

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (215)

鶴丸城跡保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3

かごしま つるまる じょうあと
鹿児島(鶴丸)城跡

—総括報告書—

(鹿児島市城山町ほか)

2022年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



①空から見た鹿兒島城跡（西から） ②空から見た鹿兒島城跡（西から）

序 文

令和2(2020)年4月、御楼門が再建され400年にわたる鹿児島(鶴丸)城跡の歴史の中でも非常に大きな画期を迎えました。鹿児島城跡は、慶長6(1601)年頃に初代薩摩藩主島津家久(18代当主)により築かれた城で、別名鶴丸城と呼ばれています。城跡は、これまで多くの災害や戦火の影響を受けており、また、周囲も都市化していることから、遺構・遺物はあまり残っていないと考えられてきました。

しかし、平成26年度からはじまった石垣の修復工事を目的とする鶴丸城跡保全整備事業に伴う発掘調査の中で、能舞台跡や本丸の庭園遺構などが確認され、鹿児島城跡の地下には多くの重要な遺構・遺物が残っていることが確認されました。そこで、令和元年からは、新たに国指定史跡を目指すための発掘調査を実施しました。

本書は、令和元年度～3年度にかけて文化庁の国庫補助事業「鶴丸城跡保全整備事業」に伴って実施した国指定史跡を目指すための発掘調査の記録と既存の鹿児島城跡の発掘調査・文献調査をまとめた総括報告書です。

調査では、大手口跡で絵図に描かれた建物に関連する石列や坪地業・布地業、唐御門跡で礎石が確認されるなど大きな成果が得られました。これまでの多様な調査成果がまとめられた本書は、鹿児島城跡の本来の範囲や城としての機能・構造を解明し、既存の文献や絵図等を裏付ける基礎資料となるものです。本書が未来につながる鹿児島城跡の保全整備と、これまで明らかにされていなかった地域史の再発見やまちづくりの一助となれば幸いです。

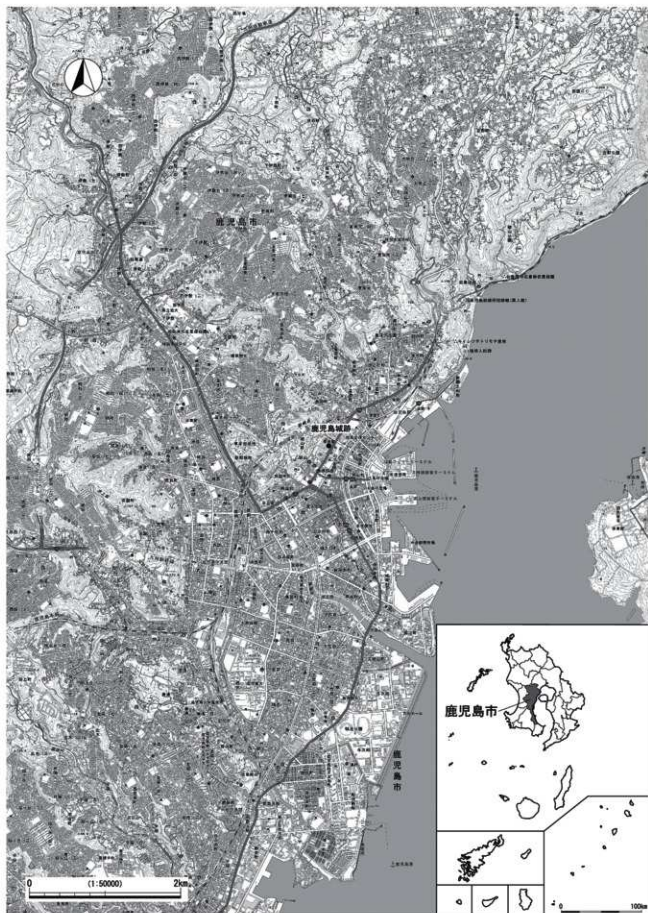
結びに、円滑な埋蔵文化財発掘調査にご理解・ご協力をいただいた地域の皆様、ご支援・ご協力いただいた関係者の皆様・関係機関に厚く御礼を申し上げます。

令和4年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 中 原 一 成

報告書抄録

ふりがな	かみら ちゅうきょう ちゅうきょう せいぎょう かいしん かい						
書名	鹿児島 (鶴丸) 城跡-総括報告書-						
副書名	鶴丸城跡跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3						
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第233編						
編者名	西野元晴・黒木梨絵・山下洋子・藤原久志・三垣恵一・西田剛士・水原浩治・和田孝行・平義典						
編者機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター						
所在地	〒899-4318 鹿児島県鹿児島市国分山上野原調文の森2番1号						
	電話 0995-48-5811 ファックス 0995-48-5821						
発行年月	2022年3月						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
所収遺跡名	所在地	出町村	遺跡番号				
鹿児島県 (鶴丸) 城跡	かごしまけん 鹿児島県 鹿児島市 大平日跡	46	201-62	31° 35' 54.0"	130° 33' 20.4"	2019.7.3 ~2019.9.30	63
二之丸跡		46	—	31° 35' 38.9"	130° 33' 37.8"		15
大平日跡		46	—	31° 35' 42.6"	130° 33' 7.8"		
海軍砲跡		46	—	31° 35' 41.4"	130° 33' 58.4"		
普賢門跡		46	201-62	31° 35' 54.0"	130° 33' 19.7"	2020.11.12 ~2021.3.19	92.5
琉球館跡		46	201-150	31° 36' 0.7"	130° 33' 29.5"		
古野砲跡		46	—	31° 36' 4.2"	130° 33' 24.6"		
本丸大塹跡	46	201-62	31° 35' 54.0"	130° 33' 20.4"	2021.5.24 ~2021.6.18	24	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺構			特記事項
鹿児島県 (鶴丸) 城跡	近世・近代	排水溝, 坪地業		近世: 青花, 染付 (肥前・肥前系・備前), 陶器 (備前・備後), 瓦 (軒瓦・丸・平・丸・朝), 土師器 (近代: 陶磁器, ガラス瓶 (薬瓶等)), 瓦 (瓦・土師器)			排水溝を確認
二之丸跡	近世・近代	切石, 排水溝		近世: 染付 (肥前), 陶器 (肥前・備前・土師器), 瓦 (丸・平・丸)			二之丸長垣基礎を確認
大平日跡	近世・近代	石列, 炭石土塹, 土塹, 布地業, 坪地業		中世: 白磁, 青磁, 近世: 染付 (肥前), 陶器 (備前), 瓦 (軒瓦・軒瓦・丸・丸・丸), 鉄製品 (百子丸・丸)			大平日跡の建物基礎を確認
海軍砲跡	近世・近代	土塹, 土坑		近世: 染付 (肥前・肥前系), 陶器 (備前), 瓦 (丸・平・丸)			海軍砲跡の遺成土を確認
普賢門跡	近世・近代	礎石, 石礎台遺構, 布地業, 方部土坑, 踏切管		近世: 染付 (肥前・備前), 陶器 (肥前・備前), 瓦 (軒瓦・軒瓦・平・丸・備前系)			普賢門礎石を確認
琉球館跡	中世~近代	土坑, 溝状遺構		中世: 白磁, 青磁, 近世: 本製品 (玉輪水筒)	近世: 染付 (陶器), 本製品 (瓦), 瓦 (軒瓦・丸)		中世館の遺構を確認
古野砲跡	近世・近代	石垣		近世: 瓦 (軒瓦・軒瓦) 近代: 瓦 (軒瓦・丸)	陶磁器		砲の礎石を確認
本丸大塹跡	近世・近代	土坑, 塹, 排水溝		近世: 青花, 染付 (肥前・肥前系・備前), 陶器 (備前・備後), 本製品 (瓦), 瓦 (軒瓦・丸)			塹の埋土を確認
遺跡の概要	<p>鹿児島城は慶長7 (1602) 年に薩摩藩初代藩主 (18代当主) 島津家久により築城された形跡のつくりの近世城郭である。別名鶴丸城とも呼ばれ、築城以降、度重なる火災による焼失や自然災害による建物、石垣等の崩落、修復を繰り返し、現在は一部は石垣と礎、櫓が残されている。鹿児島城は、これまで公的機関の建設や、民間開発に伴う発掘調査が行われてきたが、平成26年度からは、石垣修復等を目的とした鶴丸城跡跡地整備事業によって保存目的の発掘調査が行われている。また、令和元年度からは、同名の事業で国指定史跡かつ国の特別史跡調査や文庫調査が行われている。今回はその総括報告書である。今回は、過去の発掘調査成果をまとめることと、城の範囲および重要遺構の確認を行う発掘調査結果、鹿児島城跡の主要な事項に関する文献調査の結果を報告し、鹿児島城跡の事業やその全体像を明らかにした。</p> <p>鹿児島城跡の発掘調査歴をすべて集約し、主要な成果、図面・写真を一覧表で示した。</p> <p>発掘調査は、総図や写真等からの情報収集、地中レーダー探査の結果を踏まえてトレンチを設定した。調査の結果、大手日跡や二之丸跡で遺構を確認し、古銭図や写真にみられる施設がその場所にあったことを裏付けることができた。また、琉球館跡や南院跡跡では中世の遺構跡やその後の復元後の改修の遺構面を確認し、築城以前から近代に及ぶ築城城全体土地利用の変遷の様子が明らかになった。城の堀を示す西北の堀の明確な跡は確認できなかったが、北側の古野砲跡では、埋土と考えられる層を確認し、琉球館跡では南側の土塹の可能性のある層を確認しており、堀の両側の位置を想定することは可能である。南側では、地中レーダー探査で堀と見られる層を確認された。この位置は、「鹿児島城跡およびその周辺」の堀の位置と整合する結果を得られており、今後の検証が待たれる。また、鹿児島城跡の遺物の全部を明らかにするため、過去の本調査で出土した遺物の一部を個体化した。これまで鹿児島城跡の出土遺物は、18世紀以降のものを中心として、元禄9 (1696) 年の火災によって鹿児島城跡が焼失した際に多くの遺物は片付けられたと考えられてきたが、17世紀中葉の初期伊万屋や16世紀末~17世紀代の中国製青花など、築城当時~元禄火災以前の遺物が一部確認できることがわかった。</p> <p>文献調査では、鹿児島城跡の過去の主要な事項とその性格となる文獻を一覧表で示した。</p> <p>これまでの調査成果から鹿児島城跡を中心に、山城とその麓の置かれた城郭となる中世から伝説的な名勝の城であると同時に、文献や遺物等からみると琉球等の多様な地域との交流やオランダの遺物を参考にして作られた可能性のある目的など多くの遺物を残し入れた両面性を持った軍国性をもつ城跡である。また、島津氏は武土面を築城されるが、総図や写真等、発掘調査で確認された遺構からは大活物居場や御前舎、城内各所の御殿といった文化施設が充実した城であり、伝説的な武家にもふさわしい様式をもった城であるといえる。また、御健門跡や御殿舎 (私学社) にみられる銃弾や砲撃といった明治10 (1877) 年の西南戦争の爪痕が残っており、西南戦争の最後の戦線が残っているということにも大きな価値がある。</p>						



鹿兒島（鶴丸）城跡位置図 (S=1:50,000)

例言・凡例

- 1 本書は、令和元～令和3年度に実施した鶴丸城跡保全整備事業に伴う鹿児島(鶴丸)城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書及び総括報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県教育庁文化財課が調査主体となり、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 整理・報告書作成作業は、令和元～3年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本遺跡は通称「鶴丸城」と呼称される場合もあるが、他の機関等で使用している場合等を除き、本書では文献にある「鹿児島城」を使用する。
- 5 本書で用いる「薩摩藩」「薩摩国」「大隅国」「日向国の一部」を含めた広義の意味でのものとして用いる。
- 6 発掘調査における実測図作成は調査担当者が行い、一部は株式会社九州文化財研究所に委託して作成した。
- 7 発掘調査における写真撮影は調査担当者が行い、空中写真撮影は株式会社ふたつ、九州航空株式会社に委託して撮影した。
- 8 発掘調査成果の内容及び土層の色調等の表現については、原則として現場担当者による注記を用いた。また、土色の記述にあたっては、「新版 標準土色帖(日本色研事業株式会社発行)に基づき、掲載した。
- 9 本書の地図は、国土交通省国土地理院発行の「鹿児島」(縮尺1/50,000)「鹿児島北部」(縮尺1/25,000)の地形図を複製し、第1図は国土交通省国土地理院発行の「鹿児島」(縮尺1/200,000)の地質図を複製して使用した。
- 10 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
- 11 調査区を5m間隔のマス目(グリッド)で区切り、調査を行った。グリッドは御角橋南東角を基準として東(国道10号)側の石垣に平行に軸及びグリッドを設定した。
- 12 本書で使用した方位は磁北である。
- 13 各遺構内で用いたトーンについては、各図面に凡例を示す。
- 14 遺物への注記は、遺跡名をアルファベット3文字で「KS」と表し、出土地点・出土層位等を記入した。
- 15 掲載遺物番号は通し番号であり、本冊、表及び図版の遺物番号と一致する。
- 16 整理・報告書作成作業における遺物の実測図・トレース図作成に係わる業務は、黒木梨絵・西野元勝・馬籠亮道が会計年度任用職員(整理作業員)の協力を得て行った。また、陶磁器の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、黒木・西野が監修した。
- 17 軒瓦の同定・分類は金子智(株式会社乃村工藝社)が行い、瓦全般に関する指導・助言を賜った。
- 18 軒瓦の分類及び刻印瓦の刻印判分類は、『鹿児島(鶴丸)城跡-北御門跡周辺-御角橋跡周辺-能舞台跡ほか』鹿児島県立埋蔵文化財センター2022の軒丸・軒平・小菊瓦の分類表を使用した。
- 19 瓦の種別分類、瓦製作地同定は金子の指導を受け西野が行い、刻印分類・同定は山下智沙子・西野が行った。
- 20 瓦の分類について
本報告書では、互当文様を有する軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、小菊瓦について文様より分類を行い、各分類のうち遺存状態の良いものを図化した。なお、これらのうち文様の一部しか確認できない破片資料については、一部特徴的なもの以外は、明らかに別分類と思われるものについても分類番号を設定していない。今後の調査により全形が判明した際、改めて設定されることが期待される。
- 21 今回分類を行わなかった他の瓦種については、遺存状態の良いものおよび特徴的なものを図示した。以下に瓦の分類概要を右図に示す。
21 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。基本的に瓦はS=1/4、陶磁器はS=1/3、木器はS=1/4、鉄製品はS=1/2とした。
- 22 遺物観察表で示した部位ごとの計測値は欠損している場合は()を用いる。
- 23 出土遺物の写真撮影は、西野・西園勝彦・鮫島えりなが行った。
- 24 III章鹿児島城跡の過去の調査歴に関しては、鹿児島県立埋蔵文化財センター、鹿児島市教育委員会が分担して製作し、西野・黒木が編纂した。
なお、図版の参照文献の発行機関については、以下の略号を用いた。
鹿児島県教育委員会→鹿児島教委、鹿児島県立埋蔵文化財センター→鹿児島埋蔵、鹿児島市教育委員会→鹿児島教委
また、遺物等で既刊の発掘調査報告書名を以下のように略し、併せて掲載番号等を示す。
楼門: 県(205)「鹿児島(鶴丸)城跡-御楼門跡周辺-」
北角能: 県(214)「鹿児島(鶴丸)城跡-北御門跡周辺-御角橋跡周辺-能舞台跡ほか-」
- 25 V章の文献調査は、鹿児島県歴史・美術センター黎明館が行い、株式会社九州文化財研究所に委託して作成した。また、第四章の第89図、第90図は、鹿児島県教育庁文化財課が同社に委託して作成した。
- 26 本書にかかわる自然科学分析は、瓦の成分分析(蛍光X線分析及び薄片顕微鏡観察)を株式会社パリオ・サーヴェイに、地中レーダー探査を株式会社パスコに委託し、山下が監修した。
- 27 木製品・鉄製品は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保存処理を行った。
- 28 本遺跡は「鶴丸城跡」と呼称されるが、正式名称は「鹿児島城跡」である。ただし、県指定史跡の範囲は「鹿児島(鶴丸)城跡」となっているため、県史指定史跡の範囲およびそれに準じる範囲には「鹿児島(鶴丸)城跡」を、報告書が刊行されている地点にはその報告書地名を、それ以外の範囲に関しては「鹿児島城跡(地区名)」を用いる。
- 29 本書の編集は西野・黒木・山下が行った。
執筆分担は以下のとおりである。
第I章 山下・西野、第II章 水濱功治((公財)鹿児島県埋蔵文化財調査センター)、西野・浅田剛士、第III章 西野・川川孝行(鹿児島市教育委員会)、第IV章 西野・瀬葉久志・山下、第V章 平美典(鹿児島県歴史・美術センター黎明館)、第VI章 分析担当者・山下、第VII章 西野、山下
- 30 発掘調査、整理作業に御指導・御助言をいただいた方々は以下のとおりである。
掲村國、西川マルセロ宗雄、大木公彦、太田秀春、大橋康二、金子智、小林善仁、北村良介、中村直子、丹羽謙治、本田道輝、松井敏也、松尾千雄、三木靖、宮武正登、渡辺芳郎
- 31 本書に掲載する氏名はすべて敬称、職名、所属を略する。
- 32 出土遺物及び実測図・写真等の記録類は、鹿児島県立埋蔵文化財センターが保管し、展示活用を図る余地である。

五分類の概要

互種	ここでは根根の各部分で使分けられる形の異なる互種の種類を「互種」と表現する。複数の互種によって一つの根根が構成されるが、根根の形によって使われる互種や使われない互種がある。また他の互種を加工することによって利用することも少なくない。同様の根根でも使われていない互種がある。例えば、梨斗瓦という互種は専用で制作されることは少なく、平瓦を縦割りに割って使用することが多い。互種の呼称は時代や地域等によっても異なる。
文種の表記	一般的な文種を指す場合は「文」（例：津味三巴文、家紋を指す場合は「紋」（例：牡丹紋）の文字を用いる。枠やマークと組み合わせる場合は「丸に〇文（紋）」、「丸に〇文（紋）」という表現をする。なお、通常すべてに枠のあるもの（津味三巴文や牡丹紋など）では「丸に」を省略した。江戸時代の文種表記に「〇」とあるものは文種を指す（例：「丸」参照）。
分類方法	出た互種は互種ごとに分類し、分類番号を付した。互の軒先に付される「垂れ」の部分を「互当（がとう）」と呼び、軒瓦（軒丸瓦、軒平瓦、軒杖瓦）はこの「互当文種（がとうもんよう）」を基準に分類した。小菊瓦は棟瓦であるが、互当に対応する文種面を有するため、この文種を基準とした。江戸時代の瓦は基本木型（木型：箔くまんよう）で作られるため、この型によって分類し、文種の構成が同じでも型が違っても別々の番号としている。分類番号は、軒丸瓦、軒平瓦、軒杖瓦は多数にわたるため、あらかじめ文種の系統別に大分類を行い（アルファベット大文字で表現）、その後連番を付した。なお、各大分類ごとの番号の数字については、確認された順に割り付けているため、その順序については意味や並び順はない。そのため確認した文種が離れた番号になっているものも多数あるが留意されたい。 分類においては、既報告資料で分類可能なものについても、報告等により極力分類に含めるよう努めたが、実現できなかった資料については確定しがたい部分がある。今後精査が必要である。 なお、根根は複数の互種で構成されているため、それぞれのセット関係を把握する必要があるが、多くの資料が現在に出上しているためセット関係を把握できたものも少なくない。確認と思われるものについてはみ観察表に記した。

1 軒瓦

江戸時代の瓦葺根では、軒先の瓦におおむね文種が入る。文種は「木型・スタンプ」で押されるため、根根には原則として同じ種類の瓦が使われ、軒杖瓦は単独で軒を構成するが、軒丸瓦と軒平瓦は組み合わせて使用される。

(1) 軒丸瓦の分類

概要	軒丸瓦は、軒平瓦とともに本瓦葺根根の軒先を飾る。杖瓦葺でも少数使用される。 軒丸瓦の文種は、江戸時代には「津味三巴文」が一般的に用いられている。既製品の瓦にはおおむね全国的にこれが使われており、職人はこれを木の湯桶ごと解して、火事防止への懸念を込めたものとする。 津味三巴文以外の文種が用いられている場合は、特定の「家紋瓦」である可能性が高い。ただし、鹿児島島の場合は御旗系と思われる独自の文種が見られるため、これらは単独のデザインと考えられる。 軒丸瓦の文種は御旗系や御旗間など、円形の互当を有する瓦にも流用されている。
大分類	互当文種により、以下の3種に大別した。 A種：津味三巴文 B種：牡丹紋（鳥津家紋瓦） C種：それ以外の文種 分類数は既報告資料であるA種が多く、次いでB種・C種となる。

(2) 軒平瓦・軒杖瓦の分類

概要	軒平瓦は、軒丸瓦とともに本瓦葺根根の軒先を飾る。杖瓦葺でも少数使用される。 軒平瓦の文種は、江戸時代には「既報告瓦文」が一般的に用いられる。左右対称のつる草文様で、「中心飾り」から左右に展開する「唐草」（巻き込みの単位）、「子葉」（巻き込みの単位）の組み合わせから成るものが多いが、連続するものもあり表現は様々である。江戸時代の後半になると、生産の活発化に伴って文種の画一化が進み、地域性も生じる。既報告瓦文以外の文種は江戸時代には稀である。 軒杖瓦は、軒丸瓦と軒平瓦を結合した形状の瓦で、江戸時代中頃に普及した新しい形の瓦である。軒先の丸い部分を「軒丸部」、細長い部分を「軒平部」と称する。軒丸部は鹿児島島の場合、軒先から見て向かって左側に付く。軒丸の引掛けは軒先から向かって左側であり、全国的にもスタンダードな形状である。軒平部の文種は、軒丸部の文種を複製した津味三巴文や、その省略形の三巴文（意味が薄くなる）が使われるほか、縦割りに使用される。また軒丸部を完全省略したものも見られる（本报告では現状から「継軒杖瓦」と記した）。軒平部には軒平瓦の文種が複製される。 軒平瓦と軒杖瓦は、向かって右側の破片では識別が難しい。軒杖瓦の文種分類については主に軒平部で行っているため、ここでは「軒平・軒杖瓦」として一括して分類番号を付した。
大分類	軒平部の互当文種により、以下の3種に大別した。 A：「大板瓦」（大板地域を中心に近世後半広く流布した文種構成）。 文種構成は、中央から中心飾り・上向き唐草・子葉という組み合わせが基本形。中心飾りは、中央に楕円の要素があり、両側にY字の要素。両側下部に楕円に広がる要素がある。（中心飾りの「中央上」「中央下」「脇上」「脇下」と表現） B：既報「鹿児島島」（「大板瓦」文種をベースに創設されたと思われる文種。文種両端下方に、唐草もしくは子葉一対が配されるのが特徴） C：大板瓦の変形（「大板瓦」文種をベースに創設されたと思われる文種。両側に「く」の字形の子葉を配する） D：その他 なお、A種のうち、Y字状の中心飾りの脇および子葉部に深く凹凸が入るタイプはこの地域で特徴的なもので、B種とともに江戸時代後期の鹿児島島の瓦を象徴する文種とみられる。（現在確認で見られる軒杖瓦の文種も多くはこれらに属するようである。）

(3) 横込瓦

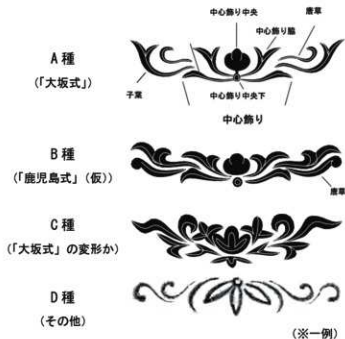
横瓦のうち、飾り瓦として使用される瓦を横込瓦と呼ぶ。鹿児島島では小菊瓦と輪造瓦が確認されているが、ここでは文種を有する小菊瓦のみを分類対象とした。

概要	小菊瓦は、根根の横に敷いて梨斗瓦の間に差し込んで飾りとして用いられる。小菊瓦の文種は右側の菊花文が定型的に用いられる（巴文・津味三巴文が使われることもあるが少なくない）。菊花文以外が使われる場合は、軒丸瓦同様に確認の可能性がある。
大分類	互当文種により分類した。菊花文以外に「三治共紋」1種が確認されているが、分類が少いため一括して連番とした。

軒丸瓦文様



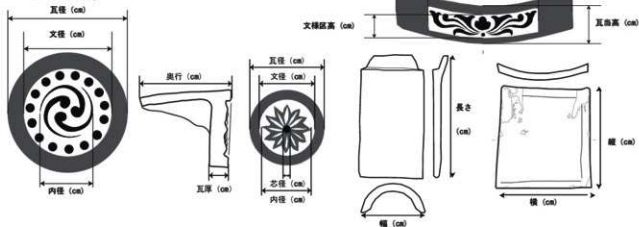
軒平瓦・軒棧瓦 (軒平部) 文様



小菊瓦文様



33 観音表及び絶括における瓦の計測部位については以下のとおりである。



目次

序文

報告書抄録

例言・凡例

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯・・・・・・・・・・・・・1

第2節 鶴丸城跡保全整備事業について・・・・・・・・・・・・・1

第3節 発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・2

第4節 整理・報告書作成作業の経過・・・・・・・・・・・・・3

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・5

第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・7

第3節 絵図・文献から見た各調査地点・・・・・・・・・・・・・11

第3章 鹿兒島(鶴丸)城跡の過去の調査歴・・・・・・・・・・・・・21

第4章 調査の方法と成果

第1節 発掘調査地点の選定と事前調査・・・・・・・・・・・・・35

第2節 発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・・35

第3節 発掘調査の成果・・・・・・・・・・・・・36

第4節 各調査地点の調査成果・・・・・・・・・・・・・36

1 本丸跡と城山との境界・・・・・・・・・・・・・36

2 唐御門跡・・・・・・・・・・・・・40

3 本丸大奥跡・・・・・・・・・・・・・46

4 本丸東堀・・・・・・・・・・・・・51

5 二之丸跡・・・・・・・・・・・・・59

6 鹿兒島城跡(二之丸)旧考古資料館地点・・・・・・・・・・・・・62

7 鹿兒島城跡(大手口)・・・・・・・・・・・・・65

8 鹿兒島城跡(南泉院)・・・・・・・・・・・・・76

9 琉球館跡・・・・・・・・・・・・・78

10 鹿兒島城跡(吉野堀)・・・・・・・・・・・・・82

第5節 調査の成果・・・・・・・・・・・・・85

第6節 過去の本丸跡・二之丸跡の出土遺物・・・・・・・・・・・・・90

第5章 文献調査・・・・・・・・・・・・・97

第6章 自然科学分析・・・・・・・・・・・・・101

第7章 総括・・・・・・・・・・・・・115

写真図版・・・・・・・・・・・・・127

挿図目次

第1図 鹿兒島(鶴丸)城跡周辺地質図・・・・・・・・・・・・・6

第2図 島津家系図・・・・・・・・・・・・・7

第3図 鹿兒島(鶴丸)城跡周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・8

第4図 島津家歴代の居城位置図・・・・・・・・・・・・・10

第5図 鹿兒島城跡周辺における居城位置図・・・・・・・・・・・・・10

第6図 絵図にみる本丸と城山との境・・・・・・・・・・・・・14

第7図 絵図にみる唐御門・・・・・・・・・・・・・14

第8図 絵図にみる本丸大奥・・・・・・・・・・・・・15

第9図 絵図にみる本丸東堀・・・・・・・・・・・・・15

第10図 絵図にみる二之丸南側長屋・・・・・・・・・・・・・16

第11図 絵図にみる大手口・・・・・・・・・・・・・17

第12図 絵図にみる南泉院・・・・・・・・・・・・・18

第13図 絵図にみる吉野堀・・・・・・・・・・・・・19

第14図 絵図に残る吉野堀の名残と考えられる地形・・・・・・・・・・・・・20

第15図 鹿兒島(鶴丸)城跡過去の発掘調査場所・・・・・・・・・・・・・22

第16図 鹿兒島(鶴丸)城跡出土遺物・・・・・・・・・・・・・23

第17図 鹿兒島(鶴丸)城跡の遺構検出状況・・・・・・・・・・・・・24

第18図 鹿兒島(鶴丸)城二之丸跡出土遺物・・・・・・・・・・・・・25

第19図 鹿兒島(鶴丸)城二之丸跡遺構検出状況(1)・・・・・・・・・・・・・26

第20図 鹿兒島(鶴丸)城二之丸跡遺構検出状況(2)・・・・・・・・・・・・・27

第21図 鹿兒島(鶴丸)城御殿跡遺構検出状況(2)・・・・・・・・・・・・・28

第22図 上山城跡遺構検出状況・・・・・・・・・・・・・28

第23図 鹿兒島城跡大手口遺構検出状況・・・・・・・・・・・・・29

第24図 鹿兒島城跡南泉院遺構検出状況・・・・・・・・・・・・・29

第25図 造士館・演武館跡遺構検出状況(1)・・・・・・・・・・・・・29

第26図 造士館・演武館跡遺構検出状況(2)・・・・・・・・・・・・・30

第27図 名山道跡遺構検出状況・・・・・・・・・・・・・30

第28図 鹿兒島城跡(大迫物馬場・火除地)遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・31

第29図 垂水・宮之城島津家屋敷跡遺構・遺物(1)・・・・・・・・・・・・・31

第30図 垂水・宮之城島津家屋敷跡遺構・遺物(2)・・・・・・・・・・・・・32

第31図 鹿兒島城跡(吉野堀)・琉球館跡遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・32

第32図 鹿兒島城跡基準点配置図・・・・・・・・・・・・・33・34

第33図 鹿兒島城跡トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・33・34

第34図 59・60トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・36

第35図 59トレンチ平面・土層断面図・・・・・・・・・・・・・37

第36図 60トレンチ平面図・排水溝断面図・・・・・・・・・・・・・38

第37図 60トレンチ土層断面図・・・・・・・・・・・・・39

第38図 59・60トレンチ出土遺物・・・・・・・・・・・・・39

第39図 唐御門跡トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・40

第40図 唐御門跡トレンチ平面図・・・・・・・・・・・・・41

第41図 唐御門跡トレンチ調査区東壁・西壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・42

第42図 唐御門跡トレンチ東側調査区東壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・43

第43図 唐御門跡トレンチ方形土坑1・2土層断面図・・・・・・・・・・・・・44

第44図 唐御門跡トレンチ出土礎石平面・立面図・・・・・・・・・・・・・44

第45図 唐御門跡トレンチ出土遺物・・・・・・・・・・・・・45

第46図 本丸大奥跡トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・46

第47図 本丸大奥跡トレンチ平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・47

第48図 本丸大奥跡トレンチ土層断面図・・・・・・・・・・・・・48

第49図 本丸大奥跡トレンチ出土遺物・・・・・・・・・・・・・50

第50図 55(61)～57・62・63トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・51

第51図 55(61)トレンチ平面図・・・・・・・・・・・・・52

第52図 55トレンチ土層断面図・・・・・・・・・・・・・53

第53図 61トレンチ土層断面図・・・・・・・・・・・・・54

第54図 55(61)トレンチ出土遺物・・・・・・・・・・・・・55

第55図 62トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・56

第56図 56トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・57

第57図 56トレンチ出土遺物・・・・・・・・・・・・・57

第58図 57トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・58

第59図 57トレンチ出土遺物・・・・・・・・・・・・・58

第60図 63トレンチ平面図・・・・・・・・・・・・・59

第61図 旧制第七高等学校校舎配置図における63トレンチの推定地・・・・・・・・・・・・・59

第62図 63トレンチ土層断面図・・・・・・・・・・・・・60

第63図 63トレンチ出土遺物・・・・・・・・・・・・・61

第64図 64トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・62

第65図 64トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・63

第66図 64トレンチ出土遺物・・・・・・・・・・・・・64

第67図 大手口跡・南泉院跡トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・65

第68図 大手口跡1～5トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・66

第69図 大手口跡1トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・67

第70図 大手口跡1トレンチ出土遺物・・・・・・・・・・・・・67

第71図 大手口跡2トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・68

第72図 大手口跡4トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・68

第73図 大手口跡3トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・69

第74図 大手口跡3トレンチ土層断面図・・・・・・・・・・・・・70

第75図 大手口跡3トレンチ出土遺物(1)・・・・・・・・・・・・・70

第76図 大手口跡3トレンチ出土遺物(2)・・・・・・・・・・・・・72

第77図 大手口跡3トレンチ出土遺物(3)・・・・・・・・・・・・・73

第78図 大手口跡5トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・74

第79図 南泉院跡トレンチ平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・75

第80図 南泉院跡トレンチ出土遺物(1)・・・・・・・・・・・・・76

第81図 南泉院跡トレンチ出土遺物(2)・・・・・・・・・・・・・77

第82図 吉野堀跡・琉球館跡トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・78

第83図	琉球館跡トレンチ平面図・ビット土層断面図	79
第84図	琉球館跡トレンチ土層断面図	80
第85図	琉球館跡トレンチ出土遺物	81
第86図	吉野堀跡トレンチ平面図	82
第87図	吉野堀跡トレンチ土層断面図	83
第88図	吉野堀跡トレンチ出土遺物	84
第89図	現在の都市計画と絵図の重なり①	88
第90図	現在の都市計画と絵図の重なり②	89
第91図	過去の本丸・二之丸で発掘調査した遺物(1)	91
第92図	過去の本丸・二之丸で発掘調査した遺物(2)	92
第93図	過去の本丸・二之丸で発掘調査した遺物(3)	93
第94図	偏光顕微鏡観察結果①	105
第95図	偏光顕微鏡観察結果②	106
第96図	砕屑物・基質・孔隙の割合	106
第97図	砕屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成①	106
第98図	砕屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成②	107
第99図	胎土化学分析散布図	107
第100図	地上レーダー探査座標系の定義	109
第101図	照国神社地区探査箇所	110
第102図	平面画像(探査深度-650mm)	110
第103図	平面画像(探査深度-1000mm)	110
第104図	平面画像(探査深度-1500mm)	110
第105図	縦断面画像(y=1080cm)	110
第106図	平面画像(探査深度-800mm)	110
第107図	縦断面画像(y=108cm)	110
第108図	鹿児島市立長田中学校探査箇所	110
第109図	平面画像(探査深度-1000mm)	110
第110図	縦断面画像(y=144cm)	110
第111図	最大乗院地区探査箇所	111

表目次

第1表	鹿児島(鶴丸)城跡周辺遺跡一覧表	9
第2表	鹿児島(鶴丸)城跡の土地利用の記録	12
第3表	鹿児島(鶴丸)城跡の過去の発掘調査一覧	21
第4表	鹿児島(鶴丸)城本丸跡の調査一覧	23
第5表	鹿児島(鶴丸)二之丸跡・鹿児島城(二之丸跡)発掘調査一覧(1)	25
第6表	鹿児島(鶴丸)二之丸跡・鹿児島城(二之丸跡)発掘調査一覧(2)	26
第7表	鹿児島(鶴丸)城御殿跡発掘調査一覧	28
第8表	上山城跡発掘調査一覧	28
第9表	鹿児島城跡(大手口)発掘調査一覧	29
第10表	鹿児島城跡(南泉院)発掘調査一覧	29
第11表	造士館・演武館跡発掘調査一覧	29
第12表	名山遺跡発掘調査一覧	30
第13表	鹿児島城跡(大迫物馬場・火除地)発掘調査一覧	31
第14表	市役所西別館発掘調査一覧	31
第15表	垂水・宮之城津家屋敷跡発掘調査一覧	31
第16表	鹿児島城跡(吉野堀)発掘調査一覧	32
第17表	琉球館跡発掘調査一覧	32
第18表	鹿児島(鶴丸)城跡基準点一覧	33

図版目次

巻頭図版	空から見た鹿児島城跡
図版1	復元された御楼門と発掘調査中の御楼門跡
図版2	空から見た本丸跡、大手口跡・南泉院跡調査区
図版3	本丸調査区
図版4	本丸東堀調査区
図版5	二之丸跡・二之丸旧考古資料館地点調査区
図版6	大手口跡調査区(1)
図版7	大手口跡調査区(2)

第112図	平面画像(探査深度-1000mm)	111
第113図	縦断面画像(y=84cm)	111
第114図	平面画像(探査深度-2000mm)	111
第115図	縦断面画像(y=84cm)	111
第116図	県歴史・美術センター黎明館駐車場地区	111
第117図	平面画像(探査深度-1200mm)	111
第118図	平面画像(探査深度-1600mm)	111
第119図	縦断面画像(y=216cm)	111
第120図	照国神社地区 絵図及び探査平面合成図	112
第121図	鹿児島二之丸跡探査平面画像および空中写真	112
第122図	高野山最大乗院及び比田中学校地区絵図及び探査平面合成図	112
第123図	2021年度探査範囲位置図	112
第124図	A地区平面画像(探査深度-1099mm)	113
第125図	A地区平面画像(探査深度-1673mm)	113
第126図	A地区平面画像(探査深度-1811mm)	113
第127図	A地区断面画像(y=44.0m)	113
第128図	B地区平面画像(探査深度-349.8mm)	113
第129図	B地区平面画像(探査深度-1424mm)	113
第130図	B地区平面画像(探査深度-1499mm)	113
第131図	B地区断面画像(y=300m)	113
第132図	B地区断面画像(y=600m)	113
第133図	A地区絵図重ね合わせ図(探査深度-1673mm)	114
第134図	B地区絵図重ね合わせ図(探査深度-1586mm)	114
第135図	江戸時代前期の鹿児島城の姿を描いた絵図	117
第136図	江戸時代中後期の鹿児島城の姿を描いた絵図	119
第137図	鹿児島城本丸跡の遺構配置図	121
第138図	鹿児島城本丸跡出土陶磁器	123
第139図	鹿児島城跡の瓦の変遷	124

第19表	本丸大奥跡トレンチ土層注記	49
第20表	遺物1(陶磁器)	94
第21表	遺物2(陶磁器)	95
第22表	遺物3(瓦)	96
第23表	遺物4(その他)	96
第24表	鹿児島城跡文獻目録(1)	97
第25表	鹿児島城跡文獻目録(2)	98
第26表	鹿児島城跡文獻目録(3)	99
第27表	鹿児島城跡文獻目録(4)	100
第28表	分析試料一覧	101
第29表	ガラスビート作製条件	102
第30表	蛍光X線装置条件	102
第31表	蛍光X線定量測定条件	102
第32表	凝灰岩の構成物量比	103
第33表	薄片観察結果	104
第34表	蛍光X線分析結果	105
第35表	地中レーダー機材特性表	109
第36表	地区ごとの歩道線長	109

図版8	南泉院跡・唐御門跡調査区
図版9	唐御門跡調査区・琉球館跡調査区
図版10	琉球館跡調査区・吉野堀跡調査区
図版11	本丸大奥跡調査区
図版12	軒丸瓦・軒平瓦・軒椀瓦・小菊瓦
図版13	丸瓦・平瓦・椀瓦・伏間瓦
図版14	鬼瓦・土器・鉄製品・ガラス製品・石製品・木製品

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は文化財の保護・活用を図るため、開発機関等との間で事業区域内に於ける文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸関係機関等との調整を図り、埋蔵文化財発掘調査等を実施している。県指定史跡である鶴丸城跡（昭和28年指定）の石垣は、豪雨や地震等による自然災害や樹根の張り出し等により、石垣表面の孕み出しや石垣間の隙間等が生じている部分があり、対応等について関係機関と協議を行ってきた。

また、平成24年から鶴丸城御楼門の復元運動が県下の経済界を中心に始まり、平成25年には実行委員会が立ち上げられ、寄付金が募られた。このような背景の中、鹿児島県は平成27年2月18日に学識経験者等で構成される「鶴丸城御楼門建設協議会専門委員会」を設置し、鹿児島城の範囲や全体構成、域内に残る遺構や各種調査成果の本質的価値等について、将来に向けて適切な保存管理を行うため、『鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画』を策定した。

鹿児島県歴史・美術センター黎明館（以下、黎明館）は、史跡の保全を目的として、調査・測量等を行い、必要な箇所について修復工事を行うため「鶴丸城跡保全整備事業」を実施することとなった。

事業は平成24年度から始まり、当初は黎明館を事業の実施主体として危険箇所の石垣修復、御角櫓整備に伴う調査が実施された。さらに鹿児島県総務部県民生活局生活・文化課（以下、生活・文化課）と鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）、鹿児島県埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）は協議を行い、対象地域内における遺構の種類や範囲、残存状況等を把握するため、当該地域において埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。この発掘調査は平成26年度から平成30年度にかけてと、令和2年度に実施した。また、令和元年度からは文化庁の補助を受け鹿児島城跡の国指定史跡を目的として、対象地域内における遺構の残存状況と性格を把握するための発掘調査を実施することになった。発掘調査は、鹿児島県総務部文化スポーツ局文化振興課が事業主体となって埋蔵文化財センターが担当することとなった。発掘調査は、国庫補助事業で実施している県内遺跡発掘調査等事業のうち、「鶴丸城跡保全整備事業」に伴って実施した。

本報告書は、鹿児島城跡の国指定史跡を目的とした令和元～3年度の3年間で発掘した120.5㎡の成果について報告する（各年度調査面積（R元：87㎡、R2：92.5㎡、R3：28㎡））。

また、文献調査は、国庫補助事業で実施している県内

遺跡等発掘調査事業のうち、「かこしまの日本遺産等魅力発信事業」に伴って実施した。

第2節 鶴丸城跡保全整備事業について

平成27年度以降に実施された事業内容の詳細は「平成27年度御楼門部石垣保全設計水理調査業務報告書」等に記載されており、発掘調査や考古学的成果に関連する内容を含むが、ここでは重複を避けるため主な経緯と概要についてのみを記載し、建築、復元技法等に関する技術検討会議の記載は避けた。また、現鹿児島県総務部文化スポーツ局文化振興課御楼門等建設推進室（旧県民生活局生活文化課御楼門等建設推進室）が主催する「鶴丸城跡保全整備事業に係る専門家検討会議」については、会議における協議事項の多くが発掘調査の計画や役割等と関連するため、ここでは国指定史跡のための発掘調査が行われた令和元～3年度に開催された会議の検討議題のみを記載する（平成27～30年度も含めた記録は『鹿児島（鶴丸）城跡-御楼門周辺-』（鹿児島県立埋蔵文化財センター2020）の第1章に記載）。

鶴丸城跡保全整備事業に係る専門家検討会議

委員：三木靖、宮武正登、原口泉、渡辺芳郎、大木公彦、北村良介、寺田仁志、松井敏也、麓和善
オブザーバー：文化庁

【会議の項目】

令和元年度

第1回（令和元年5月31日開催）

概要：国指定史跡に向けて（これまでの調査成果、今年度の調査計画）、現地視察（御楼門周辺）、危険木の伐採及びクスノキ移設、御楼門妻側の石垣上の板壁、御楼門橋の修復、北御門跡周辺部石垣の修復、御角櫓跡石垣、地下水位観測等の概要

第2回（令和元年12月19日開催）

概要：国指定史跡に向けて（絵図面類の調査、これまでの調査成果、次年度の調査計画）、北御門跡周辺部石垣の修復、修景整備（サインの設置、展示物設置、土糸舗装、擬宝珠取替、クスノキ移設）、地下水位観測等の概要、現地視察（御楼門建設の進捗状況）

令和2年度

第1回（令和2年7月20日開催）

概要：令和2年度事業概要、北御門跡周辺部石垣の修復、修景整備計画（園庭）、地下水位観測等の概要、次年度の事業計画（国指定史跡に向けて、御角櫓跡石垣修

復に向けて、現地視察（北御門跡周辺部石垣修復工事、御楼門・修景整備予定地）

第2回（令和2年12月16日開催）

概要：国指定史跡に向けて（これまでの調査成果、文献調査の状況）、北御門跡周辺部石垣の修復、七高門周辺部の発掘調査、現地視察（北御門跡周辺部石垣・黎明館駐車場・大手口・照國神社・城山二之丸跡）

令和3年度

第1回（令和3年7月12日開催）

概要：鶴丸城跡保全整備事業について（今後の事業の進め方、過去に実施した調査成果、鹿児島城跡石垣台帳、今後のスケジュール）、国指定史跡に向けた取組（令和3年度の取組、令和3年度の発掘調査状況（鹿児島県・鹿児島市）、国指定範囲、総括報告書の構成とイメージ、令和2年度文献調査の成果、今後のスケジュール）、関連の試掘調査、鶴丸城跡VRアプリ作成事業、現地見学（本丸大奥跡）

第3節 発掘調査の経過

1 本調査

令和元（平成31）年度から令和3年度までの発掘調査の経過について、日誌抄を集約したものを毎月に記載する。

令和元（平成31）年度

7月（令和元年7月3日～7月29日）

59～62トレンチ掘削、60トレンチ石組排水溝・地業跡検出、清掃、写真撮影、平面図・土層断面図実測、黎明館駐車場、国道10号植栽部レーダー探査。

8月（令和元年8月2日～8月28日）

61・62・63トレンチ掘削、61トレンチ石組排水溝、硬化面検出、62トレンチ硬化面検出、清掃、写真撮影、平面図・土層断面図実測。

9月（令和元年9月2日～9月26日）

59・60トレンチ下層確認、清掃、写真撮影、平面図・土層断面図実測、埋め戻し。61トレンチ拡張掘削、石組配水溝、硬化面、清掃、写真撮影、平面図・土層断面図実測、埋め戻し。62トレンチ拡張掘削、清掃、写真撮影、平面図・土層断面図実測、埋め戻し。63トレンチ拡張掘削、第七高等学校造土館時代のプールに付帯する配管検出、清掃、写真撮影、平面図・土層断面図実測、埋め戻し。64トレンチ掘削、石列（近世）、漆喰で固められた硬化面・敷石検出、清掃、写真撮影、平面図・土層断面図実測。59～64トレンチ空掘（株式会社ふじた）。

令和2年度

10月（令和2年10月15日）

地中レーダー探査を黎明館駐車場、照國神社駐車場、

長田中学校、高野山最大乗院にて実施。

11月（令和2年11月2日～11月27日）

大手口調査地点環境整備、トレンチ5か所設定・調査開始、1～5トレンチ掘削、1トレンチ礎石検出、3トレンチ土壘・地業・石列検出、各トレンチ遺構検出状況・土層断面写真撮影。地形測量、遺構平面実測、土層断面実測図作成。

12月（令和2年12月1日～12月24日）

大手口3トレンチ拡張掘削、土壘盛土・混土土壘、布地業・坪地業検出、石列検出、遺構検出状況撮影・土層断面写真撮影・全掘状況写真撮影、トレンチ埋め戻し（3トレンチ以外）、I～IV層土層断面実測図作成。

南泉院跡（照國神社内）環境整備、トレンチ設定・調査開始、I～VII層掘削、土坑・土壘検出。遺構検出状況撮影・土層断面・完掘状況写真撮影、遺構平面実測、土層断面実測図作成、埋め戻し。

鹿児島（鶴丸）城唐御門跡調査開始、表土剥ぎ・掘削、礎石・布地業、土坑、鈎鉄管、礎石検出。遺構検出状況撮影・土層断面・完掘状況写真撮影、遺構平面実測、土層断面実測図作成、埋め戻し（一部残し）。

琉球館跡（鹿児島市立長田中学校内）トレンチ設定、表土剥ぎ。

1月（令和3年1月5日～1月22日）

鹿児島（鶴丸）城唐御門跡、石畳状遺構（近世）、橋形スロープ（近代）基礎検出。遺構掘削、遺構検出状況撮影・土層断面・完掘状況写真撮影、遺構平面実測、土層断面実測図作成、埋め戻し。

琉球館跡（鹿児島市立長田中学校内）I～IV層掘削、溝（近世）、ピット・土坑（中世）検出、五輪塔水輪出土（IV層）、遺構検出状況撮影・土層断面・完掘状況写真撮影、遺構平面実測、土層断面実測図作成、埋め戻し。

2月（令和3年2月4日～2月19日）

鹿児島城跡吉野堀（高野山最大乗院）調査開始、トレンチ設定、表土剥ぎ、I～VII層掘削、石垣・胴木・支石（近・現代）検出、遺構検出状況撮影・土層断面・完掘状況写真撮影、遺構平面実測、土層断面実測図作成、埋め戻し。

令和3年度

令和3年度の調査区は当初本丸南堀調査区としたが、堀は確認できなかった。調査成果では、本丸大奥跡として記載する。

5月（令和3年5月24日～5月27日）

本丸南堀調査区トレンチ設定、調査開始。I～V層掘り下げ、溝、コンクリート基礎、布基礎遺構、土坑検出。

6月（令和3年6月1日～6月18日）

本丸南堀調査区、Vb層遺構検出、遺構半截・完掘、下層確認サブトレンチ掘削、遺構検出状況・遺構完掘状

況・土層断面写真撮影、遺構平面実測・土層断面図作成、トレンチ空掘（株式会社ふじた）、埋め戻し。

12月（令和3年12月6日）

地中レーダー探査、黎明館駐車場。

2 調査体制

令和元（平成31）年度

事業主体 鹿児島県総務部文化スポーツ局文化振興課
調査主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育委員会文化財課
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所長 前迫亮一
調査企画 # 次長兼総務課総務課長 野間口誠
 # 調査課長兼南の縄文調査室長 中村和美
 # 調査課第二調査係長 三垣恵一
調査担当 # 文化財主事 藤崎光洋
 # 文化財主事 山崎克之
事務担当 # 総務課主事 日置淑乃
来跡・指導助言 大木公彦、中村直子、本田道輝、三木靖、宮武正登、渡辺芳郎

令和2年度

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所長 前迫亮一
調査企画 # 次長兼総務課総務課長 野間口誠
 # 調査課長兼南の縄文調査室長 中村和美
 # 調査課第一調査係長 三垣恵一
調査担当 # 文化財主事 山崎克之
 # 文化財主事 西野元勝
事務担当 # 総務課主事 日置淑乃
来跡・指導助言 御楼門復元専門委員会、鹿児島市鹿児島城跡調査職員研修（遺跡見学）、揚村固、大木公彦、北村良介、三木靖、宮武正登、渡辺芳郎

令和3年度

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所長 中原一成
調査企画 # 次長兼総務課総務課長 大口浩嗣
 # 調査課長兼南の縄文調査室長 寺原徹
 # 調査課第一調査係長 三垣恵一
調査担当 # 文化財主事 西野元勝
 # 文化財主事 山下智沙子
事務担当 # 総務課主事 上増亜貴
来跡・指導助言 鹿児島県文化振興課、鹿児島県文化

財課、大木公彦、北村良介、渡辺芳郎

第4節 整理・報告書作成作業の経過

1 作業の経過

発掘調査に伴い、出土遺物、遺構図面、写真、デジタルデータ等の整理作業を平成28年度から実施した。日誌抄等をもとに年度毎に掲載する。

令和元（平成31）年度

遺物洗浄、選別、注記、接合、復元、実測、拓本、トレース、計測、レイアウト、遺構図面整理、遺構図面トレース、デジタルデータ（トータルステーションデータ等）整理、統合、トレース、レイアウト、現場写真整理、選別、遺物撮影、遺物レントゲン撮影、写真レイアウト、文章作成、陶磁器実測委託業務、自然科学分析委託（瓦の胎土分析、銃弾の組成分析）。

指導助言：金子智、渡辺芳郎

令和2年度

遺物洗浄、選別、注記、接合、復元、実測、拓本、トレース、計測、レイアウト、遺構図面整理、遺構図面トレース、デジタルデータ（トータルステーションデータ等）整理、統合、トレース、レイアウト、現場写真整理、選別、遺物撮影、遺物レントゲン撮影、写真レイアウト、文章作成、陶磁器実測委託業務契約、自然科学分析委託（瓦の胎土分析、銃弾の組成分析）。

指導助言：大木公彦、太田秀春、金子智、小林善仁、丹羽謙治、原口泉、松尾千歳、渡辺芳郎

令和3年度 本報告書刊行年度

遺物洗浄、選別、注記、接合、復元、実測、拓本トレース、計測、レイアウト、遺構図面整理、遺構図面トレース、デジタルデータ（トータルステーションデータ等）整理、統合、トレース、レイアウト、現場写真整理、選別、遺物撮影、遺物レントゲン撮影、写真レイアウト、文章作成、陶磁器実測委託業務、自然科学分析委託契約（瓦・陶磁器・石製品の胎土分析・組成分析）。

指導助言：大橋康二、金子智、三木靖、渡辺芳郎

2 整理作業の体制

総括、企画、事務担当は発掘調査の体制を兼ねる。

平成30年度

整理担当 中村和美調査課第一調査係長、永瀬功治文化財主事、福岡慶明文化財主事、阿比留士朗文化財主事

令和元（平成31）年度

整理担当 永瀬功治文化財主事、阿比留士朗文化財主事

事，藤崎光洋文化財主事，山崎克之文化財主事

令和2年度

整理担当 馬籠亮道文化財主事，山崎克之文化財主事，三垣恵一調査課第一調査係長，西野元勝文化財主事，黒木梨絵文化財主事

令和3年度

整理（本報告書作成）担当 黒木梨絵文化財主事，西野元勝文化財主事，山下智沙子文化財主事，彌榮久志文化財研究員，三垣恵一調査課第一調査係長

なお，令和元年度～3年度の報告書作成指導委員会及び検討委員会は以下の日程で実施した。

<報告書作成指導委員会>

令和元年度

第1回 6月14日，第2回 8月19日，
第3回 10月9日，第4回 11月6日，
第5回 11月26日

出会者：中村和美調査課長兼南の縄文調査室長，宗岡克英調査課第一調査係長，三垣恵一調査課第二調査係長，財団法人鹿児島県埋蔵文化財調査センター寺原徹調査課長，福永修一調査第一係長，有馬孝一調査第二係長，横手浩二郎調査第三係長，藤崎光洋文化財主事，山崎克之文化財主事，永濱功治文化財主事，阿比留士朗文化財主事

令和2年度

第1回 6月2日，第2回 8月4日，
第3回 10月7日，第4回 11月4日，
第5回 11月24日，第6回 2月1日

出会者：中村和美調査課長兼南の縄文調査室長，三垣恵一調査課第一調査係長，横手浩二郎調査課第二調査係長，財団法人鹿児島県埋蔵文化財調査センター寺原徹調査課長，福永修一調査第一係長，有馬孝一調査第二係長，黒川忠広調査第三係長，馬籠亮道文化財主事，山崎克之文化財主事

令和3年度

第1回 6月3日，第2回 8月4日，
第3回 10月6日，第4回 11月2日，
第5回 11月25日

出会者：寺原徹調査課長兼南の縄文調査室長，三垣恵一調査課第一調査係長，西園勝彦調査課第二調査係長，財団法人鹿児島県埋蔵文化財調査センター福永修一調査課長，永濱功治調査第一係長，有馬孝一調査第二係長，黒川忠広調査第三係長，黒木梨絵文化財主事（～6月），西野元勝文化財主事，山下智沙子文化財主事，彌榮久志文化財研究員（7月～）

<報告書作成検討委員会>

令和元年度

第1回 6月14日，第2回 8月19日，
第3回 10月10日，第4回 11月13日，
第5回 11月27日，第6回 2月10日

出会者：前迫亮一所長，野間口誠次長兼総務課長，草水美穂子主幹兼総務係長，中村和美調査課長兼南の縄文調査室長，東和幸南の縄文調査室長補佐，宗岡克英調査課第一調査係長，三垣恵一調査課第二調査係長

令和2年度

第1回 6月8日，第2回 8月7日，
第3回 10月9日，第4回 11月10日，
第5回 11月26日，第6回 2月5日

出会者：前迫亮一所長，野間口誠次長兼総務課長，山下勝史主幹兼総務係長，中村和美調査課長兼南の縄文調査室長，東和幸南の縄文調査室長補佐，三垣恵一調査課第一調査係長，横手浩二郎調査課第二調査係長

令和3年度

第1回 6月3日，第2回 8月4日，
第3回 10月6日，第4回 11月2日，
第5回 12月6日

出会者：中原一成所長，大口浩嗣次長兼総務課長，山下勝史主幹兼総務係長，寺原徹調査課長兼南の縄文調査室長，東和幸南の縄文調査室長補佐，三垣恵一調査課第一調査係長，西園勝彦調査課第二調査係長

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1 遺跡の位置

鹿児島城跡は鹿児島県鹿児島市城山町及び山下町に位置する。城域の詳細については未だ不確定な部分もあるため、ここでは『鹿児島(鶴丸)城跡保存活用計画』の記載をもとに、城山の山裾に沿って3か所の出入口(大手口、新照院口、岩崎谷口)を結んだ線と、東側にある堀(吉野堀、後寛堀)に囲まれた範囲を城域として扱う(第3図)。また、城内の機能も時代とともに変化しており、これまでの研究によると築城期は山城に星形(居館)を加えた構成の城郭で、本丸、二之丸と称していたが、後に城山の東側の掘野(麓)である現在の黎明館、県立図書館のある位置に館づくりの居館(居所)を移転し、本丸、二之丸と称するようになった。

2 地形

南部九州の地形は九州山地、宮崎平野から大隅半島、種子島・屋久島、およびその西の南部九州火山地域に区分される。九州山地は紀伊半島、四国から続く秩父帯と四万十帯からなる西南日本外帯山地の一部で、九州の山地の中で最も広く急峻な斜面からなる奥深い山々である。宮崎平野から大隅半島、種子島・屋久島は九州山地の南に接し、もはや西南日本の外帯山地ではなく琉球外弧の性質を帯びるいくつかの地塊に分かれる。大隅半島の山地(高隈・肝臓山地)は四万十層累群に中期中新世に貫入した花崗岩とまわりのホルンフェルスが侵食に抵抗して急傾斜で比高の大きい山をなす。

南部九州火山地域で非火山性の山地は出水山地(紫尾山地)と薩摩半島(掛宿山地)に分かれて分布し、火砕流台地や小型の溶岩台地に囲まれている。火山帯や地溝、山地の配列には方向性が認められ、鹿児島地溝や八代海の地溝、薩摩半島の山地はいずれも琉球弧の方向にある。

鹿児島地溝は鹿児島(錦江)湾から南北に連なり、新しく激しい火山活動が集中する。一方、肥薩・北薩の古い火山帯では、鹿児島地溝から西に離れるにつれて火山岩の時代は前期更新世から鮮新世へと古くなる。また、これらの火山群では鹿児島地溝に特徴的なカルデラを形成するような巨大な爆発的活動よりも、溶岩ドームや盾状の厚い溶岩流を噴出する活動が卓越したようである。

南九州の平野を特徴づけるシラスや始良丹沢火山灰を代表する日本列島周辺に広域に降灰した火山灰のふるさとのひとつである鹿児島地溝は九州の地形の一大特徴と言える。

鹿児島地溝は琉球弧の火山フロントのうち鹿児島湾から加久藤・小林カルデラまでゆるやかな「S」字状をなして湾曲しながら南北約75km、東西の幅約20kmで続く

大型カルデラを伴う火山性地溝である。地溝東側の新層崖は顕著であるが、西側は鹿児島湾の中央部を除き一般に不明瞭である。鹿児島湾中央部では海底に地溝中心に向かって落ち込む階段状の新層が認められており、その南北の地域では半地溝の性質を帯びている。湾奥部や中央部では水深200m以深のところがあるのに対し、湾口は100m以浅で、湾口部よりも湾奥部の方がかなり深くなっている。

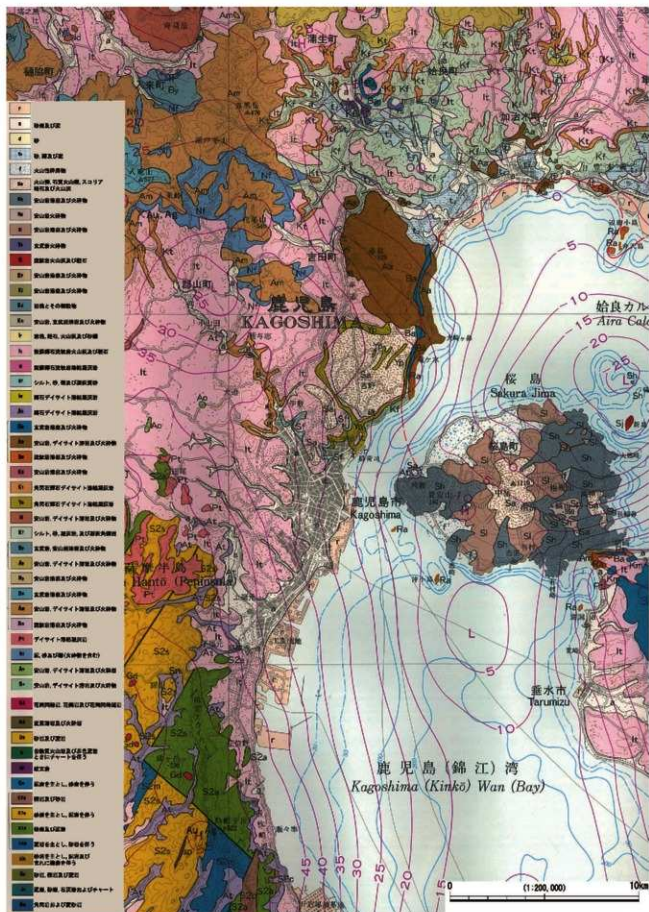
第四紀の火山フロントの位置に一致する鹿児島地溝の火山活動は、大規模火砕流噴火で多量のマグマを遠方に放出して隘没するという特徴をもち、火口の近くに噴出物が堆積して山をつくる活動は一般に少ない。これに対し、鹿児島地溝の西側の地域では、北部の肥薩火山群(国見山地)や鹿児島一串木野構造線より北側を占める北薩火山群は、古い地溝を埋めた鮮新世～前期更新世の火山岩からなる。

鹿児島地溝周辺に低地には南部九州の地形を特色づけるいわゆるシラス台地が広く発達する。これは低地や山地の緩傾斜面に堆積した火砕流堆積物がつくる地形である。始良入戸火砕流および島浜(阿多)火砕流は南部九州ほとんど全域の平野・盆地に分布し地形に応じて堆積している。鹿児島市は市街地を取り囲むように標高約100～400m前後の台地(北側に伊敷、吉野、西側に小野、西別府、南に坂之上の台地など)が連なっている。シラス台地は雨水により侵食谷が形成され、その台地の間を稲荷川、甲突川、田上川、脇田川、水田川などの河川が東流し、海岸部に小デルタを形成している。遺跡北側の吉野台地は100m程の急峻な始良カルデラ壁となって鹿児島湾にのぞむ。さらに緩傾斜をもって南西方向へ続き、坂元台地に連なる。坂元台地の標高は約100～200mで、始良カルデラの外輪山の一部、城山に続く。これらの台地は始良カルデラ噴出物の入戸火砕流堆積物(シラス)から成り、その上部にシラス以降に降下したテフラが堆積する。

鹿児島城跡御樓門周辺の標高は御樓門橋から御樓門に入る位置が約5mで、枳形虎口から城内本丸に上がった位置(黎明館)が約11mである。鹿児島城は東側に鹿児島湾を望み、周囲は堀で囲まれ、背後に城山を擁するという自然地形を巧みに生かした城づくり・地形で構成されている。また、西側の城山の一部は昭和6(1931)年に国指定史跡・天然記念物となっている。

3 地質

鹿児島市城山周辺の地質は、大木・早坂(1970)、大木(1974)、大木ほか(2016)によって詳細に報告されている。大きくは下位より城山層(竜尾層を含む)、島浜(阿多)火砕流堆積物、入戸火砕流堆積物、坂島薩摩テフラ(小



第1図 鹿児島(鶴丸)城跡周辺地質図

林, 1986) が堆積している。最下層に位置する城山層は鹿児島湾に面した城山の南東斜面の標高約30m付近まで露出しており、阿多火砕流の直下に位置することから最終間氷期5eの海成層と考えられている(大木1999)。城山層の上位に認められる阿多火砕流堆積物は城山層との時間間隔がほとんどないことから、城山層は一連の阿多火砕流堆積物の最下部層である可能性が高い。入戸火砕流堆積物は始良カルデラからの噴出であり、南九州一帯を覆い、火山灰は東北地方まで到達している。その上位にある板島薩摩テフラは鹿児島市北部地域の台地状の平坦面に広く分布する。大木・早坂(1970)は分布域の層厚の差から噴出源を板島付近に求めている。『新版火山灰アトラス』によると鳥浜(阿多)火砕流の噴出年代は約10万年前、入戸火砕流は約29,000年前、板島薩摩テフラは約12,800年前となっている。

第2節 歴史的環境

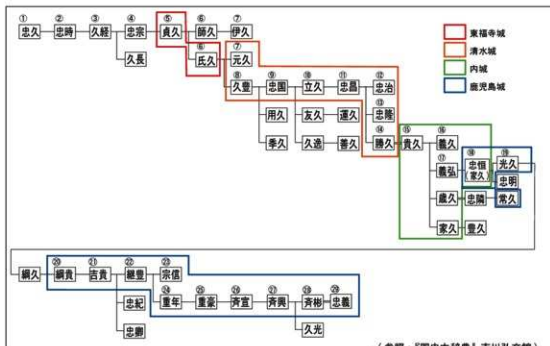
鹿児島市の先史時代の遺跡は、市中央部後背地の台地先端部や小河川によって開析されてきた舌状台地等に多く点在するほか、市街地周辺では標高約10m前後の丘陵地に点在する。市南の台地先端部には縄文時代後期の草野貝塚、海岸に近い地域では一之宮遺跡、笹貫遺跡といった弥生～古墳時代の遺跡が多数点在する。市街地周辺の丘陵部では春日町遺跡、若宮神社遺跡等の縄文時代前期から後期にかけての遺跡が存在している。また現在の鹿児島城より北側には島津氏の御館であった内城、清水城、東福寺城等、中・近世の城郭があり、歴史のある地域として知られている。さらに幕末から明治初めごろの産業遺産等は、平成27年に世界文化遺産に登録された

「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産である旧集成館・守山炭窯跡・間宮の碓氷溝がある。鹿児島城跡周辺に点在する遺跡について分布図と一覧表でまとめる(第3図, 第1表)。

鹿児島城跡北側の吉野台地には旧石器時代～縄文時代の遺跡が多い。中でも前平遺跡、加栗山遺跡からは縄文時代早期前半の指標となる土器群が出土し、標式遺跡となっている。大正4(1915)年、イギリスの医師であり考古学、人類学の研究者であるN.G.マンロー(1863-1942)らにより、鹿児島県における黎明期の発掘調査が行われた石郷遺跡も吉野台地に所在する。この台地を取り巻くように流れる榑木川は、下流において稲荷川へと名前を変え鹿児島湾に流れる。稲荷川河口には縄文時代中期の標式遺跡の一つである春日町遺跡がある。

中世の鹿児島城下

島津氏は初代から3代までは鎌倉在任の守護職であり、5代島津貞久の時に鹿児島に入り、守護大名から実質的に薩摩・大隅・日向三国を支配する戦国大名となった。守護大名時の鹿児島は郡司の矢上氏や長谷場氏によって支配されていた。貞久は興国2/暦応4(1341)年、鹿児島郡司矢上高純の東福寺城(現在の鹿児島市清水町多賀山公園)を降し、居城としたことで島津氏の鹿児島進出が始まった。その後の居城の変遷については、島津氏が鹿児島進出の足がかりとした東福寺城に興国4/康永2～元中4/至徳4(1343～1387)年の44年間居城した。東福寺城は南北朝期、海に面した要害の城として重要な意義を有したが、居館や城下町を形成するには狭隘であった。そこで向側の榑木川(稲荷川上流)を隔てた北西



第2図 島津家家系図



第3図 鹿児島(鶴丸)城跡周辺遺跡位置図

第1表 鹿兒島(鶴丸)城跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	種類	時代
1	201-082	鹿兒島(鶴丸)城跡	城山町	平地	縄文時代、古代、近世、近現代
2	201-	仙巖園附花倉御仮屋敷園	吉野町9700-1	-	近世
3	201-027	壱ヶ宮	吉野町壱ヶ宮深庭	台地	弥生時代、古墳時代
4	201-104	矢来門	吉野町壱ヶ宮矢来門	丘陵	縄文時代 早期
5	201-145	集虎塚跡	吉野町壱	平地	近世
6	201-156	鹿兒島紡績所跡	吉野町壱ヶ水	平地	近世
7	201-142	壱ヶ宮B	吉野町壱ヶ宮	丘陵	縄文時代 早期
8	201-005	鶴平	吉野町壱ヶ宮鶴平	台地	縄文時代 早期
9	201-127	滝ノ上火薬製造所跡	吉野町滝ノ上	平地	近世
10	201-069	横ノ口城跡	坂元町字城ノ後	台地	中世
11	201-055	清水城跡	清水町大隅寺岡	丘陵	中世、近世
12	201-054	東福寺城跡	清水町田之浦	丘陵	古代、中世
13	201-083	尾鷲小城跡	稲荷町字後迫	平地	中世
14	201-058	浜崎城跡	清水町田之浦	丘陵	中世
15	201-146	城園之洲跡台跡	清水町城園之洲	平地	近世
16	201-132	浜町	浜町	平地	近世
17	201-082	大乗院跡	稲荷町清水中校庭	丘陵	中世、近世
18	201-144	福昌寺跡	池之上町玉置高枝一帯	平地	中世、近世
19	201-003	丸岡	坂元町たんたとう丸岡	丘陵	縄文時代 早期、後期
20	201-007	南洲神社	上竜尾町南洲神社境内	台地	縄文時代 早期
21	201-009	大龍遺跡群	大竜町・池之上町・春日町	台地	縄文時代 前期・中期・後期・晩期、弥生時代、古墳時代、中世、近世
22	201-056	内城跡	大竜町	平地	中世
23	201-057	壱馬楽城跡	坂元町矢上	丘陵	中世
24	201-143	整野冷水宮跡	冷水町整野	丘陵	近世
25	201-159	琉球館跡	小川町	-	近世
26	201-134	壱水・宮之城島津家屋敷跡	山下町	平地	近世
27	201-411	火障地跡	山下町13番21号	-	近世
28	201-105	名山	山下町名山小枝庭	平地	近世、近現代
29	201-106	造士館・清武館跡	山下町4-1、4-2	平地	近世、近現代
30	201-061	上山城跡	新開院町	丘陵	中世
31	201-133	夏塩城跡	草牟田町夏塩	丘陵	中世、近世、近現代
32	201-060	伴操館跡	伊敷町中福良	丘陵	古代、中世
33	201-157	玉置邸跡	玉置町	-	近世
34	201-020	玉置	玉置町(旧練兵場跡)	平地	弥生時代 初期～前期
35	201-158	共研公園	中央町	-	弥生時代、古代
36	201-129	武	武一丁目	平地	弥生時代、古墳時代、中世
37	201-023	鹿大構内	郡元一丁目鹿大構内	平地	弥生時代、古墳時代



第4図 島津家歴代の居城位置図

の丘陵に七代元久は嘉慶元（1387）年、清水城を築いた。清水城は本城とも呼ばれ、鹿児島にある東福寺城以下、島津氏歴代の居城中で別格の城であったと考えられる。

清水城には元中4/至徳4年～天文19（1387～1550）年の163年間居城した。天文4（1535）年勝久の没落後、空城となっていたが、天文19（1550）年、15代貴久が現在の鹿児島市立大龍小学校のあたりに内城を築いた。島津氏が薩摩・大隅・日向の三州統一および九州一円の制覇を目指す拠点として、交通の利便性や城下町形成に有利な地を選んだものと考えられる。内城には天文19～慶長7（1550～1602）年の52年間居城した。内城は一重の堀を巡らせた程度で、防衛機能に乏しく、慶長5（1600）年の関ヶ原の敗戦を機に移転問題が表面化した。そこで薩摩藩初代藩主忠恒（のちの家久）は、当時、城山の山上に築かれた山城（上山城、上之山城とも称された）及び麓に鹿児島（鶴丸）城を築くこととなった。上山城はほぼ現在の城山の範囲にあり、家久は上山城の曲輪を生かしながら、本丸曲輪、二ノ丸曲輪を整え、新居城となる山城を整備したと考えられる。

島津家の略系図と居城の変遷を第2、4、5図に、島津氏の居城と鹿児島城関連の年表を第2表に示す。

近世の鹿児島城下

鹿児島城の築城年月は、『築城史ヨリ見タル鹿児島城』の中で、「當城の築城年月は明かでないが、島津國史に依れば慶長七年上山城の構築を始め同十一年六月島津家久が此城に遷ったことになって居る」と記されている（林1930）。

鹿児島（鶴丸）城本丸跡発掘調査報告書「鹿児島城の



第5図 鹿児島城跡周辺における居城位置図

沿革」の中では、『経兼日記』及び『見聞秘記』中の記事を紹介したうえで、「着工の年時に些少の相違はあるが、関ヶ原戦後程なく始ったとみてよいであろう」と記されている（五味1983）。

黎明館調査研究報告「鹿児島城について」の中では、「家久（初代藩主）は、1601年より鹿児島城（鶴丸城）の構築を始めると共に、ここを軍事・政治の拠点として藩体制を整えていった」と記されている（高中1992）。

黎明館調査研究報告「鹿児島（鶴丸）城築城に見る思想」の中では、「鹿児島城築城の時期については、慶長6年説と7年説の両説があり、決定づけることは困難である」としつつ、「薩摩藩の公的編纂物は鹿児島城築城を慶長7年としているといえる」と記されている（徳永2008）。

鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告「島津藩の本城としての鹿児島城」の中では、「家久は1602年、当時の領国内の地域行政拠点だった城を、「外城」と位置付けた枠組みを活かしつつも、家康勢と対峙する軍事的視野を優先しながら、藩政を新たに展開する新拠城としての内城の役割を念頭におきながら、新規に本城を築く覚悟で（義久、義弘の同意を得ることを優先して）、上山城に星形を加えて新鹿児島城を建設しようとした」と記されている（三木2014）。

鹿兒島城の築城年については、慶長6年説あるいは慶長7年説と諸説あり、史料によって異なるが、関ヶ原の戦い直後であるということは言えよう（鹿兒島（鶴丸）城跡保存活用計画「2 鹿兒島（鶴丸）城跡の論考 ① 築城年について」より抜粋）。

近世初期の頃の鹿兒島城は上山城または鹿兒島城（藩内では御内城）と呼ばれ、山城部分と麓の平城部分を含んでいた。慶長期には藩主の居館は山下に置かれ、慶長15（1610）年、常久（上山城主）に御城中警護を命じ、同17（1612）年から常久が上山城に在番、同19（1614）年常久が亡くなり、以後、番所が置かれることとなる。また、城山の南側麓に屋形（居館）が整備され始めるが、依然として山城部分が城のメインであった。大手口は城山に通じ、居館の正門は御棧門であった。鹿兒島城は、慶長末頃に一応の完成をみるが、元和から寛政年間にかけて増築、補修が続けられた。また、寛永16（1639）年、麓の御殿が増築され、石垣の修補も行われる。

近世中期以降は山城部分を美称で鶴丸山と呼んでおり、それ以降から山城部分を鶴丸城と呼ぶようになった。明治になり鹿兒島城全体を鶴丸城とも呼ぶようになった。麓の屋形（居館）が広大なものとなり、屋形（居館）の部分が目立つようになった。なお本丸曲輪は、石垣や堀に3面を囲われたものとなり、東及び南側からの姿は南九州第一の規模であり、壮大なものであったと考えられる。

慶安3（1650）年、大雨により城が破損し、元禄9（1696）年には大火により城が延焼し、本丸焼失、二之丸の一部を焼く。天明5（1785）年、25代重豪は二之丸を整備拡大する。明治4（1871）年に廃藩置県、同年に29代忠義が本丸を去ることとなる。

明治5（1872）年、明治天皇が西国行幸の際に鹿兒島城を訪れ、随行した内田九一により撮影された城内の写真や錦絵が現存している。

明治6（1873）年、火災により本丸が炎上、明治10（1877）年には西南戦争により二之丸が炎上する。最後の内戦と言われる西南戦争では熊本県の田原坂など九州各地でその戦跡を残しているが、最後の戦地となった鹿兒島城を含む城山にも多くの痕跡を残している。後の私学校跡や御棧門跡周辺では官軍から多くの砲弾、銃弾を浴び、石礮及び石垣にその痕跡を残している。

その後、本丸、二之丸跡には教育関連施設が多く設立される。明治17（1884）年には県立中学造士館が設立され、今回の発掘調査で初代校長である島津珍彦の銅像台座の銘？（花崗岩製）が出土した。明治34（1901）年には官立第七高等学校造士館が設立され、今回の発掘調査では初代校長である岩崎行親の銅像台座が出土している。いずれの銅像も太平洋戦争時の金属供出で供出され、台座のみが残ったと考えられる。

昭和3（1928）年「薩摩庭園調査覚書」の中で、庭園について（山下御殿の庭（本丸庭園のことか））として、次のように記されている（永見1928）。

抜粋

- (1) 池。岩組で築いた池畔。玉座上庭に見るのと全く同型の亀の姿体をかたちどる石を池中に浮かべる石の一枚反り構。
- (2) 対庭の家屋主体の片隅から礎岩組を組み出し池に進み入れる。それに沿って水を落とし流す。
- (3) 背景にやや厚い植え込み。中景および前景に若干の配植、等々。
- (4) 面積二百三坪級内外。
- (5) この庭は斉興公の時、號の善八の造修または新造とご考証せられる事前項の通りであるが小生は技術的に考へて新造とすることが事実にあたるに否ざるかと思ふ。等

また、本丸庭園内の御池の石は、昭和初期、第七高等学校造士館プール建設の際に一部が鹿兒島市の公会堂（現在の中央公民館）に、大部分は鴨池動物園の庭石として使用された。昭和46（1971）年12月、同園が平川へ移転する際、これらの石材は黎明館の庭園用に鹿兒島市から譲渡され、昭和58（1983）年、黎明館西側に移設・復元された。この御庭については、平成29年度の発掘調査により、庭石の一部が確認されている。

昭和24（1949）年には鹿兒島大学文学部が創設され、昭和27（1952）年、大火により一部を除き焼失、昭和32（1957）年には鴨池町から鹿兒島大学医学部が移転することとなる。昭和35（1960）年、石垣の一部が崩壊、昭和49（1974）年、鹿兒島大学医学部が宇宿町へ移転する。昭和53（1978）年より（仮称）明治100年記念館（現黎明館）建設のための発掘調査が行われた後、県歴史資料センター黎明館（現：鹿兒島県歴史・美術センター黎明館）が設立され、現在に至る。

第3節 絵図・文献から見た各調査地点(第33図)

ここでは、文献・絵図から鹿兒島城跡の国指定史跡をめぐり上発掘調査を行った各地点についてみる。

(1) 本丸と城山の境界(第6図)

本丸と城山との境については、多くの絵図で本丸の建物が描かれていないため、不明な点が多い。天保14（1843）年「天保年間鹿兒島城下絵図」では、城山と本丸との境付近に瓦葺きの建物が描かれており、明治6（1873）年に鹿兒島城の建物配置等を詳細に描いた成尾常矩による「鹿兒島屋形及びその周辺図」と「鹿兒島城本丸殿舎配置図」には、「御納戸」と「御御藏」、「御数寄屋」、「御進物藏」などが描かれている。少なくとも19世紀の段階には、この周辺一体は蔵が置かれる場所

第2表 鹿児島(鶴丸)城跡の土地利用の記録

№	年号	西暦	主な出来事	出典
1	文治元年	1185	忠久、島津征下可頼に任命される。	日記雑録(前編) 1-93
2	建久7年	1196	島津家初代忠久、本丸丸城(出水市本丸)に入城したと伝えられる。	日記雑録(前編) 1-96
3	暦応4	1341	3代貞久、鹿児島郡司矢上高純の東福寺城(鹿児島市清水町多賀山公園)を下し入城する。	日記雑録(前編) 1-2115
4	嘉慶元年	1387	7代貞久、大隅防守清頼を誘討して、清水城(鹿児島市鶴岡町清水中学校裏山)へ入城する。	文政五年鹿児島城始創
5	天文19	1550	15代貞久、伊集院城(自鹿市伊集院町)より鹿児島へ入城し、内城(鹿児島市大町 大蔵小学校敷地内)を築造して居城とする。	文政五年鹿児島城始創
6	慶長3	1600	徳ヶ原の戦い	日記雑録(後編) 3-1169
7	慶長6	1601	上山城普請	上山経業日記
8	慶長7	1602	初代藩主家久が鶴丸城の築城を始める(記録あり)。	日記雑録(後編) 3-1660
9	慶長8	1603	家久、内城から鶴丸城へ入城する。	日記雑録(後編) 3-1789
10	慶長11	1606	徳門前板橋築り初め	日記雑録(後編) 4-216
11	慶長14	1609	砲球を平定	日記雑録(後編) 4-583
12	慶長17	1612	御殿門柱立	不明
13	慶長18	1613	御普請・蔵の柱立	日記雑録(後編) 4-1074
14	元和元	1615	幕府の一団一城令により、上山城を廃止する。	日記雑録(後編) 4-1280
15	寛永16	1639	城の堀敷建替え・石垣の修繕を行う。	日記雑録(後編) 6-65
16	慶安3	1650	大雨により鶴丸城が破壊する。	日記雑録(追録) 1-330
17	寛文4	1664	鹿児島城石垣普請	日記雑録(追録) 1-1939
18	延宝5	1677	鹿児島城東北門破損、東北に新設砲臺許可	日記雑録(追録) 1-1726
19	天和3	1683	二之丸建替	古記 371~372頁
20	元禄9	1696	鹿児島大火により、鹿児島城へ延焼し、本丸(御殿門とも)が焼失。二之丸の一部等が焼失する。	日記雑録(追録) 1-2599~2601
21	宝永元	1704	鹿児島城、対面所、小倉、大蔵所完成	日記雑録(追録) 2-1614
22	宝永4	1707	本丸再建工事を完了	日記雑録(追録) 2-2496
23	享保12	1727	城下土居堀積	日記雑録(追録) 3-1944
24	宝暦5	1759	普請方より出火し、奉行所や材木蔵が焼失する。	三州御出仕要覧
25	明和3	1766	城下土居大雨のため崩壊	日記雑録(追録) 6-324
26	安永2	1773	造土師・面取師ができる。	日記雑録(追録) 6-1082
27	天明5	1785	防火重要、二之丸を惣堀拡大する。それまで二之丸御門と呼ばれていた門を矢東御門(現在の県立図書館正門の位置)に改め、御下土居門と呼ばれていた門を二之丸御門(現在の市立高輪正門の位置)と改称する。	日記雑録(追録) 6-2196
28	寛政4	1792	二之丸の廻廊を含む大工事が完了する。	列朝制度
29	文化7	1819	御殿門前の板橋を石垣に架け替える。	日記雑録(追録) 7-1975
30	文久3	1863	薩英戦争	日記雑録(追録) 8-432
31	明治2	1869	徳弘義興	忠義公史料 6-214の8
32	明治4	1871	徳澤源兵衛、29代忠義は本丸を去り、新石垣台二分宮が入る。	忠義公史料 7-135-162
33	明治6	1873	本丸、御殿門が焼失する。	玉皇島津家史料 7-2176
34	明治10	1877	西南戦争、二之丸が焼失する。	鹿児島県庁日記、黒木為経日記
35	明治17	1884	(県立)中学造士館設立	日記雑録(追録) 8-1305
36	明治34	1901	(官立)第七高等学校造士館設立	
37	大正3	1914	板島大正大火焼に伴う地震により石垣の一部崩落、翌年修復	
38	昭和20	1945	空襲により校舎全焼、石垣一部崩壊	
39	昭和27	1952	鹿児島大学文学部学舎全焼	
40	昭和32	1957	鹿児島大学医学部、鶴岡町より移転	
41	昭和35	1960	石垣一部崩壊	
42	昭和40	1974	鹿児島大学医学部、宇留町へ移転	鹿児島県史第六巻下
43	昭和53	1978	発掘調査(本丸跡・二之丸跡、昭和54年まで)	鹿児島(鶴丸)城跡-御殿門周辺-
44	昭和55	1980	県立図書館移設(現県立博物館より)	鹿児島県史第六巻下
45	昭和58	1983	鹿児島史資料センター整備開始	鹿児島県史第六巻下
46	平成11	1999	御角橋跡周辺発掘調査	鹿児島(鶴丸)城跡-御殿門周辺-
47	平成11	1999	御角橋跡周辺石垣の一部掘削替え	鹿児島(鶴丸)城跡-御殿門周辺-
48	平成27	2015	鶴丸城保全整備事業に伴う学歴文化財発掘調査を実施(継続中)	鹿児島(鶴丸)城跡-御殿門周辺-
49	平成27	2015	本丸北側壁の石垣が一部崩落一合和2年度に修復	鹿児島(鶴丸)城跡-御殿門周辺-
50	令和2	2020	御殿門設立	鹿児島(鶴丸)城跡-御殿門周辺-

あったことがわかる。また、第七高等学校造士館では、この周辺に第2寄宿舎があった。現在は、黎明館の古民家などの屋外展示ゾーンとなっている。

59トレンチは、「鹿児島屋形及びその周辺図」に描かれる道と現在の黎明館背後の石垣の屈曲の線がほぼ一致しており、その石垣の屈曲地点の距離から考えると衣服や調度品などを納めた「御納戸」の一部にあたる可能性が高い。御納戸は、元禄9(1696)年の大火で焼け残った数少ない建物の1つであるが(鹿児島大学玉里文庫「古記」元禄9年4月24日条)、19世紀代に絵図に描かれた建物が、築城当初のものかはわからない。

(2)唐御門(第7図)

唐御門は、現在の黎明館入り口にあった門である。唐門とは、屋根に唐破風の付いた門のことである。唐門には、妻側に唐破風を置く「平唐門」と開口部正面に唐破風を置く「向唐門」の二種類がある。

元禄9(1696)年「鹿児島城絵図控」では、「此門焼失」と書かれており、17世紀の段階には既に建っており、それが元禄9(1696)年の大火で焼失したことがわかる。同絵図では瓦葺建物ではなく、唐破風も描かれていないが、宝暦6(1756)年「薩摩国鹿児島城絵図」では向唐門の唐破風のある瓦葺屋根の表現で描かれており、元禄の大火後に瓦葺き屋根で再建された可能性がある。明治6(1873)年「鹿児島屋形及びその周辺図」には門の印が、「鹿児島城本丸殿舎配置図」には、「唐御門」と書かれている。いずれも、門の規模は不明である。現在の黎明館の門は、明治34(1901)年の第七高等学校造士館の門を利用したものである。

江戸期から明治6(1873)年までの絵図では、御樓門から唐御門までは階段が描かれており、明治34(1901)年一昭和11(1936)年のものと思われる第七高等学校造士館の写真では、階段の中央にスロープがある。現在の黎明館橋形内のスロープは、明治時代以降に造られた可能性がある。

(3)本丸大奥(第8図)

元禄9(1696)年「鹿児島城絵図控」や宝暦6(1756)年「薩摩国鹿児島城絵図控」では、本丸と二之丸の間に堀が描かれている。しかし、その後の、天保14(1843)年「天保年間鹿児島城下絵図」、明治6(1873)年「鹿児島屋形及びその周辺図」では、本丸東堀に通じる東側は描かれるものの、今回の調査区は、「御本丸大奥」、「大奥」と書かれている。もともとは、堀であった部分が、後世に埋め立てられ、本丸大奥になったと考えられる。

鹿児島城には、「本丸大奥」と「二之丸大奥」の2つの大奥がある。大奥は、「奥」と「御奥」と表記されることもある。通常、江戸城以外では「大奥」を用いないことが多

いが、鹿児島城では、慶長18(1613)年9月18日に初代薩摩藩主島津家久が「当御城大奥」に移ると記載されており(『鹿児島県史料 大図雑録(後編)』4-1074)、江戸時代の早い段階で既に大奥の表記を用いていた。安永9(1780)年には、御側を奥、御奥を大奥と改め、寛政5(1793)年にそれぞれの掛かりを奥掛・大奥掛と改称した。その後、第8代薩摩藩主島津重豪の代になると、『旧記雑録』の中にも「本丸大奥」という記載が増える。明治10(1877)年の薩英戦争の際には、本丸大奥2階に砲弾が1つ直撃し破裂したと記録が残る(鹿児島県史料『忠義公史料』2-433)。その後、第七高等学校造士館時代はテニスコートなどとして利用され、現在は黎明館の駐車場である。

(4)本丸東堀の調査(第9図)

本丸北側から東側まで巡る堀である。現存する鹿児島城跡のほぼ全ての絵図に描かれている。宝暦6(1756)年「監察使問答集上」(『鹿児島県史料集 通昭録』1)によれば、「北方の堀の入は1町20間、横幅9間、深さ1丈2尺。南方の堀の入は1町57間、横幅9間、深さ5尺」とある。北御門跡周辺の石垣修復に伴う発掘調査で北側の堀幅は築城当初より狭くなっていたことが確認された(鹿児島県立埋蔵文化財センター2022)。

(5)二之丸南側長屋(第10図)

調査区周辺は、二之丸の南東端に近い場所であると考えられる。この周辺には、宝暦6(1756)年「薩摩国鹿児島城絵図」や天保14(1843)年「天保年間鹿児島城下絵図」では、二之丸南東端の角から南東院(現在の照國神社)まで続く長屋が描かれており、「天保年間鹿児島城下絵図」では「山奉行」「宗門」などと書かれている。

明治6(1873)年「鹿児島屋形及びその周辺図」でも同じく、二之丸南東端の曲輪を囲むように長屋が巡り、その長屋には、御勘定、御奉行代官所、宗門方、山奉行所があったことがわかる。調査区は、このうち御勘定か御奉行代官所の周辺であったことが想定される。また、明治5(1872)年に撮影された「照國神社之辺」(『鹿児島名勝撮影』)には、この長屋と考えられる建物が写っている。この長屋は、長屋の前に半間飛び出した庇を設け石積みの石塀を設け、その上に櫓を備えている。調査区には、明治10(1877)年の西南戦争で火災によって二之丸が焼失した後は、明治15(1882)年に、石造りで和風を基調としながら、随所に和風モチーフの細部を混在させた興業館が建設された。興業館は、鹿児島県の産業振興に大きな役割を果たし、その後は旧県立博物館古資料館などとして利用された。

(6)大手口(第11図)

調査区は、現在の照國神社背後から城山へ登る道の途中にある。宝暦5(1755)年に幕府から派遣された監察



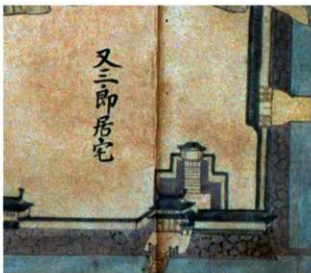
天保14年(1843)年
「天保年間鹿兒島城下絵図」(部分)(鹿兒島市立美術館所蔵)



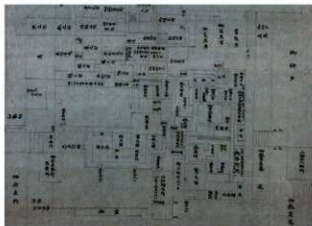
元禄9年(1696)年
「鹿兒島城絵図控」(部分)(東京大学史料編纂所蔵)



明治6(1873)年
「鹿兒島屋形及びその周辺図」(部分)(鹿兒島市立美術館所蔵)



宝暦6年(1756)年
「薩摩国鹿兒島城絵図」(部分)(東京大学史料編纂所蔵)



明治6(1873)年
「鹿兒島城本丸殿舎配置図」(部分)(鹿兒島市立美術館所蔵)

第6図 絵図にみる本丸と城山との境



「第七高等学校遺士館絵葉書」(部分)(個人蔵)

第7図 絵図にみる唐御門



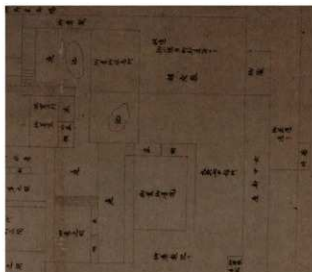
元禄9年(1696)年
「鹿兒島城絵図控」(部分)(東京大学史料編纂所蔵)



明治6(1873)年
「鹿兒島屋形及びその周辺図」(部分)(鹿兒島市立美術館所蔵)



天保14年(1843)年
「天保年間鹿兒島城下絵図」(部分)(鹿兒島市立美術館所蔵)



明治6(1873)年
「鹿兒島城本丸殿舎配置図」(部分)(鹿兒島市立美術館所蔵)

第8図 絵図にみる本丸大奥



宝暦6年(1756)年
「薩摩国鹿兒島城絵図」(部分)(東京大学史料編纂所蔵)

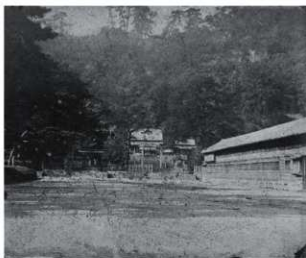


明治6(1873)年
「鹿兒島屋形及びその周辺図」(部分)(鹿兒島市立美術館所蔵)

第9図 絵図にみる本丸東堀



天保14年(1843)年
「天保年間鹿兒島城下絵図」(部分)(鹿兒島市立美術館所蔵)



明治5(1872)年
「鹿兒島照国神社」藤崎直高 東京国立博物館



明治6(1873)年
「鹿兒島屋形及びその周辺図」(部分)(鹿兒島市立美術館所蔵)

第10図 絵図にみる二之丸南側長屋

使に対し、島津家が答えた内容を記した『監察使問答集』(『鹿兒島県史料集 通昭録』1)によれば、鹿兒島城は山城であり、南には大手口、北は岩崎口、西は新照院口にそれぞれ門があり、本丸は大手口の上にあつたと記され、大手口には侍屋敷が6か所あつたという。

寛文10(1670)年『薩藩御城下絵図』では、調査区付近と推定される場所に瓦葺き建物で「大手門」と書かれており、城山に「鹿兒島城」が書かれる。元禄9(1696)年「鹿兒島城絵図控」や宝暦6(1756)年「薩摩国鹿兒島城絵図」でも「大手口」と記され周辺には瓦葺きの侍屋敷が描かれ、城山には「本丸」と「二丸」の曲輪が描かれている。本来は、「監察使問答集」であつたように本丸や二之丸は城山にあり、その入口としての大手門が調査区付近にあつた。18世紀以降の絵図になる

と、城山の曲輪や建物は描かれなくなり、本来藩主の居所であつた麓に本丸と二之丸は移つたようであるが、天保14(1843)年「天保14年城下絵図」でもこの場所には瓦葺き建物が描かれ「大番」と書かれており、麓に本丸が移つた後にも、この場所には山城の番所としての機能があつたようである。

明治10(1877)年9月の西南戦争城山攻防戦では、薩軍は「旧大手成は鎮魂社の周辺等に大板竹柵を設け、その所々の要地に穴を掘つて砲弾を避けている」(『鹿兒島県史料集 丁丑日誌』(下) 桜島出張御用掛西久保紀林ヨリ上申書く)とあり、薩軍の一部が籠もつていた。

現在でも、絵図に描かれているように屈曲しながら大手口から城山に登る山道脇には、近世の石組排水溝が残っており、機能している。



寛文10年(1670)年
「薩藩御城下絵図」(部分)(鹿児島県立図書館所蔵)



天保14年(1843)年
「天保14年城下絵図」(部分)(鹿児島県立図書館所蔵)



元禄9年(1696)年
「鹿児島城絵図控」(部分)(東京大学史料編纂所蔵)



宝暦6年(1756)年
「薩摩国鹿児島城絵図」(部分)(東京大学史料編纂所蔵)

第11図 絵図にみる大手口

(7) 南泉院(第12図)

調査区は、現在の照國神社の境内にある。照國神社境内は、近世には南泉院の境内であった。大雄山仏日寺南泉院は、江戸寛永寺を本山とする天台宗寺院で、徳川家康を祭神とする徳川歴代将軍の位牌も安置した東照宮の別当寺である。宝暦9(1759)年、第4代薩摩藩主島津吉貴が、紫尾山大願寺(さつま町鶴田にあった天台宗の古刹)の再興と(日光)東照宮並の(徳川将軍家の)位牌殿を造営せんとして、鹿児島城大手口に土地を定めて、寺号を南泉院とする『鹿児島県史料 旧記雑録追録』2-2829)とあり、翌年の宝永7(1710)年に南泉院とその子院の実相院・観受院・吉祥院が落成し、遷宮を行っている『鹿児島県史料 旧記雑録追録』2-2927)。始良市祐佐増田を領するなど、505石の寺領を持つ藩内最大の天台宗寺院であったという『三国名勝図絵』。幕末には、幕府との関係悪化から鹿児島市常盤に移され、その後、明治2(1869)年に廃仏毀釈により、廃寺となった。東照宮は本堂の北東にあった。他に御位牌殿・開山堂・護摩堂・千手観音堂の塔頭があった。南泉院建立前の元禄9(1696)年「鹿児島城絵図控」では、南泉院は描かれていないが、宝暦6(1756)年「薩摩国鹿児島城絵図」や天保14(1843)年「天保14年城下絵図」や『三国名勝図絵』では、堂舎が描かれる。調査区は、その境内南西端の部分で、林が描かれている。城山の南泉院南側から東側にかけては、鹿児島城跡の南の境界となる堀があり、後寛堀につながっている。この堀は、一部近代まで照國神社境内にあったようである。

照國神社は、第11代薩摩藩主島津斉彬を祭神とし、文久2(1862)年に第12代薩摩藩主島津忠義とその父久光によって南泉院境内に敷地が選定され、文久3(1863)年に孝明天皇より「照國大明神」の神号授受を受けて祠が建てられた。その後、元治元(1864)年に改めて東照宮が建てていた地に社殿を造営し、照國神社と称した『鹿児島県史料 旧記雑録』8-546)。明治2(1869)年には、同じ境内に島津家代々の惣社として鶴峯神社が創建された(『鹿児島県史料 旧記雑録』8-938-1)。後に磯に遷宮)。明治6(1873)年に県社に列し、同15(1882)年には別格官幣社に昇格した。境内は、明治時代以降も拡張しており、明治36(1903)年の境内図では、境内南東に「濠」が描かれている。これは、江戸時代の絵図にある鹿児島城の南境界となる堀であると考えられる。この場所は、現在は駐車場となっている。現在の照國神社境内は、南泉院の時よりも東に広がっていることになる。



南日本出版文化協会1966『三国名勝図会』上巻より



三輪智根1994『照國神社誌』照國神社社務所より

第12図 絵図にみる南泉院



寛文10 (1670) 年
「高藩御城下絵図 (鹿児島)」 (部分) (鹿児島県立図書館所蔵)



明治6 (1873) 年
「鹿児島島形及びその周辺図」 (部分) (鹿児島市立美術館所蔵)



天保14年 (1843) 年
「天保年間鹿児島城下絵図」 (部分) (鹿児島市立美術館所蔵)



天保年間 (1830~1843) 年
「鹿児島絵図」 (部分) (東京大学史料編纂所所蔵)

第13図 絵図にみる吉野堀

(8) 吉野堀(琉球館・高野山最大乗院)(第13図・第14図)

今回は吉野堀の確認のため、周知の埋蔵文化財包蔵地「琉球館跡」,「最大乗院」で調査を行った。調査区である、吉野堀は、鹿児島城の北側にあった堀である。

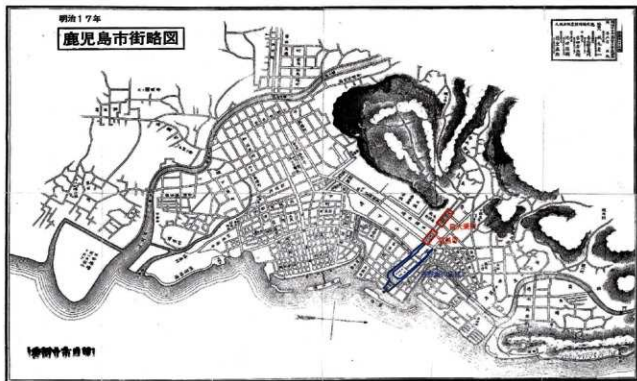
宝暦6(1756)年の「監察使問答集上」『鹿児島県史料集 通昭録』1)によれば、「吉野橋と堀のこと。岩崎口から海際まで4町16間。吉野橋から上へは2町7間。堀を修復する際に公儀に届けた時の幅は、吉野橋で10間半、新橋で16間、海際で26間で、深さは6尺5寸。」とある。堀は岩崎口の出口付近から始まり、海に近づくにつれて幅が広がっている。

吉野堀には、吉野橋、新橋の2つの橋が掛かっていた。天保年間(1830~1843)「天保期絵図」には、新橋の擬宝珠に慶長17(1612)年の銘があるとの記載があることから、この時期には既に堀と各橋があったようである。安永4(1775)年には櫓門を新橋・吉野橋にたて、それぞれ番鎖を設置され『鹿児島県史料 旧記雑録』6-1251),のちに門は新橋御門・吉野橋御門に改称されている『鹿児島県史料 旧記雑録』6-1252)。吉野堀は、明治5(1872)年には、鎮台分営の門の下通り・吉野橋入口・元中ノ辻番所の角へ櫓門を建て、訓練の時には閉じるようにする『鹿児島県史料 旧記雑録(追録)』8-1087の3)

とあり、まだ埋め立てが行われていないが、明治17(1884)年「鹿児島市街略図」では、堀が描かれておらず市街地化していることから、この段階では既に埋め戻されたと考えられる。

琉球館は、琉球からの使節の滞在場所で、琉球との貿易拠点としても機能していた。もともとは琉球飯屋と呼ばれていたが、天明4(1784)年に琉球館と改名された『鹿児島県史料 旧記雑録(追録)』6-2087)。天保14(1843)年「天保年間鹿児島城下絵図」や明治6(1873)年「鹿児島島屋形及びその周辺図」では、吉野堀の新橋の北側に「琉球館」が描かれる。

高野山最大乗院は、内城跡にあった島津氏の祈願寺で、薩摩藩最大の真言寺院であった経国山寶成就寺最大乗院が明治2(1869)年の廃仏毀釈によって廃寺になった後、現在地に再興された寺院である。その再建時期は明治11・12(1878・1879)年頃と考えられ、当初は説教所として復興し、現在に至る。明治17(1884)年「鹿児島市街略図」には既に最大乗院の記載がある。この地図では、最大乗院とその東西の区画は、南北に長くなっており、吉野堀を埋め立てた名残が区画に残っていると考えられる。そのため、この最大乗院は、吉野堀の埋立地に再興されたと考えられる。



明治17(1884)年「鹿児島市街略図」

第14図 絵図に残る吉野堀の名残と考えられる地形

第三章 鹿兒島（鶴丸）城跡の過去の調査歴

鹿兒島（鶴丸）城跡では、鹿兒島県教育委員会、鹿兒島県立埋蔵文化財センター、県歴史資料センター黎明館（現在の県歴史・美術センター黎明館）、鹿兒島市教育委員会によって46地点で発掘調査が行われている。

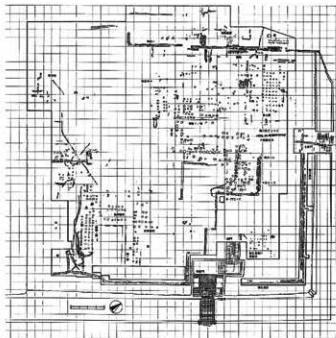
鹿兒島城は、明治6（1873）年の大火や明治10（1877）年西南戦争、大正3（1914）年の桜島大噴火に伴う地震、第二次世界大戦によって多くの建物や石垣が失われ、近代以降に吉野堀、名山堀等の堀で埋め立てられ、その跡地は大部分が都市化している。

そのため、地上には城の残存遺構は少ない。また、本丸跡を除く調査の多くは民間開発に伴う小規模発掘調査となっており、城跡の全容解明を困難にしている。ただし、発掘調査された地点の多くでは、近世後期を中心とした遺構が確認されており、地下には鹿兒島城の遺構が残っていると考えられる。今後はそうした地下遺構の適切な保護措置、さらなる全容解明のための発掘調査が望まれる。

鹿兒島（鶴丸）城跡の過去の発掘調査歴を第3表で過去し、地点ごとの調査成果を第4表～第17表に示す。鹿兒島城ではこれまで統一された名称の規則がなく、報告書によっても異なっている。今回は、県指定史跡は「鹿兒島（鶴丸）城跡」となっているため、県史指定史跡の範囲およびそれに準じる範囲には「鹿兒島（鶴丸）城跡」を、二之丸以外で報告書が刊行されている場合は報告書の地点名を、それ以外の範囲に関しては「鹿兒島城跡（地区名）」を用いる。二之丸の表記に関しては、鹿兒島県（二之丸）と鹿兒島市（二ノ丸）で異なっているが、今回は二之丸を用いた。今後は、名称の統一が課題である。

地点名	調査の種類	調査主体	調査	調査番号	
鹿兒島（鶴丸）城 本丸跡	A地点	明治40年中元記念館（現在の鹿兒島県・歴史民俗センター黎明館）（A地点）	本調査	鹿兒島教委	S53.10～S54.12
		石垣修復工事（跡内堀跡）（A地点）	本調査	鹿兒島教委	H11.7～H11.8
		鶴丸城跡保全整備事業 石垣修復等 1～31、35～41、43～50、北園門跡調査区、跡内堀跡調査区、鹿野台跡調査区	確認調査	鹿兒島教委	H27.1～H27.3 H27.5～H28.3 H28.4～H29.3 H29.5～H21.2 H21.4～H21.8
		鶴丸城跡保全整備事業 国指定史跡を再調査した調査 59～627	確認調査	鹿兒島教委	H1.6～H2.8 H2.11～H3.2 H3.5～H3.6
鹿兒島（鶴丸）城 二之丸跡（二之丸）	二之丸跡（B地点）	二之丸跡城跡保全整備事業 石垣修復等、32～33、34～42・527	確認調査	鹿兒島教委	S52.4～S53.1
		鶴丸城跡保全整備事業 国指定史跡を再調査した調査 637（B地点）	確認調査	鹿兒島教委	H25.5～H21.3
	二之丸跡（B地点）	二之丸跡 鶴丸城跡保全整備事業 国指定史跡を再調査した調査（647）	確認調査	鹿兒島教委	H1.6～H1.8
		二之丸跡（孤立博物館地点）	本調査	鹿兒島教委	H13.7～H13.8 確認 H15.8～H15.8 本調査
	二之丸跡C地点	本調査	鹿兒島教委	S58.3～S58.3 確認 S58.6～S.58.10 本調査	
	二之丸跡D地点	確認調査	鹿兒島教委	H8.10～H8.10	
	二之丸跡E地点	本調査	鹿兒島教委	H28.7 確認1次 H28.9 確認2次 H28.11 確認3次 H29.3～6 本調査	
	二之丸跡F地点	確認調査	鹿兒島教委	H8.7～9 確認	
	二之丸跡G地点	本調査	鹿兒島教委	H10.10～H10.10 確認 H11.2～3 本調査	
	二之丸跡H地点	確認調査	鹿兒島教委	H25.5～H25.5	
二之丸I地点	確認調査	鹿兒島教委	H14.1～H14.1		
二之丸J地点	確認調査	鹿兒島教委	H16.6～H16.6		
二之丸K地点	確認調査	鹿兒島教委	H18.7～H18.7		
二之丸L地点	確認調査	鹿兒島教委	H18.8～H18.8		
二之丸M地点	確認調査	鹿兒島教委	H19.10～H19.10		
二之丸N地点	確認調査	鹿兒島教委	H21.5～H21.6		
二之丸O地点	確認調査	鹿兒島教委	H27.1		
二之丸P地点	確認調査	鹿兒島教委	H21.6～H21.6		
二之丸Q地点	確認調査	鹿兒島教委	H27.1～27.1		
二之丸R地点①、②	確認調査	鹿兒島教委	H1.7～H1.8		
鹿兒島（鶴丸）城（御親跡）		確認調査	鹿兒島教委	H12.2～2	
		本調査	鹿兒島教委	H28.9～H28.9 確認 H28.12～H28.12 本調査	
上山城跡	二ノ丸跡（堀山トンネル上）	確認調査	鹿兒島教委	S61.2～S61.3 確認	
	鶴丸城跡保全整備事業1次 二ノ丸跡・土塁（F・G地点）	確認調査	鹿兒島教委	H12～H1.1 確認	
	鶴丸城跡保全整備事業2次 本丸、二ノ丸曲輪跡の空堀	確認調査	鹿兒島教委	H3.5～6 確認	
鹿兒島城跡（大手口）		確認調査	鹿兒島教委	H2.11～H3.2	
鹿兒島城跡（南泉口）		確認調査	鹿兒島教委	H2.11～H3.2	
護土堀跡・護武堀跡		本調査	鹿兒島教委	H2.7～2.8 確認 H3.3～3.4 本調査	
名山遺跡	1次	確認調査	鹿兒島教委	S59.9～10	
	2次	確認調査	鹿兒島教委	S60.9～S60.9	
	3次	確認調査	鹿兒島教委	S61.7～S61.7	
	5次	確認調査	鹿兒島教委	H13.7～H13.8	
鹿兒島城跡（大谷物馬場・火跡跡）	鹿兒島城跡（大谷物馬場・火跡跡）	本調査	鹿兒島教委	H29.12～H29.2	
	鹿兒島城跡（大谷物馬場・火跡跡）2	本調査	鹿兒島教委	H3.2～H3.2	
存存所内宮跡	試掘	試掘	鹿兒島教委	H11.7～H2.7	
	鹿兒島・宮之城城島津家跡敷	本調査	鹿兒島教委	H11.5～H11.6 確認 H12.6～H12.7 本調査	
経路遺跡	鹿兒島城跡（吉野堀）	確認調査	鹿兒島教委	H2.11～H2.2	
		確認調査	鹿兒島教委	H11.7～H11.8	
		確認調査	鹿兒島教委	H11.8～H11.8	
		確認調査	鹿兒島教委	H2.12～H2.2	

第3表 鹿兒島（鶴丸）城跡の過去の発掘調査一覧



鹿児島（鶴丸）城本丸跡遺構配置図（鹿県教委1983）



御楼門跡周辺完掘状況（鹿県埋セ2020）



遺構検出状況（鹿県教委1983）



御楼門跡周辺石垣の砲弾・銃撃痕（鹿県埋セ2020）



能舞台跡構掛り検出状況（鹿県埋セ2022）



庭園状遺構の底石（鹿県埋セ2022）

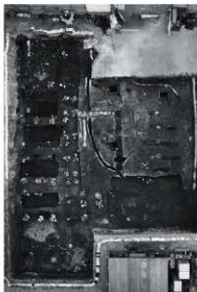
第17図 鹿児島（鶴丸）城跡の遺構検出状況

第6表 鹿兒島(鶴丸)城二之丸跡・鹿兒島城(二之丸跡)発掘調査一覧(2)

調査地点	地図上の位置NO	調査起因	調査の種類	調査時期	調査面積	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の状況	備考
二之丸跡 J地点	⑬	集合住宅建設	確認調査	1916.6.9	3.0㎡	鹿児島市教育委員会	鹿児島市教育委員会2004『鹿児島(鶴丸)城二ノ丸跡』(鹿児島文化財保護調査事業報告書)	遺物 陶磁器	埋没に伴い一部調査	鹿児島城に繋がる遺構、遺物なし。
二之丸跡 K地点	⑭	個人住宅新築	確認調査	1918.7.24～ 1918.7.26	6.0㎡	鹿児島市古物委員会	鹿児島市教育委員会2006『個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿児島(鶴丸)城二ノ丸跡J地点』	—	埋没に伴い一部調査	近現代の建物基礎が確認された。
二之丸跡 L地点	⑮	建物増築	確認調査	1918.8.23～ 1918.8.25	6.0㎡	鹿児島市教育委員会	鹿児島市教育委員会2006『建物増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書』鹿児島(鶴丸)城二ノ丸跡J地点』	遺構 土坑 遺物 陶磁器、土銅器	埋没に伴い一部調査	鹿児島城に繋がる遺構、遺物なし。
二之丸跡 M地点	⑯	高層住宅建設	確認調査	1919.10.2～ 1919.10.9	50.0㎡	鹿児島市教育委員会	鹿児島市教育委員会2009『鹿児島(鶴丸)城二ノ丸跡埋没点』	遺構 石垣 遺物 陶磁器、土銅、玉葱	埋没に伴い一部調査	おおよそ近代のものと考えられる。
二之丸跡 N地点	⑰	土地売買	確認調査	1921.5.21～ 1921.6.9	11.2㎡	鹿児島市古物委員会	鹿児島市教育委員会2009『土地売買に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書』鹿児島(鶴丸)城二ノ丸跡J地点』	遺構 印土状遺構、傾斜状遺構、溝 集中土、緑石状遺構 遺物 陶磁器、瓦、古銭等	埋没に伴い一部調査	多くの傾斜遺構、遺物が確認された。
二之丸跡 前西端	⑱	建物基礎調査及び内装土壁入付調査	確認調査	1927.1.7	9.9㎡	鹿児島市古物委員会	鹿児島市教育委員会2015『鹿児島(鶴丸)城(旧御城高城センター)発掘調査報告書』	遺物 陶磁器、瓦	埋没に伴い一部調査	近頃の遺物が確認された。
二之丸跡 O地点	⑲	宅地造成	確認調査	1924.6.21～ 1924.6.22	8.0㎡	鹿児島市教育委員会	鹿児島市教育委員会2012『鹿児島城跡(鶴丸城)O地点』宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書』	陶磁器 陶磁器	埋没に伴い一部調査	鹿児島城に繋がる遺構なし。
二之丸跡 P地点	⑳	個人住宅建設	確認調査	1927.7.13	4.0㎡	鹿児島市教育委員会	発掘調査実施報告書	—	埋没に伴い一部調査	鹿児島城に繋がる遺構なし。
二之丸跡 Q地点	㉑	マンション建設	確認調査	1929.8.18	12.9㎡	鹿児島市古物委員会	鹿児島市教育委員会2017『鹿児島(鶴丸)城跡Q地点』マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書』	遺物 陶磁器	埋没に伴い一部調査	鹿児島城に繋がる遺構なし。
二之丸跡 R地点①	㉒	駐車場建設	確認調査	1971.7.22～ 1971.8.29	80㎡	鹿児島市教育委員会	鹿児島市教育委員会2019『鹿児島(鶴丸)城跡R地点』かこしこ近代文字版・ムルヘン編・美術館駐車場建設工事に伴う鹿児島(鶴丸)二ノ丸跡埋蔵文化財発掘調査事業報告書』	遺構 石垣、水運石壁、遺物 陶磁器、瓦	一部調査	近頃の遺構・遺物が確認された。
		駐車場建設	確認調査	1971.7.22～ 1971.8.29	120㎡	鹿児島市教育委員会	鹿児島市教育委員会2019『鹿児島(鶴丸)城跡R地点』駐車場建設工事に伴う鹿児島(鶴丸)二ノ丸跡埋蔵文化財発掘調査事業報告書』	遺構 水運石壁 遺物 陶磁器	埋没保存	近頃の遺構・遺物が確認された。

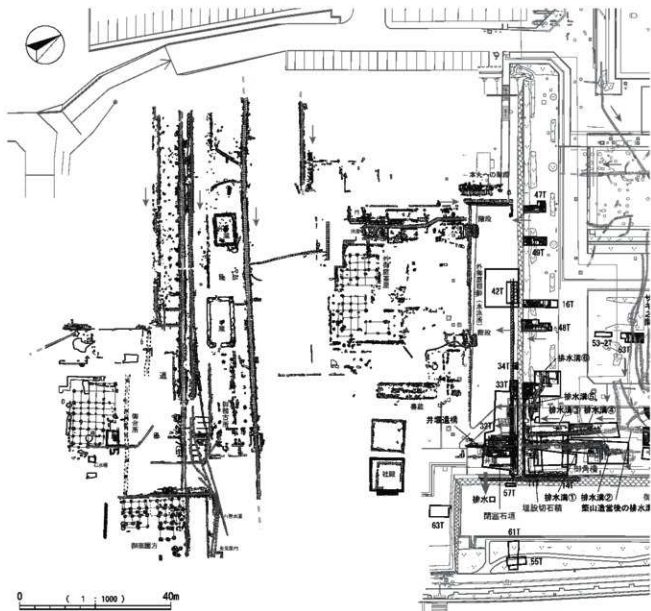


二之丸C地点遺構出土状況(鹿市教委1984)



二之丸E地点遺構出土状況(鹿市教委2020)

第19図 鹿児島(鶴丸)城二之丸跡遺構検出状況(1)



二之丸B地点遺構配置図（鹿泉教委1991）改変（鹿泉埋セ2022）



二之丸C地点遺構出土状況（鹿泉教委1984）



二之丸B地点堀の井堰出土状況（鹿泉埋セ2022）

第20図 鹿兒島（鶴丸）城二之丸跡遺構核出状況（2）

3 鹿児島(鶴丸)城御殿跡

第7表 鹿児島(鶴丸)城御殿跡発掘調査一覧

調査地点	地図上の 所在地	調査起因	調査の種類	調査期間	調査面積	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の現状	備考
鹿児島(鶴丸)城 (御殿跡)	②	中継線建設 及び駐車場 改修	発掘調査	2012.5.14～ 5.14	204㎡	鹿児島県地 理委員会	鹿児島県文化財課2009『鹿児島 [鶴丸城] 概説』鹿児島県内閣中 央官庁事務管理局に鹿児島県文化 財課調査結果報告書	—	—	鹿児島城に 関する遺 構、遺物な し。
鹿児島(鶴丸)城 (御殿跡)	②	鹿児島県 センター一 層工事	発掘調査	2020.5.20～ 6.14	16.6㎡	鹿児島市教 育委員会	鹿児島市教育委員会2018『鹿児島 [鶴丸] 概説概説』鹿児島県セ ンター一層工事に伴う鹿児島(鶴 丸)城跡跡線線文化財課調査報 告書報告書	—	—	鹿児島城に 関する遺 構、遺物な し。
鹿児島(鶴丸)城 (御殿跡)	②	鹿児島県 センター一 層工事	発掘調査	2020.12.16 ～ 2021.2.17	200㎡	鹿児島市教 育委員会	鹿児島市教育委員会2017『鹿児島 [鶴丸] 概説概説』鹿児島県セ ンター一層工事に伴う鹿児島(鶴 丸)城跡跡線線文化財課調査報 告書報告書	遺構 礎石遺構、土坑、ピット 埋物、瓦葺土器、土師器等類品、 金銭類品、瓦、焼酎口、鉄片	一部消滅	御殿跡遺 構を確 定し、調査 ・分析等に 関係する遺 物(土器上 ・中級の瓦類)を確認。



Ⅱ層上面遺構検出状況(鹿児島教委2017)



石組溝と布地業(鹿児島教委2017)

第21図 鹿児島(鶴丸)城御殿跡遺構検出状況

4 上山城跡

第8表 上山城跡発掘調査一覧

調査地点	地図上の 所在地	調査起因	調査の種類	調査期間	調査面積	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の現状	備考
上山城跡	②	城山公園ト ンネル工事	発掘調査	2011.3.17～ 3.31	90㎡	鹿児島市教 育委員会	鹿児島市教育委員会2008『上山城 跡』城山公園トンネル工事に伴 う上山城跡発掘調査結果報告書	—	一部消滅	鹿児島城に 関する遺 構、遺物な し。
上山城跡 (1次)	②	保存目的	発掘調査	2021.12.1～ 2022.1.29	72.75㎡	鹿児島市教 育委員会	鹿児島市教育委員会2021『上山城 跡(1次)』事業報告書城山公園ト ンネル跡跡線線文化財課調査報 告書報告書	遺構 土坑、空堀 遺物 土師器、青花磁、埴丸、近世陶磁 器	現地保存	遺上土器上 ・中級の土 器を確認。
上山城跡 (2次)	②	保存目的	発掘調査	2022.5.10～ 6.9	16㎡	鹿児島市教 育委員会	鹿児島市教育委員会2021『上山城 跡(2次)』事業報告書城山公園ト ンネル跡跡線線文化財課調査報 告書報告書	遺構 空堀 埋物 土師器、瓦葺土器、近世陶磁、新 銅品	現地保存	土器に伴う 空堀を確認



土壁(令和2年度調査)



二ノ丸曲輪切り岸と空堀
(令和2年度調査)



二ノ丸曲輪切り岸と空堀
(令和3年度調査)

第22図 上山城跡遺構検出状況

5 鹿兒島城跡（大手口）

第9表 鹿兒島城跡（大手口）発掘調査一覧

調査地点	地図上の 所在地	調査経緯	調査の種類	調査期間	調査面積	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の状況	備考
鹿兒島城跡 （大手口）	㊦	鹿児島城跡発掘調査事業（鹿児島県）	発掘調査	昭和11.2~ 昭和31.1	昭和34	鹿児島県立博物館文化財センター	鹿児島県立博物館文化財センター2012『鹿児島（戦国）城跡・城跡・城跡発掘調査』鹿児島県立博物館文化財センター発掘調査報告書1215	遺構 石列、浮地盤、布地業、土器 陶磁器、瓦	現地保存	3頁の遺構平面図。大手口が江戸時代を通じて城跡とされていたことが証明



大手口全景（本書）



大手口の布地業等（本書）



大手口の石列（本書）

第23図 鹿兒島城跡大手口遺構検出状況

6 鹿兒島城跡（南泉院）

第10表 鹿兒島城跡（南泉院）発掘調査一覧

調査地点	地図上の 所在地	調査経緯	調査の種類	調査期間	調査面積	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の状況	備考
鹿兒島城跡 （南泉院）	㊦	鹿児島城跡発掘調査事業（鹿児島県）	発掘調査	昭和11.2~ 昭和21.10	34	鹿児島県立博物館文化財センター	鹿児島県立博物館文化財センター2012『鹿児島（戦国）城跡・城跡発掘調査』鹿児島県立博物館文化財センター発掘調査報告書1215	遺構 【中略】土坑 【中略】土器 【中略】陶磁器、瓦	現地保存	中巻の遺構平面図。南泉院は土器、陶磁器が土器、土器の土器、土器の土器、土器の土器を確定



南泉院全景（本書）



土壘（本書）



土坑（本書）

第24図 鹿兒島城跡南泉院遺構検出状況

7 造士館・演武館跡

第11表 造士館・演武館跡発掘調査一覧

調査地点	地図上の 所在地	調査経緯	調査の種類	調査期間	調査面積	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の状況	備考
造士館・演武館跡	㊦	中央公園地下駐車場の発掘	水調査	昭和7.2~ 昭和20 昭和3.4~ 昭和5.10	3,300	鹿児島中央教育委員会	鹿児島中央教育委員会1992『造士館・演武館』鹿児島県立博物館文化財センター発掘調査報告書1215	遺構 溝溝、石礎、根石基礎、布地業、排水溝、石組排水溝、式水屋石管遺物 陶磁器、瓦	南泉に付いた溝溝	造士館に設置する排水溝等を確定



根石列（鹿市教委1992）

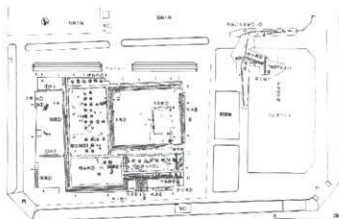


石管水道と石組排水溝（鹿市教委1992）



布基礎（鹿市教委1992）

第25図 造士館・演武館跡遺構検出状況（1）



遺構配置図（鹿市教委1992）



調査区北東部全景（鹿市教委1992）

第26図 造士館・演武館跡遺構検出状況（2）

8 名山遺跡

第12表 名山遺跡発掘調査一覧

調査地点	地層との対応	調査範囲	調査の種類	調査期間	調査面積	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	調査の現状	備考
名山遺跡 (第1次)	⑨	院内庫前跡	遺跡調査	199.9.26～ 10.11	302㎡	鹿野島町教育委員会 鹿市教委	鹿野島の教育委員会 1999「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第1次」） 鹿野島の教育委員会 1999「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第2次」） 鹿野島の教育委員会 2002「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第3次」） 鹿野島の教育委員会 2002「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第4次」） 鹿野島の教育委員会 2002「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第5次」）	遺構 土器・土器片、土 器片、瓦	一部跡保存	地下河の存在 調査は中止で重 撃である。
名山遺跡 (第2次)		教育総合セ ンター跡	遺跡調査	199.9.2～ 9.6	234㎡	鹿野島町教育委員会	鹿野島の教育委員会 1999「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第1次」） 鹿野島の教育委員会 1999「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第2次」） 鹿野島の教育委員会 2002「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第3次」） 鹿野島の教育委員会 2002「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第4次」） 鹿野島の教育委員会 2002「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第5次」）	遺構 土器片、土器	調査により調査	遺構は近代
名山遺跡 (第3次)		教育総合セ ンター駐車 場跡	遺跡調査	199.7.12～ 7.18	196㎡	鹿野島町教育委員会	鹿野島の教育委員会 1998「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第1次」） 鹿野島の教育委員会 1999「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第2次」） 鹿野島の教育委員会 2002「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第3次」） 鹿野島の教育委員会 2002「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第4次」） 鹿野島の教育委員会 2002「名山遺跡-庭 内庫前跡」報告書 （以下「第5次」）	遺構 瓦葺り等	調査により調査	遺構は近代
名山遺跡 (第5次)		内庭整備	遺跡調査	1913.7.27～ 8.16	40㎡	鹿野島町教育委員会	鹿野島の教育委員会 2002「名山遺跡-名 山小学校校庭跡調査 報告書」報告書 文化財調査報告書 「鹿野島の歴史文 化財調査報告書」 報告書	遺構 土器片、土器、基礎石列、土 器片、土器片、土 器片、瓦、土器片（下駄等）	埋没保存	遺構は、喜入 北照教士生居跡 調査区域の南の 遺構の可能性あり。 。



石組排水溝出土状況（鹿市教委1998）



石組排水溝のはしご桐木
（鹿市教委2002）



基礎石列（鹿市教委2002）

第27図 名山遺跡遺構検出状況

9 鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）

第13表 鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）発掘調査一覧

調査地点	地層上の 所在	調査起日	調査の種類	調査期間	調査量	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の状況	備考
鹿児島城跡 （犬追物馬場・火除地）	㊸	鹿児島市立 総合庁舎新 築事業	本調査	2021. 12. 9～ 2021. 12. 23	300㎥	鹿児島県立 埋蔵文化財 センター	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2021『鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告211	遺構 【中層】柱列 【下層】土坑遺構、土坑、柱穴跡、 柱石、瓦葺中層物 【中層】陶磁器 【中層】陶磁器、瓦、木製品（釘 等）、骨セル、硬、鏡等、銀葉	現存により約断	上記の 「13表」参照 鹿児島城跡 中心部の地 層構造を調査 し、甲斐の 遺構・遺物 も確認。犬 追物馬場の 埋蔵文化財 を調査。
鹿児島城跡 （犬追物馬場・火除地）	㊸	鹿児島市立 総合庁舎新 築事業	本調査	2021. 12. 9～ 2021. 12. 23	2,100㎥	鹿児島県立 埋蔵文化財 センター	令和4年度発掘予定		現存により約断	



犬追物馬場の欄と考えられるSD1杭列（鹿泉埋せ2021）



SD1杭列の杭
（鹿泉埋せ2021）



加治木・埴良系陶器
（鹿泉埋せ2021）

第28図 鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）遺構・遺物

10 市役所西別館

第14表 市役所西別館発掘調査一覧

調査地点	地層上の 所在	調査起日	調査の種類	調査期間	調査量	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の状況	備考
市役所西別館	㊸	鹿児島市役所 西別館新築 事業	試掘	2021. 7. 11～ 2021. 7. 19	18㎥	鹿児島県立 埋蔵文化財 センター	鹿児島市教育委員会2021『鹿児島市役所西別館発掘調査報告（試掘）』鹿児島市役所西別館新築事業報告210（令和4年度埋蔵文化財調査報告書）			鹿児島城跡に 関する情報 なし。

11 垂水・宮之城島津屋敷

第15表 垂水・宮之城島津屋敷発掘調査一覧

調査地点	地層上の 所在	調査起日	調査の種類	調査期間	調査量	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の状況	備考
垂水・宮之城 島津屋敷	㊸	みづしま新 築文化財セン ター建設	本調査	2003. 6. 19～ 2003. 6. 4 2003. 6. 19～ 2003. 7. 27	700㎥	鹿児島県立 埋蔵文化財 センター	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『垂水・宮之城島津屋敷 跡』鹿児島県立埋蔵文化財調査調 査報告書18	遺構 埋蔵溝、竪穴、土坑 陶磁器、瓦、土師、瓦葺土壇、木 製品、島瓦	現存により約断	当該発掘に あわせてこ の調査発掘 調査を多く 行うことが でき、ア ンダー グラウンド の歴史を 調査。



廃棄土坑（鹿泉埋せ2003）



屋敷境溝と空堀（鹿泉埋せ2003）



出土遺物1（鹿泉埋せ2003）

第29図 垂水・宮之城島津屋敷跡遺構・遺物（1）



出土遺物 2 (鹿泉埋せ2003)



地象列 (鹿泉埋せ2003)

第30図 垂水・宮之城島津家屋敷跡遺構・遺物 (2)

12 鹿兒島城跡 (吉野堀)

第16表 鹿兒島城跡 (吉野堀) 発掘調査一覧

調査地点	地図上の 所在地	調査範囲	調査の種類	調査期間	調査面積	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の状況	備考
鹿兒島城跡 (吉野堀)	◎	鹿兒島城跡 発掘事業 (吉野堀)	発掘調査	02.11.27~ 03.03.19	8,000	鹿兒島県立 博物館文化研 究センター	鹿兒島県立博物館文化研究センター『鹿兒島「戦乱」遺跡-新編報告書-』鹿兒島県立博物館文化研究センター-発掘調査報告書215	遺物 土坑、駅本 遺物 陶磁器、瓦	現地保存	発掘前の遺土の可塑性のある層様を確認。



溝の埋土と考えられる造成土 (吉野堀・本書)



琉球陶器 (琉球館跡・鹿市教委2003)



中世の土坑と五輪塔水輪 (琉球館跡・本書)

第31図 鹿兒島城跡 (吉野堀)・琉球館跡遺構・遺物

13 琉球館跡

第17表 琉球館跡発掘調査一覧

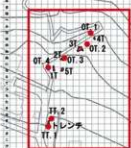
調査地点	地図上の 所在地	調査範囲	調査の種類	調査期間	調査面積	調査主体	報告	特筆すべき遺物・遺構	現在の状況	備考
琉球館跡	◎	発掘調査事業	発掘調査	014.7.22~ 014.8.4	20,000	鹿兒島県教育委員会	鹿兒島県教育委員会2004『鹿兒島県立博物館文化研究報告書第14号』高野純一、琉球館跡・鹿兒島県立博物館文化研究報告書第14号	遺物 土坑埋土 陶磁器 (琉球館、清和館跡)、瓦	琉球に似ている遺構	琉球館跡に比べて琉球館跡、清和館跡の跡の割合が低い。琉球館跡と清和館跡の遺構が確認された。
琉球館跡 目録点	◎	鹿兒島県立博物館発掘事業	発掘調査	015.8.29~ 015.8.31	6,400	鹿兒島県教育委員会	鹿兒島県立博物館文化研究報告書第15号『鹿兒島県立博物館文化研究報告書第15号』高野純一、五輪塔跡・鹿兒島県立博物館文化研究報告書第15号	遺物 竹筒埋土 遺物 陶磁器、瓦	琉球に似ている遺構	発掘前の遺土を確認し、土の可塑性を確認。
琉球館跡	◎	鹿兒島県立博物館発掘事業	発掘調査	02.11.27~ 03.03.19	12,000	鹿兒島県立博物館文化研究センター	鹿兒島県立博物館文化研究センター『鹿兒島「戦乱」遺跡-新編報告書-』鹿兒島県立博物館文化研究センター-発掘調査報告書215	遺物 【中世】 礎石遺構 【中世】 土坑、ピット 遺物 【中世】 瓦、陶磁器、杖 【中世】 五輪塔水輪、陶磁器	現地保存	発掘前の遺土の中、鹿兒島城跡跡地跡の可塑性の層様を確認。

第18表 鹿兒島（鶴丸）城跡基準点一覧

No.	点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	Z座標 (m)	備考
1	10A12	-155297.705	-42094.180	5.590	既設（国道10号実測歩道・公共）
2	1A-2	-155365.873	-42311.723	5.167	既設（国道10号実測歩道）
3	1A-4	-155462.923	-43178.121	4.460	既設（国道10号実測歩道）
4	1A-5	-155465.718	-42151.878	3.518	既設（名山小学校）
5	T-1	-155303.429	-42162.902	11.995	R29年度新設（黎明館敷地内）
6	1	-155296.590	-42183.490	10.730	R29年度新設（黎明館敷地内）
7	2	-155386.253	-42284.085	11.276	R29年度新設（黎明館敷地内）
8	3	-155362.456	-42305.741	11.881	R29年度新設（黎明館敷地内）
9	T-2	-155411.941	-42217.796	12.060	R元年度新設（黎明館敷地内）
10	MB1	-155390.940	-42229.771	11.473	既設（黎明館敷地内）
11	MB2	-155416.269	-42215.794	11.756	既設（黎明館敷地内）
12	MB3	-155329.163	-42335.181	11.779	既設（黎明館敷地内）
13	MB4	-155334.993	-42328.483	11.651	既設（黎明館敷地内）
14	MB5	-155275.168	-42287.423	11.141	既設（黎明館駐車場付近）
15	MB6	-155213.128	-42256.103	11.555	既設（御達物廊跡付近）
16	K8M-1	-155389.861	-42148.580	5.932	既設（国道10号実測歩道）
17	K8M-4	-155312.290	-42208.255	11.184	既設（黎明館敷地内）
18	N-30	-155298.034	-42145.383	12.411	既設（黎明館敷地内）
19	N-18,R2	-155348.641	-42177.605	11.883	既設（黎明館敷地内）
20	A	-155440.954	-42200.537	5.941	R29年度新設（国道10号実測歩道）
21	B	-155342.255	-42195.162	5.931	R29年度新設（国道10号実測歩道）
22	O-1	-155427.282	-42221.624	-	R29年度新設（N・O-D・1区）
23	O-35	-155283.818	-42130.421	-	R29年度新設（N・O-D・35区）
24	a-1	-155370.951	-42310.234	-	R29年度新設（a・h-O・1区）

No.	点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	Z座標 (m)	備考
25	N-18	-155233.796	-42197.243	11.951	R29年度新設（北御門跡）
26	OT.1	-155683.471	-42765.294	32.622	R29年度新設（大平口3）
27	OT.2	-155670.547	-42759.223	47.967	R29年度新設（大平口3）
28	OT.3	-155691.625	-42759.670	62.828	R29年度新設（大平口3）
29	OT.4	-155706.594	-42740.249	29.629	R29年度新設（大平口4）
30	TT.1	-155731.619	-42720.656	16.189	R29年度新設（鹿籠神社1）
31	TT.2	-155726.206	-42724.705	16.358	R29年度新設（鹿籠神社2）
32	NT.1	-155112.785	-41854.128	4.651	R29年度新設（長田中学校1）
33	NT.2	-155119.537	-41847.322	4.716	R29年度新設（長田中学校2）
34	ST.1	-155021.774	-42062.401	6.320	R29年度新設（高野山最大丸跡1）
35	ST.2	-155032.598	-42066.943	6.260	R29年度新設（高野山最大丸跡2）
36	R3T.1	-155383.490	-42339.514	12.369	R39年度新設（黎明館駐車場）

鹿兒島城跡（大手口）



鹿兒島城跡（南泉院）



照国神社

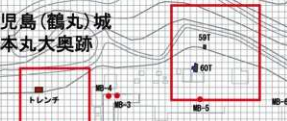


鹿兒島城跡（二之丸）

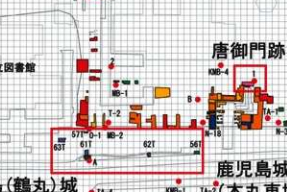


本報告書調査対象範囲
 H26年度設定トレンチ(1T~3T)
 H27年度設定トレンチ(4T~20T)
 H28年度設定トレンチ(21T~41T・土堀1~3)
 H29年度設定トレンチ(42T~49T)
 H30年度設定トレンチ(50T~58T)
 R1年度設定トレンチ(54T~63T)
 R2年度設定トレンチ(北御門跡周辺石垣修復)

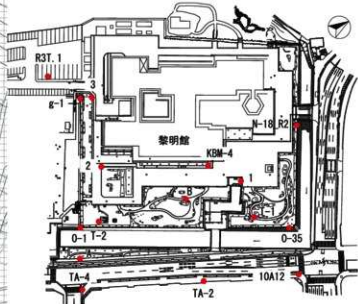
本丸と城山の境界



鹿兒島（鶴丸）城 本丸大丸跡



鹿兒島（鶴丸）城 二之丸跡



第32図 鹿兒島城跡基準点配置図

鹿兒島城跡（吉野堀）



琉球館跡



第33図 鹿兒島城跡トレンチ配置図

第四章 調査の方法と成果

第1節 発掘調査地点の選定と事前調査

発掘調査地点については、「鶴丸城跡保全整備事業に伴う専門家検討会議」の専門家の意見を参考に、鹿児島城跡の主の本丸・二之丸の境や城域の北限にあたる吉野堀、城城南限にあたる大手口と堀を確認することを目的とした。

調査地の選定に際し、委員長以下、委員の方々と鹿児島城域の現地踏査を令和元年6月18日(火)に実施した。この結果を受けて、鹿児島県文化財課、文化振興課及び鹿児島県立埋蔵文化財センター(以下、埋蔵文化財センター)の3者で協議を行い、範囲確認調査の3か年計画を策定した。発掘調査は、城山山頂部の御曲輪である上山城跡を鹿児島市教育委員会が、その他は埋蔵文化財センターが行うこととなった。

埋蔵文化財センターは、令和元年度に本丸跡及び二之丸の一部を対象とした発掘調査を実施した。

令和2年度は、調査に先立ち、調査予定地の各関係機関及び所有者と事前協議を行った。鹿児島城下における大手口跡(現在の手口周辺)、南泉院跡(現在の照國神社境内)、唐御門跡(現在の黎明館七高門周辺)、琉球館跡(現在の鹿児島市立長田中学校敷地内)、鹿児島城吉野堀跡(現在の高野山最大乗院境内)を対象とした地中レーダー探査(令和2年10月14～16日実施)を行い、その結果を受けて遺構の残存状況と性格の把握を主たる目的とした確認調査を実施した。

令和3年度は、本丸と二之丸境の堀の確認のため、本丸大奥跡の発掘調査を行った。

各調査地点の目的については各項で述べるが、各調査地点では、地中レーダー探査の結果や地形、近世近代の古記録を参考にトレンチの位置を設定した。

第2節 発掘調査の方法

発掘調査は当地形に応じて、2×3m程度のトレンチを設定し、必要に応じて調査範囲を拡張した。各地点の表土は厚さ10～120cm程度と幅があるが、バックホー等の重機で薄く掘削しながら除去し、表土除去後、人力で山鉋、鋤、移植ごて、ねじり鎌等を用い掘削した。遺構面及び遺物の周囲は移植ごて、竹べら、竹串、手鋸等を使い丁寧に検出した。確認した遺構は、基本的には検出に止め、一部時期や性格が確定できない遺構に関しては、サブトレンチや半裁での確認を行った。遺構は、検出後、実測・撮影等を行い、調査後は養生シート(寒冷紗)の敷設や土嚢の充填等を行うことで遺構表面を保護し、調査前の標高まで元の覆土等で埋戻した。遺構は基本的に検出時と完掘後に写真撮影を行い、必要に応じて調査中の状況等を撮影した。撮影にはデジタルカメラ(NIKON D3200, PENTAX K-m, Canon EOS Kiss X7, NIKON D5000)を使用し、35mmフィルムカメラはNIKON FM2、

FM3を使用して白黒フィルム(富士フィルム株式会社 NEOPAN 100 ACROS)とスライド用フィルム(富士フィルム株式会社 PROVIA 100F)を用い、職員が撮影した。令和3年度は民間業者に空中写真撮影を委託し、上空から遺跡及び周辺地形の状況等を撮影した。

遺構等の測量は平板とトータルステーションを用いて行った。世界測地系の国土座標と周辺の基準点(4級等)や黎明館内の既知の基準杭等を用いてトレンチや遺構の位置等を記録した。遺構の実測や測量は職員が行い、一部は民間業者に委託した。昭和53年の調査で設定したグリッドと同じ位置に調査区内を5m間隔で区切り、調査を行った。グリッドは御角橋跡南東角を基準として東(国道10号)側の石垣に平行にグリッド軸を設定したが、平成11年度の石垣修復工事の際に積み替えを行っており、厳密に今回の調査で用いるグリッドに合わせることは出来ない。新規の基準点の打設、グリッド設定の一部は民間業者に委託した。今回調査で用いた代表的な基準杭の国土座標値(世界測地系)、標高値と位置を本丸周辺は第18表、第33図に、その他は各地点に示す。

なお、調査区の各地点名については、既存の鹿児島城跡の発掘調査の多くが、天保14(1843)年(天保年間鹿児島城下絵図)に記載されている施設名が遺跡名に用いられているため、本書でも当該絵図の記載内容をもとに名称を付与した。また、当該絵図に描かれていない地点に関しては、鶴丸城跡保全整備事業の発掘調査と合わせ、明治6(1873)年「鹿児島城跡本丸敷合配置図」を参考に付与した。

発掘調査で確認された遺構の位置づけに関しては、鹿児島城の絵図等を参考にした。参考にした絵図等については、第II章で述べた。

遺物の取り上げの際、一部についてはトータルステーションで位置情報を記録したが、包含層から出土したものは少なく、攪乱層や近現代の造成土から出土したものは層及びグリッド(トレンチ)の範囲で一括して取り上げた。その後、発掘調査事務所プレハブや埋蔵文化財センターで洗浄、選別作業を行い、大量に出土した瓦は軒の互当文様から型式が分かるものと比較的破損の少ないものを取り扱うこととした。

整理作業は令和元年度から埋蔵文化財センターで実施した。出土遺物は洗浄、注記、選別、接合、復元、実測、トレース、レイアウト、写真撮影等を行い、遺構は図面整理、図面の統合、トレース、レイアウト等の一連の報告書作成の流れで行った。陶磁器の遺物実測、トレースと胎土分析等の自然科学分析業務は民間業者に委託した。土層断面図、遺構、遺物トレースはAdobe社の「Illustrator CC 2021」、「Photoshop CC 2021」を用い、編集、レイアウトは「Windows Word 10」で行った。

第3節 発掘調査の成果

今回は、本丸跡・二之丸跡の範囲および重要遺構の残存状況確認のための調査と鹿児島城全体の範囲確認および遺構残存状況確認のための調査を行った。

本丸跡・二之丸跡の発掘調査では、本丸跡の範囲を確定することを目的とし、本丸跡と城山の境、本丸跡と二之丸跡の境の内堀の確認、本丸東堀の拡張の有無を確認するための発掘調査を行った。さらに、本丸跡内の重要遺構の残存状況確認のために唐御門跡の調査を行った。また、二之丸跡では、外御庭跡で確認された堀の延長の有無等を確認するための調査、二之丸南東端の長屋の遺構の確認のための発掘調査を行った。なお、本丸跡と二之丸跡の間の堀の調査に際しては、調査前に地中レーダー探査を行い、調査地点を絞り込むとともに、発掘調査終了後にも調査成果を踏まえて追加の地中レーダー探査を行った。

鹿児島城跡全体の範囲確認および遺構の残存状況確認のための調査では、調査地点の選定および発掘調査が困難な地点での堀の確認を目的として城城南側の堀、城城北側の吉野堀の確認のための地中レーダー探査を行った。発掘調査は、城城南側の大手口跡と南泉院跡、城城北側の吉野堀跡の確認のための発掘調査を行った。なお、吉野堀の確認のための発掘調査では、地中レーダー探査で反応を確認した地点の中で、調査が可能な地点の発掘調査を行った。

発掘調査の結果、全ての地点で江戸時代の鹿児島城に関連する遺構または遺物を確認し、絵図や文献等との比較から、鹿児島城の範囲や遺構の残存状況に必要な情報を得た。ここでは、各地点の調査成果については、調査地点ごとに述べる。なお、各地点の歴史的環境・関連する絵図については、第2章第3節に示している。

第4節 各調査地点の調査成果

鹿児島（鶴丸）城本丸跡・二之丸跡周辺の調査

1 本丸跡と城山との境界（第34図～第38図）

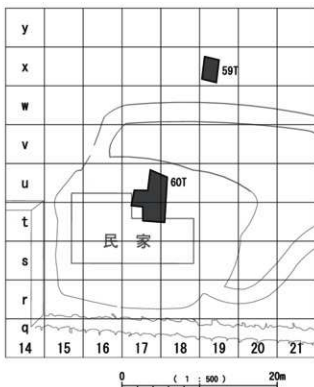
城山と鹿児島城本丸の境界における造成等、整地の痕跡を確認するための調査である。60トレンチでは、「御納戸」に関連する遺構を確認した。

(1) 59トレンチ（第34図・第35図）

概要 x-19区に2×3mの規模でトレンチを設定した。層の堆積状況を確認するため、長辺を城山裾部に直交させている。調査の結果、この地点は近代以降に擾乱を受けており、近世の遺構は確認できなかった。

地層の堆積は、城山から数回にわたって崩落した地層が傾斜しながら堆積していることを確認した。

遺物は、擾乱土中から薬瓶、ガラス片、瓦、赤色レンガ、モルタルの付いた土管の煙突、花瓶、御飯茶碗等が



第34図 59・60トレンチ配置図

出土した。詳細は不明だが、擾乱層は廃棄土坑の可能性はある。北壁のV層からガラス片、薬瓶、木片が出土しており、擾乱層も含めこれらの遺物は、鹿児島大学医学部時代のものである。調査面積に比する掘削深度が上限を超えたため下層の確認を中断したが、下位には近世の造成面が残存している可能性が残る。

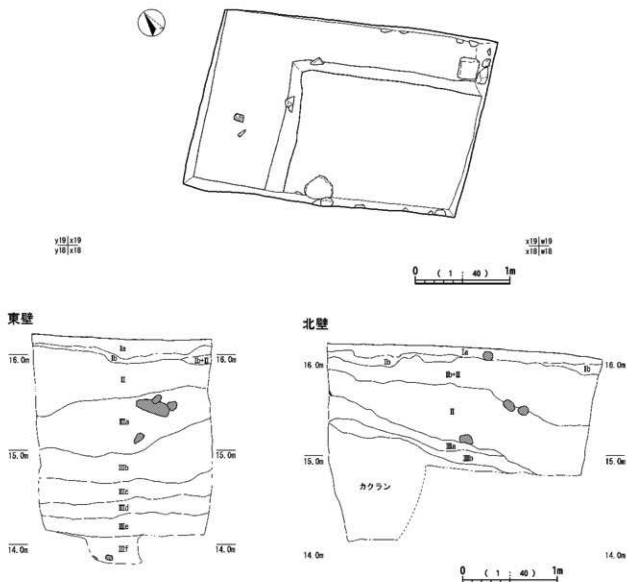
出土遺物（第38図1～4）

1, 2は、陶器である。1は近代の美濃の碗である。外面は花文を陽刻する。2は、苗代川系の壺である。18～19世紀。3は軒丸瓦である。小型で連珠小さい。4はガラス瓶である。瓶の前面に鹿児島大学医学部とエンボスがあり、その両側には内部の液体の分量を示す目盛りが入っている。口縁部まで型の合せ目の痕跡が残ることから、大正5（1916）年に採用された自動製瓶機の製品である。鹿児島大学医学部で使用されたと考えられる。

(2) 60トレンチ（第34図・第36図・第37図）

概要 昭和53・54年度の調査では、60トレンチの約5m東側で下水道石管を南北方向に確認している。

t-u-17・18区に2×5mのトレンチを設定し調査に着手した。排水溝を検出したため、南側をT字形に拡張し、調査を継続した。V層以下が鹿児島城に関連する造成土である。



層	色(記号)	色表	特徴
Ia	10YR5/7/1	黒色土	硬くしまっているが、粘性は弱い
Ib	10YR7/3	にぶい黄色土	硬くしまっているが、粘性は弱い
II	7.5YR5/3	にぶい褐色土	硬くしまっているが、粘性は弱い。0.2~1cm程度の白色軽石を含む
IIIa	7.5YR6/3	にぶい褐色土	0.2~5cmの白色軽石を密に含む。黒ビーン、ガラス片、瓦、赤色レンガ遺さる
IIIb	7.5YR3/1	黒褐色土	砂粒混じり、赤銅色の鉄が混ざる。粘性弱く、水分含む
IIIc	7.5YR3/3	暗褐色土	粘性は弱く、水分含む。わずかに0.1~0.3cmの白色ノリスを含む
IIId	10YR3/3	暗褐色土	赤銅色の砂粒を含む。粘性は弱く、水分含む
IIIe	10YR3/1	黒褐色土	粘性は弱くIIIdより強い。ガラス片、黒ビーン、木片が混ざる
IIIf	10YR3/2	黒褐色土	粘性は弱くIIIdより強い。ガラス片、黒ビーン、木片が混ざる

第35図 59トレンチ平面・土層断面図

遺構 遺構は、石組排水溝、坪地業等を確認した。

① 石組排水溝

石組排水溝は、幅約90cm、深さ15cmの開渠排水溝である。石材は溶結凝灰岩である。側石は厚さ約20cm、長さ50~70cmのものを配列し、底石は約50cm四方の板石を敷き込んでいる。中央には径約50cmの攪乱があり、板石が投げ込まれていた。側石より約10cm外側に掘り方がみら

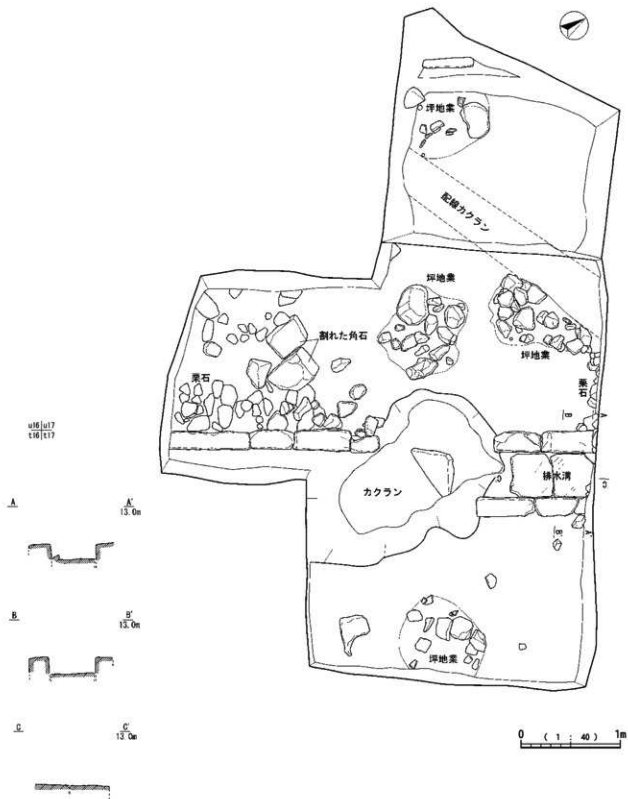
れ、凝灰岩の砕石が入れ込まれていた。底石は、側石底面から5cm程度上位にあてられ、底石下に凝灰岩の砕石が敷かれていた。排水溝周辺は茶褐色の造成土の中に鉄分が多く含まれ赤色を呈する層となっている。

② 敷石遺構

排水溝の西(城山)側は、幅約1.5mの範囲に溶結凝灰岩の割石、河原石が裏栗状に敷き込まれた状態で検出

v16/v17
u16/u17

v17/v18
u17/u18



第36図 60トレンチ平面・排水溝断面図

北壁



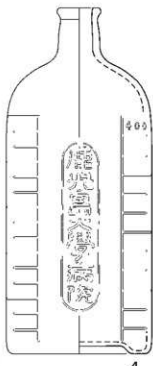
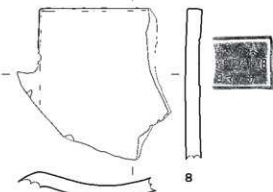
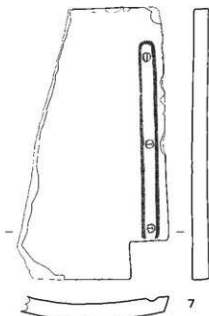
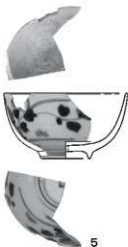
西壁



0 (1 : 40) 1m

層	色 (記号)	色名	特徴
Ia	10YR3/1	黒褐色土	粘性はなく、サラサラしている
Ib	10YR2/1	黒色土	1cm大の砂粒が密に入る。粘性はない
Ic	7.5YR4/2	灰褐色土	サラサラしている
II	NA/	灰色土	粘性はなく、サラサラしている。互や15cm大の塊が混ざる。カクラン層の埋土に類似している
IVa	2.5Y5/3	黄褐色土	1~2cm大の白色パミスが混ざる。粘性はなく、サラサラしている。
IVb	2.5Y5/3	黄褐色土	IVa層よりもパミスが少ない。硬く、しまりがある
IVc	2.5Y4/1	黄灰色土	0.2~0.3cm大の白色パミスが混ざる。硬く、しまりがある

第37図 60トレンチ土層断面図



0 (1-2) 5cm

0 (1-3) 10cm

1・2・5

0 (1-4) 10cm

3・6~8

第38図 59・60トレンチ出土遺物

された。敷石基礎の可能性がある。

③ 坪地業

地業は、坪地業と布状の地業を検出した。排水溝西側の坪地業の検出高は12.61mで栗石が固められていた。山手（最西端）の坪地業は検出高12.71mで礎数は少ないものの、栗石の痕跡を確認できた。坪地業間は約1.8mを測る。坪地業の北側にも地業や栗石の一部があり、建物跡等に関連した遺構である可能性が高い。なお、排水溝の東においても検出高12m76cmの坪地業を検出した。

出土遺物（第38図5～8）

5は肥前の磁器碗である。外面は花文で高台内面にも文様があるが、判別できない。内面底は熱により釉薬が溶けており、熱いものや容器としても利用したようである。18世紀前半。6～8は近代以降の瓦である。6は軒棧瓦、7・8はプレス瓦の棧瓦で、8には刻印（刻印125）がある。この付近には、第七高等学校造士館の2号宿舎が建っており、その建物に葺かれていた可能性がある。

2 唐御門跡（第39～第45図）

概要 調査区は、黎明館の東側入口である。現在の門は、第七高等学校造士館の門が利用されている。今回の発掘調査は、鹿児島城跡の範囲確認と合わせ、重要遺構の残存状況の確認を目的としている。今回は、本丸跡内の重要遺構である唐御門の遺構残存状況の確認のための調査を行った。

黎明館の開館時間に発掘調査を行うため、来客通路を確保しながら反転調査を行った。その後、枳形内のスロープおよび階段の造成時期を確認するため、東側調査区の掘り下げを行った。

発掘調査では、鹿児島城跡の基本土層IV層（近世の造成土）上面まで重機および人力で掘削し、遺構検出を行った。また、方形土坑1・2については、半截を行った。

遺構 標高約9.8mの基本土層IV層（近世の造成土）上面で、近世は、唐御門礎石と考えられる礎石、石畳、布地業2か所、平石2基、溝状遺構、土坑2基、近代は鉄管を確認した。

（1）近世

①石畳状遺構（第40図・第42図）

石畳状遺構は調査区北側と南側で2列確認した。拳大～人頭大の石を幅80cmほどで上面を平ら成形した石が敷き詰めていた。北側の石畳状遺構では、その上に唐御門の礎石が乗っていたことから、唐御門のための基礎構造だった可能性がある。南側は、鉄管埋設のための攪乱により、一部が残存しているのみである。

②布地業（第40図・第42図）

調査区北側で確認した。A-A'の土層では、この布地

業が石畳状遺構の上ののっていることから、本来は石畳状遺構の上に布地業が広がっていた可能性がある。幅80cmで石畳状遺構と同じだが、3cm～拳大の円礫が多く、溶結凝灰岩をすり潰して固めたものも含まれている。唐御門の礎石がある部分では、布地業は攪乱を受けており、本来は、石畳状遺構の上に布地業が貼られ、その上に唐御門の礎石が乗るという二重の基礎構造であったと考えられる。

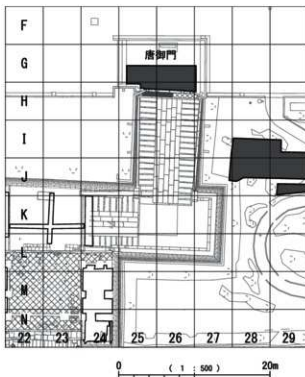
東側調査区では、幅約30cmの布地業を確認した。石畳上遺構の東側には、布地業が延びていた可能性がある。

③唐御門礎石（第40図・第41図・第44図）

石材は溶結凝灰岩。下段約70cm×約70cm、上段約60cm×60cmの2段正方形からなる礎石で、高さは約42cmを測る。上面には約32cm×32cmの正方形で約2cm彫り窪められ、その中央に約12cm×12cm、深さ6cmの枘穴が穿たれている。本来土に埋まっていたと考えられる下段表面は粗く削られているが、土の上にあった上段表面はノミやチョウナで平滑に整えられている。

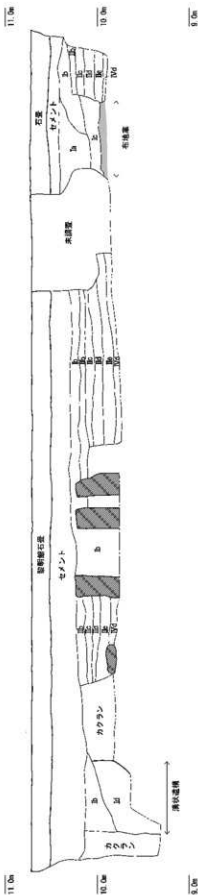
④方形土坑（第40図・第43図）

方形土坑は2基確認した。方形土坑1は、南北約84cm、東西約72cm、深さ74cmを測る長方形の土坑である。方形土坑2は、南北約84cm、東西約84cm、深さは最大で80cmを測る正方形の土坑である。どちらも大型の土

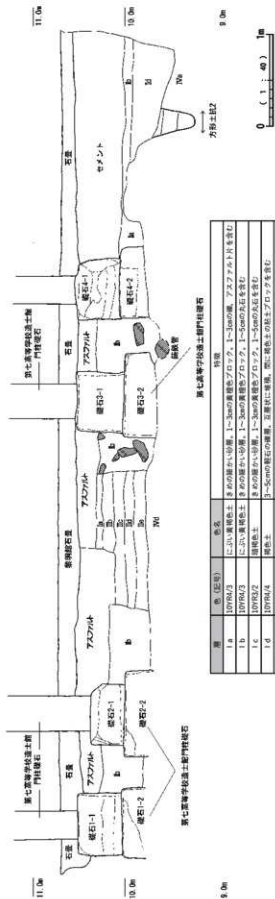


第39図 唐御門跡トレンチ配置図

調査区西壁



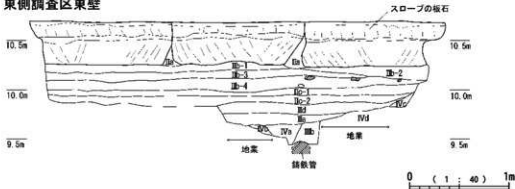
調査区東壁



層	色 (土質)	色名	特徴
I a	10YR6/3	にじみ黄褐色土	その層から砂層、1~3cmの黄褐色ブロック、1~5cmの塊、アスファルト片を含む
I b	10YR6/3	にじみ黄褐色土	その層から砂層、1~3cmの黄褐色ブロック、1~5cmの土片を含む
I c	10YR5/2	暗褐色土	その層から砂層、1~3cmの黄褐色ブロック、1~5cmの土片を含む
I d	10YR6/4	褐色土	5~10cmの厚の塊層、互層が不明、暗褐色土の粘土ブロックを含む
II a	10YR7/4	にじみ黄褐色土	5cm厚の粘土、1~3cmの塊、粘土も少量含む、砂の混入土
II b	10YR6/4	にじみ黄褐色土	粘土層と互層に、黄褐色土(10YR5/3)の塊層が混入した層、砂の混入土
II c	10YR6/4	にじみ黄褐色土	粘土層と互層に、砂の混入土
II d	10YR6/2	にじみ黄褐色土	その層から砂層、1~5cmの塊層を含む、砂の混入土
III a	10YR5/8	黄褐色土	黄褐色土(10YR5/3)の塊層が混入した層、1~5cmの塊、粘土を含む、砂の混入土
IV d	10YR5/8	黄褐色土	黄褐色土

第41図 唐御門跡トレンチ調査区東壁・西壁土層断面図

東側調査区東壁



A-A'

A
11.0m
七雲門柱

10.0m

七雲門礎石

石畳状遺構

布地蔵

0 (1 : 40) 1m

A'

11.0m

10.0m

南壁

10.5m

10.0m

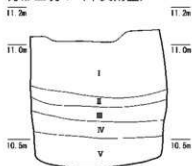


0 (1 : 40) 1m

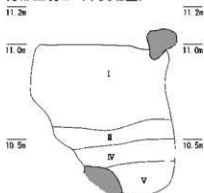
層	色 (記号)	色名	特徴
I b	10YR4/3	にぶい黄褐色土	まめ細かい砂層。1~3cmの黄褐色ブロック。1~5cmの丸石を含む
I c	10YR3/2	暗褐色土	まめ細かい砂層。1~3cmの黄褐色ブロック。1~5cmの丸石を含む
II a	10YR4/3	にぶい黄褐色土	しまりない。1~5cmの小礫。0.5~1.0cmの白色パズル。炭化物が混じる。スロープ造成の際の盛土
II b-1	10YR2/4	にぶい黄褐色土	シルト質の粘質土。1~3cmの小礫。軽石を少量含む。スロープ造成の際の盛土
II b-2	10YR5/4	にぶい黄褐色土	しまりあり。1~5cmの小礫。軽石を含む。10.1~5cmの白色パズル。炭化物を含む。スロープ造成の際の盛土
II b-3	10YR5/3	にぶい黄褐色土	しまりあり。1~5cmの小礫。軽石を含む。IIcよりや炭化物多い。スロープ造成の際の盛土
II b-4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	しまりあり。1~5cmの小礫。軽石を含む。IIcより粘性強く礫が多い。スロープ造成の際の盛土
II c-1	10YR5/4	にぶい黄褐色土	IIb-1層と同じ。黄褐色土(10YR5/6)の粘質土が混じった層。スロープ造成の際の盛土
II c-2	10YR5/4	にぶい黄褐色土	IIb-1層と同じ。ややIIeより砂質。スロープ造成の際の盛土
II d	10YR5/4	にぶい黄褐色土	IIb-1層と同じ。近代の造成土
III e	10YR5/3	にぶい黄褐色土	まめ細かい砂層。1~5cmの小礫混じる。微かな白石滓味を含む。近代の造成土
III a	10YR4/3	にぶい黄褐色土	1~5cmの礫。軽石。粘土ブロックを含む。炭化物を含む
III b	10YR4/3	にぶい黄褐色土	IIIa層と同様だがしまりなくぼそぼそ
III a	10YR5/6	黄褐色土	粘性強い。1~5cmの礫を含む。上面には白色の滓味。層がうすくしかれる。近世
III b	10YR5/3	にぶい黄褐色土	粘性強い。凝灰岩をすりつぶした層。近世
III c	10YR4/4	褐色土	粒の粗い砂層。非常に硬くしまる。近世
III d	10YR5/8	黄褐色土	基本はにぶい黄褐色土(10YR5/3)の粘質土が混じる層。1~5cmの小礫。軽石を含む。近世

第42図 唐御門跡トレンチ東側調査区東壁土層断面図

方形土坑 1 (中央南壁)



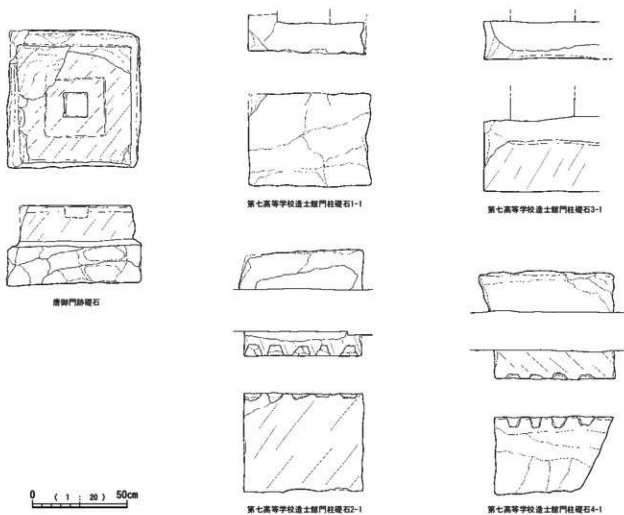
方形土坑 2 (中央北壁)



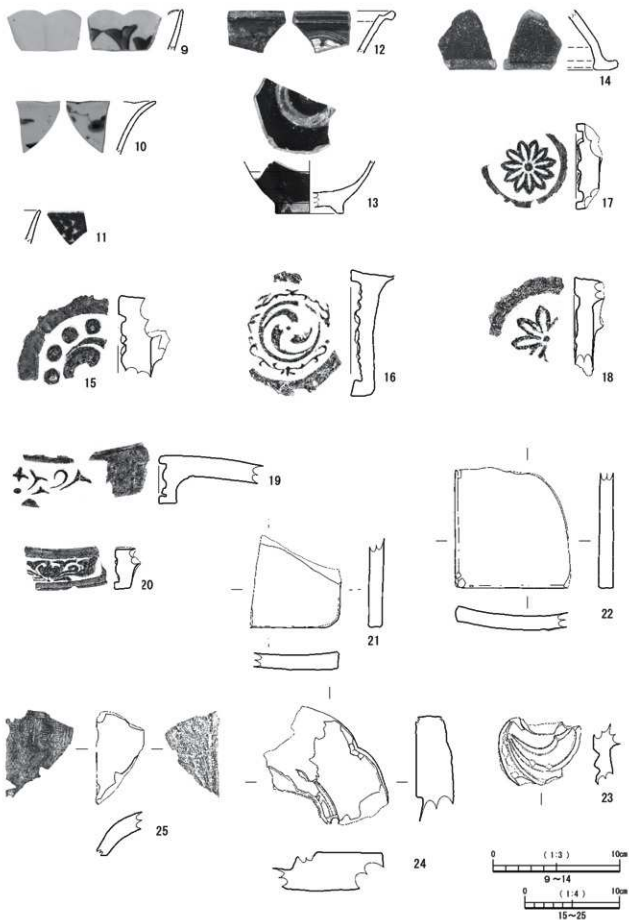
層	色 (記号)	色名	特徴
I	10YR5/4	にぶい黄褐色土	まめの細かい砂層(シラス層), 1~5cmの粒性のある黄褐色土(10YR5/6)ブロック, 1~5cmの軽石含む
II	10YR2/1	黒色土	ガラス質黒じりの粗い砂層(火山灰) 1~5cmの粒性のあるにぶい黄褐色土(10YR3/4) が混じる
III	10YR5/3	にぶい黄褐色土	I層と同じだが, 硬くしまる
IV	10YR5/3	にぶい黄褐色土	II層と同じだが, III層との間にシラスの層が入る
V	10YR4/4	褐色土	まめの細かい砂層(シラス層), 1~5cmの粒性のある黄褐色土(10YR5/6)ブロック, 1~5cmの軽石含む細かい砂層(シラス), にぶい黄褐色土のブロックが混じる

0 (1 : 20) 50cm

第43図 唐御門跡トレンチ方形土坑1・2土層断面図



第44図 唐御門跡トレンチ出土礎石平面・立面図



第45図 唐御門跡トレンチ出土遺物

坑であることから、唐御門に関連する遺構である可能性がある。

⑤溝状遺構（第40図・第41図）

溝状遺構は、西側調査区の南端で確認した。南側は近代の擾乱に切られており、確認できた範囲では、幅20cm、深さ80cmである。北岸は直線的ではなく蛇行していることから、排水溝を抜いた跡である可能性がある。

（2）近代

①第七高等学校造士館門（第40図・第41図）

第七高等学校造士館の門は、現在でも黎明館の門として使用されている。今回は、その地下構造を確認した。門柱の基礎には、礎石が2段ある。下段の礎石（礎石1-2～4-2）は、全て長方形のコンクリートである。規格は揃っていない。門が造られた時のものと考えられる。上段の礎石（礎石1-1～4-1）の石材は、溶結凝灰岩である。一辺約60cmの長方形で、高さ約50cmである。側面には、矢穴が残るものがある。第七高等学校造士館の門を造る際に、唐御門の礎石を再利用した可能性がある。

②鉄管（第40図・第41図）

鉄管は、基本土層Ⅳ層（近世の造成土）を掘り込み、断面直径約18cmで、調査区西側には、石組みに囲まれた栓がある。鉄管は東側調査区西側まで延びており、橋形から黎明館に向かうスロープ（第39図）の下まで延びている。鉄管の上には造成土があり、その上にスロープが乗っていることから、スロープは鉄管埋設以降に造られたと考えられる。

出土遺物（第45図9～25）

基本土層Ⅰ～Ⅲ層から出土している。9～14は陶磁器である。9は、肥前の磁器輪花皿である。型押し成形でやや厚手。18世紀後半。10は、肥前系の磁器輪花皿である。口縁部に向かって外反する。18世紀後半。11は、肥前系の磁器碗である。輪葉にはコバルトが用いられ、文様は型紙摺り。近代。12は、肥前の陶器皿である。古武雄と呼ばれる二彩である。口縁部下に段がつく。17世紀後半～18世紀前半。13は、加治木・始良系陶器碗である。内面見込みは蛇の目軸刺ぎされる。高台は露胎。18世紀後半以降。14は、苗代川系陶器蓋である。口縁部下位で屈曲する。18世紀～19世紀。

15～25は瓦である。15・16は軒丸瓦。15は、連珠三巴文軒丸瓦（A-041）である。瓦当厚い。16は、その他の軒丸瓦（C-017）である。外区に珠文で区画した1対の変形唐草文をもつ。陶器瓦の焼け損じか。凸面にタタキがみられる。17・18は、小菊瓦。17は、（K-02）、18は、大型の（K-09）である。19は、大坂式（A-051）軒平瓦である。瓦当は顎貼付け技法。瓦当上面は面取りされる。20は、軒平瓦または軒棧瓦端である。焼成は良好で、文様帯は小さく、瓦当上端・下端は面取りされている。

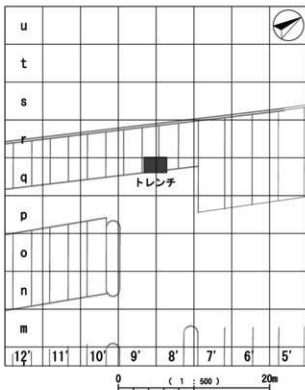
21・22は、平瓦。21は小型で角は面取りされている。凹面にわずかにタタキ痕が残る。胎土はやや灰褐色を呈しており、鹿児島で製作されたものではないと考えられる。22は、端部凹面側が強く面取りされている。23・24は、鬼瓦の一部である。25は、朝鮮系瓦の九瓦である。凹面に布袋痕が残り、凸面は幾何学文のタタキ痕が見られる。

3 本丸大奥跡（第46～第49図）

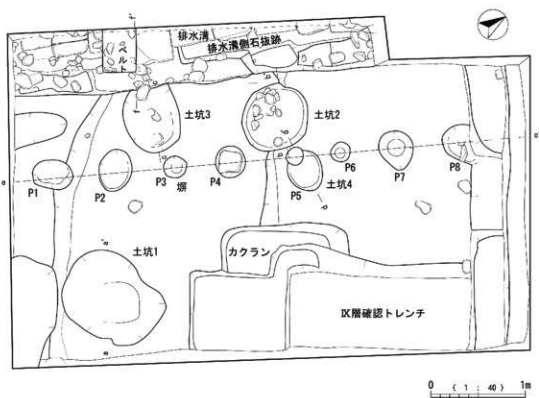
概要 絵図（第9図）で本丸と二之丸の間に描かれる堀を確認する目的で調査を行った。

調査地点の選定に先立ち、令和2年度に本丸跡と二之丸跡の境界にあったと考えられる堀跡の探知と調査地点の絞り込みを目的として、黎明館駐車場における地中レーダー探査を実施した。第Ⅵ章にて詳細の結果を示す。探査の結果、現地表面から1.5～1.7mの深度において、一直線上を呈する大きな異常反応と土壌の変化点と想定される反応が感知された。この結果を受けて、専門家検討会議で検討したところ、レーダー反応が把握された直下を調査する方針が示された。

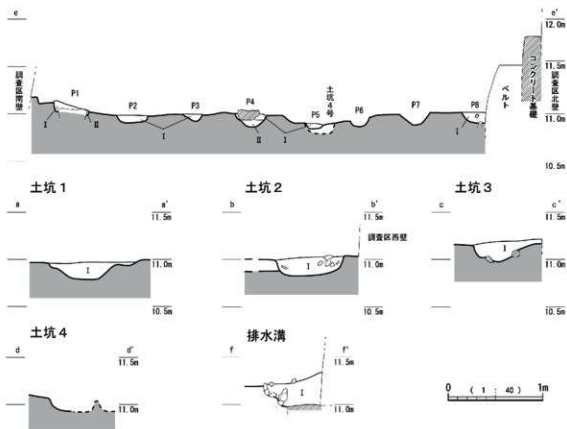
その後、調査の具体について関係機関と協議を重ねた結果、黎明館への来館者に対する動線の確保等、安全対策上の観点から、最終的にはレーダー探査箇所から約10m西側に調査地点を設定した。調査地点を変更した上で、堀跡の確認が可能であると判断した根拠は、絵図にみられる堀が、鹿児島城本丸・二之丸の西に控える城山の裾まで延びて描かれていることによる。



第46図 本丸大奥跡トレンチ配置図



堀



第47図 本丸大奥跡トレンチ位平面図・断面図

第19表 本丸大奥跡トレンチ土層注記

層	色 (記号)	色名	特徴
I a	10YR4/1	褐灰色土	深くしまる砂利層。現代
I b	10YR6/2	灰黄褐色土	深くしまるシラス層。現代
II a	10YR5/6	黄褐色土	まめ細かい砂層。3-5cmの小礫。5cm-拳大の軽石を含む。上層は深くしまる。昭和53-54年調査の埋土
II b	10YR4/1	褐灰色土	まめ細かい砂層。3-5cmの小礫を含む。1cm以下の白色パミス、黄褐色ブロックを含む。上層は深くしまる。陶磁器、瓦、ガラス片出土。昭和53-54年調査の埋土
II c	10YR5/2	黄褐色土	II b層と同じ。しまり弱い。礫も多い。昭和53-54年調査の埋土
II d	10YR3/1	黒褐色土	II c層と同じ。昭和53-54年調査の埋土
III a	10YR4/1	褐灰色土	粒の粗い層。1-3cmの小礫を含む。土別満の埋土か。近代の造成土
III b	10YR4/1	褐灰色土	まめの細かい砂層。3-5cmの小礫を含む。1cm以下の白色パミスを含む。コンクリート建物の基礎埋設の部の造成土。近代の造成土
III c	10YR3/2	黒褐色土	5cm-入階大の礫からなる層。コンクリート基礎の地盤め。近代の造成土
III d	10YR4/1	褐灰色土	Muc10YR4/1と褐色度(Yuc10YR5/6)が混じる層。まめの細かい砂層。3-5cmの小礫。5cm-拳大の礫。軽石が混じる。近代の造成土
III e	10YR3/3	暗褐色土	まめは細かい。1cm以下の白色パミスを含む。陶磁器、ガラス片出土。近代の造成土
IV a	10YR4/5	にぶい黄褐色土	まめの細かい砂層。1-5cmの礫を含む。1cm以下の黄褐色ブロックを含む。炭化物を多量に含む火災層。明治6年の火災の部のもの? 近世の造成土
IV b	10YR4/5	にぶい黄褐色土	まめの細かい砂層。1-5cmの礫を含む。1cm以下の黄褐色ブロックを含む。城山層。江戸時代の造成土。近世の造成土
V a	10YR4/2	灰黄褐色土	まめの細かい砂層。しまり弱い。1-5cmの礫を含む。1cm以下の黄褐色ブロックを含む。城山層
V b	10YR4/3	にぶい黄褐色土	まめの細かい砂層。しまり弱い。1-5cmの礫を含む。1cm以下の黄褐色ブロックを含む。城山層
V c	10YR4/1	褐灰色土	まめの細かい砂層。しまり弱い。1-5cmの礫を含む。1cm以下の黄褐色ブロックを含む。城山層
近代(?)	10YR3/2	黒褐色土	まめの細かい砂層。1cm以下の白色砂粒を含む。3-5cmの礫を含む

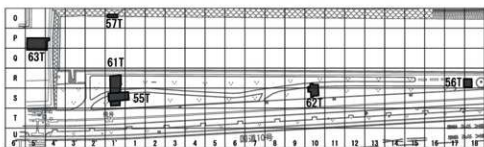
遺構名	土坑1		
層	色 (記号)	色名	特徴
I	7.5YR5/3	灰オリーブ色土	城山層由来の埋土。0.5-3cm内礫。円礫含む。1cm以下の白色パミス。まめ細かい

遺構名	土坑2		
層	色 (記号)	色名	特徴
I	5Y4/4	暗オリーブ色土	まめ細かい。1cm以下の白色パミスを含む。1cm-拳大の円礫を含む。ほぼ完形の土器類、陶磁器(漆付、小皿)出土。城山層由来の砂層

遺構名	土坑3		
層	色 (記号)	色名	特徴
I	7.5YR5/2	灰オリーブ色土	まめ細かい砂層。1cm以下の白色パミスを含む。1cm-拳大の円礫内礫を含む

遺構名	排水溝		
層	色 (記号)	色名	特徴
I	10YR3/3	暗褐色土	まめ細かい砂層。1cm-拳大の内礫を含む。陶磁器。(19c時代の磁器破片入る)。ガラス出土

遺構名	礎		
層	色 (記号)	色名	特徴
P1 I	10YR5/3	にぶい黄褐色土	深くしまった砂層。1cm以下の白色パミスを含む。1-3cmの礫を含む。(礎石の役割をもつ面の丸層?)
II	10YR4/2	灰黄褐色土	まめの細かい砂層。1cm以下の白色パミスを含む。1-3cmの礫を含む
P2 I	≠	灰黄褐色土	≠
P3 I	≠	灰黄褐色土	≠
P4 I	≠	灰黄褐色土	≠
P4 II	10YR4/4	暗オリーブ色土	深くしまった層。まめは細かい。湖沢石をすりつぶして固めた層。礎石のための地盤め
P5 I		P1 II層と同じ	
P8 I		P1 II層と同じ	



第50図 55(61)～57・62・63トレンチ配置図

0 (1 : 1000) 40m

土師器皿である。赤褐色系の胎土で薄い。29は、土師器皿である。胎土は白褐色系である。底部には糸切痕が残る。体部下半は面取りされ強く屈曲する。内面はきれいにナデられ、見込みは平滑に仕上げられている。ほぼ完形であること、白褐色系胎土を用いていることから、地鎮等で用いられた可能性がある。

30～32は、排水溝埋土から出土した。30は、肥前系の磁器端反碗である。呉須は滲む。1820～60年。31は、関西系陶器蓋物である。口縁部は軸刺ぎされている。腰部で屈曲する。江戸時代後期。32は、平瓦である。凹面の頭端部は面取りされ、側面に山に西の刻印(刻印043-1)。金属片が付着する。33～39はI～III層出土遺物である。33～38は陶磁器。33は、中国景徳鎮窯系の青花小坏である。薄手。16世紀末～17世紀前半。34は、肥前系の外青染付の碗である。見込みには、二重円と中央に五芒星が描かれる。18世紀後半。35は、肥前系の磁器小坏である。18世紀末～19世紀中頃。36は肥前系の磁器小皿である。型打ち成形で口縁部は波状になる。19世紀。37・38は、薩摩磁器の端反碗である。19世紀中頃。38の軸葉透明釉は青みがかった。39は、鬼瓦の一部である。全面に雲母子が目立つ。近代。

土坑2は17世紀代の遺構で、その他の遺構は、遺物から近代に埋められたと考えられる。陶磁器は、少量だが中国景徳鎮系の青花等がみられ、本丸大奥にふさわしい上流階級の人々の生活の一端が窺える。本丸大奥跡では、瓦は少量しか出土しておらず、近代以降のものである。天保14年(1843)年「天保年間鹿児島城下絵図」では、本丸大奥の建物は瓦葺きで描かれていないことから、出土した瓦は、近代以降の建物に葺かれたものと考えられる。

4 本丸東堀 (第50図～第63図)

本丸跡の東に面する堀の幅の変遷や、絵図に描かれた堀に付随すると想定された土塁等(第9図)の確認を目的とする調査である。調査の結果、各トレンチで近世の生活面が確認されており、本丸東堀の拡張はなかったと考えられる。また、版築等の土塁の存在を想定できる堆

積は確認されていない。

(1) 55トレンチ・61トレンチ (第51図～第54図)

55トレンチは、鶴丸城跡保全整備事業の一環として平成30年度に発掘調査された。61トレンチはその55トレンチを拡張する形で令和元年度に発掘調査を行った。そのため、今回は、55トレンチの成果も含わせて報告する。
55トレンチ概要 55トレンチは、S-1'1'に堀と平行に2×5mの規模で設定した。南部に擾乱の窪みがあり、溶結凝灰岩の板石が投げ込まれていた。擾乱の下位で地山面(VI層)が確認されており、検出高は約4.5mである。北側は斜面状に削平され、地山層の最下面の標高は約3.5mを測る。南側の擾乱の北側に灰黄褐色土(VIc層)を埋土する土坑状の掘り込みを確認した。北東部には、地山を切り込んだ約1mの落ち込みがみられた。西壁の地層堆積状況はなだらかであるが、東壁、北壁は擾乱層となっている。

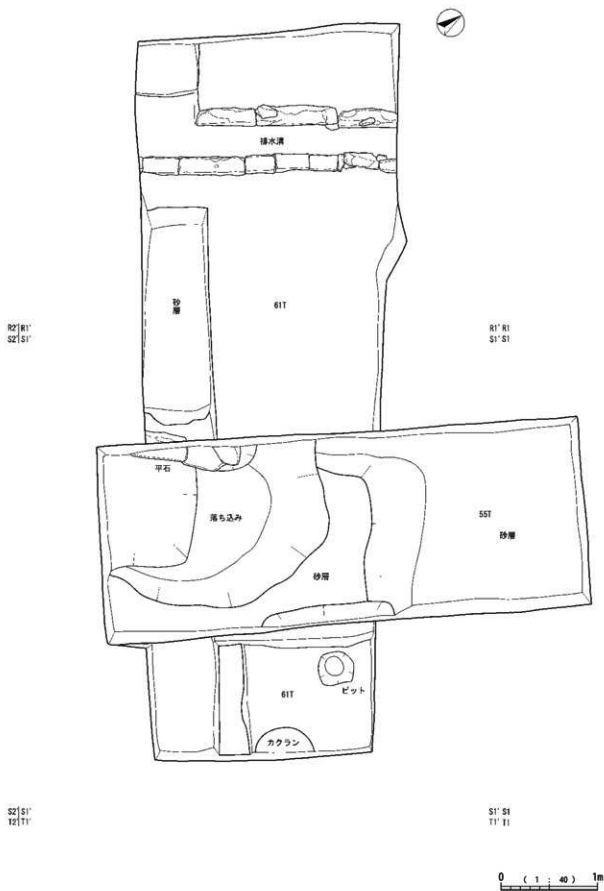
61トレンチ概要 61トレンチは、本丸跡の東に面する堀の石垣に漏水等の影響を及ぼさないよう、石垣の天端から1m間隔を空け、2×7.5mの規模で設定した。

III層からは、近代の焼け瓦や面的に広がる焼土が出土した。表土直下であることから、昭和27年の鹿児島火災時のものと想定される。IV層は暗褐色層で固くしまっており、V層は黄灰色の砂質土層でややしまりがある。いずれも生活面に該当すると思われる。V層はIV層よりもしまるが、砂質が少なくなる。VI層はにぶい褐色で砂質である。V・VI層が地山層である。VII層は明褐色で砂粒が1～2mmとなり1cm大の小礫も含まれる。

遺構 遺構は、本丸東堀の外岸で排水溝を確認した。

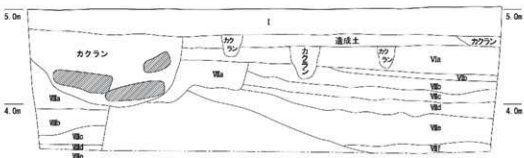
① 排水溝 (第51図)

排水溝の側壁は、溶結凝灰岩製の2段積みである。石列間の幅は約30cm。上段で標高5.11m、下段は標高4.81mで、厚み約30cmの切石を配列している。下段の石列は、上部は丁寧に面取りされているが、最下部から約5cmで面調整が粗くなっていることから、この高さまで地下に埋められていたと考えられる。石列内には、軟質の砂質土が堆積しており、底石が敷設されていないことから、底石がない土溝であった可能性が高い。

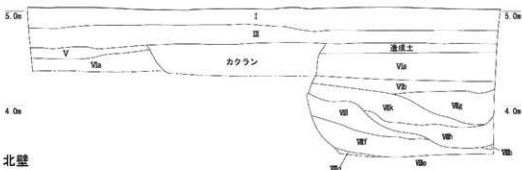


第51図 55 (61) トレンチ平面図

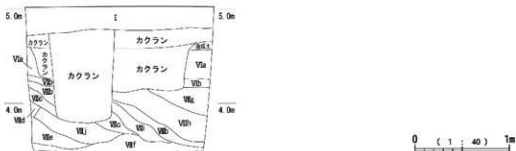
西壁



東壁



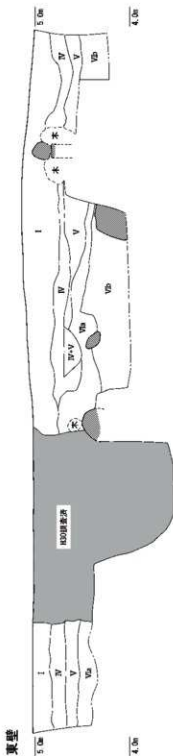
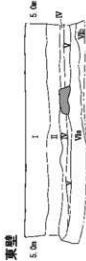
北壁



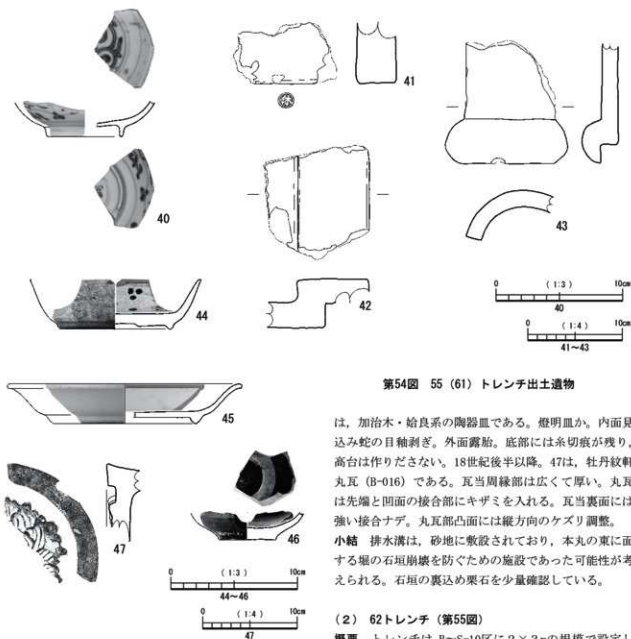
層	色(記号)	色名	特徴
			I～V層は811にある
VIa	7.5YR4/3	褐色土	砂土。砂層。土盛りりと互層に堆積
VIb	7.5YR4/1	黄褐色土	シルト。砂が互層に堆積
VIa	10YR4/2	灰黄褐色土	土盛り
VIb	10YR3/2	黄褐色土	砂質土。黒色土ブロック混じり
VIc	10YR4/2	灰黄褐色土	
VIe	2.5Y6/3	にじみ黄褐色土	砂土。I層流れ込み。灰色ブロック混じり
VIe	10YR4/2	灰黄褐色土	砂質土
VIg	10YR4/1	褐色土	砂質土。灰色シルト。赤褐色砂土層付着
VIg	7.5YR4/3	褐色土	砂質土。赤褐色砂土や泥層が含まれる
VIh	10YR4/3	にじみ黄褐色土	黒色ブロック土。灰色砂質ブロック土層付着
VIi	5YR3/2	黄褐色土	砂土。砂粒はやや粗い
VIj	10YR4/2	灰黄褐色土	砂質土
VIk	7.5YR4/2	黄褐色土	砂質土。黒色土。I層砂混じり
VIi	5YR3/2	黄褐色土	砂質土。11層砂土に灰色。灰色ブロックが混じる。11層と同層と思われる
VIa	2.5Y6/3	にじみ黄褐色土	砂層層。0.1-1mmの鋭角-円錐多く含む
VIb	5YR4/3	にじみ黄褐色土	砂層層。0.1-1mmの鋭角-砂粒は粗い
VIc	7.5YR3/1	黒褐色土	堆積。5mm程度の線-円錐が多く1-2cmの厚み層も含まれる
VIe	2.5Y7/4	洗炭	砂層。I、II層より砂粒は細かいが粗い
VIe	10YR2/1	黒色	砂層。砂粒は細く、赤褐色砂層ブロックが混じる

第52図 55トレンチ土層断面図

層	色(図例)	地層	説明
I	10192/2	硬砂土	埋没はなくて、やや硬め
II	10196/1	硬砂土	埋没は浅い層に比べて硬さを失ってしまっており、ところどころより下層に硬さが残っている
III	10192/3	硬砂土	埋没は浅い層に比べて硬さを失ってしまっており、硬さを失っている
IV	2350/4.1	硬砂土	埋没は浅い層に比べて硬さを失ってしまっており、硬さを失っている
Va	10196/1.1	硬砂土	V.1よりも硬く、埋没は浅い層に比べて硬さを失ってしまっており、硬さを失っている
Vb	2350/5.1	硬砂土	埋没が1~2m程度で、V.1よりも硬く、埋没は浅い層に比べて硬さを失ってしまっており、硬さを失っている



第53図 61トレンチ土層断面図



第54図 55 (61) トレンチ出土遺物

は、加治木・蛤良系の陶器皿である。燈明皿か、内面見込み蛇の目軸刺ぎ。外面露胎。底部には糸切痕が残り、高台は作りださない。18世紀後半以降。47は、牡丹紋軒丸瓦 (B-016) である。瓦当周縁部は広くて厚い。丸瓦は先端と凹面の接合部にキザミを入れる。瓦当裏面には強い接合ナデ。丸瓦部凸面には縦方向のケズリ調整。小結 排水溝は、砂地に敷設されており、本丸の東に面する塚の石垣崩壊を防ぐための施設であった可能性が考えられる。石垣の裏込め栗石を少量確認している。

(2) 62トレンチ (第55図)

概要 トレンチは R-S-10区に2×3mの規模で設定した。調査の結果、植栽に関連すると考えられる掘り込みや重機の掘削痕等、近代から現代にかけての痕跡が認められた。南側を一部拡張し、遺構の確認に努め、南北にサブトレンチを設定し、下層確認を行ったが、近世の遺構確認には至らなかった。

表層は、約20cmで、I層は褐灰色土で、部分的にラミナ状の橙色焼土を含むことから、昭和27年の鹿児島火災時の片付け層と考えられる。III～V層は砂粒を多く含み、粘性は少なく水平堆積をなす。VI層は土壌の目が詰まり、生活面に近い。VII層の砂粒は1～2mmで地山の砂層である。

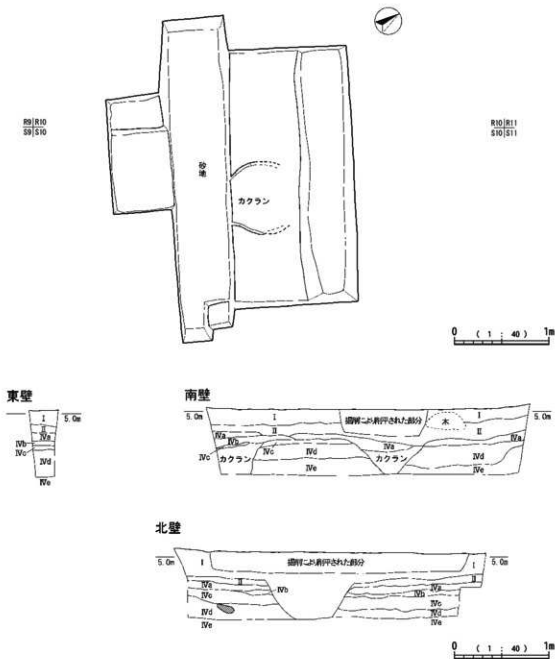
(3) 56トレンチ (第56・第57図)

概要 調査は、御楼門橋周辺の遺構の残存状況を把握することを目的として実施した。トレンチは、御楼門橋の

出土遺物 (第54図40～47)

40～43は55トレンチから出土した。40は、中国景德鎮窯系の青花碗である。一部ではあるが、見込み内面には七宝唐草文、外面は花唐草文が描かれる。高台は高く、高台内面には、「富貴長命」が書かれていたようである。41は、塀瓦もしくは海鼠瓦である。厚手。側面に丸に休の刻印 (刻印039-3) がある。42は、塀瓦である。接合部には切り込みをいれ、接着しやすいようにしている。裏側は被熱している。43は近代以降の瓦管である。表面には雲母子がみられる。

44～47は、61トレンチから出土した。44は、肥前の磁器皿である。高台内面は蛇の目軸刺ぎされる。総輪だが、畳付きは軸刺ぎされる。焼成不良で文様が滲んでいる。18世紀末～19世紀中頃。45は、磁器皿である。近代の統制食器である。高台内側には番号等はいかれない。46



層	色(記号)	色名	特徴
I	5YR1.7/1	赤色土	硬くしまっている。粘性なし。10cm先の黄色粒。2~3mm先の白色粒混ざる
II	10YR6/1	黄灰色土	昭和27年の火災による焼土層。硬くしまっており、ところどころミナ状のオレンジシヤ色がみられる。
IVa	7.5YR4/3	褐色土	砂粒が多く粘性なし
IVb	9N1/	灰色土	砂粒が多く粘性なし
IVc	7.5YR4/3	褐色土	砂粒が多く粘性なし。IVaと類似する
IVd	7.5YR4/3	褐色土	IVcよりは砂粒が少なく、土層の目がつまった状態
IVe	7.5YR5/6	明褐色土	砂粒が1~2mm程度でザラザラした層。10cmの小層も混じる。焼土層

第55図 62トレンチ平面図・土層断面図

南約18mの地点のR-18区に約2×2mで設定した。

遺構 遺構は、石列2列を確認した。

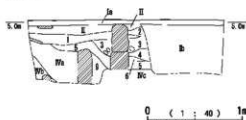
石列 (第56・第57図)

表層は約4cmと薄く、直下で幅約20cm、深さ28cmの石列を検出した。石列の下位に栗石を敷き、IVc層から

掘り込まれている。近代のものである。

北側で下層確認を行った結果、標高4.72mで幅20cm溶結凝灰岩の切石を検出した。1石のみであるが61トレンチで検出した石列と堀の縁からの間隔が類似している。

北壁



層	色 (記号)	色名	特徴
I a	10YR2/1	黒褐色土	
I b	10YR3/1	黒褐色土	砂質土。上部明褐色砂質土(10YR5/4)のクラン土
II	10YR6/2	灰青褐色土	砂質土。ベタ基礎(須賀写真裏のゴール固定の?)に伴う敷設土
石列1	5Y4/1	灰色土	
石列2	10YR4/4	褐色土	
石列3	10YR4/2	灰青褐色土	3-5cm程の角縁が多く含まれる。面石敷工跡の礎石敷設層
石列4	10YR4/1	褐色土	
石列5	10YR4/2	灰青褐色土	砂質土
石列6	10YR5/1	褐色土	
IVa	10YR4/2	灰青褐色土	砂質土。立石?←石しか確認できていないに伴うもの
IVb	10YR5/1	褐色土	砂質土。鉄分酸化が多く見られ、5cm-手のひらサイズの鏝を含む
IVc	10YR5/2	灰青褐色土	砂質土。黒くしまる。基礎層?

第56図 56トレンチ平面図・土層断面図

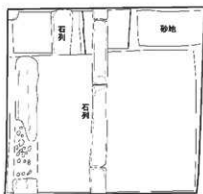
出土遺物 48は九瓦である。凸面はタテナデ調整で、「太左衛門」(刻印027-3)の刻印がある。御楼門に使用された瓦の可能性がある。凹面にはコピキBが残る。側縁・広縁には面取りがある。49は、平瓦である。大型。周縁はナデにより角を取り、凹面には縦方向のナデ調整。

(4) 57トレンチ (第58図)

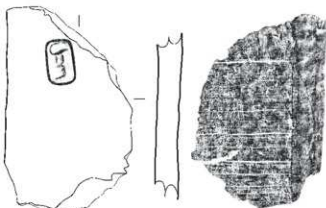
概要 隅角部の胴木を確認するため、0-1'区に設定した。隅角部は本丸の東に面する堀と南に面する堀の交点であり、併せて塀台との繋ぎ部にもあたる。

調査の結果、算木積み石垣の角石の下に根石が確認され、根石の下位から厚さ22~28cmの胴木を検出した。

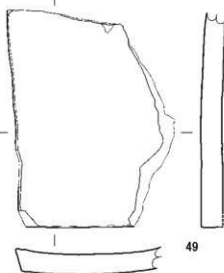
調査が12月の湯水期であったため、堀の水位は根石の下部約30cmまでであった。豊水期の水位は、根石の上部で標高約4.30~4.48mであり、根石に残る水位線を確認することができた。胴木を敷設した基礎層は砂粒が粗い暗緑灰色砂層で、2cm程の円縁を多く含んでいた。胴木は石垣の底面と形状を同じくして敷設されていた。また、胴木は本丸の南に面する堀を閉塞する石垣となる塀台下の石垣の1石分南へ延びていた。胴木脇には、ずれを防ぐために径6cmの杭が打ち込まれていた。隅角部の石垣は、算木積みと隅脇石が丁寧に組まれており、表面は丁寧に調整されている。閉鎖石垣は、本丸石垣よりやや小ぶりの切石布崩し積みである。これらの石材はいずれも溶結凝灰岩である。胴木の設置方法が明らかになった。



0 (1 : 40) 1m



48

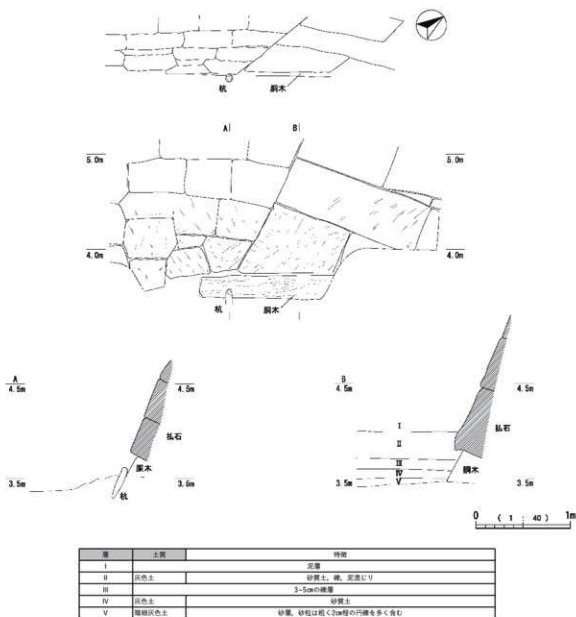


49

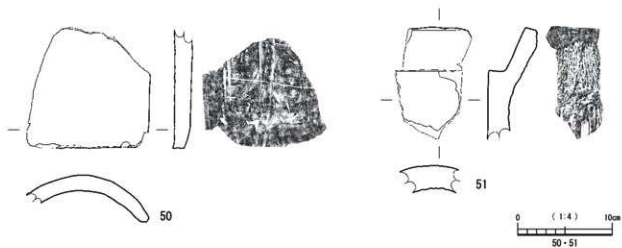
0 (1 : 4) 10cm

48~49

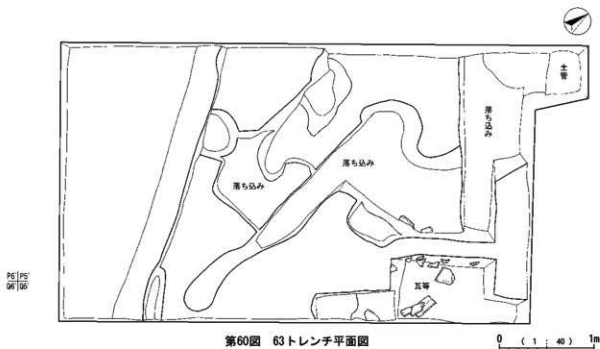
第57図 56トレンチ出土遺物



第58図 57トレンチ平面図・土層断面図



第59図 57トレンチ出土遺物



第60図 63トレンチ平面図

出土遺物 (第59図50・51)

50は、丸瓦である。凸面はタテナデ調整。凹面は、コピキB。布袋痕が残り、尻側は面取りされている。51は、丸瓦である。凸面玉縁から筒部狭端には強いヨコナデ調整。凹面には布袋痕が残り、周縁は面取りされている。

5 二之丸跡 (第60～第63図)

平成28・29年度に鶴丸城跡保全整備事業の際の外御庭跡で確認された井環の延長の有無の確認、及び二之丸の北側境界を確認することを目的とした調査である。また、石垣の孕みだしの状況等を確認した。

63トレンチ (第60図～第63図)

概要 発掘調査は、P・Q・5'区に3×5m規模のトレンチを設定し、後に北西端を約50cm拡張した。

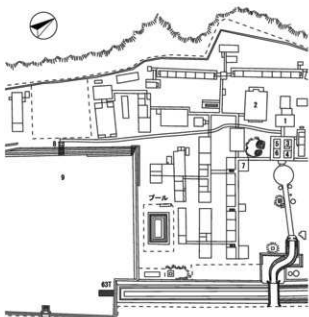
調査の結果、トレンチ南側では、表層から約70cm下位で城山層を含む暗黄茶褐色の近世期の平坦な造成面を確認した。中央部では、遺構が攪乱を受けた落ち込みを確認した。北側では、ほぼ垂直の角度で掘られた深さ約70cmの堀り込みを確認した。その後、標高6.32mで铸铁管を検出した。この铸铁管およびその埋設のための攪乱は、平成30年度の発掘調査で確認された第七高等学校のブルの排水のためのものである。調査区南東では瓦片や礫及びVI層を検出し、近世の瓦溜りを確認した。

石垣 (第62図)

石垣は堀の水面より4m以上の高さがあり、天端で標高7.55mを測る。石垣の孕み出しは、上から2段目から下まで続いており、断面が凸状を呈する形となっている。石垣の上部に礫基礎の地覆石が乗せられている。

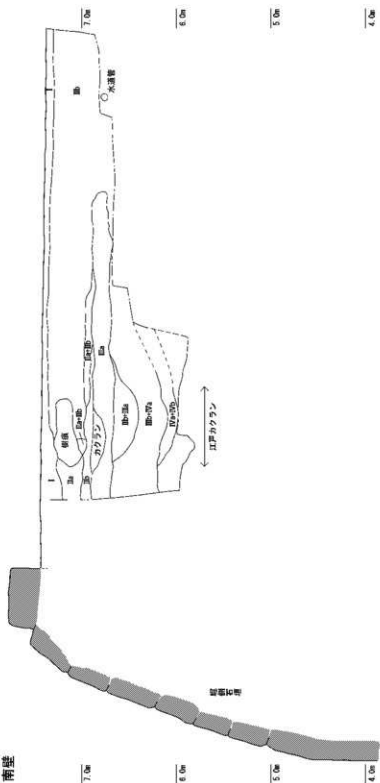
出土遺物 (第63図52～69)

近代以降の造成土や攪乱から遺物が出土した。52～62は陶磁器。52は、肥前系の磁器皿である。総軸だが、畳付きは軸剥ぎ、高台内側は蛇の目軸剥ぎされている。内面は草花文が描かれる。18世紀後半。53は、統制食器の小碗である。54は、加治木・始良系の陶器碗である。総軸。見込みは蛇の目軸剥ぎ。焼け損じか。18世紀前半。55は、加治木・始良系の陶器燈明皿台である。外面は露胎で、底部に糸切痕が残る。18世紀。56は、加治木・始良系の陶器皿である。57は、陶器皿である。外面露胎で、縦方向の刻みが入る。近代か。58は、苗代川系の陶器甕である。19世紀。59・60は、苗代川系の播鉢である。59は折り曲げ口縁の18世紀前半。60は、

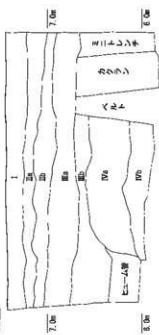


第61図 旧制第七高等学校校舎配置図における63トレンチの推定地

南壁

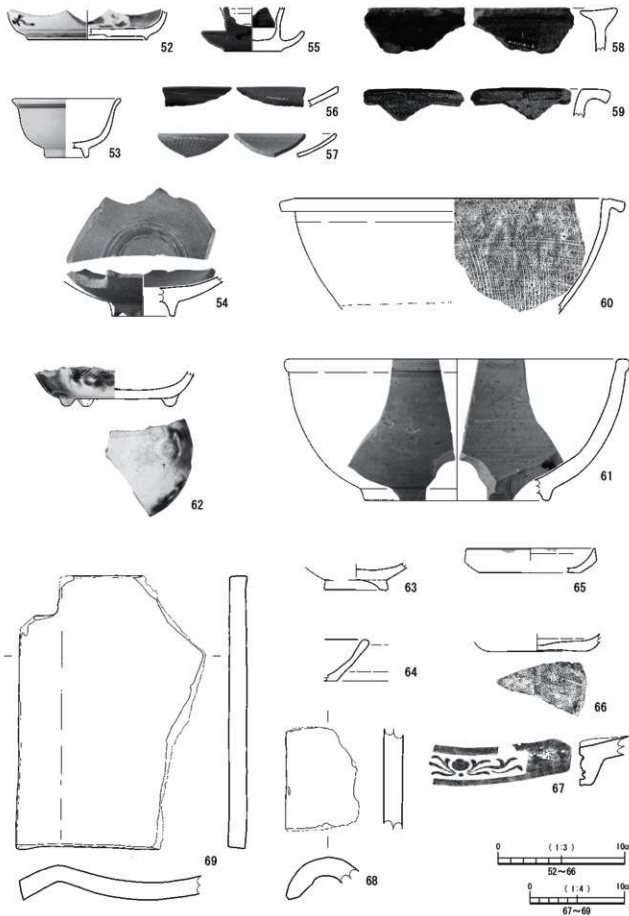


北壁



層	表 (位置)	色名	特徴
1	10782/1	黒褐色土	灰土(灰土) 築直層位時代に落ちた土
	10783/1	黒褐色土	田舎土
a	10783/2	二色(黄褐色土)	縁が深い、築直層位のように築えたが下の身置層位に持ち込まれたもの
b	10783/3	黒褐色土	縁が浅い、築直層位のように築えたが下の身置層位に持ち込まれたもの
a	10784/1	黒褐色土	切込層
b	10784/2	黒褐色土	江戸時代、縁直層をまぼらに含む
a	10785/1	黒褐色土	江戸時代、縁直層をまぼらに含む
b	10785/2	黒褐色土	江戸時代、縁直層をまぼらに含む

第62図 63トレンチ土層断面図



第63図 63トレンチ出土物

19世紀。61は瀬戸美濃の陶器鉢である。近代。62は、琉球陶器（壺屋焼）の土瓶である。鮮やかな色の三彩。19世紀～近代か。63～66は土師器。63は土師器碗である。白褐色系。64は、土師器坏である。赤褐色系。腰部がやや屈曲ぎみに立ち上がる。65は、土師器皿である。白褐色系。燈明皿として利用されたと考えられ、口縁部には油の痕跡が残る。66は土師器皿。白褐色系。底部には糸切痕が残る。67～69は瓦である。67は、鹿児島式の軒棧瓦（B-012）である。瓦当には○に体の刻印（刻印039-1）がある。瓦当は顎貼付け技法。顎裏面にはヨコナゲ調整。瓦当右外縁部角は、側面に沿って瓦当から平瓦部後方へ向かって三角形に切り落としている。68は、目板棧瓦である。平瓦に小型丸瓦のような丸い棧部をつけた棧瓦である。熊本県の独特の形態であること、鶴丸城跡保全整備事業で発掘調査された本丸では、熊本県益城町の土山瓦の刻印が確認されていることから（刻印172-1、172-2）（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2022）、熊本で製作されたものと考えられる。69は、大型の棧瓦である。凹面頭側の周縁は面取りする。

6 鹿児島城跡（二之丸）旧考古資料館地点（第64図～第66図）

調査は、二之丸の南端の境界を確認するために行った。絵図で「御勘定所 宗門方 御代官所 山奉行所」等の施設が記された長屋（第10図）の南端と想定される場所の発掘調査を行った。

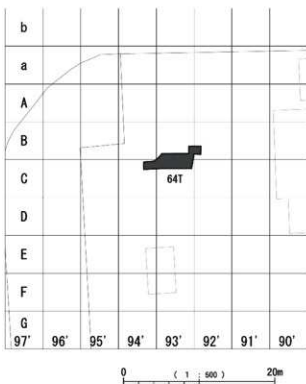
概要 トレンチをB・C-92°～94°区に2×5mの規模で設定し、調査に着手した。地下埋設物が多数残存する地点であることが判明したことから、可能な範囲で南北方向に拡張し調査を継続した。

遺構 排水溝や長屋の石垣裏込めに使用された可能性のある裏込め等を確認した。

①排水溝（第65図）

南側では、水道管を挟む形で円形の攪乱を確認し、掘り下げを行った結果、攪乱の底面付近から溶結凝灰岩の切石を検出した。長さ120cm、幅20～25cm、高さ約40cmを測る切石である。東側の面と上面が丁寧に面取りされ調整が施されていた。切石高を確認するために掘り進めたところ、切石に接する形で組み合わされた板石を2枚確認した。確認できた範囲での計測値は幅70cm、厚みが約7cmである。調査区外へ延びることが想定され、検出高は、約5.0mではほぼ平坦である。切石が側石で、板石を底石とする排水溝を確認できた可能性が高い。切石は、この延長線上の調査区北側でも確認しており、この遺構が排水溝であれば、排水溝は南北方向に伸びていたと考えられる。

調査区中央部付近では、近代以降の造成土を掘り下げたあと、IV層から凝灰岩を砕いた排水溝の基礎構造であるズリ石が確認された。94°区では表層の下に水成の互



第64図 64T トレンチ配置図

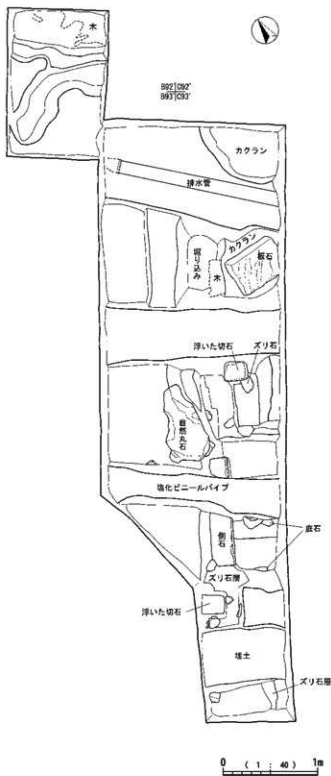
層がみられ、下位に橙色の層を敷いていた。その下に凝結凝灰岩を砕いたズリ石が確認された。

②長屋の痕跡（第65図）

調査区南側では、拳大の切石や丸石が多量に出土した。後世の攪乱が著しく、原位置を留めていないが、これらは長屋の石垣の裏込め等で使用された可能性がある。長屋の建物は、排水溝の東側にあったと想定されることから、長屋の遺構は調査区東側に残存する可能性が高い。

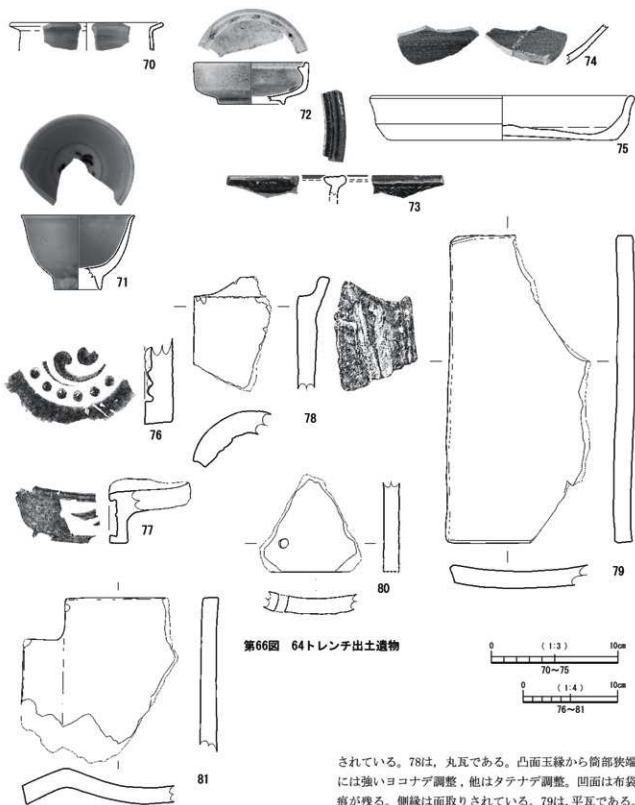
出土遺物（第66図70～81）

近代以降の造成土から遺物が出土した。70～73は陶磁器。70は、肥前の青磁の香炉か。17世紀代。71は、肥前の磁器小碗である。高台露胎。軸粟の発色は暗く、厚手。見込みには花文が描かれる。1640年代の初期伊万里である。72は、堅野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の蓋物の皿である。総輪。腰部が屈曲して立ち上がる。18世紀～19世紀。73は、古武雄と呼ばれる肥前の陶器小壺である。外面には波文が描かれる。17世紀中頃～末。74は、加治木・始良系の半陶半磁の透明釉の碗である。輻輳目を明瞭に残す。75は、赤褐色系の土師器焙烙である。76～81は瓦である。76は、連珠三巴文軒丸瓦（A-007）である。瓦当周縁は広くて厚い。77は、軒平瓦（C-006）である。瓦当は瓦当貼付け技法。瓦当上面、凹面の周縁は面取り



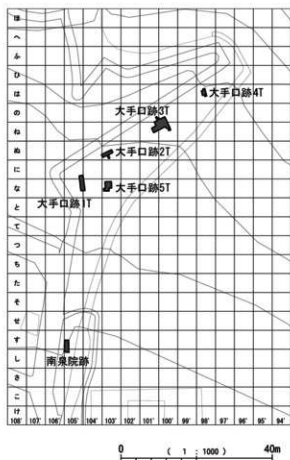
層	色 (図号)	地名	特徴
Ia	25166/1	褐色土	赤土、瓦、セシ、マタルト、フアンタ皿、ブラスチア片等を多く含む
Ib	25167/1	にじみ黒褐色土	
Ic	25167/2	にじみ褐色土	瓦片を含む
IIa	25168/1	にじみ褐色土	瓦、炭化物を多く含む(炭化物のものか?)
IIb	25168/2	褐色土	灰い褐色土、黒く印灰色の層(灰分を多く含んでいる)
IIc	25168/3	褐色土	瓦、炭化物を多く含む(灰に行くにつれて多くなる傾向がある)
IIId	25168/4	褐色土	炭を多量に含む
IV	25169/1	褐色土	層がやや大きくなるとIIIdのものに近づく

第65図 64トレンチ平面図・土層断面



第66図 64トレンチ出土遺物

されている。78は、丸瓦である。凸面玉縁から筒部狭端には強いヨコナデ調整、他はタテナデ調整。凹面は布袋痕が残る。側縁は面取りされている。79は、平瓦である。凹面の周辺は面取りされている。凹面には横方向のナデ調整。80は、平瓦である。凹面周縁は面取りされている。凹面側からは、焼成後に直径1cmの釘孔が開けられている。81は、棧瓦である。凹面の周縁部は面取りされている。凸面に斜め方向の交差するカキメがある。



第67図 大手口跡・南泉院跡トレンチ配置図

鹿兒島城跡全体の範囲確認のための調査

7 鹿兒島城跡（大手口）（第67図～第78図）

大手口は、鹿兒島城本来の本丸や二之丸があった城山山頂への南側の門があった場所である（第Ⅱ章第3節（6））。鹿兒島城全体でも城城南限の一角にあたる。これまで発掘調査を行われたことはなく、その位置は確定できていなかった。今回は、大手口の位置の確定、遺構残存状況を確認するための発掘調査を行った。調査地点は、現在の照國神社背後から城山へ登る遊歩道の途中にある。調査地点の北側には谷が開析しており、谷には砂防ダムが設けられている（第67図）。

概要 調査地点は、専門家検討委員会の指導や絵図と周辺を含めた平坦面の有無等の現地形との比較、隣接する遊歩道に近世の排水溝の残存を確認し選定した。

調査地点は、北側の谷に沿うならかな尾根状の自然地形を改変して、4つの平坦面が造成されている。今回は、遺構確認を目的として各平坦面に計5本のトレンチを設定した（第68図）。

調査の結果、2トレンチ・4トレンチ・5トレンチでは明確な遺構は確認できなかった。1トレンチでは、遺構は確認できなかったものの、石列や礎石に用いられた

可能性のある平石を確認した。3トレンチでは、4時期の遺構・遺物を確認した。

（1）1トレンチ（第69図）

平坦面1に設置した。標高約29.2mで地山層であるV層を確認した。遺構は確認できなかったが、調査区東で平石を確認した。平石は、長軸60cm×短軸40cmで厚さ20cmである。表面は平滑に成形されている。絵図等に描かれている建物の礎石の可能性もあるが、大手口3トレンチで確認された石列の一部が下まで落ちた可能性もある。平坦面1は、昭和50年の砂防ダム建設により削平を受けており、遺構は確認できなかった。

出土物（第70図82）

82は、棧瓦である。凹面はヨコナゲ調整。

（2）2トレンチ（第71図）

概要 平坦面2に設定した。標高約32.4mで平坦に造成された地山面を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。

（3）4トレンチ（第72図）

概要 平坦面4に設定した。標高約38.4mで平坦に造成された地山面を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。

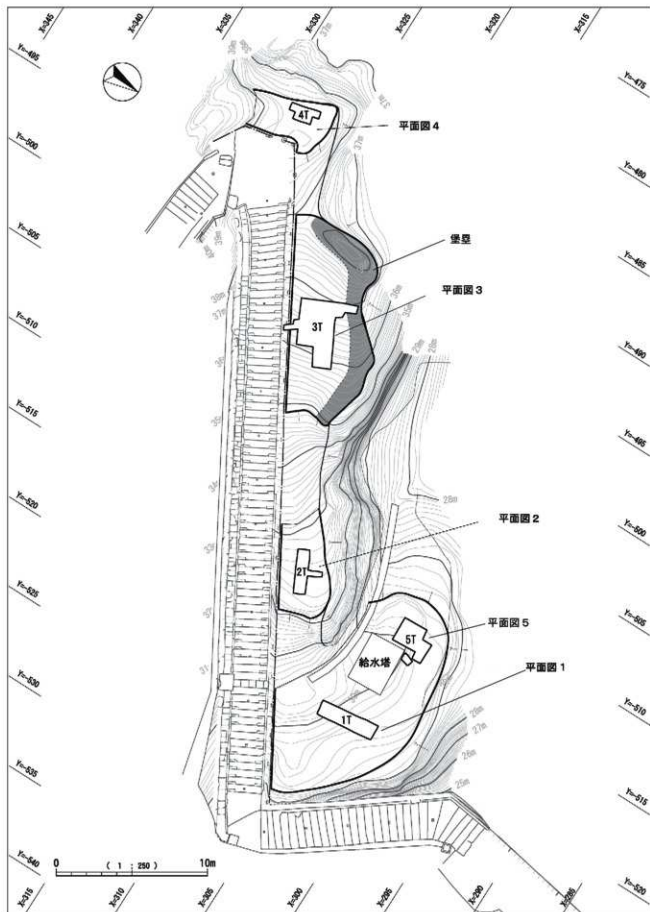
（4）3トレンチ（第73図）

概要 平坦面3に設定した。平坦面3は、他の平坦面に比べ傾斜していたが、周囲に土塁状の高まりが巡っており、瓦も散布していたことから平坦面とした。

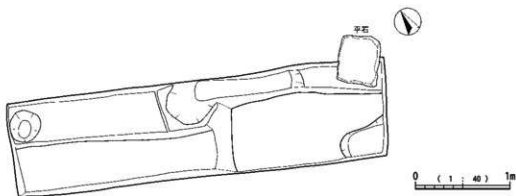
遺構 遺構は、L字状に曲がる石列1列、混石土塁1列、坪地業2基、布地業1列、土塁1列を確認した。遺構は4時期に分かれる。

（1）第1期 石列・混石土塁（第73図・第74図）

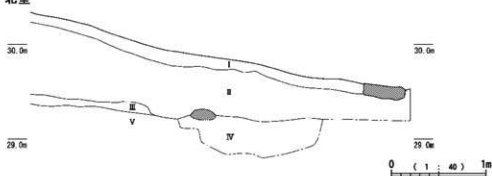
第1期は、L字に曲がる石列とその外側に混石土塁である。石列は、東西約250cm、南北約110cmを確認した。石材は全て溶結凝灰岩で、ハツリヤノミで表面は平滑に整えられていた。石列の内側は、外側より一段高くなっており、石列はその内側に建物を建てるための基壇の土留めであったと考えられる。石列は調査区外側まで伸びており、現在の遊歩道の下まで続いている。混石土塁は、地山面から幅20cm、高さ約30cmの半円形に3cm～拳大の礫と土を突き固めたものである。本来は土塁の基礎であった可能性がある。坪地業等の建物痕跡は確認できていないが、1期建物の埋土（V層）から鬼板瓦（113）・丸瓦（114）等が出土しており、建物の存在が想定される。時期は17世紀前半～後半と考えられる。



第68図 大手口跡1～5トレンチ配置図

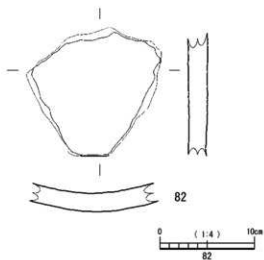


北壁



層	色(記号)	色名	特徴
I	黒褐色土	10YR3/1	腐食土
II	にじみ黄褐色土	10YR5/3	透気土。近代-現代の海浜砂出土。近代
III	黒色土	10R2/1	やや粘性あり。透気土。近代
IV	にじみ黄褐色土	10YR5/4	しまりはなし。攪乱。近代
V	黄褐色土	10YR6/2	まめの殻かい砂層。2-5cmの小礫-人頭大の礫を含む。城山層。3つり層と同じ

第69図 大手口跡1 トレンチ平面図・土層断面図



第70図 大手口跡1 トレンチ出土遺物

(2) 第2期 第1期 坪地業 (第73図・第74図)

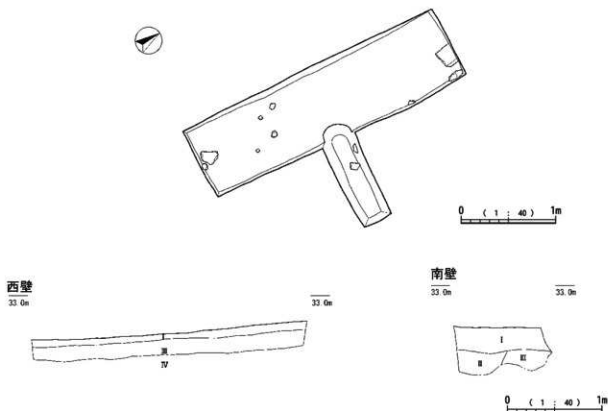
2期は、坪地業2基を確認した。直径約30cmの穴に3cm〜拳大の焼礫を詰めており、本来はこの上に礎石を置き、その上に柱を立てた建物が建っていたと考えられる。苗代川系陶器播鉢(104)が出土しており、時期は17世紀後半〜18世紀前半と考えられる。

(3) 第3期 布地業 (第73図・第74図)

3期は、布地業を確認した。布地業は、幅90cmで途中、攪乱を受けるものの、長さ約4.5mを確認した。15〜20cmの掘込みの中に3cm〜拳大の礫を敷き詰めた基礎構造で土堀等の基礎構造と考えられる。遺物は、加治木・始良系陶器碗、苗代川系陶器播鉢・甕、多量の棧瓦が出土した。多量に出土した棧瓦に関しては、この付近にあった建物か土堀に伴うものと考えられる。時期は18世紀後半〜19世紀と考えられる。

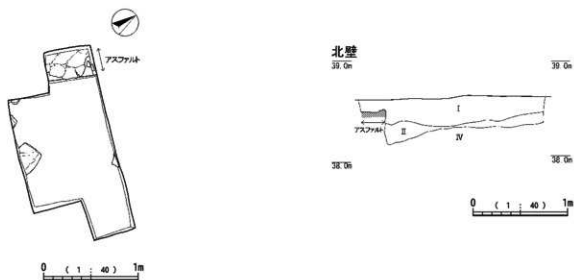
(4) 第4期 堡塁 (第74図)

4期は、堡塁を確認した。堡塁は高さ50cm以上あり、北側の谷に対し、平坦面3の周囲を囲むように築かれている。



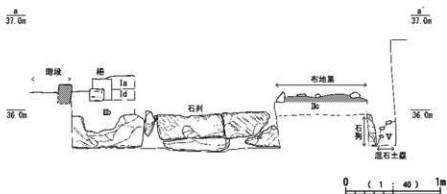
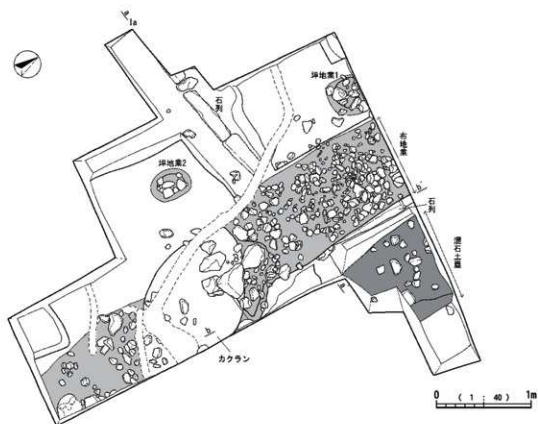
層	色(記号)	色名	特徴
I	10YR3/1	黒褐色土	硬食土
II	10YR4/3	にぶい黄褐色土	現代の陶磁器、ヒンを含む。現代の擾乱および造成土。現代
III	10YR2/1	褐色土	相互状に堆積する造成土。現代の擾乱および造成土。現代
IV	10YR6/2	灰黄褐色土	きめの細かい砂層。上面は硬くしまる。2~5cmの小礫~人頭大の礫を含む。埋山層(IV表土)3TV層と同じ

第71図 大手口跡2トレンチ平面図・土層断面図



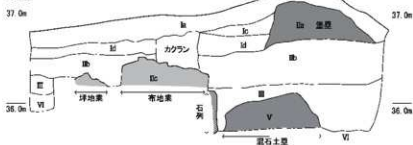
層	色(記号)	色名	特徴
I	10YR3/1	黒褐色土	硬食土
II	10YR5/3	にぶい黄褐色土	造成土
IV	10YR6/2	灰黄褐色土	きめの細かい砂層。2~5cmの小礫~人頭大の礫を含む。上面は硬くしまる。3TV層と同じ

第72図 大手口跡4トレンチ平面図・土層断面図

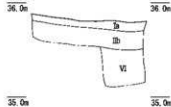


第73図 大手口跡3トレンチ平面図・土層断面図

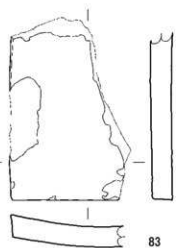
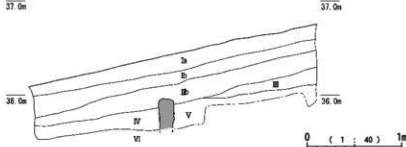
北壁



南壁

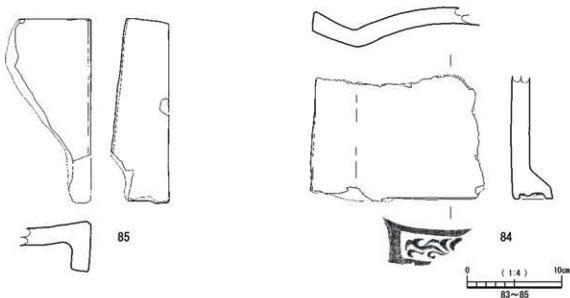


西壁



層	色(記号)	色名	特徴
I a	10YR3/1	黒褐色土	黄粘土、表面に瓦が多量に落ちている
I b	10YR2/2	黒褐色土	灰化物を含む。2~5cmの小礫をしまつめる。地蔵状、現代
I c	10YR4/1	灰黄褐色土	きめの細かい砂層。2~5cmの小礫を含む。瓦出土。現代
I d	10YR4/2	灰黄褐色土	きめの細かい砂層。2~5cmの小礫を含む。瓦出土。現代
II a	10YR4/4	褐色土	きめの細かい砂層。2~5cmの小礫を含む。瓦出土。西園戦争時の壁型か?
II b	10YR4/3	にじみ黄褐色土	きめの細かい砂層。2~5cmの小礫を含む。瓦、陶磁器出土(すり鉢、龍門白文瓦土)II c後半以降。布地層を埋める層。近世
II c	10YR4/1	灰黄褐色土	きめの細かい砂層。2~5cmの小礫を含む。布地層の下層でI期の石列を埋める。近世
III	10YR4/3	にじみ黄褐色土	きめの細かい砂層。2~5cmの小礫を含む。瓦、陶磁器出土。17c後半~18c前半か。I期の石列を埋め、II期の埴地層の面を造成する層。近世
IV	10YR4/3	にじみ黄褐色土	埴層と似たが上面が固くしる。瓦、陶磁器出土。I期の石列を埋め、II期の埴地層の面を造成する層。近世
V	10YR4/2	灰黄褐色土	きめの細かい砂と多量の2~5cmの小礫からなる層。固くしる。瓦石土層。近世
VI	10YR6/2	灰黄褐色土	きめの細かい砂層。上面は固くしる。2~5cmの小礫~人頭大の礫を含む。城山層。近世

第74図 大手口跡3トレンチ土層断面図



第75図 大手口跡3トレンチ出土遺物(1)

出土遺物 (第75図～第77図86～114)

83～85は、I層出土遺物である。83は、大型の平瓦である。凹面周縁は面取りされている。凸面には縦方向のナデ調整。84は、鹿兒島式軒棧瓦 (B-020) である。丸部は欠損している。焼成は良好。瓦当上端を面取りする。瓦当の接合は顎貼付け。貼付け部分はキザミを入れてつきやすくしている。凸面はヨコナデ調整。85は、袖瓦である。凹面周辺部は面取りされている。

86～103はII層出土遺物である。布基礎の段階にあったと考えられる建物に伴うものと考えられる。86～90は陶磁器である。86は、陶器皿である。産地は不明である。見込み蛇の目軸刺ぎ。釉薬は、内面のみで外面は露胎。刷毛状の工具で横方向に塗られたようである。高台は、焼成前に一部を蒲針状にしており、何かにはめて使用すると考えられる。87は、加治木・始良系の陶器碗である。赤褐色系胎土に白化粧土と透明釉を重ね掛けし、内面見込みは蛇の目軸刺ぎされる。高台内側中央は円形に窪む。18世紀後半以降。88は苗代川系の陶器鉢である。89は、苗代川系の陶器播鉢である。内面の摺目は金属目で、19世紀。90は、堅野系の白麤摩と呼ばれる白色陶胎の脚付皿である。燈明台として使用したのか、口縁部付近が黒色化している。口縁部内側は軸刺ぎされており、本来は蓋が伴う可能性がある。18世紀～19世紀。91は、連珠三巴文軒丸瓦である (分類不明)。連珠と巴文は高く立体的に表現されており、18世紀後半以降のものと考えられる。瓦当周縁部は広い。92は、大坂式谷軒棧瓦である (A種)。瓦当上端は面取り。瓦当は瓦当貼付けで、凸面接合部には強い接合ナデ。建物の端に用いられる谷瓦に瓦当がついたものである。93は、大坂式軒棧瓦 (A種) である。焼成は良好で胎土はほかの瓦に比べて明るい。大阪府等県外で生産された可能性がある。瓦当上面は面取りされている。瓦当貼付け。94は、鹿兒島式軒棧瓦 (B-020) である。瓦当上面は面取りする。瓦当貼付け。瓦当右周縁に口に竇の刻印(刻印055)がある。95は、鹿兒島式軒棧瓦 (B-020) である。瓦当上面は面取りする。瓦当貼付けで、凸面接合部には強い接合ナデ。96は、丸瓦である。凹面には布袋痕が残る。凸面は縦方向のナデ調整。凸面に刻印があるが、判断できない。97は、棧瓦である。頭部側面に長の刻印(刻印059)がある。98は、棧瓦である。頭部側面に丸に谷の刻印(刻印069)がある。凹面周縁部は面取りされる。雲母子が目立つ。99は、棧瓦である。凹面周縁は面取りされる。凹面はヨコナデ調整。100は、棧瓦である。凹面周縁は面取りされる。凹面はヨコナデ調整。雲母子が目立つ。焼成前に直径3cmの釘孔が空けられる。101は、大型の棧瓦である。凹面周縁部は面取りされている。102は、雨どいの受けである。建物に伴っていた可能性がある。103は角釘である。

104・105は、III層出土遺物である。III層は、布地業を作る前段階の埋土である。104は、苗代川系の陶器播鉢。18世紀。摺目は細かい。105は平瓦。凹面周縁部は面取りされている。凸面は縦方向のケズリがある。

106～114はIV層の出土遺物である。106は中国の白磁碗である。玉縁口縁。大宰府福年白磁碗IV類である。11世紀後半～12世紀前半。107は、中国龍泉窯系青磁碗である。青磁碗II類である。13世紀前後～前半。108は中国龍泉窯系青磁碗である。大宰府福年青磁碗III類である。13世紀中頃～後半。109は、中国漳州窯系の青花碗である。16世紀末～17世紀前半。110は、丸瓦である。凸面に○に金の刻印(刻印050)がある。凹面には布袋痕が残る。111は、平瓦である。凹面周縁は面取りされる。凸面には、コピキBの痕跡が残る。112は鬼瓦の一部である。113は、鬼瓦である。鬼ではなく、桃の花が彫られている。114は、小型の丸瓦である。凹面には布袋痕が残る。頭部にかけて薄くなる。

(5) 5トレンチ

概要 平坦面1に設置した。標高約29.3mで地山層であるIV層を確認した。1トレンチと同じく昭和50年の砂防ダム建設や給水塔のVII設置により削平を受けており、遺構は確認できなかった。

ここでは、調査区周辺の遺構についても述べる。

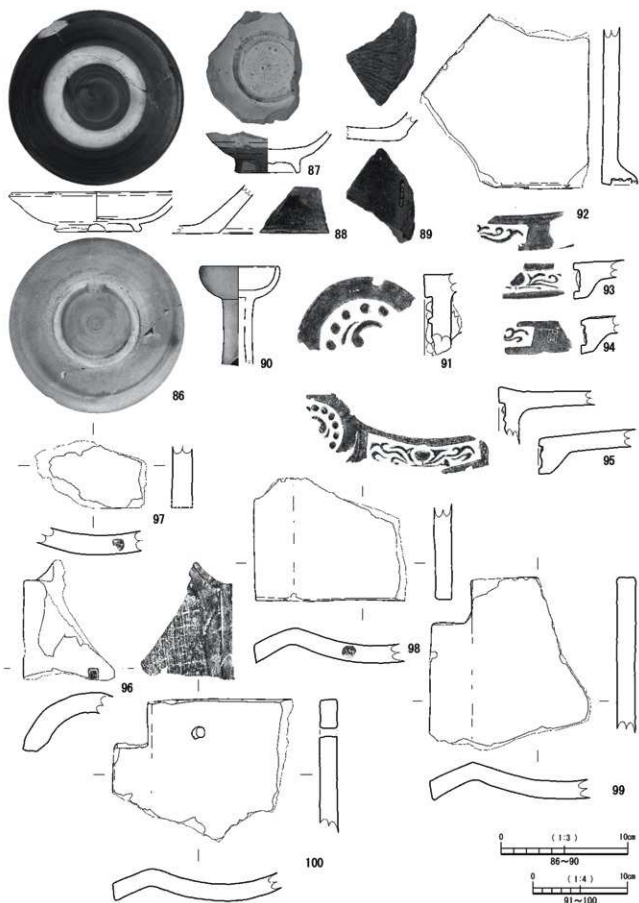
(6) 階段 (第68図)

調査区の隣にある遊歩道は、各段に4つの石材が並べられている。そのうち、中央の2石はコンクリート、左右両端の石材は溶結凝灰岩である。これら両端の2石の加工は3トレンチ出土の石列と似ていることから、近世のものと考えられる。また、3トレンチでは、石列が階段下まで潜っていることから、階段は近世の段階ではもっと狭かったと考えられる。そのため、階段は本来各段2石の幅であり、それが近代以降に4石に広げられた可能性がある。

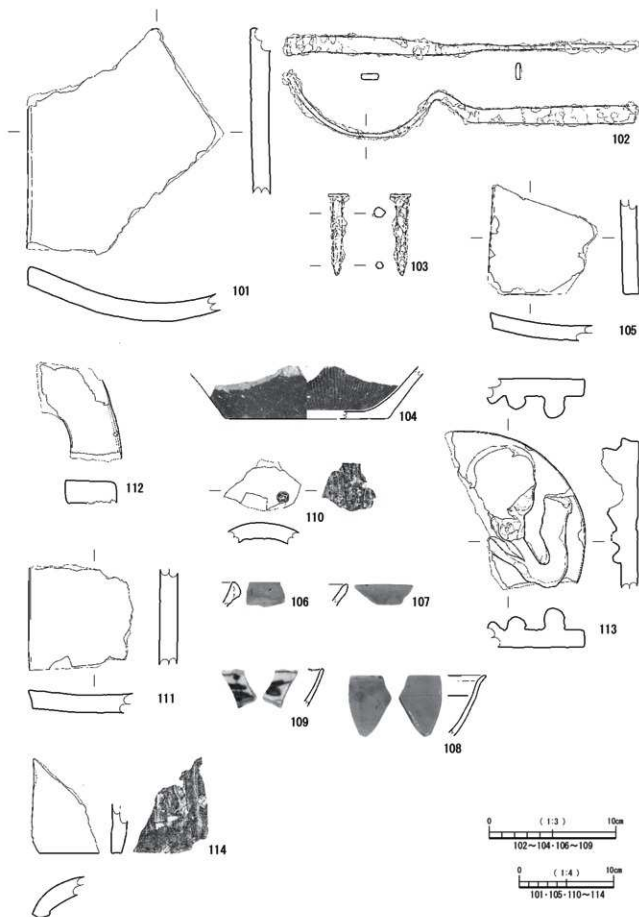
(7) 排水溝

階段の端には、排水溝が設けられている。この排水溝は、底石と側壁が溶結凝灰岩製の石組みの閉塞排水溝である。石材はそれぞれ50～60cm四方で、厚さは約20cmである。この排水溝は、鶴丸城跡保全整備事業の鹿兒島(本丸)城跡、御楼門枳形内の発掘調査で確認された排水溝(鹿兒島県立埋蔵文化財センター2020)と規模・調整が類似していることから、近世のものであると考えられる。

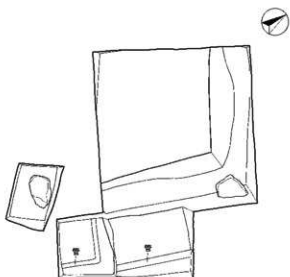
階段と排水溝は、城山展望台付近まで続いている。排水溝は一部セメントに置き換えられているが、現在でも大半の箇所が機能している。江戸時代の道が拡張や改変を経ながらも遊歩道として現在も利用されている。



第76図 大手口跡3トレンチ出土遺物(2)



第77図 大手口跡3トレンチ出土遺物(3)



0 (1 : 40) 1m

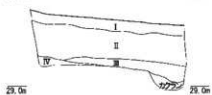
西壁

30.0m



南壁

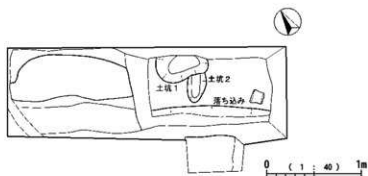
30.0m



0 (1 : 40) 1m

層	色(記号)	色名	特徴
I	10YR3/2	黄褐色土	腐食土
II	10YR5/3	にじい黄褐色土	造成土、現代
III	10YR2/1	黒色土	造成土、現代
IV	10YR6/2	灰黄褐色土	まめの殻かいかけ層、2-5cmの小礫に人頭大の礫を含む。3 TVI層と同じ

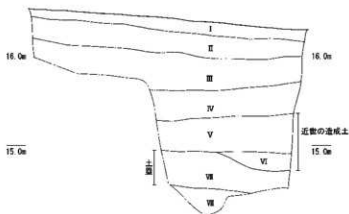
第78図 大手口跡5トレンチ平面図・土層断面図



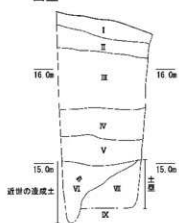
東壁



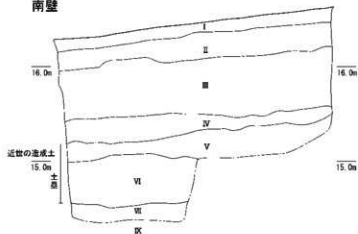
北壁



西壁



南壁



層	色(記号)	色名	
I	10YR2/3	黒褐色土	炭食土、現代
II	10YR4/3	にがい黄褐色土	遺成土、現代
III	10YR3/2	黒褐色土	灰土、ガラス片、プラスチック片が多数に混じる、現代
IV	10YR4/3	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層、3-5cmの小礫を含む、瓦、陶磁器が出土、近世の遺成土
V	10YR3/3	暗褐色土	きめの細かい砂、0.5-1cmの白色砂粒、3-5cmの軽石を含む、瓦、陶磁器が出土、近世の遺成土
VI	10YR4/4	褐色土	きめの細かい砂層、しまり強い、0.5-1cmの白色砂粒、3-5cmの軽石を含む、陶磁器(肥前、染付等)が出土、近世の遺成土(土壁を築いた層)
VII	10YR4/3	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層、0.5-1cmの白色砂粒を含む、3-5cmの軽石を含む、散在状の埴輪、土壁
VIII	10YR3/4	暗褐色土	きめの細かい砂層、0.5-1cmの白色砂粒を含む、3-5cmの軽石を含む、陶磁器(豊前、鍋島系染付)、半世
IX	10YR3/4	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層、3-5cmの軽石、小礫を含む、上面は固くしめる、半世

第79図 南泉院跡トレンチ平面図・土層断面図

8 鹿児島城跡（南泉院）（第79～第81図）

天保14（1843）年「天保14年城下絵図」（第11図）には、大手口にあったと考えられる「大番」の下、南泉院跡の横に門が描かれている。今回の発掘調査は、その門（大手門か）の確認のための発掘調査を行った。

概要 調査区南側には、大手口に向かう道路が通っているが、一部が鍵型に曲がっている。この地点が絵図に描かれた門にあたる可能性があり、門遺構の確認のための発掘調査を行うこととした。ただし、鍵型に曲がった部分は道路になっており、隣接する現在の照國神社境内を発掘調査した。現在の照國神社の境内には、近世に大雄山仏日寺南泉院が建っていたため、調査地点名は南泉院とした。

遺構 中世の土坑2基、近世の土塁1基を確認した。

（1）中世 土坑2基（第79図）

地山面であるIX層上面で土坑2基を確認した。土坑1は、長軸60cm、短軸28cm、深さ35cmを測る。土坑2は、長軸32cm、短軸20cm、深さ20cmを測る。土坑2からは小片のため図化できなかつたが、16世紀代の景徳鎮窯系の青花が出土しており、中世の遺構と考えられる。

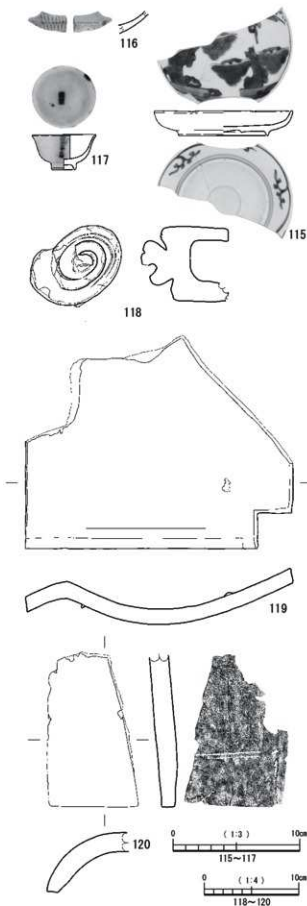
（2）近世 土塁（第79図）

IX層上面には、盛土（VII層）と切り土からなる土塁が築かれている。土塁は、平面調査では確認できず、土層断面の観察の際に確認した。地山面であるIX層を削平する切り土部分（落ち込み）は現在の照國神社から大手口方面に抜ける道路に向かって傾斜していることから、本来、現在の道路部分は低くなっていたと考えられる。絵図（第11図）では山が迫っているように描かれており、道路部分を両側から山と土塁が迫る狭道として、防御機能を高めていたと考えられる。

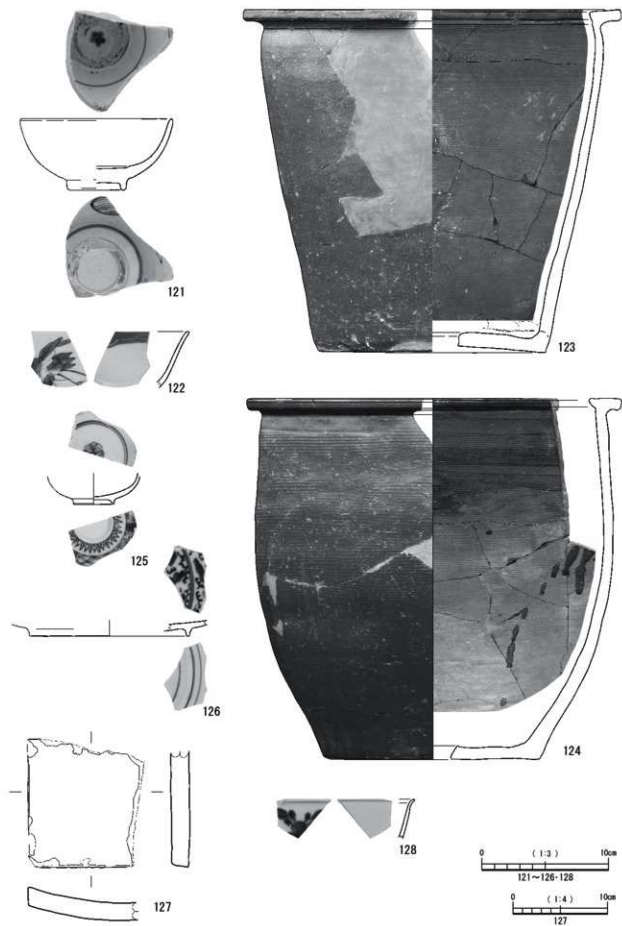
出土遺物（第80図・第81図 115～128）

115～120はI～IV層の近代以降の造成土の出土遺物である。115～117は陶磁器。115は、有田の色絵磁器の皿。内面には松に鶴が描かれる。高台内側は蛇の目軸刺ぎされる。18世紀第4四半期～19世紀初頭。116は薩摩磁器の碗である。外面は唐文が描かれる。117は、磁器小坏内面見込みには寶星、外面には本坊合名會社（現在の本坊酒造）醸と書かれている。儀礼等で用いたものか。118～120は瓦である。118は、鬼瓦の一部である。近代以降のものと考えられる。119は、プレス式の棧瓦である。頭部が薄くなる。近代以降である。120は、丸瓦である。裏面に布袋痕はない。

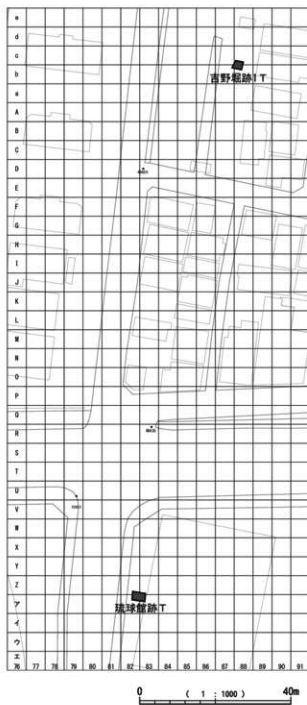
121～124はV層出土遺物で、すべて陶磁器である。近世の造成土と考えられる。121は、肥前佐佐見の磁器碗である。くらわんか碗と呼ばれる丸碗である。見込みは軸刺ぎされ、中央に五芒星のコンニャク印判。18世紀後半。122は、肥前の磁器端反碗である。外面には鶴が描かれる。1820～1860年。123・124は苗代川系の陶器鉢で



第80図 南泉院跡トレンチ出土遺物（1）



第81図 南泉院跡トレンチ出土遺物(2)



第82図 吉野堀跡・琉球館跡トレンチ配置図

ある。内面にヘラ状工具による細かい横方向の調整が入る。旋軸は、鉄軸が外面全体と内面井底部付近まで雑にかけられる。底部は穴が開いており、植木鉢として使用されたと考えられる。19世紀。

125は、VI層出土の陶磁器である。125は、肥前有田の磁器小碗である。外面放射状の連弁文、内面に虫文が描かれる。1770～1810年。

126～128はVII層（土壘）出土遺物である。126は、肥前有田の磁器皿である。内面に唐草文が描かれる。高台畳付きは軸割ぎされる。18世紀前半。127は、平瓦である。凹面周縁は面取りされている。128は、中国福建省の磁器端反碗か。

地中レーダー探査

照国神社境内では、発掘調査の他、城城南側の堀の確認を目的として、令和2年度に地中レーダー探査を行った。探査は、絵図（第14図）と現在地の比較から、現在でも排水溝が通っている範囲で行うこととした。

調査の結果、深度1.5mの地点で、調査区北側で堀の可能性のある異常反応を確認した（第VI章）。

9 琉球館跡（第82図～第85図）

鹿児島城北限である吉野堀（第13図）の確認のための発掘調査である。当初、吉野堀は、現在の県民交流センター北側の道路の下にあると想定されていた。吉野堀北岸の痕跡の一部が道路北側に広がっていた場合、道路北側のどこかで痕跡が確認できる可能性を考え、吉野堀の北岸の探知と調査地点の絞り込みを目的として、調査可能な地点（鹿児島市立長田中学校と高野山最大乗院境内、周辺道路）において地中レーダー探査を行った（第VI章）。

概要 長田中学校敷地内では、探査の結果、現地表面から1.7mの深度において、探査地点北側に幅10m以上の直線的な土壌の変化点と想定される異常反応が感知された。この結果を受けて、専門家検討会議で検討したところ、異常反応が確認された場所は、吉野堀の南限で、吉野堀は想定よりも北側にある可能性が高いとして、異常反応が把握された地点の周辺を調査する方針が示された。調査地点については、関係機関との協議の結果、異常反応がでた地点よりも南側の調査が可能な範囲を発掘調査地点とすることとした。

調査区一帯は、周知の埋蔵文化財包蔵地「琉球館跡」になっているため、琉球館跡として報告する。

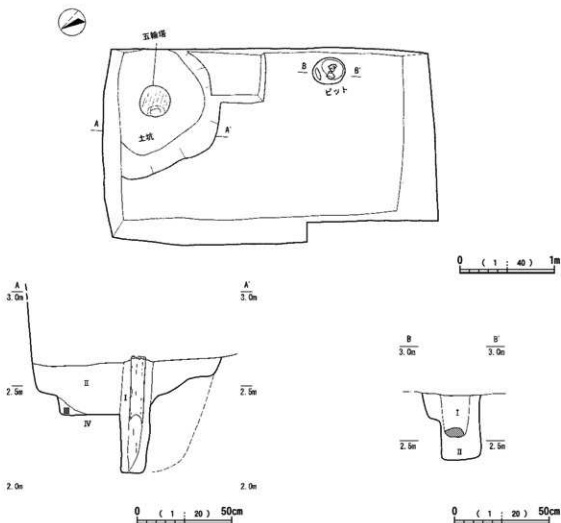
遺構 調査の結果、中世の土坑1基、ビット1基、近世の溝状遺構1列を確認した。

（1）中世 土坑1基、ビット1基（第83図・第84図）

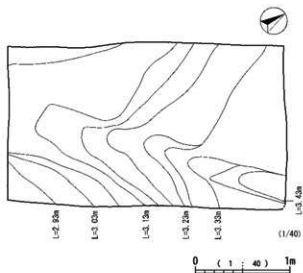
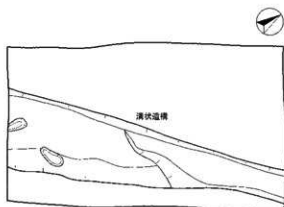
中世の遺構面（VI層上面）を標高約2.8mで確認した。土坑は、長軸140cm、短軸110cm、深さ56cmを図る。土坑中央部では、五輪塔水輪（131）が出土した。ビットは、長軸36cm、短軸27cm、深さ70cmを測る。遺物は、白磁（129）が出土した。

（2）近世 溝状遺構（第83図・第84図）

近世は、VI層に盛土で造成しており、3面の造成面を確認した。VI層の造成の際には、土坑に杭を差し込みその上に造成土を入れている。沈下防止などの工夫であると考えられる。III層中面では、溝状遺構を確認



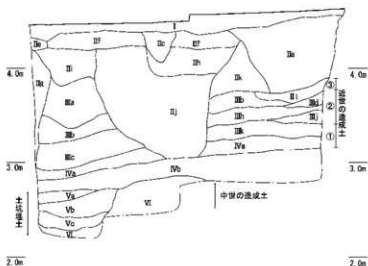
層	色 (記号)	色名	特徴
I	10YR6/1	純灰色土	粘性強いシルト層。1~3cmの礫を少量含む
II	10YR6/2	灰黄褐色土	粘性強いシルト層。1~3cmの礫を少量含む。上面は硬くしまっていた。土状の礫土
III	10YR5/6	黄褐色土	1~2cmの小礫まじりの砂層。粘性層残層
IV	10YR5/2	灰黄褐色土	粘性強い、やや粒の粗い砂層。1~5cmの礫石、小礫含む。鉄分の粒が散りに入る



第83図 琉球館跡トレンチ平面図・ピット土層断面図

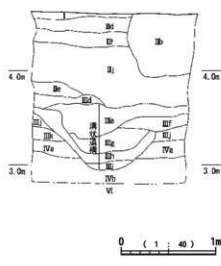
東壁

5.0m



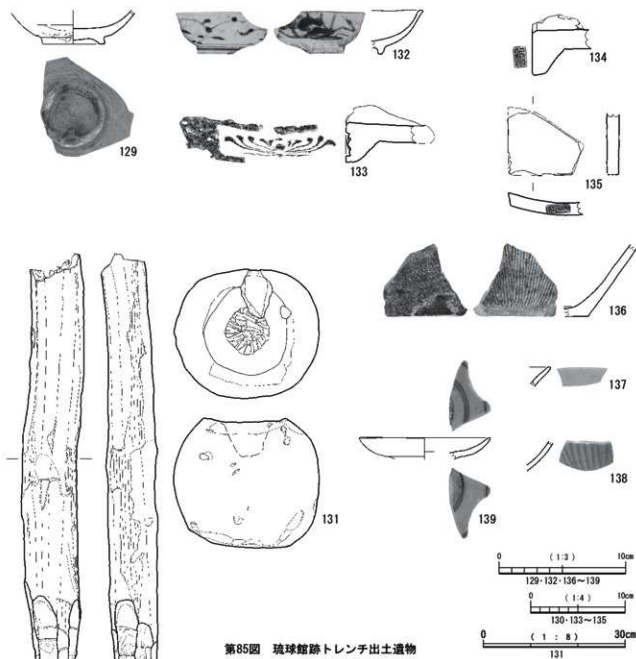
南壁

5.0m



層	色 (記号)	色名	特徴
I	10YR3/2	黒褐色土	腐食土
IIa	10YR3/4	緑褐色土	0.5~1cmの黄褐色パミスを含む。1~5cmの礫を含む。現代埋没。
IIb	10YR4/2	灰黄褐色土	固くしまる。1~5cmの礫を含む。配管のための埋没。現代
IIc	10YR3/2	黒褐色土	固くしまる。1~6cmの礫を含む。配管のための埋没。現代
IId	10YR5/2	灰黄褐色土	1~5cmの礫が選じ。旧表土のアスファルトを埋めている層
IIe	10YR3/1	黒褐色土	固くしまる。0.5~1cmの黄褐色パミスを含む。1~5cmの礫を含む。II層と地面の高さを合わせるために入れた層。現代
IIf	10YR5/3	にがい黄褐色土	固くしまったシラスの造成土。1~5cmの礫を含む。上面には旧表土のアスファルトがのる。現代
IIg	10YR4/1	純灰色土	固くしまったシラスの造成土。1~5cmの礫を含む。上面には旧表土のアスファルトがのる。向くに板瓦状に堆積。現代の埋没。現代
IIh	10YR5/4	にがい黄褐色土	砂質土(1~5cmの礫を含む)と灰黄褐色土(10YR5/2)のシルト層が選じられる。近代の溝か?現代
IIi	10YR4/1	純灰色土	熟土層。多量の焼けた瓦や緑灰岩の割れた石片を含む。戦後の火災の片付け層を利用した造成土。現代
IIj	10YR3/2	黒褐色土	熟土層。多量の焼けた瓦や緑灰岩の割れた石片を含む。戦後の火災の片付け層を利用した造成土。現代
IIk	10YR5/2	灰黄褐色土	II層と同じだがやや明るく炭化物は少ない。1~5cmの礫を含む。戦後の火災の片付け層を利用した造成土。現代
IIl	10YR2/1	黒褐色土	1~5cmの礫を含む。炭化物を少量含む。戦後の火災の片付け層を利用した造成土。現代
IIIa	10YR4/3	にがい黄褐色土	0.5~1cmの白色パミス。鉄分を含む。1~5cmの礫を含む。近世の造成土
IIIb	10YR4/2	灰黄褐色土	IIIa層と似る。IIIa層より固く崩り易く鉄分を多く含む。近世の造成土
IIIc	10YR4/2	灰黄褐色土	IIIb層と似るが、純灰色土(10YR4/5)が選じりタタラしている。近世の造成土
IIId	10YR4/1	純灰色土	0.5~1cmの白色パミス。黄褐色の鉄分を含む。1~5cmの礫を含む。近世の造成土
IIIe	10YR5/6	黒褐色土	1~3cmの小礫からなる層と純灰色土(10YR4/1)の粘土層が選じられる層。近世の水性堆積層(溝の底と埋土)
IIIf	10YR5/3	にがい黄褐色土	きめの粗い砂層。0.5~1cmの白色パミスを含む。1~5cmの小礫を含む。近世の水性堆積層(溝の底と埋土)
IIIg	10YR5/2	灰黄褐色土	きめの粗い砂層。0.5~1cmの白色パミスを含む。1~5cmの小礫を含む。近世の水性堆積層(溝の底と埋土)
IIIh	10YR6/2	灰黄褐色土	粘性強い。1~5cmの礫を含む。近世の水性堆積層(溝の底と埋土)
IIIi	10YR4/2	灰黄褐色土	きめの粗い砂層。1~3cmの小礫を含む。近世の造成土
IIIj	10YR5/3	にがい黄褐色土	やや粘性強い。1~3cmの小礫を含む。近世の造成土
IIIk	10YR4/2	灰黄褐色土	IIIiに似る。1~5cmの礫。鉄分を多く含む。近世の造成土
IIIl	10YR4/1	純灰色土	粘性あり。0.5~1cmの炭化物。鉄分を含む。1~3cmの小礫を含む。近世の造成土
IIIv	10YR4/3	にがい黄褐色土	粘性あり。0.5~1cmの炭化物。鉄分を含む。1~3cmの小礫を含む。近世の造成土
IIIa	10YR4/2	灰黄褐色土	粘性強い砂層。1~5cmの礫を含む。中留の土埋埋土
IIIb	10YR4/1	純灰色土	粘性強い砂層。1~5cmの礫を含む。中留の土埋埋土
IIIc	10YR4/1	純灰色土	黄褐色の鉄分が選じられる層。きめは粗い。中留の土埋埋土
IIIv	10YR4/1	純灰色土	粘性強い。きめの粗い砂層。1~5cmの軽石を含む。湧水層。中留

第84図 琉球館跡トレンチ土層断面図



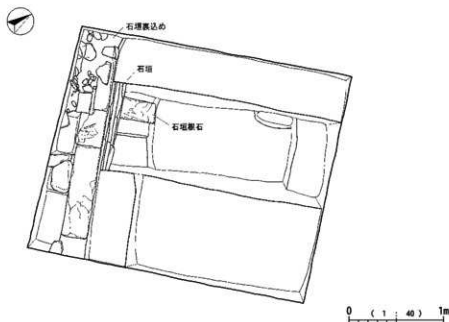
第85図 琉球館跡トレンチ出土遺物

認した。この溝状遺構は、吉野堀があった北側に向かって傾斜している。

出土遺物（第85図129～139）

129～131は遺構内出土遺物である。VI層上面のビットでは、129の中国の白磁碗が出土した。14世紀代と考えられる。土坑からは、130・131が出土した。130は、杭である。下部のみ左回転をしながら成形し、その上部は樹皮を残す。近世に湧水層であるVI層に杭を打ち、その上から造成をしたと考えられる。131は五輪塔水輪である。上部から奉籠孔が彫られる。石材は、白色溶結凝灰岩で、霧島市国分や大隅半島で採取された可能性がある。

132～135は、II層の近代以降の造成土や攪乱出土遺物である。132は、肥前有田の磁器皿である。焼成不良で



第86図 吉野堀跡トレンチ平面図

文様は滲んでいる。1660～1690年。133は、大板式軒棧瓦（A-066）である。鎌棧瓦である。瓦当上端は面取りされる。瓦当は顎貼付け。134は、その他の軒棧瓦である。瓦当中央部には、口に安富の刻印（刻印184）がある。瓦当上面は面取りされる。瓦当は顎貼付け。135は、平瓦である。口に日置板元の刻印（刻印186）がある。近代以降の日置市の日置瓦である。

136は、Ⅲ層（2度目の近世の造成土）から出土した苗代川系の陶器播鉢である。18世紀前半。

137～139は、Ⅳ層（Ⅵ層中世の遺構面を埋めた層）の出土遺物である。137は、中国の白磁碗である。森田編年E群で16世紀。138は、中国龍泉窯系青磁の碗である。上田編年B-Ⅳ類で15世紀後半～16世紀。139は、漳州窯系の碗である。小野分類染付碗C群で16世紀後半頃。

9 鹿兒島城跡（吉野堀）（第82図・第86～第88図）

琉球館跡と同じく、吉野堀（第13図）の確認のための発掘調査である。

概要 高野山最大乗院境内、調査区南側の道路部分の地中レーダー探査を行った。高野山最大乗院周辺道路では、地中ノイズが多く明確な異常反応を確認できなかったが、境内では、2.0mの深度において、探査地点北側に幅10m以上の異常反応直線的な土壌の変化点と想定される異常反応が感知された。この反応は、琉球館跡と同じく吉野堀の南岸の可能性があるため、調査地点については、関係機関との協議の結果、反応がでた地点よりもやや北側の調査が可能な範囲を発掘調査する

こととした。

遺構 近世、もしくは近代の石壇を確認した。また、吉野堀の埋土の可能性のある堆積層を確認した。

（1）近世～近代 吉野溝埋土（第86図・第87図）

発掘調査の結果、地表下約1.8mより下で厚い造成土（Ⅵa～Ⅵc層）を確認した。地中レーダー探査では、この地点は吉野堀の中にあたる可能性があり、地表下2.5mでも近世の造成面が確認できないこと、埋土には瓦が混じることから、明治初期に吉野堀を埋めた際の埋土の可能性はある。

（2）近代（第86図・第87図）

明治12・13年の説教所（最大乗院の前身）にあった池に伴うものと考えられる高さ約132cmの石壇を確認した。石壇と石壇の接合面には黒漆喰が塗られており、石壇の下には桐木が沈められ、桐木が沈まないように桐木下には支石が敷かれていた。また、石壇中央部では、水抜き穴の可能性のある穴が石壇内側から穿孔されていた。

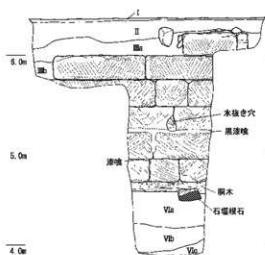
出土遺物（第88図140～149）

140・141はⅡ層の出土瓦である。140は、連珠三巴文軒丸瓦（A-025）である。連珠・巴文も大きく盛り上がっている。雲母子が目立つ近代以降のものである。141は、その他の軒棧瓦（D-046）である。丸部は、密教法具の三貼柱である。真言宗寺院である最大乗院のための特注品であると考えられる。胎土は灰色が強いことから、異外（大阪府等）で生産されたものと考えられる。

142～147はⅣ層出土遺物である。142は、第二次世界

南壁

7.0m

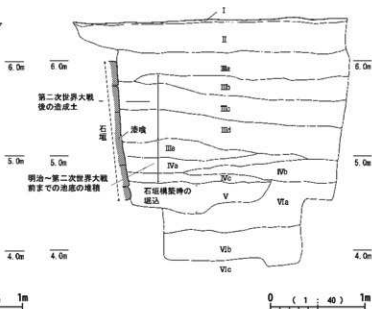


西壁

7.0m

7.0m

7.0m



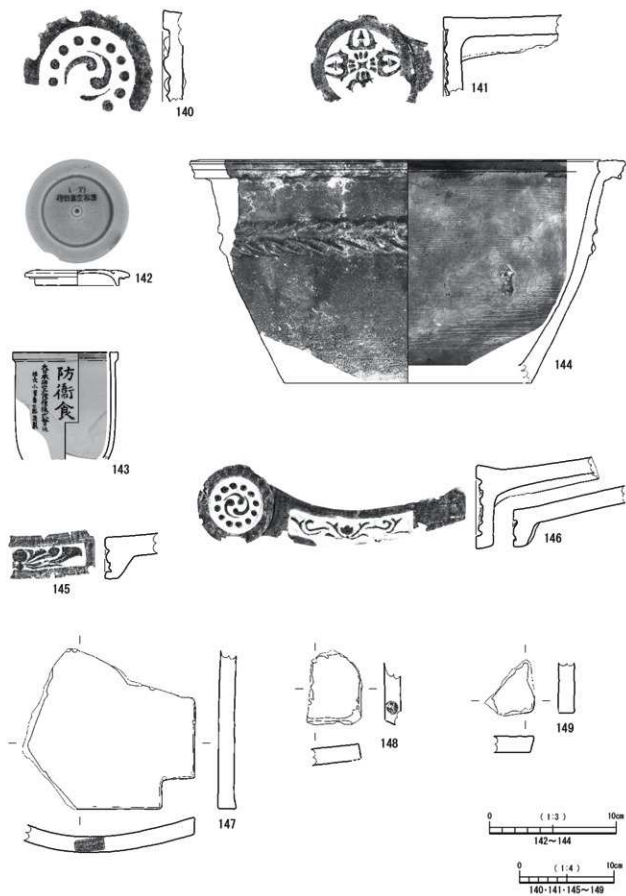
層	色 (正号)	色名	特徴
I	10YR3/2	黒褐色土	灰土
II	10YR4/6	にぶい黄褐色土	灰砂土。3-5cmの礫を含む。現代の造成土
IIIa	10YR4/2	灰黒褐色土	まめの細かい砂層。0.5-1cmの黄褐色鉄分を含む。1-5cmの礫を含む。近代-現代までの陶磁器、瓦、ガラスが出土。戦後の造成土
IIIb	10YR4/2	灰黒褐色土	IIIa層と似るが、固くしめる。戦後の造成土
IIIc	10YR5/2	灰黒褐色土	粗い砂と褐色土(10YR4/4)の鉄分を含む砂層が選り分けられた層。戦後の造成土
IIId	10YR6/2	灰黒褐色土	IIIc層と似るが、粘性が強い。上面では瓦や陶磁器を多く含む。戦後の造成土
IIIe	10YR7/1	黒褐色土	まめの粗い砂層。IVa層由来の粘土、ブロックを含む。戦後の造成土
IVa	10YR4/1	桃灰色土	シルト層。粘性強い。0.5-1cmも鉄分を多く含む。田層から入り込んだ近世-現代までの陶磁器、瓦、ガラス(トリスハイボール瓶出土)。池の埋土
IVb	10YR3/1	黒褐色土	シルト層。粘性強い。鉄分はあまり含まない。田層から取り込んだ近世-現代までの陶磁器、瓦、ガラス(トリスハイボール瓶出土)。池の埋土
IVc	10YR4/2	灰黒褐色土	シルト層。粘性強い。円礫を多く含む。砂層が選ばれる。池の埋土
V	10YR4/1	桃灰色土	砂質土を主体に鉄分を多く含んだ桃褐色土(10YR5/6)砂質土が選ばれる層。吉野堀の埋土か?
Via	10YR4/2	灰黒褐色土	まめの粗い砂層。1cm-数大の円礫を多く含む。瓦、弥生-古墳時代の土器片が出土。吉野堀の埋土か?
Vb	10YR4/2	灰黒褐色土	Via層より固くしめる。吉野堀の埋土か?
Vc	10YR4/1	桃灰色土	Via層と似るが、粘性強い。黒水層。吉野堀の埋土か?

第87図 吉野堀跡トレンチ土層断面図

大戦中の避難貯蔵食糧「防衛食」の容器の蓋である。統制番号に(7)と記載されている。鹿児島県内で同じ番号を持つものは今のところ確認できていない。また、同じ種類の遺物にはふたの開け方に関する文章が記載されているものが多いが、この遺物には記載されていない。143は、第二次世界大戦中の避難貯蔵食糧「防衛食」の容器である。中身が入っていたかどうかは不明。統制番号の記載はなかった。144は、苗代川系の陶器鉢である。内面にヘラ状工具による細かい横方向の調整が入る。施軸は、鉄軸が外面全体と内面底部付近まで雑にかけられる。19世紀以降。145は、鹿児島式軒椀瓦(A種不明)である。瓦当上端を面取りする。瓦当が顎貼付け。146は、

大板式軒椀瓦(A-053)である。焼成は良好で、瓦当も椀はシャープである。大阪府等で生産された可能性がある。瓦当上端を面取りする。瓦当が顎貼付け。147は、椀瓦である。頭部側面に口に泉州谷川中喜の刻印(刻印185)がある。泉州谷とは現在の大阪府岬町の谷川瓦のことである。近代以降近畿地方南部や四国を中心に広域に流通した瓦である。146も同様の胎土であり、おそらくこれも谷川瓦であろう。

148, 149は、VI層(吉野埋土か)出土瓦である。148は平瓦。刻印はあるが不明である。149は、平瓦。どちらも近世のものである。



第88図 吉野堀跡トレンチ出土遺物

第5節 調査の成果

鹿兒島（鶴丸）城本丸跡・二之丸跡周辺の調査

鹿兒島（鶴丸）城の本丸跡、二之丸跡の範囲や重要遺構の残存状況確認のための発掘調査である。

1 本丸跡と城山との境界（第34図～第38図）

城山と鹿兒島城本丸の境界における造成等、整地の痕跡を確認するための調査である。

59トレンチは、近代以降に攪乱を受けており、近世の遺構は確認できなかった。

60トレンチは、明治6（1873）年の「鹿兒島屋形及びその周辺図」と「鹿兒島城本丸殿舎配置図」等（第6図）に記載される衣服や調度品などを納めた「御納戸」の一部である可能性が高い。60トレンチでは、坪地業と敷石遺構、排水溝が確認されたが、建物基礎である坪地業があり、その周辺に排水溝が巡る構造は、「御兵具所跡」などでも確認できることから（鹿兒島県立埋蔵文化財センター2022）、これらは同様の遺構であると考えられる。トレンチの位置から考えると、これらの遺構は、「御納戸長屋」もしくは関連建物の基礎であると考えられる。

遺物は、近世、近代の遺物が混在して確認されており、御納戸と直接関係あるかは判断できない。

この調査区では、城山と鹿兒島城本丸の境界における造成等、整地の痕跡は確認できなかったが、「御納戸長屋」もしくは関連建物の基礎を確認することができた。

2 唐御門跡（第39図～第45図）

本丸内の重要遺構である唐御門の遺構残存状況の確認のための調査を行った。

発掘調査の結果、唐御門の礎石および礎石付近の地下構造を確認した。今回確認した唐御門の礎石は、1石しか確認できていないため、主柱か側柱かは判断できない。また、第七高等学校造士館の礎石（礎石1-1～4-1）は、大型の溶結凝灰岩を使用していることから、唐御門の礎石を再利用した可能性がある。

唐御門の地下構造は、石畳状遺構の上に布地業が貼られ、その上に唐御門の礎石が載るといふ二重の基礎構造であったと考えられる。

また、現在の橋形から黎明館入口に登るスロープは、近代の鉤鉄管理設以降に造られたことを確認した。第二章第3節（2）、（第7図）であるように、宝暦6（1756）年「薩摩国鹿兒島城絵図」等では、現在スロープがある場所には階段が描かれており、本来は階段だったものが近代以降にスロープに改修もされたと考えられる。ここでは、橋形内の変遷・構造解明のための成果も得ることができた。

遺物は、18世紀以降を中心とした遺物が出土している。ただし、本丸跡は近代以降の造成によって遺物・土が二次的に移動しており、この調査区で出土した瓦が唐御門に葺かれていたかは判断できない。

3 本丸大奥跡（第46図～第49図）

絵図（第9図）で本丸と二之丸の間に描かれる堀を確認し、本丸と二之丸の境を明らかにするための調査である。堀は確認できなかったが、堀埋設後に造成されたと考えられる本丸大奥に関連する遺構を確認した。

今回確認された遺構は、絵図（第8図）に描かれた本丸大奥の一部であると考えられる。明治6（1873）年「鹿兒島屋形及びその周辺図」では、本丸大奥の上に道（御茶道通り）が描かれている。今回確認された堀は、本丸大奥と道の境となる堀である可能性がある。

排水溝は、道の側溝であったと考えられる。IVa層は火災層であり、明治6（1873）年の大火か、明治10（1877）年の西南戦争の戦火の火災層である。その後、近代には第七高等学校造士館の際の建物造成の際に、この周辺は盛土造成されたため、遺構が保護されたと考えられる。

発掘調査終了後、発掘調査の成果を受けて追加の地中レーダー探査を行った。その結果と令和2年度の地中レーダー探査の結果を精査したところ、地表下約1.6mの地点で、調査地点より南約2.5m、北側約8.0mの地点で大きな異常反応と土壌の変化点を確認した。この幅は、約16～19mである。この反応は堀である可能性がある。今回の調査は、堀の中である可能性があり、下層確認を行ったV層以下は、堀の埋土を確認していた可能性がある。この堀が埋め立てられた時期については、土坑2からは17世紀代の遺物か出土しないこと、宝暦6（1756）年「監察使問答集上」【鹿兒島県史料集 通昭録】1）では、他の堀についての記載がありながら、この堀についての記載がないことから、18世紀前半である可能性がある。その時期に堀が埋め立てられた後、この場所に本丸大奥が造成されたと考えられる。ただし、「本丸大奥」は、慶長16（1611）年には既に史料にみられることから【鹿兒島県史料 日記雑録（後編）】4-1074）、元の位置からの移動や増設等が考えられる。

4 本丸東堀（第50図～第57図）

本丸跡の東に面する堀の幅の変遷や、絵図に描かれた堀に付随すると想定された土塁等（第9図）の確認を目的とする調査である。

55トレンチ・61トレンチでは、排水溝が確認された。排水溝は、砂地に敷設されており、本丸の東に面する堀の石垣崩壊を防ぐための施設であった可能性が考えられる。石垣の裏込め栗石を少量確認している。

62トレンチでは、明確な遺構は確認できなかったが、地山層（砂層）が堀の東に残存することが判明し、堀が地山層を掘り込んで造られていることが把握できた。

56トレンチでは、遺構は確認できなかったが、御樓門

に関連する瓦(48)が出土した。

57トレンチでは、石垣の下部から胴木を確認し、石垣の設置方法を確認した。

本丸東堀の調査では、全てのトレンチで地山層を確認したことから、現在の堀幅は、築城当初から拡張したかは証明できないが、少なくとも狭まっていなかったことが確認された。宝暦6(1756)年「監察使問答集上」『鹿児島県史料集 通昭録』1)によれば、「南方の堀の入口は1町57間、横幅9間、深さ5尺」とある。現在の石垣天端から東堀の西岸までは、約16mあり、ほぼ記述通りである。また、堀の幅の変遷絵図に描かれた堀に付随すると想定された土塁等については、確認できなかった。

5 二之丸跡(第60図～第63図)

平成28・29年度に鶴丸城跡保全整備事業の際の外御庭跡で確認された堀の延長の有無の確認、及び二之丸の北側境界を確認することを目的とした調査である。また、石垣の積みだしの状況等を確認した。

63トレンチでは、石垣背面で第七高等学校造士館のプール排水のための鉄管および鉄管管理設のための攪乱を確認した。近代に入り、石垣周辺にプールに付帯する鉄管が埋設されたことによって、結果的に石垣の裏側に不安定層が形成されたことになり、石垣の本体に孕みを生じる一つの要因になっているものと考えられる。今回の調査によって得られた成果は、将来の鹿児島城における石垣保全整備に反映できるものと期待される。

なお、R-3'区には、水門が現存する。この水門は、本丸東堀の水量を調整する施設である。第七高等学校造士館のプールの排水は、鉄管を通して本丸跡から42トレンチ(平成28年度発掘調査)、63トレンチを通り、本丸東堀ではなく、直接水門に流れたと考えられる。

6 鹿児島城(二之丸)旧考古資料館地点(第64図～第66図)

調査は、二之丸の南端の境界を確認するために行った。調査地点は、明治6(1873)年「鹿児島島形及びその周辺図」で「御勘定所 宗門方 御代官所 山奉行所」等の施設が記された長屋(第10図)の南端に想定される場所にあたる。

発掘調査では、排水溝や裏込めの残骸と考えられる石材を確認した。排水溝は、東西方向ではなく、南北方向に延びていた。明治5(1872)年藤崎直高が撮映した「鹿児島照國神社」では、右側に「長屋」が写っており(第10図)、長屋は前面に張り出した庇と石垣とその上に石積みの上を設け、前面には、排水溝が写っている。今回確認した排水溝は、長屋前面の排水溝の可能性が高い。また、南北方向に通っていることから、長屋南側ではなく、照國神社側に面した長屋西側の排水溝である可能性が高い。絵図にみられる二之丸南西端にあたる「勘定奉

行所」等の長屋の西端を確認できた可能性がある。平成13・15年度に発掘調査で坪地業が確認されている県立図書館地点(第5表⑤)は、この長屋の北東端である可能性があり、それが正しければ、長屋の範囲を想定できる材料が明らかにできたことになる。

遺物は少数だが白薩摩と呼ばれる白色陶胎の蓋物(72)がみられるなど、雑品が含まれている。また、元禄9(1696)年の大火がここまで及んでいない影響か、本丸跡周辺では少ない17世紀代の陶磁器がみられる。瓦は、本瓦と椀瓦が混じって出土しており、長屋に葺かれた瓦がどのようなものであったかは判断できない。

鹿児島城跡全体の範囲確認のための調査

鹿児島城跡の南側の境界とその周辺遺構の残存状況確認のための発掘調査である。

7 鹿児島城跡(大手口)(第67図～第78図)

今回は、大手口の位置の確定、遺構残存状況を確認するための発掘調査を行った。限定的な調査であったため、遺構の全容は確認できなかったが、3トレンチで大手口跡では、はじめて遺構を確認することができた。

3トレンチの遺構は4時期にわかれる。それぞれの遺構の時期および位置づけについて述べる。

第I期(石列・混石土塁)の遺構に伴うIV層出土遺物は、いずれも石列の埋土から出土したことから、石列と混石土塁があった段階の建物に伴う可能性がある。遺物は、17世紀代の一帯と考えられる。元禄9(1696)年「鹿児島城絵図」や正徳3(1713)年「正徳三年御城下絵図」、宝暦6(1756)年「薩摩国鹿児島城絵図(第11図)」でみられる「侍屋敷」に関連する可能性がある。また、鬼瓦をもつ本瓦葺きの建物があった可能性も指摘できる。ただし、瓦は少ないため、瓦葺きであったとしても軒先だけと考えられる。また、IV層では、中国の輸入陶磁器(106～109)が出土した。これらが大手口にあった建物に伴うものか、中世の城山山頂にあった上山城跡に関連する遺構に伴うものかは、現段階では不明である。

第II期(坪地業)は、概ね17世紀後半～18世紀前半である。I期と同じく、元禄9(1696)年「鹿児島城絵図」や正徳3(1713)年「正徳三年御城下絵図」、宝暦6(1756)年「薩摩国鹿児島城絵図(第11図)」でみられる「侍屋敷」に関連する可能性がある。

第III期(布地業)は、I層とII層出土遺物から、概ね19世紀の遺構であると考えられる。天保14(1843)年「天保年間鹿児島城下絵図」の「大番」に関連する遺構の可能性があり、大手口で使われていた陶磁器や建物に葺かれていた瓦の可能性が高い。屋根は、椀瓦葺きの建物だったと考えられる。I層やII層からは、播鉢や甕など調理具や貯蔵具も出土した。番人等は常駐して城山への出

入りを管理した可能性がある。また、90の堅野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の御付皿が出土した。登明皿にまで藩直轄の堅野系の製品が使われるのは、堅野系の窯の最大供給先である鹿兒島城の特徴であると考えられる。

第IV期は、時期が不明である。ただし、大手口には、明治10（1877）年の西南戦争の際に薩軍が立て籠もっており（第II章第3節（6））、第IV期の土塁は、その西南戦争の城山攻防戦の際に薩軍によって築かれた堡塁の可能性がある。

大手口には、時期の違う複数の絵図（第10図）に建物跡が描かれているおり、3トレンチでも複数時期の遺構が確認された。絵図の建物の存在を証明しただけでなく、江戸時代を通じて遺構が維持されていたことも明らかになった。

8 鹿兒島城跡（南泉院）（第79図～第81図）

天保14（1843）年「天保14年城下絵図」（第11図）には、大手口にあったと考えられる「大番」の下、南泉院の横に門が描かれている。今回の発掘調査は、その門（大手口門）の確認のための発掘調査を行った。

VII層上面では、中世の遺構・輸入陶磁器が確認された。中世の輸入陶磁器は、大手口でも確認されていることから、大手口から南泉院にかけて、上山城に関係する何らかの施設があった可能性がある。

発掘調査で確認された土塁（VII層）は、18世紀前半には築かれ、18世紀後～19世紀初頭には埋め戻されていたと考えられる。土塁という防御をわざわざ損なってまで平坦面を造成していることから、宝暦3（1753）の南泉院造営に伴う造成の可能性が高い。土塁を埋めた後の造成土であるV層では、植木鉢が多く出土することから、南泉院の庭としての利用が考えられる。その後、現代まで複数回の造成が行われ、現在に至る。

南泉院では、大手門を確認することはできなかったが、これまで発掘調査が行われてこなかった南泉院跡の土地利用の一端を明らかにできた。

また、地中レーダー探査では、堀の可能性のある直線的な異常反応がみられた。明治36（1903）年の照國神社の境内図では、照國神社境内に「濠」が描かれており（第12図）、明治5（1872）年藤崎直高が撮映した「鹿兒島照國神社」では、写真左下に土塁らしきものが写っている（第10図）。この反応は、鹿兒島城跡南側の堀の可能性が高い。絵図や写真（第10図・第14図）に描かれた城域南側の堀を確認できた可能性がある。

9 琉球館跡（第82図～第85図）

鹿兒島城北限である吉野堀（第13図）の確認のための発掘調査である。

今回の調査では、吉野堀は確認できなかった。地中レ

ーダー探査の結果から、吉野堀は調査区北側に推定される。

遺構では、中世の土坑とピットを確認した。『三因名勝図会』（第12図）では、鹿兒島城築城時に少なくとも4つの寺院が城内から移転されたことが記されている。墓塔などに用いられる五輪塔水輪が出土したこと、輸入陶磁器を伴っていることから、鹿兒島城築城時に移転した寺院のいずれかに関連する遺構の可能性が高い。

近世の遺構に関しては、絵図の吉野堀南側には土塁が描かれている（第12図）。この土塁は、北側に向かって傾斜する。溝状遺構はこの土塁の一部が崩れ、そこに水が流れた跡である可能性がある。

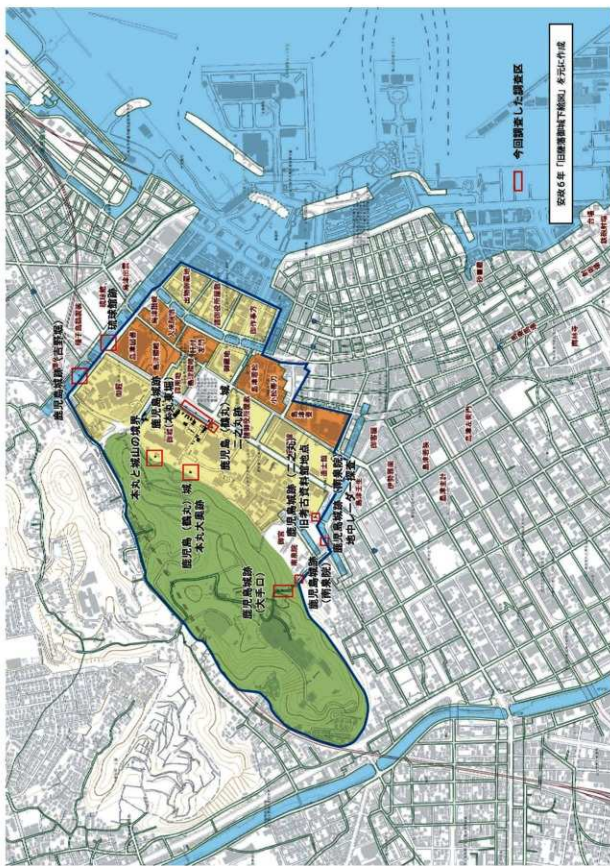
10 鹿兒島城跡（吉野堀）（第82図・第86～第88図）

琉球館跡と同じく、吉野堀（第13図）の確認のための発掘調査である。

高野山最大乗院は、明治11・12（1878・1879）年頃に説教所として復興し、現在に至る。明治17（1884）年「鹿兒島市街略図」（第14図）には既に最大乗院と記載がある。この地図では、最大乗院とその東西の区画は、南北に長くなっており、吉野堀を埋め立てた名残が区画に残っていると考えられる。そのため、この最大乗院は、吉野堀の埋立地に再興されたと考えられる。吉野堀の埋立地上には、島津氏の菩提寺であった玉龍山福昌寺の移転予定地も含まれている。大寺院の復興のためには土地が必要であり、吉野堀の埋め立て地は、都合がよかつたのだろう。吉野堀跡地での大寺院の復興は明治期の都市計画の一部であった可能性がある。

小結 本丸、二之丸の発掘調査では、本丸の御納戸や唐御門、本丸大奥、二之丸南側長屋に関連する遺構が確認され、本丸や二之丸の重要遺構が現在も地下に残存していることが確認された。さらに、複数地点で中世の遺構・遺物が確認され、鹿兒島城跡築城以前の鹿兒島下町に関する情報が蓄積された。

また、城域全体の理解に繋がる調査成果が挙げられた。現在の都市計画図に、今回の発掘調査成果を踏まえて文政4（1821）年「鹿兒島御城下明細絵図」を重ね合わせた図が第89図、安政6（1859）年「旧薩藩御城跡絵図」を重ね合わせた図が第90図である。城域南北の堀や大手口などの城域範囲確認の発掘調査や地中レーダー探査では、大手口の位置が判明するとともに、吉野堀が予想よりも北にある可能性があるなど、堀の位置をより正確に推定することができたこと、本来の城域の範囲が想定できるようになった。また、今回の調査で大災や戦火によって鹿兒島城は大きくその姿を変え、現在の城域は都市化しているが、その地下には多くの遺構が眠っていることが確認できた。



第90図 現在の都市計画と絵図の重ね図②

第6節 過去の本丸跡・二之丸跡の出土遺物

(第91図～第93図150～191)

昭和52年度の二之丸跡、昭和53・54年度の本丸跡の発掘調査では、大量の遺物が出土した。報告書で掲載されたのはその一部であり、平成25年の収蔵庫遺物活用化事業に伴う整理作業やその後の調査・研究で鹿児島城にとって重要な遺物が多く含まれていることが判明した。そのため、今回はその一部を報告する。

150～159は、薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器で、150～153は、鋤手や金擲手とも呼ばれる色絵薩摩である。色絵薩摩は、鹿児島の本薩摩を始め、京薩摩、大阪薩摩、横浜薩摩など各地へ派生し、海外輸出用などに焼かれた。全て被熱しており、釉薬の一部は黒～灰褐色に変色する。150は、苗代川系の瓶である。金箔などを用いた文様が底面を造る。総軸で、畳付は軸刺ぎされる。幕末～明治。151～153は、瓶または壺である。151は金箔などで孔雀の羽と思われる文様が、152・153は孔雀の尾と思われる文様が描かれる。幕末～明治10年頃か。明治6（1873）年の大火か明治10（1877）年の西南戦争の際に被熱した可能性がある。154は、壱野系の三島手と呼ばれる象嵌陶器の壺か瓶である。大型。白化粧土で鋸歯文や重弧文が象嵌される。18世紀～19世紀。155～159は、壱野系の鉄絵で幾何学文様などを描いた宋胡録写である。全て18世紀～19世紀。155は、小型の瓶もしくは急須か。外面には蛸唐草などが描かれる。156は、小型の瓶か香炉か。総軸。157～159は、大型の鉢である。植木鉢か。157は、脚がつく。脚の裏側、底面は露胎。158は、獣面と思われる脚が付く。畳付から高台内面は露胎。159は、大型で外面は複数の区画に分けられ、区画ごとに異なる文様が描かれる。総軸。

160～168は、輸入陶磁器である。160～166は、中国景德鎮窯系の青花である。全て総軸。160は、碗である。内面見込みには、龍文が描かれる。161世紀末～17世紀第1四半期。161は、饅頭心の碗で、小野分類染付碗E群である。内面見込みの文様は、龍文か玉取獅子文の一部か。16世紀後半。162は、皿である。内面見込みには、蛸唐草文が描かれる。16世紀中頃～後半。163は、皿である。内面見込みには、七宝唐草文が描かれる。16世紀後半～17世紀初頭。164は、皿である。外面と内面見込みには、草花文が描かれる。16世紀後半。165は、皿である。小野分類染付皿E群である。内面見込みには唐人文、外面胴部に笹文が描かれ、高台内面には「富貴長命」の銘款がある。16世紀後半。166は、皿である。腰折れで口縁部が外販する小野分類染付皿B1群である。16世紀前半～中頃。167・168は、中国漳州窯系青花の大皿である。16世紀末～17世紀前半。167は、口縁部が外側に向かって開く。168は、内面見込みに草花文が描かれ、畳付には砂目が残る。

169～176は、肥前有田の初期伊万里である。口縁部径に比べて高台の径は狭く、高さは低い。色調は灰色がかり、内面に文様があるが、外面に文様はない。総軸で、畳付に砂目が付着するものが多い。169～175は1630～40年代。169は、小碗である。内面見込み唐花が描かれる。170は、碗である。内面見込みには、草花文が描かれる。171は、碗か皿である。内面見込みには、山水文が描かれる。172は、碗である。内面見込みには、葡萄蝶文が描かれる。173・174は、皿である。内面見込みには、草花文が描かれる。175は、皿である。内面見込みには、山水文が描かれる。176は、肥前有田の磁器碗である。内面には荒織文、外面には龍文が描かれる。総軸で、畳付は軸刺ぎされる。東南アジアへの輸出向け用などに焼かれたものである。1655～60年代。177は、肥前有田の初期色絵の碗である。厚手。総軸で、畳付は軸刺ぎされる。1650～1670年代。

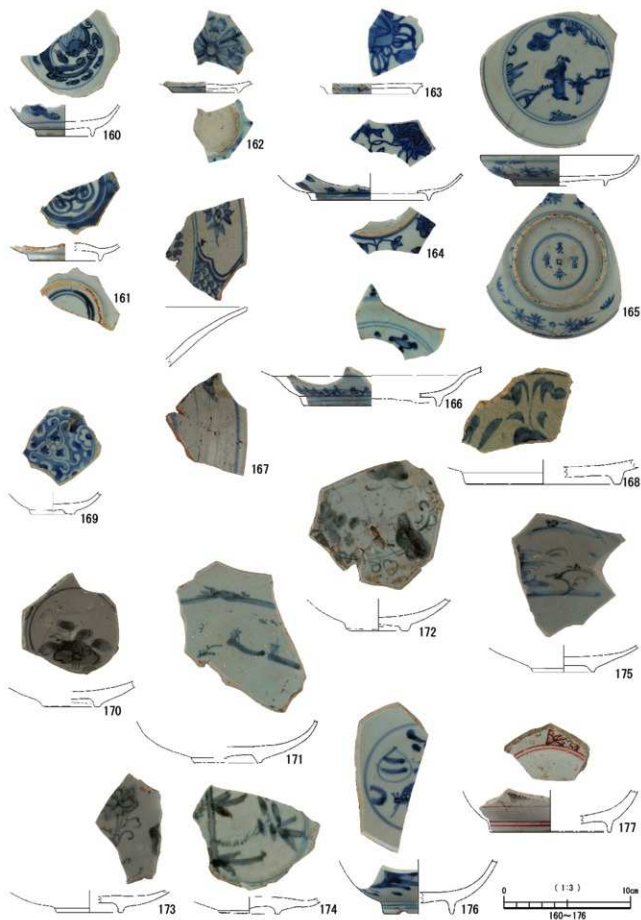
178～181は、色絵磁器である。178・179は、肥前系の端反碗である。178は外面に禪文が、179は内面に四方禪文が描かれる。18世紀後半～幕末。180は、肥前有田の小皿か碗蓋である。18世紀後半～19世紀。内面見込みには五芒星が描かれる。総軸で、畳付は軸刺ぎされる。181は、肥前有田の蓋である。草花文が描かれる。見込みには、「富貴長命」の銘款がある。19世紀。

182～189は、肥前や薩摩の磁器である。182は、肥前有田の壺などの袋物である。外面には草花文が描かれる。17世紀。183は、肥前の鉢である。長崎の長与窯などのものか。内・外面に薄文や唐草紋が描かれる。18世紀前半。184～188は肥前系。184は、碗である。外面には、鋸歯文系の文様などが描かれる。18世紀末～幕末。185は、桜花の碗か鉢である。型作り成形。内面見込みには、扇のようなものが描かれ、縁線に沿って線が描かれる。18世紀末～幕末。186は、鉢である。内面見込みに「寿」が書かれる。18世紀～幕末。187は、皿である。内面見込みに葡萄文などが描かれる。188は、壺である。内面は露胎。高台内面に「大明成化年製」の銘款があり、外面は区画され、それぞれに文様が描かれる。189、190は、薩摩磁器の桜花皿か鉢である。189は、外面に山水文、内面に草花文が描かれる。190は、内面見込みに「寿」、周囲に連続文、外面にも文様がある。191は、瀬戸美濃の小皿である。内面見込みに墨芝文が描かれる。近代。

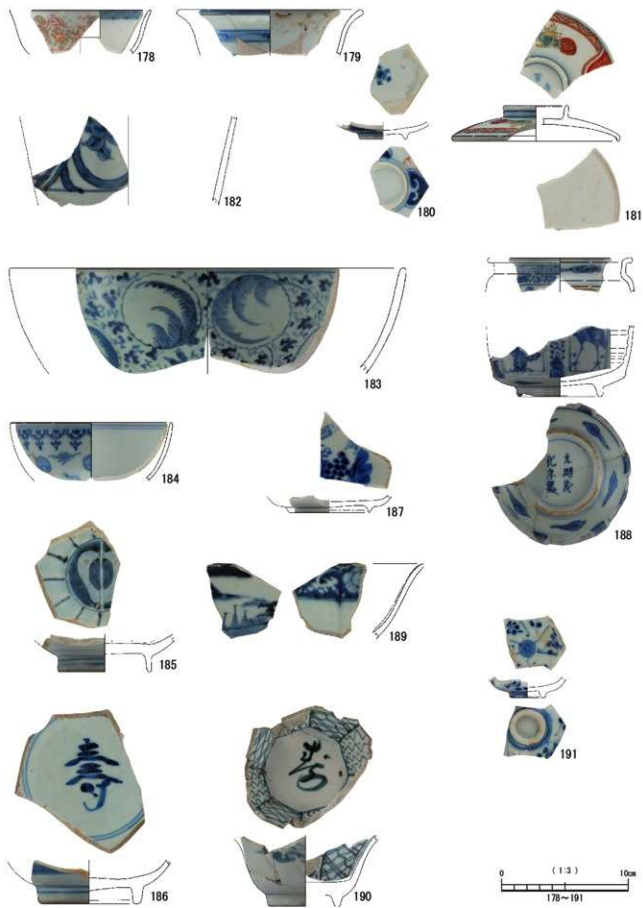
薩摩焼では、これまで発掘調査出土例がなかった色絵薩摩やこれまであまり報告されていない三島手（象嵌陶器）、宋胡録写の器種が確認できた。また、鹿児島景德鎮窯系青花や初期伊万里など、これまでの鹿児島城跡の発掘調査報告書でもあまり報告されてこなかった17世紀代の陶磁器が出土していることが新たに確認できた。



第91図 過去の本丸・二之丸で発掘調査した遺物（1）



第92図 過去の本丸・二之丸で発掘調査した遺物（2）



第93図 過去の本丸・二之丸で発掘調査した遺物（3）

第20表 遺物 1 (陶磁器)

所出地	調査年	地区	種別	器種	形状	トレンツ	形	素材	陶磁器法線 (cm)			色名	記号	産地	年代	備考
									口径	底径	高さ					
38	1	本丸東照	海磁部	瓶	海磁	597	-	-	12	4.7	6	灰白	1098/2	瀬戸青漆	近代	
	2	本丸東照	海磁部	壺	海磁	597	表土	-	-	-	-	緑灰	578/1	薩摩(鹿代川系)	18C-18C	
	5	本丸東照	海磁部	瓶	金付	607	0	カクラン	9.8	3.8	5.2	灰白	7298/1	肥前	18C前半	
	9	東照門	海磁部	瓶	金付	0	0	-	-	-	-	灰白	7298/3	肥前	18C前半	
	10	東照門	海磁部	瓶	金付	0	0	-	-	-	-	灰白	578/1	肥前系	18C後半	
45	11	東照門	海磁部	瓶	金付	0	0	-	-	-	-	灰白	578/1	肥前系	明治・大正	5年産
	12	東照門	海磁部	大皿	海磁	-	0	カクラン	-	-	-	明赤焼	578/5	肥前(武雄)	17C後半-18C前半	
	13	東照門	海磁部	瓶	海磁	-	0	-	-	5.2	-	にじい色焼	578/4	薩摩(加治木・松島系)	18C後半以降	内蔵見込小瓶の群類群
	14	東照門	海磁部	壺	海磁	-	0	-	-	-	-	灰焼	578/2	薩摩(鹿代川系)	18C-19C	
49	26	本丸東照	海磁部	瓶	金付	0-7	1	土粉?	10.6	6.7	2.1	灰白	578/1	豊後国保原	17C前半	
	27	本丸東照	海磁部	瓶	金付	0-7	1	土粉?	12.3	-	-	灰白	7298/3	肥前系	18C後半	
	30	本丸東照	海磁部	瓶	金付	0-7-9	-	源水遺棄土	10	-	4.3	灰白	7298/1	肥前系	1820-1830	
	31	本丸東照	海磁部	蓋物	海磁	0-7-9	-	源水遺棄土	-	-	4.4	灰白	2581/1	肥前系	江戸後期	
	32	本丸東照	海磁部	小瓶	金付	0-7	Va	-	5.3	-	-	灰白	578/1	豊後国保原	16C末-17C前半	
	34	本丸東照	海磁部	瓶	金付	0-7	0	-	-	5.4	-	灰白	48/0	肥前系	18C後半	
	35	本丸東照	海磁部	小瓶	金付	0-7	Vb	-	-	-	-	灰白	2581/1	肥前系	18C末-19C中	
	36	本丸東照	海磁部	小皿	金付	0-7-9	-	源水遺棄土	-	-	-	灰白	2581/1	肥前系	18C初-18C末	
	37	本丸東照	海磁部	瓶	金付	0-7	Vc	カクラン	-	-	-	灰白	578/1	薩摩	19C中頃	
	38	本丸東照	海磁部	瓶	金付	0-7	Va	-	-	-	-	灰白	2581/1	薩摩	19C中頃	
54	40	本丸東照	海磁部	瓶	金付	557	-	-	-	-	5.8	灰白	578/1	豊後国保原	18C後半	肥前 内蔵見込小瓶の群類群
	44	本丸東照	海磁部	瓶	金付	617	-	平底30高直壁	13.4	8.8	4	灰白	2577/1	肥前系	18C末-19C中頃	
	45	本丸東照	海磁部	瓶	経折部群	617	経折トレンツ	-	18.6	10.5	3.2	灰白	2581/1	-	-	内蔵見込小瓶の群類群
63	46	本丸東照	海磁部	徳利	海磁	617	表土	-	-	4.4	-	灰赤	2581/2	薩摩(加治木・松島系)	18C後半以降	内蔵見込小瓶の群類群 肥前系切り
	52	本丸東照	海磁部	瓶	金付	637	1(肥前系)	-	-	9.4	-	灰白	2581/1	肥前系	18C後半	肥前 基台内蔵肥前系群類群
	53	本丸東照	海磁部	小瓶	経折部群	637	1	-	8.6	3.2	4.7	灰白	48/0	-	-	
	54	本丸東照	海磁部	瓶	海磁	637	-	江戸カクラン	-	5	-	にじい色焼	1098/1	薩摩(加治木・松島系)	18C前半	肥前 内蔵見込小瓶の群類群
	55	本丸東照	海磁部	徳利	金付	637	表土	-	-	4.6	-	灰焼	7298/1	薩摩(加治木・松島系)	18C	肥前系切り
	56	本丸東照	海磁部	瓶	海磁	637	-	-	-	-	-	緑	7298/4	薩摩(加治木・松島系)	-	
	57	本丸東照	海磁部	瓶	海磁	637	-	江戸カクラン	-	-	-	灰	578/1	肥前?	近代か?	
	58	本丸東照	海磁部	瓶	海磁	637	表土	-	-	-	-	赤焼	1098/4	薩摩(鹿代川系)	19C	
	59	本丸東照	海磁部	徳利	海磁	637	-	カクラン	-	-	-	にじい色焼	2581/3	薩摩(鹿代川系)	18C前半	
	60	本丸東照	海磁部	徳利	海磁	637	-	カクラン	27.4	-	-	灰焼	578/2	薩摩(鹿代川系)	19C	
66	61	本丸東照	海磁部	瓶	海磁	637	表土	-	27.4	14.6	11.2	灰白	2581/1	瀬戸青漆	近代	
	62	本丸東照	海磁部	土瓶	経折部群	637	-	カクラン	-	9	-	緑灰	7298/1	肥前	19C-近代か?	
	70	本丸東照	海磁部	香炉?	香炉	647	1	-	12.2	-	-	灰白	7298/1	肥前	17C代	
	71	本丸東照	海磁部	小皿	金付	647	-	源水遺	9	3.6	5.9	灰白	577/1	肥前	1640年代前後	
	72	本丸東照	海磁部	蓋物	白色海磁	647	1	-	9	5.6	3.4	灰白	2581/1	薩摩(鹿野系)	18C-19C	肥前
	73	本丸東照	海磁部	小皿	海磁	647	-	表土	-	-	-	灰	7298/1	肥前(武雄)	17C前半	
	74	本丸東照	海磁部	瓶	赤系海磁	647	-	カクラン	-	-	-	淡赤	2581/2	薩摩(加治木・松島系)	17C後半-18C前半	
	76	大平口	海磁部	瓶	海磁	37	0	-	13.9	6.5	3.2	緑	578/5	不明	19C頃?	内蔵見込小瓶の群類群
76	87	大平口	海磁部	瓶	海磁	37	0 b	-	-	4.8	-	にじい色焼	578/4	薩摩(加治木・松島系)	18C後半	内蔵見込小瓶の群類群
	88	大平口	海磁部	瓶	海磁	37	0 b	-	-	-	-	緑	578/6	薩摩(鹿代川系)	-	
	89	大平口	海磁部	徳利	海磁	37	0 b	-	-	-	-	にじい色焼	578/4	薩摩(鹿代川系)	19C	
	90	大平口	海磁部	徳利	白色海磁	37	0 b	-	6.1	-	-	灰白	2581/2	薩摩(鹿野系)	18-19C	
77	104	大平口	海磁部	徳利	海磁	37	0	-	-	12.9	-	にじい色焼	578/4	薩摩(鹿代川系)	18C	
	106	大平口	海磁部	瓶	白磁	37	IV	-	-	-	-	淡赤	2577/3	中国	11C後半-12C前半	
	107	大平口	海磁部	瓶	香炉	37	IV	-	-	-	-	灰白	577/1	豊後系系	13C前半-後半	
	108	大平口	海磁部	瓶	海磁	37	IV	-	-	-	-	灰赤	2577/2	豊後系系	12C-13C	
	109	大平口	海磁部	瓶	金付	37	IV	-	-	-	-	灰白	2581/1	瀬戸系系	16C末-17C前半	基台内蔵肥前系群類群
80	115	東照院	海磁部	瓶	金付	67	0-IV	-	-	-	-	灰白	578/1	肥前(有田)	1875	
	116	東照院	海磁部	瓶	金付	67	0-IV	-	11	7.1	2	灰白	578/1	肥前(有田)	18C-19C頃	
	117	東照院	海磁部	小瓶	金付	67	0-IV	-	5	1.8	2.8	灰白	1098/1	薩摩	18C末-19C前半	

第21表 遺物 2 (陶磁器)

群	群内番号	地区	種別	器種	種類	トレン チ	原	産地	海磁器法量 (g)			色名	記号	産物	年代	備考
									口部	底面	底高					
E1	121	東京府	海磁器	甕	漆付	GT	V		12.1	4.4	5.6	灰白	5Y8/1	肥前 (津佐見)	18C後半	内原克己・大塚の 目録新号
	122	東京府	海磁器	甕	漆付	GT	V		-	-	-	灰白	5Y8/1	肥前	1800-1880	
	123	東京府	海磁器	磁鉢鉢	海磁	GT	V		30	16	27.2	赤黒	2.5Y8/2	薩摩 (豊平川 島)		
	124	東京府	海磁器	磁鉢鉢	海磁	GT	V		29.8	17.2	28.6	明漆黒	2.5Y8/8	薩摩 (豊平川 島)		
	125	東京府	海磁器	小瓶	漆付	GT	VI		-	3.1	-	灰白	5Y8/1	肥前 (有田)	1770-1810	
E5	126	東京府	海磁器	甕	漆付	GT	VI		-	12.6	-	灰白	5Y8/1	肥前 (有田)	18C後半	
	128	東京府	海磁器	甕	青文	GT	VI		-	-	-	灰白	5Y8/1	薩摩	18C	
	129	成徳院跡	海磁器	甕	白磁	VI	PI		-	4.9	-	灰白	7.5Y8/1	小浜	14C代	
	132	成徳院跡	海磁器	甕	漆付	B			-	-	3.5	灰白	7.5Y8/3	肥前 (有田)	1660-1800	
	136	成徳院跡	海磁器	漆鉢	海磁	II			-	-	-	明漆黒	5Y8/8	薩摩 (豊平川 島)	18C前半	
E8	137	成徳院跡	海磁器	甕	白磁	IVb			-	-	-	灰白	5Y8/1	中国	18C	
	138	成徳院跡	海磁器	甕	青磁	IVb			-	-	-	灰白	5Y8/1	薩摩	15C後半- 18C	
	139	成徳院跡	海磁器	甕	青文?	IVa			10.5	-	-	灰白	鳩/0	豊州	16C後半	
	142	吉野館	海磁器	甕	漆付	IV			6.7	底径8.4	1.2	灰白	2.5Y8/1	肥前		
	143	吉野館	海磁器	甕	漆付	IV			8.3	-	-	灰白	7.5Y8/1			
E11	144	吉野館	海磁器	鉢	海磁	IV			34.6	19.6	17.7	にじみ赤	7.5Y4/4	薩摩 (豊平川 島)	19C以降	
	150	本丸	海磁器	瓶	色絵				-	-	-	灰白	N8/0	薩摩 (豊平川 島)	薩摩-明治	絵物
	151	本丸	海磁器	瓶小壺	色絵				-	-	-	灰白	N8/0	薩摩 (豊平川 島)	薩摩-明治10 年頃	
	152	本丸	海磁器	瓶小壺	色絵				-	-	-	灰白	N8/0	薩摩	薩摩-明治10 年頃	
	153	本丸	海磁器	瓶小壺	色絵				-	-	-	灰白	N8/0	薩摩	薩摩-明治10 年頃	
E12	154	本丸	海磁器	瓶小壺	二色半(漆 敷)				-	14.4	-	灰青	2.5Y7/2	薩摩 (豊平系)	18C-19C	
	155	本丸	海磁器	小瓶の急須か	茶漆研写				-	9.9	-	灰白	10Y8/1	薩摩 (豊平系)	18C-19C	
	156	二之丸	海磁器	瓶小壺評小	茶漆研写	C-G- 8-10?		大塚遺物	-	6.8	-	灰白	10Y8/1	薩摩 (豊平系)	18C-19C	絵物
	157	二之丸	海磁器	大型の鉢 磁鉢鉢	茶漆研写	C-G- 8-10?		大塚遺物	-	14.6	-	灰白	2.5Y8/1	薩摩 (豊平系)	18C-19C	
	158	本丸	海磁器	大型の鉢 磁鉢鉢	茶漆研写				-	20.5	-	灰白	2.5Y8/1	薩摩 (豊平系)	18C-19C	
	159	二之丸	海磁器	大型の鉢 磁鉢鉢	茶漆研写	C-G- 8-10?		大塚遺物	34.4	28.4	23.8	灰白	5Y7/1	薩摩 (豊平系)	18C-19C	絵物
	160	二之丸	海磁器	甕	青文	D-23			-	4.6	-	灰白	N8/0	豊後熊本系	16C末- 17C末10年頃	絵物
	161	二之丸	海磁器	甕	青文	A-11			-	5.3	-	灰白	N8/0	豊後熊本系	16C後半- 18C	絵物
	162	本丸	海磁器	甕	青文				-	5.4	-	灰白	N8/0	豊後熊本系	16C中頃- 後半	絵物
	163	二之丸	海磁器	甕	青文	D-22			-	6.8	-	灰白	N8/0	豊後熊本系	16C後半- 17C初頃	絵物
E13	164	二之丸	海磁器	甕	青文	I-22?			-	9.3	-	灰白	N8/0	豊後熊本系	16C後半	絵物
	165	本丸	海磁器	甕	青文				12.8	2.4	7.4	灰白	N8/0	豊後熊本系	16C後半	絵物
	166	二之丸	海磁器	甕	青文	J-23?			-	-	-	灰白	N8/0	豊後熊本系	16C後半-中 頃	絵物
	167	二之丸	海磁器	大皿	青文	G-18?			-	-	-	灰白	5Y8/3 5Y8/4 記号	豊州	16C末- 17C前半	
	168	二之丸	海磁器	大皿	青文	J-7?			-	11.2	-	灰緑 にじみ焼	5Y8/3 5Y8/4 記号	豊州	16C末- 17C前半	
	169	二之丸	海磁器	小瓶	初期伊方系	8-11 16-17?			-	3.4	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	1630-1640	絵物
	170	二之丸	海磁器	甕	初期伊方系	L-11?			-	4.6	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	1630-1640	絵物
	171	二之丸	海磁器	甕小壺	初期伊方系				-	5.4	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	1630-1640	絵物
	172	二之丸	海磁器	甕	初期伊方系	K-10?			-	4.8	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	1630-1640	絵物
	173	二之丸	海磁器	甕	初期伊方系	K-9?			-	5.3	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	1630-1640	絵物
E14	174	二之丸	海磁器	甕	初期伊方系				-	4.4	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	1630-1640	絵物
	175	二之丸	海磁器	甕	初期伊方系	K-4?			-	4.9	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	1630-1640	絵物
	176	二之丸	海磁器	甕	初期伊方系				-	5.2	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	1630-1640	絵物
	177	二之丸	海磁器	甕	色絵	I-21?			-	9.6	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	1630-1670	絵物
	178	本丸	海磁器	甕	色絵				11.1	-	-	灰白	N8/0	肥前	18C後半-幕 末	
	179	二之丸	海磁器	甕	色絵	B-4?			14.8	-	-	灰白	N8/0	肥前	18C後半-幕 末	
	180	本丸	海磁器	小皿小壺型	色絵				-	3.5	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	18C後半- 19C	絵物
	181	二之丸	海磁器	甕	色絵	F-N- 22-24?			13.1	5.1	2.8	灰白	N8/0	肥前 (有田)	19C	
	182	二之丸	海磁器	甕	漆付	O-22?			-	-	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	17C	
	183	二之丸	海磁器	鉢	漆付				31.4	-	-	灰白	N8/0	肥前 (有田)	18C後半	
E15	184	二之丸	海磁器	甕	漆付	E-8?			12.8	-	-	灰白	N8/0	肥前	18C-幕末	
	185	二之丸	海磁器	甕小壺	漆付	K-20?			-	7.4	-	灰白	N8/0	肥前	18C-幕末	
	186	二之丸	海磁器	鉢	漆付				-	7.7	-	灰白	N8/0	肥前	18C-幕末	
	187	二之丸	海磁器	鉢	漆付	I-24?			-	6.4	-	灰白	N8/0	肥前	19C-幕末	
	188	二之丸	海磁器	甕	漆付	J-23?		豊島所	11.5	6.6	-	灰白	N8/0	肥前	19C-幕末	
	189	二之丸	海磁器	鉢	漆研写				-	-	-	灰白	N8/0	肥前	19C-幕末	
	190	二之丸	海磁器	磁鉢鉢	漆研写	I-22?			-	5.7	-	灰白	N8/0	薩摩		
	191	二之丸	海磁器	小皿	漆付	O-23?			-	2.7	-	灰白	N8/0	豊州	近代	

第22表 遺物3 (瓦)

探区	探区名	地区	種別	器種	種類	トレンチ	層	遺構	瓦幅法 (cm)										計測	備考					
									長さ	幅	厚さ	瓦口長さ	瓦口幅	瓦口厚	瓦口長さ	瓦口幅	瓦口厚	瓦口長さ			瓦口幅	瓦口厚			
38	3	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	107	遺土						2.1	1.9											
	6	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	877(17)-17-18																			
	7	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	877(17)-17-18	カクラン	18.8	18.0	1.7															
	8	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	877(17)-17-18																		877(17)125	
45	15	徳門	瓦	軒丸	葺										2.1									A04	
	16	徳門	瓦	軒丸	葺								13.6	2.6	1.8									C017	
	17	徳門	瓦	軒丸	葺								9.2	1.0	0.8									A05	
	18	徳門	瓦	軒丸	葺											1.9								K09	
	19	徳門	瓦	軒平	大瓦葺	葺								2.0		3.2	1.4							A01	
	20	徳門	瓦	軒平	大瓦葺	葺										1.8		4.3	2.3						
	21	徳門	瓦	軒平	大瓦葺	葺																			
	22	徳門	瓦	軒平	大瓦葺	葺																			
	23	徳門	瓦	軒平	大瓦葺	葺																			
	24	徳門	瓦	軒平	大瓦葺	葺																			
49	32	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	せう下草																	877(17)042-3		
	38	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	せう下草																			
54	41	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	557																		877(17)029-	
	42	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	557																			
	43	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	557																			
	47	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	417(16)-17-1	遺土									2.4								877(17)027-	
57	48	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	567																			
	49	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	567																			
59	50	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	577(16)-1	軒丸下葺																		
	51	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	577(16)-1	軒丸下葺																		
63	67	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	637(16)-1	カクラン								1.5		4.2	2.3						877(17)039-	
	68	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	637(16)-1	中葺																		
	69	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	637(16)-1	カクラン																		
	76	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	647	遺土									3.0	3.0							A07	
	77	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	647	遺土									2.0		5.3	3.7					C006	
	78	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	647	遺土																		
	79	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	647	遺土																		
	80	中丸瓦葺	瓦	軒平	葺	647	遺土																		
	81	中丸瓦葺	瓦	軒丸	葺	647	遺土																		
	79	82	大平口	瓦	軒丸	葺	17																		
83		大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
84		大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
85		大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
91		大平口	瓦	軒丸	葺	17										1.5									小葺
92		大平口	瓦	軒丸	葺	17																			小葺
93		大平口	瓦	軒丸	葺	17																			A08
96		大平口	瓦	軒丸	葺	17																			877(17)053
98		大平口	瓦	軒丸	葺	17																			877(17)051
99		大平口	瓦	軒丸	葺	17																			877(17)052
76	96	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
	97	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			877(17)050
	98	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			877(17)050
	99	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
	100	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			小葺
	101	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
	102	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
	103	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
	104	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
	105	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
77	110	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			877(17)050
	111	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
	112	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
	113	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
	114	大平口	瓦	軒丸	葺	17																			
	118	焼物	瓦	丸	葺	67	軒平																		
	119	焼物	瓦	丸	葺	77	軒平																		
	120	焼物	瓦	丸	葺	87	軒平																		
	81	127	焼物	瓦	丸	葺	67	軒平																	
	85	131	焼物	瓦	丸	葺																			
134		焼物	瓦	丸	葺																				D06
135		焼物	瓦	丸	葺																				877(17)186
140		焼物	瓦	丸	葺																				A05
88	141	焼物	瓦	丸	葺																				D06
	142	焼物	瓦	丸	葺																				D06
	143	焼物	瓦	丸	葺																				
	146	焼物	瓦	丸	葺	大瓦葺																			A01
	147	焼物	瓦	丸	葺	大瓦葺																			877(17)183
	148	焼物	瓦	丸	葺																				
	149	焼物	瓦	丸	葺																				
	149	焼物	瓦	丸	葺																				

第23表 遺物4 (その他)

探区	探区名	地区	種別	器種	種類	トレンチ	層	遺構	海堀線法 (cm)			色名	記号	ガラス層		備考	
									口径	底径	器高			長さ	厚さ		
38	4	中丸瓦葺	ガラス製品	瓶		597	表土										
49	28	中丸瓦葺	土器	皿		せう下草	表土										
	29	中丸瓦葺	土器	皿		せう下草	I	土坑2									
66	75	中丸瓦葺	土器	磁瓶		64T	II	カクラン	21	18.1	3.6	遺濁	2.5Y8/3				
77	102	大平口	金属製品	銅	銅		II		1.8								
	103	大平口	銅	銅		3T	II		1.8								
85	130	焼物	木製品	杖			VI	土坑							53.5	5.9	5.3
	131	焼物	石器	五輪石			VI	土坑	1.8								

第25表 鹿児島城跡文獻目録(2)

承応4	1635	2月4日	島津長久、内務を下して、新しい御殿が壊れていなければ小命をいれること、門外へ出る時は城の小番・大番の中から時宜に応じて召し出すことなど命じる	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-566 史料番号24(2)四一
寛文4	1664	7月16日	『鹿児島城跡所』の石垣に「御城跡 修復許可」	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-1039
寛文8	1668	6月18日	『鹿児島城跡所』の城跡、(「御城跡」の城跡)の修復許可	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-1249
		8月13日	赤久らに記す。赤久に書状を送り、城跡の復旧について先日述べた奉書の内容を承知するよう伝える	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-1249
寛文10	1670		鹿児島城及び鹿児島城跡下城跡の内の、現在城跡として先日述べた奉書の旨を詳細に、上山城の位置に「鹿児島城」に記載され、城跡の所に記しては「御城」と記載	鹿児島県立書庫『鹿児島城跡下城跡』
延宝5	1677	4月8日	『鹿児島城跡方之間』が編纂、修復修理許可	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-1728
延宝10	1678	1月12日	鹿児島にて火災。下郷土家・御茶屋・堀丸蔵・下町まで焼失(住民火事)	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-1768
天和3	1683	11月23日	島津中興-島津伊賀屋敷から島津御方の本陣敷まで火災とする。新たに地割を行う	鹿児島城史料『古記』天和3年11月23日条
		12月17日	二ノ丸作事開始	鹿児島城史料『古記』天和3年12月17日条
		1月2日	二ノ丸完成。先王先丸400人	鹿児島城史料『古記』天和3年12月17日条
貞享元	1684	1月24日	二ノ丸作事完了	鹿児島城史料『古記』貞享元年正月24日条
		4月25日	新しく作事した城跡の門番詰が完了し、門と橋の通り筋を行う	鹿児島城史料『古記』貞享元年4月25日条
元禄2	1686	8月14日	赤久に取つかつた城跡の門番詰が完了し、門と橋の通り筋を行う	鹿児島城史料『古記』元禄2年8月14日条
		4月22日	鹿児島に大火あり。上郷町から出火し、堀門及び橋・対面所も焼く報告	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-2599
		4月23日	元禄2年4月23日の火災の事、鹿児島上町行燈より火災、城まで燃焼する	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-2600-2601
		4月24日	上山和泉野より出火、堀丸蔵も焼く。金銀庫焼失は確る	鹿児島城史料『古記』元禄2年4月24日条
元禄9	1696	5月12日	元禄2年4月23日の鹿児島城下大火災について被害状況をまとめた城跡を整理し、城跡の控えの裏には、関係する奉書等が収められ、経緯と被害状況及び、鹿児島城の修復の手続き、修復(普請)箇所についてがまとめられる	鹿児島城史料『鹿児島城跡修復』
		5月23日	鹿児島上郷町で出火し城まで燃焼。堀門・堀門・堀門が焼失。石垣も焼け崩れる。石垣の修復し、堀門の新築、堀一橋の修復許可	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-2614
		5月28日	鹿児島城の修復普請について、島津親書より、木材の用意に依頼するようにしたこと	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-2616
元禄12	1699	8月18日	鹿児島城大火後の普請が終わらず	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』1-2623
元禄14	1701	3月28日	城下の下郷を修復して堀門と下郷とすること。堀跡内に小堀の入る堀、堀跡の裏の方に大船繋ぎの溝戸の堀造を許可	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』2-963
元禄16	1703	6月21日	鹿児島城跡所から南の方の堀と堀跡、南東の門前堀跡、東北の堀跡堀跡について、修復許可	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』2-1463
元禄17	1704	2月25日	元禄9年の火災後、まず堀門・外郭などを修復するも未だ終わらず。去年(元禄16年)には、先に対面所・広間を普請した。この日吉原につき、島津親書、本丸に移す	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』2-1669
		4月18日	本丸普請作事終了。御茶屋を御下敷敷より本丸へ移す	鹿児島城史料『古記』元禄16年4月18日条
宝永4	1707	8月8日	各門や御茶屋への呼称を定める。北御門前の新築堀門を長堀門。御茶屋等の出入り口を中口、惣出入り口を内下口と改称。笠置番所入口の長堀門前を笠置番所と改称し、下郷の大堀を堀下下郷と改称	鹿児島城史料『古記』宝永4年8月8日条
宝永6	1709	5月3日	島津尊信、父老の志を継ぎ、南近江大領等との再興と東宮御首の位階職を普請等として、鹿児島城大寺口・土佐を定め、普請を御院院とする。この日より普請を始める	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』2-2790
宝永7	1710	4月17日	『御茶屋門』を内堀として「御茶屋門」と改称	『藩政史料 鹿児島』(下)-2567
		4月18日	南宮院の普請および本陣御院院-奥御院-吉原院、落成	『藩政史料 鹿児島』(下)-2927
正徳2	1712	9月7日	9月7日-23日の鹿児島城下大火災について被害状況をまとめた城跡-普請状況を整理する。城跡は3枚綴りに、江戸御院院、御茶屋、御茶屋、御茶屋御茶屋に置く	鹿児島城史料『鹿児島城跡修復』
		8月2日	御茶屋の修繕を御茶屋之間と呼称する	『藩政史料 鹿児島』(下)-2564
		1月29日	鹿児島城下町大火	鹿児島城史料『古記』正徳2年1月29日条
		4月28日	鹿児島城下町大火	鹿児島城史料『古記』正徳2年4月28日条
		4月28日	火除けのため、鹿児島城下町御茶屋および下町礼法より堀跡まで、普請堀を築く。土分の宅地を普請堀とし、その後二ノ丸より下郷敷跡まで火除堀とする。鹿児島城跡(神楽)西より鹿児島城跡(地蔵)まで下郷敷堀の申上りする	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』3-207
正徳3	1713		火除堀を作るために、堀内に総門を築造する。そのうち、総門の裏には、元禄9年の火災の後、正徳3年から4年にかけての鹿児島城下の改修(普請)の手続き、改修箇所についてまとめる。複数の奉書等を城跡の裏に貼る	鹿児島城史料『鹿児島城跡修復(普請)』
			『鹿児島城跡修復(普請)』の写し	鹿児島城史料『鹿児島城跡修復(普請)』
		9月11日	「元御茶屋門」を「元堀門」と改称。南宮院下高松堀跡の堀にかかると橋を「仮橋」とする	鹿児島城史料『古記』正徳3年9月11日条
		12月	島津尊信から前出した御茶屋の修繕。鹿児島は近年大火が多く、当年は二度も島津守御茶屋近辺まで燃焼した。島津守御茶屋の内外に城跡の堀跡と堀跡があり、近辺に家室を住まわせた屋敷があり、火の用心のために家室の堀跡を取り除く。島津守御茶屋から堀跡の堀跡に家室を建て直した	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』3-297
享保6	1721	6月9日	本丸・下郷敷の修繕の作事について、役屋の修繕。藩主(鎌倉)の諸役屋を本丸に直す。下郷敷は御茶屋(吉原)として作事を取り除く。御茶屋御茶屋を併せつけたら人は下郷敷長堀の中に当分は役屋を建て、下郷敷の作事が終わるとは御茶屋に移る。鎌倉を御茶屋御茶屋とする	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』3-1263
享保10	1725	2月17日	御茶屋之間を普請と改称	『藩政史料 鹿児島』(下)-2565
		10月23日	下郷敷堀内の土着堀と御茶屋の土着堀を高松堀と呼称	『藩政史料 鹿児島』(下)-2566
享保12	1727	3月	鹿児島城下町御茶屋所員方外北東之間、土堀三ツ所并に堀岸三ツ所が去年の大雨で破損したので、修繕箇所を総門に記し、修繕に伺いを立てる	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』3-1944-1945
		3月11日	鹿児島城下町御茶屋所員方外北東之間、土堀三ツ所并に堀岸三ツ所、総門の火災の修繕が認められる	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』3-1946-1947
享保14	1729	5月	鹿児島城下町御茶屋所員方外北東之間、土堀三ツ所が去年の大雨により破損したので、修繕の伺いを立てる	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』3-2218-2219
		5月12日	鹿児島城下町御茶屋所員方外北東之間、土堀三ツ所、総門火災の修繕が認められる	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』3-2220
享保17	1732	8月28日	浦由に提出していた鹿児島城下町御茶屋所、員方外北東之間、土堀三ツ所、土堀堀岸三ツ所の修繕が認められる	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』4-442
享保19	1734	8月9日	浦由に提出していた鹿児島城下町御茶屋所、員方外北東之間、土堀三ツ所、土堀堀岸三ツ所の修繕が認められる	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』4-669
享保20	1735	10月	島津親書の鹿児島城跡の修繕に急がれていたので、材木の取替と修繕を願う	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』4-784
享保20	1735	10月	島津親書の鹿児島城跡の修繕について、修繕と先陣普請を御茶屋御茶屋(吉原)の方の堀跡へ進出したところ、堀跡を掘き深く掘直される	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』4-786
享保22	1745	9月18日	鹿児島城下町御茶屋所、員方外北東之間、土堀三ツ所について、修繕と先陣普請が認められる	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』4-2177
享保4	1747	4月21日	御茶屋所へ、お堀久保(赤心)堀跡の作事が完成。山より堀跡と呼称	『藩政史料 鹿児島』(下)-2577
		8月21日	鹿児島城下町御茶屋所、員方外北東之間、土堀三ツ所について、修繕と先陣普請を許可	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』4-728
寛政12	1749	春	内堀(二ノ丸御茶屋門)は鹿児島城の御殿であったが、島津尊信の隠居の際に焼失してしまっった。この度島津親書が復元した橋、お堀から再びこの地に堀跡を建て、今春に竣工した	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』5-426
		3月29日	下郷敷の作事について、御茶屋所員が大火成就	『鹿児島城史料 前記録(巻録)』5-428

第VI章 自然科学分析

鹿児島城跡から出土した遺物について、自然科学分析を実施した。分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。以下に結果を示す。

はじめに

本報告では、試料番号1～20の瓦の材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、地質との関連性やこれまでの瓦の胎土分析結果との類似性あるいは異質性を検討し、瓦の生産に係る資料を作成する。試料番号21・22、24～27は鹿児島城跡から出土した土器である土器の胎土分析を行い、その材質を調べることにより、土器生産に係る資料を作成する。試料番号23は鹿児島城跡から出土した五輪塔を構成する凝灰岩の特徴についても記載を行う。

第28表 分析試料一覧

試料番号	発掘番号	遺物名	トレンチ名	グッド	出土地点等
1	本丸跡 80-20	御舟地跡		M-1	排水溝②
2	本丸跡 80-20	御舟地跡	11-14F-レンテ	L-3	
3	本丸跡 80-21	御舟地跡		L-3	カクラン
4	本丸跡 80-20	御舟地跡		L-1+2	遺成土
5	本丸跡 80-21	御舟地跡		L-2	カクラン
6	本丸跡 80-20	御舟地跡		M-1	排水溝②
7	本丸跡 80-21	御舟地跡		L-1	遺成土
8	本丸跡 80-21	御舟地跡		L-2	排水溝③
9	本丸跡 80-20	御徳門南側石垣南辺	37F-レンテ	N-11	カクラン
10	本丸跡 80-20	御徳門南側石垣南辺	41F-レンテ	M-8	遺成土
11	本丸跡 80-20	御徳門南側石垣南辺	44F-レンテ	M-N-12-13	瓦唐瓦土坑
12	本丸跡 80-20	御徳門南側石垣南辺	43F-レンテ	N-17	七土瓦溜り
13	本丸跡 80-20	北御門跡石垣修復		a-b-38-39	XⅡa層
14	本丸跡 80-20	北御門跡南辺			東置坂遺跡
15	本丸跡 80-21	北御門跡石垣修復		a-b-38-39	V・VI層
16	本丸跡 80-20	外御道跡		N-17	遺成土
17	本丸跡 80-20	外御道跡		M-2	堀
18	本丸跡 80-21	御遺物敷跡			
19	本丸跡 80-20	北御門跡南辺		c-34-35	中央トレンチ
20	本丸跡 81-05	北御門跡石垣修復		a-b-38-39	3段 XⅡa層
21	28	本丸大異跡		q-7-F	排水溝埋土
22	29	本丸大異跡		q-7	土坑2
23	131	琉球地跡			土坑
24	64	本丸裏庭	53F-レンテ	P-5	遺成土
25	63	本丸裏庭	53F-レンテ	P-5	遺成土
26	66	本丸裏庭	53F-レンテ	P-5	遺成土
27	65	本丸裏庭	53F-レンテ	P-5	遺成土

1. 試料

試料は、鹿児島城跡の各箇所から出土した瓦片20点、

土器器片6点と五輪塔から採取された凝灰岩片1点である。試料には試料番号1～27までの試料番号が付されている。各試料の詳細を一覧にして第28表に示す。

2. 分析方法

これまでの分析では、薄片作製観察と蛍光X線分析を併用した。本分析でも同様の方法を用いる。試料番号23の凝灰岩片、試料番号24～27の土器(土器器)については、薄片作製観察により、その岩石学的な特徴を記載する。以下に各分析方法を述べる。

(1) 薄片作製観察

瓦試料については、薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。顕微鏡下で観察すると、構成鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようにするという事を利用しての。

土器試料は、ダイヤモンドカッターにより一部を切断して薄片用のチップとする。凝灰岩試料は、破片を樹脂に包埋して薄片用のチップとする。それらのチップをプレパラートに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け、観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡を用い、下方ポラーラーおよび直交ポラーラー下において観察記載を行なう。ここでは薄片観察結果を松田ほか(1999)の方法に従って表記する。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細塵までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下にその手順を述べる。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細塵～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラートの全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果か

ら、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。凝灰岩試料については、偏光顕微鏡下における観察から構成鉱物および組織の特徴を明らかにした。構成物の量比は、観察面全体に対して多量(>50%)、中量(20~50%)、少量(5~20%)、微量(<5%)およびきわめて微量(<1%)という基準で目視により判定した。構成鉱物の量比は表に示す。顕微鏡観察に際しては下方ポーラーおよび直交ポーラー下において代表的な箇所を撮影し、図版に示す。

(2) 蛍光X線分析

リガク製長分散型蛍光X線分析装置(ZSX PrimusIII+)を用い、ガラスビード法により分析を実施した。測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムのFP定量法を使用し、SiO₂, TiO₂, Al₂O₃, FeO₃, MnO, MgO, CaO, Na₂O, K₂O, P₂O₅の主要10元素およびRb, Sr, Y, Zr, Baの微量元素について定量分析を実施した。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料(JA-1, JA-2, JA-3, JB-1a, JB-2, JB-3, JCh-1, JF-1, JF-2, JG-1a, JG-2, JG-3, JGb-1, JGb-2, JH-1, JHk-1, JR-1, JR-2, JR-3, JSd-1, JSd-2, JSd-3, JS1-1, JS1-2, JSy-1)を用いた。

1) 装置

(株)リガク製 走査型蛍光X線分析装置 ZSX PrimusIII+(FP定量法アプリケーション)

第29表 ガラスビード作製条件

溶融装置	リガク製卓上型高周波ビードサンブラ(3091A001)
融剤及び希釈率	融剤(Li2B4O7)5.000g:試料0.500g
剥離剤	Li
溶融温度・時間	1200°C.600sec

2) 試料作製

機械乾燥(110°C)した試料を、振動ミル(平工製作所製 T1100;10ml容タンクステンカーバイト容器)で粉砕・混合し、ガラスビードを第29表の条件で作製した。

3) 測定条件

上記作成したガラスビードを専用ホルダーにセットし、走査型蛍光X線分析装置((株)リガク製 ZSX PrimusIII+)を用い、第30、31表の条件で測定を実施した。

3. 結果

観察結果を第33・34表、第94~99図に示す。以下に、鉱物・岩石組成、粒径組成、砕屑物・基質・孔隙の順に

第31表 蛍光X線定量測定条件

測定項目	測定方法	測定条件	測定結果	測定誤差	測定回数	測定標準	測定標準値	測定標準偏差	測定標準係数
SiO ₂	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
TiO ₂	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
Al ₂ O ₃	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
FeO	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
MnO	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
MgO	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
CaO	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
Na ₂ O	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
K ₂ O	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
P ₂ O ₅	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
Rb	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
Sr	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
Y	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
Zr	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100
Ba	蛍光	50kV	50mA	10000	100	10000	10000	100	100

各試料の特徴を述べる。

1) 鉱物・岩石組成

試料番号1~17の試料における鉱物と岩石の種類の実現頻度は、概々の傾向としては同様であると評価できる。いずれの試料も砂粒の主体は石英の鉱物片であるが、それ以外の鉱物片ではアクチノ閃石、緑簾石および白雲母と黒雲母が主要な組成を占めている。岩石片では多結晶石英が主体を占めるが、それ以外の岩石では緑色片岩または雲母片岩の変成岩類が特徴的に含まれる。他に少量のカリ長石や斜長石の鉱物片と多結晶石英からなる岩石片が含まれる。

試料番号18:全体的に砕屑物の量が少なく、特に多い鉱物や岩石は認められないが、鉱物も岩石もその種類数は比較的多い。認められた鉱物は石英と斜長石および輝石類であり、岩石では軽石、凝灰岩、流紋岩・デイサイトといった火砕岩および火山岩とさらに火山ガラスも含まれる。

試料番号19:砕屑物のほとんどは火山ガラスであり、その形態の多くは平板状のバブル型を示す。

試料番号20:砕屑物の主体をなすのは石英の鉱物片であり、他に鉱物片としてはカリ長石と斜長石の長石類と角閃石および雲母類が含まれる。岩石片はいずれも微量であるが、その種類数は多い。認められた岩石は、チャーと頁岩の堆積岩類、凝灰岩と流紋岩・デイサイトの火砕岩・火山岩類、さらに深成岩の花崗岩類も認められた。

土器:試料番号21・22については、両試料ともにバブル型火山ガラスを多く含むことは共通するが、試料番号21は火山ガラスのほかに石英や斜長石の鉱物粒および凝灰岩などの岩石片が少量または微量含まれるのに対し、試料番号22は火山ガラス以外の砕屑物はほとんど含まれない。

砕屑物の粒径組成でも、2点の試料は極細粒砂が最も多く、次いで細粒砂の多い組成であるが、試料番号21には細粒砂と同程度に中粒砂も多く含まれる点で試料番号22とは異なっている。砕屑物の割合は、ともに10%前後であるが、試料番号22の方が若干高い割合である。凝灰岩試料については以下の結果となった。

岩石名：デイサイト質溶結凝灰岩

岩石の組織：砕屑状組織 (clastic texture)

鉱物片

斜長石：中量存在し、粒径最大2.3mmの半自形、厚板状～破片板状を呈し、集片双晶が発達する。累帯構造、集斑状組織を形成するものや、内部に汚濁帯が生じるものが散見される。

斜方輝石：微量存在し、粒径最大0.82mmの他形、破片柱状を呈し、内部に不透明鉱物を包有するものが散在する。

単斜輝石：きわめて微量存在し、粒径最大0.35mmの半自形、破片柱状を呈し、淡緑色を示す。

不透明鉱物：きわめて微量存在し、粒径最大0.25mmの半自形～他形、粒状を呈する。周縁部に酸化鉄が生じているものが認められる。

岩片

軽石：少量存在し、粒径最大5.6mmの垂円礫状を呈する。火山ガラスから構成され、内部に斜長石や斜方輝石を包有することがある。繊維状やスポンジ状に細かく発泡する。

変質鉱物

珪長質鉱物：微量存在し、粒径最大0.07mmの他形で不定形状～針状を呈する。基質や軽石片を構成する火山ガラスの一部を交代して分布する。

セリサイト：きわめて微量存在し、粒径最大0.01mmの他形で不定形状～針状を呈する。基質や軽石を構成する火山ガラスを交代して分布する。

その他

火山ガラス：多量存在し、溶結により不定形状や引き延ばされた形状を呈する。基質や火山ガラスを構成して分布し、一部は珪長質鉱物によって交代されている。

水酸化鉄：微量存在し、不透明鉱物の周囲に分布するものや基質に鉱染状に分布するものが認められる。

以上に述べた構成物の量比を第32表に示す。

第32表 凝灰岩の構成物量比

試料名	鉱物片				岩片 軽石	変質鉱物		その他	
	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	不透明 鉱物		珪 長 質 鉱 物	セ リ サ イ ト	火 山 ガ ラ ス	水 酸 化 鉄
試料番号23 凝灰岩	◎	+	±	±	△	+	±	◎	±

◎：多量(>50%) ○：中量(20～50%) △：少量(5～20%)

＋：微量(<5%) ±：きわめて微量(<1%)

2) 粒径組成

試料番号4・5以外の15点の試料は、極細粒砂をモー

ドとし、次いで細粒砂または粗粒シルトの割合が高い。試料番号4・5は細粒砂をモードとするが、次いで極細粒砂の割合が高い。

試料番号18・19は極細粒砂をモードとし、試料番号20は中粒砂をモードとする。

3) 砕屑物・基質・孔隙の割合

試料番号1～17の試料における砕屑物の割合は、10%から30%までの幅が認められるが、特に集中する割合は認められない。

しかし、試料番号18～20の試料の砕屑物の割合は10%前後である。

(2) 蛍光 X線分析

結果を第34表に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した。

1) 化学組成中で最も主要な元素 (SiO₂, Al₂O₃)

本図では、鉱物や岩石および粘土を構成する化学組成の中で最も主要な元素であるSiO₂とAl₂O₃を選択し、これらを横軸と縦軸とした散布図を作成した。

2) 長石類主要元素 (CaO, Na₂O, K₂O)

粘土の母材を考える上で長石類(主にカリ長石、斜長石)の種類構成は重要である。このことから、本図では、指標として長石類の主要元素であるCaO, Na₂O, K₂Oの3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合 (Na₂O+K₂O) / (CaO+Na₂O+K₂O) を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合 K₂O / (Na₂O+K₂O) を縦軸とする。

3) 有色鉱物主要元素 (TiO₂, Fe₂O₃, MgO)

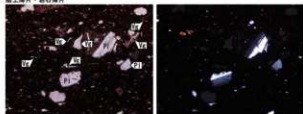
本図では、輝石類や黒雲母、角閃石などの有色鉱物において、その特性を決める上で重要な元素であるTiO₂, Fe₂O₃, MgOを選択し、Fe₂O₃を分母としたTiO₂, MgOの割合を見る。

4) 微量元素 (Rb, Sr, Zr, Ba)

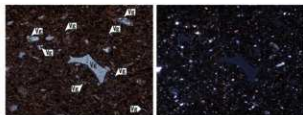
各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-SrとZr-Baとする。これら4元素は、ほとんどの珪酸塩鉱物中に含まれており、CaやNaなどの元素と準動を共にすることから、鉱物組成にも連動し、胎土の特性を把握する上で有効な微量元素である。

以上述べた視点による5種類の散布図を第102図に示す。図では出土遺構別にマークを変えてある。試料間の相対的な位置関係をみると、5つの散布図を通じて試料番号3・5・14・15の4点が互に近接した位置にあり、かつ他の試料とはやや離れた位置にプロットされていることが指摘できる。

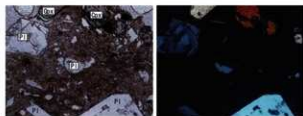
試料番号24～27の土師器4点はいずれもバブル型火山ガラスを主体とした砕屑物を多く含む。さらに、試料番号24と試料番号26は火山ガラスのほかに石英や斜長



試料番号21(土質) 調査番号28 い-7-8 緑水浸漬土



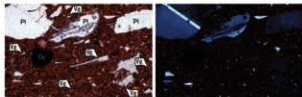
試料番号22(土質) 調査番号29 い-7 土砂



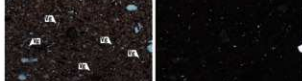
試料番号23(泥状土 調査番号131 五輪池水側 環状砂防工体埋土)

Pl: 針葉石, Exr: 斜方輝石, Cov: 斜方輝石, Ve: 火山ガラス,
写真左列は下方ポーラー, 写真右列は上方ポーラー。

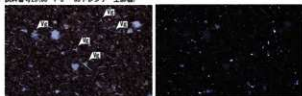
0.5mm



試料番号24(砂) P-5 63トレンチ 土質



試料番号25(砂) P-5 63トレンチ 土質



試料番号26(砂) P-5 63トレンチ 土質

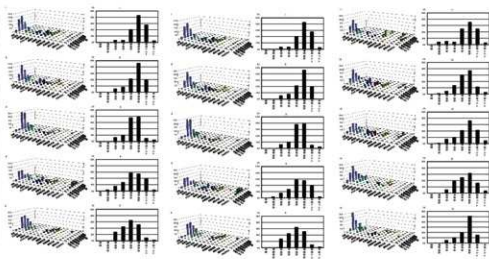
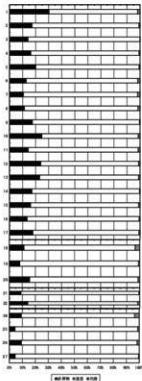


試料番号27(砂) P-5 63トレンチ 土質

Pl: 針葉石, Opv: 斜方輝石, Op: 不透明鉱物, Ve: 火山ガラス,
写真左列は下方ポーラー, 写真右列は上方ポーラー。

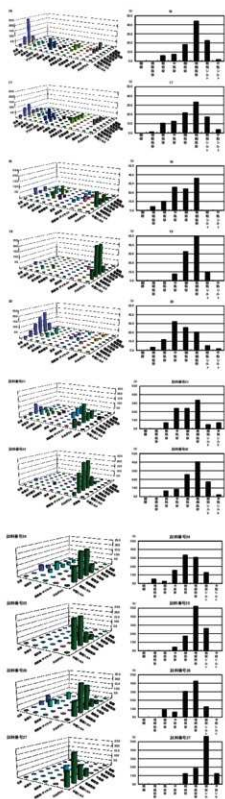
0.5mm

第95図 偏光顕微鏡観察結果②

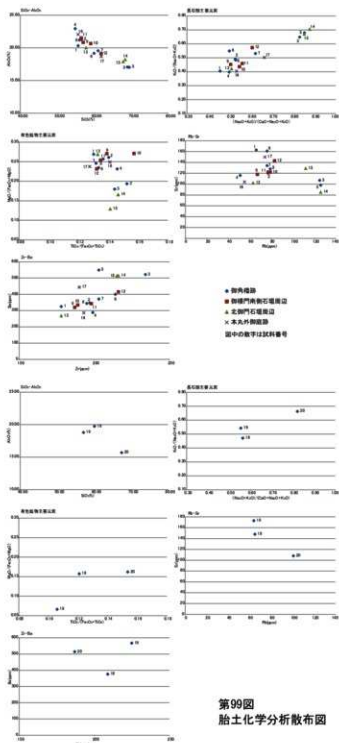


第97図 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成①

第96図
碎屑物・基質・孔隙の割合



第98図 砕屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成②



第99図
胎土化学分析散布図

り概観すると、少なくとも鹿児島県内にはこのような地質は分布しないことから、試料番号1～17の試料はいずれも鹿児島県外で作製されたものが運び込まれたと考えられる。鹿児島県から最も近い結晶片岩類からなる変成岩帯の分布としては、熊本県南部の九州山地に分布する肥後帯と呼ばれる地質がある。さらに遠方では長崎県の西彼杵半島および長崎半島に長崎帯と呼ばれる変成岩帯が認められる。これまでの分析事例では、鹿児島城跡から出土した花十字紋の瓦の胎

土に認められた鉱物・岩石組成が、今回の試料の胎土に類似している。現時点では、今回の試料の産地を特定することはできないが、遠隔地で作られた瓦が比較的多量に使用されていた可能性のあることが示唆され、今後の継続的な分析事例の蓄積による検討が必要と考えられる。

また、試料番号18～20についてはさらに違う結果となった。それらの中で、特に試料番号19については、多量の火山ガラスがシラスを構成する火山ガラスの形態と同様であることから、シラスの分布域およびその周縁地域の堆積物を材料としている可能性が高いと考えられる。他方、試料番号18については、流紋岩・デイサイト質の火山岩や凝灰岩の分布する地質を背後に有する地域の堆積物であることが推定され、試料番号20については、様々な地質が流域に分布する比較的大河川の中下流域の堆積物に由来することが推定される。

これまでの鹿児島城跡出土瓦の胎土分析により、地質学的背景の異なる複数の地域の堆積物が材料として使用されていることが明らかになったが、今後のさらなる分析事例の蓄積と検討が必要であろう。

なお、今回同時に行った化学組成による胎土の特性では、一部に他の瓦の化学組成とは有意な違いのあることが示唆された。今回の分析結果からは、出土遺構と胎土との間の相関関係は捉えることができなかったが、薄片観察では区別できなかった違いが、化学組成により見出せる可能性のあることが示唆される。また、阿部 (2003) による勝山町遺跡出土瓦の胎土の化学組成との比較では、測定機器や処理法の違いから、数値の直接的な比較はできない。ただし、傾向としては、勝山町遺跡出土試料に比べて今回の試料は、 SiO_2 の量比が低く、 Al_2O_3 や MgO および CaO の値が高いことが窺える。これらの比較についても、薄片観察による鉱物・岩石の産状を確認した上で比較検討する必要があると考えられる。

(2) 土器について

試料番号21・22の試料間における胎土の化学組成の違いを見出すことは、主要元素の中でほぼ大きな差がない限り非常に難しい。ただし、今回の分析では同時に薄片観察を行うことにより、2点の土器試料間における胎土の違いを比較的明瞭に認めることができた。これらのうち、特に試料番号22の砕屑物のほとんどがバブル型火山ガラスからなる胎土は、これまでに行った鹿児島城跡出土の瓦にも多く認められている。バブル型火山ガラスの由来は、鹿児島城の立地を考慮すれば、鹿児島県に広く分布する火砕流堆積物いわゆるシラス (鹿児島県, 1990) であると考えられる。したがって、試料番号22とした土師器は、少なくともシラス台地およびその周縁に分布する堆積物を材料としている

と考えられる。また、試料番号21の土師器にもバブル型火山ガラスは比較的多く含まれているから、試料番号22と同様にシラスの分布域内および周縁の堆積物の利用が考えられる。両者の違いは、より局所的な材料採取地の違いを示唆していると考えられる。

試料番号24～27についても胎土中に含まれる砕屑物のほとんどがバブル型火山ガラスからなる組成は、これまでに行った鹿児島城跡出土の瓦にも多く認められている。これは少なくともシラス台地およびその周縁に分布する堆積物を材料としていると考えられる。すなわち、いずれの土師器も鹿児島県内に分布する堆積物を材料として、鹿児島県内で作製された可能性が高いと考えられる。今後、鹿児島県内各地で出土した土師器の分析事例を蓄積することができれば、より局所的な胎土の違いも見出される可能性のあることが期待される。

(3) 凝灰岩について

溶結凝灰岩は、火山灰をふくむ火山砕屑物が高温を保ったまま流送後、定置し、火砕流堆積物の自重および熱で火山ガラスや軽石が溶結した堆積物である。溶結凝灰岩は軽量で加工が容易であることから、古来より各地で石材として切り出されている。

鹿児島県においては石垣、石塀、石橋などの石造物に利用される溶結凝灰岩がいくつか知られている (大木, 2011)。それらは、入戸火砕流堆積物、阿多火砕流堆積物、加久藤火砕流堆積物、下門火砕流堆積物、吉野火砕流堆積物などが挙げられる。今回の石材は、斜長石を主体とし、斜方輝石、単斜輝石などを含む組成を示しており、遺跡の立地を考慮すると、本石材は入戸火砕流堆積物の弱溶結部の可能性が高い。

引用文献 阿部百里子・藤波朋子・大沢眞澄, 2003, 勝山町遺跡出土瓦の自然科学的調査。勝山町遺跡, 長崎県教育委員会。松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—。日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121。日本の地質「九州地方」編集委員会, 1992, 日本の地質9 九州地方, 共立出版, 371p。鹿児島県地質図編集委員会, 1990, 鹿児島県地質図 縮尺10万分の1。鹿児島県。

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—。日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121。大木公彦, 2011, シラスを知り・活かす。Nature of Kagoshima, 鹿児島県自然愛護協会, 37, 153-159。

地中レーダー探査

鹿児島城跡発掘調査に係る地中レーダー探査業務

株式会社 パスコ

はじめに

調査地である鹿児島城跡は1601年頃に島津家久によって、築城が開始された山城と麓の居館で構成される城郭である。居館は本丸、二之丸が隣接して造営され石垣や水堀で囲われていたとされる。本業務は往時の鹿児島城に関する施設、特に堀が造成されていた場所の想定を行うため、4地点6か所と追加調査で1地点2か所のレーダー探査を行うものである。

1 探査機器

使用したレーダー機材を第35表に示す。探査に使用した機材はIDSGeoRader社製Stream-Xである。これは200MHzのアンテナ7つを搭載しており、一度の計測で7断面取得することができるため、調査範囲を面的に計測する場合に適している。断面の間隔は12cmである。また、データの取得及び表示はPanasonic社製TOUGH BOOKを用いた。

第35表 地中レーダー機材 特性表

	Stream-X
アンテナタイプ	VV:200MHz
探査深度 [m]	2
観測幅 [m]	0.72
観測断面数	7
横断サンプリング [12cm]	12
機材の特徴	・観測幅が広い ・探査深度<2~3m

2 調査手順

調査地区が公共性の高い箇所となっていたために迅速に作業を行うためすべての側線を設置せず探査箇所の隅にマーカーを設定することとした。その後マーカーに位置情報をVRS (Virtual Reference Station) 方式のネットワーク型RTK-GPS測量によって取得した。なお座標値は平面直角座標系Ⅱを使用している。

測量後探査機器の探査幅を目安にラインチョークを用いてマーキングして、探査ごとにロープを這わせて測線とした。

3 探査数量および解析方法

各地区の走査した距離内訳を第36表に示す。操作距離の総延長は1270mとなった。主に対象地の長軸方向に測線を設定して探査を実施した。

探査データの解析には主にタイムスライス平面図を使用した。GPR探査によって取得した断面画像を合成することで3次元データを得るが、これを時間方向（深度方向）にスライスすることでタイムスライス平面図を得る。

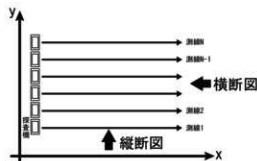
タイムスライス平面図では、色情報としてあらわすことによって電波の反射、屈折、減衰などの様子を可視化し、埋設物や構造物、地質境界等の平面的な広がりを把握することができる。タイムスライス平面図は深さ約0.75cmごとに得られるが、本業務では、深さ12cm毎に深度幅24cmのデータを平均化することで、平均タイムスライス平面図を作成している。

第36表 地区ごとの走作線長

地区名	走査線長 [m]
照国神社境内	490
鹿児島市立長田中学校	120
高野山最大薬院	360
県歴史・美術センター-聖明館駐車場	300
計	1270

4 GPR 探査成果

探査成果として、縦横断面図を作成した。第100図に地中レーダー探査における座標系の定義を示す。断面図には探査機器の進行方向をx軸、進行方向と直行する方向をy軸として出力される。したがって、断面図に表示されるxは始点からの距離、yは基準となる測線からの横断距離、zは地表面からの推定深さを示している。なお、推定深さは土壌の誘導電率を9と仮定して計算した。本報告書ではxy平面を水平断面図、x軸に沿った断面図を縦断面図、y軸に沿った断面図を横断面図として扱う。



第100図 地中レーダー探査座標系の定義

(1) 照国神社境内 A 地区

照国神社境内 A 地区は面的に調査を実施できた箇所である。第101図の赤線部が探査範囲である。

【異常信号】

- ・深度0.5~0.8mに逆コの字型の反応を検出 (第102図)
- ・深度1.0m付近に局所的な反応を検出 (第103図)
- ・深度1.5m付近に境目のような反応を検出 (第104図)
- ・縦断面図では右側（終点側）に周囲と反応の異なる箇所を検出 (第105図)



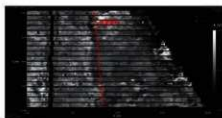
第101図 照国神社地区探査箇所



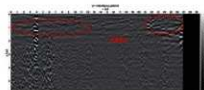
第102図 平面画像(探査深度 -650mm)



第103図 平面画像(探査深度 -1000mm)



第104図 平面画像(探査深度 -1500mm)



第105図 縦断面画像(y=1080cm)

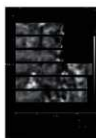
(2) 照国神社境内B地区

照国神社境内B地区はA地区西側の建物近接部にあたる。探査を実施できた箇所である。

【異常信号】

- ・目立った反応は見られなかったが、深度80cm付近にパイプのような反応を検出(第106図)

(3) 鹿児島市立長田中学校地区



第106図 平面画像
(探査深度 -800mm)



第107図 縦断面画像
(y=108cm)

鹿児島市立長田中学校地区は公道から中学校敷地内に入る校門及び通路にあたる。(第108図)

【異常信号】

- ・中学校建設時の影響なのか、全体的に反応が目立たなく均一的。(第109図)
- ・校舎と体育館を結ぶ渡り廊下(コンクリート敷)より終点側に異常点を検出。(第109図)
- ・縦断面17m付近より終点まで異常点を検出。(第110図)



第108図 鹿児島市立長田中学校探査箇所



第109図 平面画像(探査深度 -1000mm)



第110図 縦断面画像(y=144cm)

(4) 高野山最大乗院境内地区

高野山最大乗院境内地区は公道から寺院境内を横断する形である。境内は被覆するものはないが一部山道

部分が石畳となる。

【異常信号】

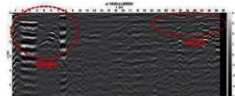
- ・ 始点から8mまで異常点を検出。道路に伴う地中埋設物と推定。(第112図)
- ・ 始点から15m付近を境に異常点の開始地点を検出。(第112図)
- ・ 縦断面始点から17m付近に小さな異常点検出。(第113図)
- ・ 縦断面20m付近より終地点で異常点を検出。(第113図)



第111図 最大乗院地区探査箇所



第112図 平面画像 (探査深度-1000mm)



第113図 縦断面画像 (y=84cm)

(5) 高野山最大乗院道路地区

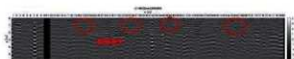
高野山最大乗院道路地区は境内南東側に位置する。ほぼアスファルト敷である。

【異常信号】

- ・ 幅が狭く特徴的な反応を検出できなかったが、深度2.0m付近に線状の異常点を検出。(第114図)
- ・ 縦断面で、直線的な異常点を検出。(特に始点から20~30mにかけて) (第115図)
- ・ 道路建設及び住宅に関連する埋設物等の異常点と推定されるものを多数検出 (第115図)



第114図 平面画像 (探査深度-2000mm)



第115図 縦断面画像 (y=84cm)

(6) 県歴史・美術センター黎明館駐車場

県歴史・美術センター黎明館駐車場はアスファルト敷の現状である。駐車場北側にある公衆トイレ付近から駐車場出入口付近までを探索した。(第116図)

【異常信号】

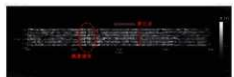
- ・ 深度1.0m~1.2mに円形の異常点を検出。(第117図)
- ・ 深度1.5m~1.7mで一直線の大きな異常点と土壌変化点を検出。(第118図)
- ・ 縦断面、始点から30m付近で反応の変化点を検出。(第119図)



第116図 県歴史・美術センター黎明館駐車場地区



第117図 平面画像 (探査深度-1200mm)



第118図 平面画像 (探査深度-1600mm)



第119図 縦断面画像 (y=216cm)

5 成果の総括

これまで各地区での探査結果を報告した。その中で特徴的な異常信号を検出した、照国神社A地区、県歴史・美術センター黎明館駐車場地区を中心に遺構と推定される部分について考察し総括とする。考察にあたっては鹿児島市立美術館所蔵 成尾常矩『鹿児島屋形及びその周辺図』1873年(以下絵図とする)を現況の都市計画図と任意位置で整合させ位置関係を推定する材料とした。



第120図 照国神社地区 絵図及び探査平面画像合成図

尺度調整は特に往時から変化の少ないと思われる内堀を基準に絵図と現況図でおおよそ整合させた。ただし位置、尺度とも任意であるため数m単位、大きいところは数十m単位で誤差があることを前提としている。

照国神社A地区では地表面よりの深度-0.65m、-1.00m、-1.50mにて異常信号を検出した。

-0.65mにて検出した『コ』の形状の反応は6.0m側の方形型の反応となり形状から遺構の可能性が高い。検出位置は絵図では広場上の空間となっているため、比較的新しい時期に帰属する可能性もある。

深度-1.00mにおける平面画像の反応は円形状であり大形の岩等が考えられる。深度-1.50mでは平面画像上の左右で反応に差異が確認された。面的に広がることから地質的に特徴が異なることが考えられる。こちらは絵図と探査平面画像を重ね合わせた結果、異常信号の位置が水路もしくは堀の位置に近い状況から堀の外側と堀内部の土中状況を示している可能性が高い。



第121図 鹿兒島城二之丸跡探査平面画像および空中写真

県歴史・美術センター黎明館駐車場地区では地表面よりの深度-1.20m、-1.60mで異常信号を検出した。深度-1.20mでは円形状の反応が散在している状況を検出している。異常信号の様相から岩や礫などと推察されるが規則性は観察されない。位置状況から建物に関連する礎石とも考えられるが判断材料が少ないため、低い可能性にとどめたい。深度-1.60mでは探査平面画像15m付近で横断する方向に直線的な異常信号と土壌変化点を検出した。前者は幅が0.5m程度の反応が数条見られる。これは

水道石管の反応と類似する。直線距離にして10m程度の反応検出であるが遺構の可能性を指摘したい。後者は縦断面画像(第121図)において水平方向に直線的な反応を示している。また始点方向にやや下り傾斜しているのも特徴であるが溝などのくぼみとは考えづらく、整地によって土壌性質が上下で異なる様相と考えられるが、遺構との判断はできない。上記以外の長田中学校地区、高野山最大乗院境内・道路地区では異常信号を捉えたものの、地下埋設物によるものと考えられる影響も重なり、遺構を推定するには至らなかった。

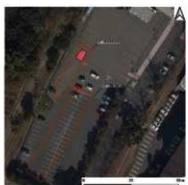


第122図 高野山最大乗院及び長田中学校地区 絵図及び探査平面画像合成図

6 2021年度追加調査

探査結果 概要

2021年度探査実施箇所は合計2か所である。(第123図)探査実施順序に沿って黎明館駐車場中央をA地区、駐車場西側をB地区として呼称し、探査結果を記載する。各地区の現況は駐車場として利用されており、アスファルトで舗装されているが、B地区は2021年度の発掘調査後に埋め戻した箇所が含まれるため舗装も新しい状況であった。



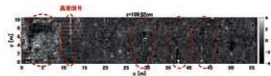
第123図 2021年度探査範囲位置図

A地区 長辺約52m、短辺10mの長方形に探査範囲を設定した。(第123図)2020年度探査範囲に接続する形である。

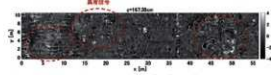
【異常信号】(第124～127図)

- ・地表下-1.09m x軸12m付近から45m付近に東西方向に延びる異常信号を検出。
- ・地表下-1.09m x軸10m付近南北で異常信号を検出。

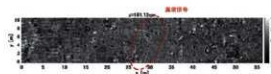
- ・地表下-1.67m x軸14m, y軸7m, x軸40mから53mに円形, 方形の異常信号を複数検出。
- ・地表下-1.67m x軸2mから10m, y軸0mから8mに馬蹄形の異常信号を検出。
- ・地表下-1.31mから-1.8mでx軸10m付近から28m付近にかけて円形の異常信号を検出。
- ・地表下-1.8m x軸28m付近北西から南東方向に延びる異常信号を検出。
- ・地表下-1.8m x軸40m付近円形の異常信号を検出。乱れた反応。



第124図 A地区平面画像 (探査深度-1099mm)



第125図 A地区平面画像 (探査深度-1673mm)



第126図 A地区平面画像 (探査深度-1811mm)



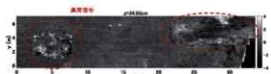
第127図 A地区断面画像 (y=444.0cm)

B地区 長辺約30m, 短辺6mの長方形に探査範囲を設定した。同地区は2021年度発掘調査実施箇所を含む形となる。(第123図)

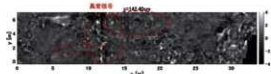
【異常信号】(第128～132図)

- ・地表下-0.3mにて2021年度発掘調査箇所の反応が、周囲土壌と比較して差異が顕著となる。
- ・地表下-0.18mから-0.42mでx軸22mから34m, y軸4m付近で、角を有する異常信号を検出。
- ・地表下-1.00mから-1.50mでx軸10mから15m間, 東西方向に延びる直線状の異常信号を2条検出。
- ・地表下-1.42m, x軸15mから20m, y軸6mの間で南北方向に連なるように円形の異常信号を検出。
- ・地表下-1.46m, x軸4mから10m, y軸1mの間で南北方向に延びる異常信号を検出。
- ・地表下-3.00m以下ではノイズの影響により判読不可となる。

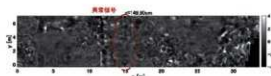
7 成果の総括



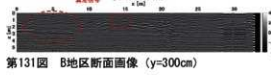
第128図 B地区平面画像 (探査深度-349.8mm)



第129図 B地区平面画像 (探査深度-1424mm)



第130図 B地区平面画像 (探査深度-1499mm)



第131図 B地区断面画像 (y=300cm)



第132図 B地区断面画像 (y=600cm)

前節では各地区での探査結果を報告した。本節では、特徴的な異常信号を検出した箇所について考察し、総括とする。考察にあたっては前年度探査結果報告でも使用した、鹿児島市立美術館所蔵 成尾常矩『鹿児島扇形及びその周辺図』1873年(以下絵図とする)を現況の都市計画図と整合させ位置関係を推定する材料とした。

整合作業はオープンソースである「QGIS Ver.3.18」を使用し、都市計画図を基準に築城から最も変化の少ない箇所と考えられる場を基に絵図を重ね合わせてジオリファレンス(幾何補正)した。ただし位置、尺度ともに場所によって数m単位, 大きいところは数十m単位で誤差があることを前提としている。また、検出されることが想定される遺構については、1983『鹿児島(鶴丸)城本丸跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(26)(以下本丸跡報告書), 2020『鹿児島(鶴丸)城二之丸跡E地点』鹿児島市埋蔵文化財調査報告書(84), 2020年度県立埋蔵文化財センター発掘調査成果(以下2020年度調査)を基に想定した。

想定される遺構の種類: 礎石, 地業, 排水溝, 水道石管
A地区では地表下-1.09m, -1.67m, -1.2～-1.8mの深さで異常信号を検出した。地表下-1.09mでは東西方向に直線状に走る異常信号を数条検出した。(第124図)西から東に向かって、やや検出深度が深くなる傾向もみられ

反応範囲は10mである。想定される構造物としては埋設管が挙げられる。遺構だった場合は水道石管と考えられるが判然としない。同じ探査深度ではx軸10m付近南北で顕著な土壌変化が見られた。(第124図) 絵図との比較において縄張りの区画とみられる箇所からの延長線上あたりため、関連を指摘したい。断面ではx軸10mから0mに向かって左下がりの反応が重層的に確認できる。(第127図)

地表下-1.67mでは円形、方形の異常信号を複数個検出したほか馬蹄形異常信号も確認した。(第125図) x軸15mから20m, y軸5mから10mで検出された円形の反応は、約1mで等間隔に見られることなどから建築物に関連する遺構の可能性を指摘したい。想定される遺構としては礎石や地業が考えられる。絵図においても今回探査エリアの比較で一棟、建物跡が見られた。(第133図) 馬蹄形の異常信号に関しては深度-1.81mにかけても継続的に反応が見られたため土壌の変化による境界面と考えられ、形状から人工的な作用によって生じた現象と推定される。

地表下-1.81mでは直線状の異常信号を検出した。(第126図) 上述した直線状の反応とは伸びる方向及び反応感が異なるが遺構の可能性を指摘したい。

B地区では地表面から地表下-1.81mまで2021年度調査の土壌変化を捉えることができた。2021年度調査では、地表下-1.5mほどで面的な調査を行った後、遺構面をポリエチレン製の土嚢や養生シートで被覆保護しているが、探査結果に上記影響は見られなかった。また縦断面画像では土壌変化の境界面がレンズ状に見られ、埋め戻しの様相を検出していると考えられる。(第128・131図)

地表下-0.18mでは方形の異常信号を検出している。(第128図) 反応は土壌境界面を示しているが、検出面が比較的浅いことから現代の構造物に関連するものと推定される。『本丸跡 報告書』掲載の写真図版では2021年度探査付近は建物が確認できるため、これら構造物に関連する可能性が高い。

地表下-1.00m以下から-1.58mで検出した直線状の異常信号は、A地区でも触れた埋設管と考えられる。(第129・130図) 反応は概ね探査範囲を横断する形で東西方向に見られる。

地表下-1.42m, x軸15mから20m, y軸6mの間で南北方向に連なるように検出した円形の異常信号は等間隔に見られることや、2021年度調査で検出した遺構面の深度に近いことから礎石や地業の可能性を指摘したい。(第129図)

地表下-1.46m, x軸4mから10m, y軸

1mの間で南北方向に延びる異常信号は弱い反応であるが、検出位置が2021年度発掘調査で検出した石組排水溝に接続する位置であるため同一遺構の可能性が高い。発掘調査範囲から4mほど南に伸びていると推定される。(第129図)

地表下-3.00m以下では反応にノイズが顕著になり判読は困難であった。

以上、探査結果の異常信号について遺構や判然としないものについて述べた。遺構と推定される異常信号はA・B地区で地表下-1.00mから-1.80mにかけての深度で検出された。A地区ではB地区に比べてやや深くなる傾向が見られたが、城山から海浜部に向かっての自然地形を考えた場合、検出深度の違いは正しい検出といえる。また第133図で示した絵図と探査深度-1673mmの水平探査画像では絵図上の通路範囲と異常信号範囲がややズレで見られるような位置関係が見られた。先にも述べた通り絵図の整合に関しては現状の堀を基準にしているため、城内の奥行に若干のズレが生じている可能性が考えられる。仮にx軸50m, y軸0mに絵図上の通路範囲を任意で合わせた場合、x軸10mから25m付近に見られる異常信号と絵図上の建物との距離も相対的に近くなるため、これら異常信号が通路や建物を示している可能性も考えられる。探査画像地表下-3.00m以下の反応については浅い箇所の信号を受信するため電波強度を上げてノイズが強調され有効なデータを取得することができなかった。

参考文献 1983『鹿兒島(鶴丸)城本丸跡』鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書(26) 2020『鹿兒島(鶴丸)城二之丸跡E地点』鹿兒島市埋蔵文化財調査報告書(84) 鹿兒島市総務局総務部 ICT推進室管理 鹿兒島市都市計画図オープンデータ 鹿兒島市立美術館蔵 成尾常矩『鹿兒島屋形及びその周辺図』1873年



第133図 A地区絵図重ね合わせ図
(探査深度-1673mm)



第134図 B地区絵図重ね合わせ図
(探査深度-1586mm)

第七章 総括

本章では、第1章～第6章の成果を踏まえ、鹿児島城跡の歴史や特色、今後の展望を述べる。

第1節 鹿児島城跡の構造

鹿児島城は、諸説あるが初代薩摩藩主島津家久によって南北朝期に築かれた上山城を利用して慶長6(1601)年頃に築城された城である。城は、城山の山城部分と麓の方形区画をもつ星形(居館)からなる。防御機能が重要であった築城当初は、本丸・二之丸は城山にあり、山城部分が「城」の中心であったが、時代が下るにつれてより政治的な機能が重要視されるようになり、藩主の居館や藩庁があった麓が整備されて「城」の中心となり、本丸や二之丸も麓に移った。

江戸時代を通じて鹿児島城の西側は上部に平坦面を得やすく、風雨により急峻に切り立つ防御に適した特徴をもつシラス台地の城山(上山城)、北を吉野堀、南は俊寛堀によって守られ、東側には鹿児島湾(錦江湾)が広がっていた。星形(居館)は内堀と石垣によって守られ、藩主やその妻子が暮らす屋敷(御殿・大奥)や藩庁、藩の役所があった。星形(居館)の北側には、多間櫓、居館入口の枳形には前面に御楼門、背後に唐御門という二重の門をもち、防御を固めていた。居館の周囲には、出丸的な存在の御殿や各種の奉行所のほか、一門や重臣の屋敷が配され、海岸部には交易の管理等を行う築地(出島)があった。城下町は、本丸と二之丸境の堀を挟んで旧御星形である内城のあった稲荷川沿いの北側(上方限)と海岸部を中心として甲斐川北岸まで南側(下方限)の両方に広がり、城山の山麓部や町外れには寺社が置かれていた(第89図・90図・第135～第137図等)。

城域については、不確定な部分もあるが、先行研究を踏まえた『鹿児島(鶴丸)城跡保存活用計画』の記載をもとに、城山の山裾に沿って3か所の出入口(大手口、新照院口、岩崎谷口)を結んだ線と、城山東側にある南北の堀(吉野堀、俊寛堀)に囲まれた範囲の推定地内約85haを扱っている(第15図・第89図・第90図)。

城域のうち、城山の公園化されている部分が国天然記念物及び史跡「城山」に、江戸時代後半の本丸跡の北・東側石垣と堀及び石橋が県指定史跡「鶴丸城跡」に、御殿跡の石垣及び石橋が同「私学校跡石垣」に指定されている。次節からは、鹿児島城の時代のごとの変遷を文献調査と発掘調査の成果から述べる。

第2節 鹿児島城の成り立ち～鹿児島城築城以前～

鹿児島城跡では、城域内における各地の調査で造成土から縄文時代～古墳時代の土器小片が希に出土することがあり、古くから人々の生活があったと考えられる。

中世には、矢上氏の一族である上山氏が南北朝時代に城山に上山城を築く。上山城では、当初官方であった上

山氏が室町幕府方であった島津氏に攻略され、島津氏の支配下に入る。その後、上山城は官方と室町幕府方の戦場になり、応永35(1482)年の段階では「上山古城」となるなど空き城となり、島津家に縁のある宝泉山寶忠寺の寺地となっていたようである(『鹿児島県史料 旧記雑録前編』2-1078)。その後、天文8(1539)年には、伊集院大和守が「鹿児島上之山を取り誘ひ自身がここに罷り移り」とあり(『鹿児島県史料 旧記雑録』前編2-2359)、島津家の重臣伊集院忠明が上山城に入って再び山城としての性格をもつようになり、禁原合戦の際には島津家第15代当主島津貴久の拠点となるなど(鹿大王里文庫、「文政五年鹿児島城図」)、その後再び整備されたと考えられる。

城山の麓には、戦国期の内城を中心とした城下町が広がっていた可能性があるが、正確なことはわかっていない。ただし、『三国名勝図会』の記載では、御殿にあった興国寺や隆盛院など鹿児島城築城時に少なくとも4つの寺院が城内から移転されたことが記されており、中世の城下町が広がっていた可能性がある。

発掘調査等 上山城跡は、築城当初は城山南西側が中心で、その後城山全体にまで拡張されていったと考えられている。その上山城の構造や縄張り図については、これまでも報告がなされている(鹿児島県教育委員会1987、木島1995、三木2011・2014等)。上山城を含む城山全体は近世期の増築・改築や近代以降の造成によって改変されており、具体的にどの部分が中世の上山城の遺構かは明らかになっていない。上山城二ノ丸跡の発掘調査では、箱堀の堀が確認されており、中世に遡る遺構が残存する可能性が把握された(第3章4)。

近年、麓の星形(居館)部分でも発掘調査でも中世の遺構・遺物が確認されるようになっており、大迫馬場・火除地では、南北方向に延びる杭列が確認され(第3章9)、大手口跡では中世の陶磁器が出土し(第3章6、第77図106～109)、琉球館跡においても五輪塔水輪が出土した土坑が確認されている(第83図)。琉球館跡の土坑では、墓塔などに用いられる五輪塔水輪が出土したことから、鹿児島城築城時に移転した寺院に関連する可能性がある(第3章12、第83図)。今後調査が進捗すれば、鹿児島城築城以前の城域の姿も明らかになっていくと考えられる。

第3節 鹿児島城跡の変遷(文献・考古学的調査から)

本節では、文献調査成果、発掘調査成果等をまとめ、鹿児島城跡の歴史の変遷を明らかにする。

(1) 江戸時代前期の鹿児島城～上山城と星形～

鹿児島城跡は、諸説あるが、慶長6(1601)年頃に築城された。初代薩摩藩主島津家久は、それまでの御星形

であった内城から、当時島津義久、島津義弘との三殿体制であったことを考慮し、当初はそれぞれの居城に近い給良市建昌城(瓜生野城)への移城を考えていた。その後、義久・義弘との協議を経て本拠としてきた鹿兒島に城を築くこととし『鹿兒島県史料 旧記雑録(後編)』3-1113等)、上山城を利用しつつ、麓に新たに方形居館である屋形(居館)を加えて鹿兒島城を築城した。

近世初期の鹿兒島城は上山城または鹿兒島城(藩内では御内城)と呼ばれ、山城と麓の屋形(居館)からなっていた。慶長期には藩主の屋形(居館)は山下に置かれ、山城部には慶長15(1610)年、島津常久(上山城主)に御城中警護を命じ、同17(1612)年から常久が上山城に在番し(鹿大玉里文庫、「文政五年鹿兒島城絵図」、同19(1614)年常久が亡くなるまで、番所が置かれることとなる『鹿兒島県史料 旧記雑録(後編)』4-1100)。また、城山の麓に屋形(居館)が整備され始めるが、依然として山城が城の中心であった。大手口は城山に通じ、屋形の正門は御楼門であった。鹿兒島城は、慶長末頃に一応の完成をみる、寛永16(1639)年に麓の御殿が増改築され『鹿兒島県史料 旧記雑録(後編)』6-48)、天和3(1683)年には二之丸作事(鹿大玉里文庫、「古記」- 天和3年12月17日条)が行われるなど、元和から寛政年間にかけて殿舎や御屋敷の増築、補修が続けられた。また、石垣の修補や堀の深漠も行われている。

江戸時代前期の城の認識については、宝暦6(1756)年「監察使問答集上」『鹿兒島県史料集 通昭録』1-「監察使問答抄」にみることができる。それによれば、「鹿兒島城は山城である。山城には本丸・二之丸があるが、櫓・塀・堀はない。南には大手口、北には岩崎口、西には新照院口があり、それぞれに御門があり、土番が任命されている。…本丸は大手口の上、二之丸は御下屋敷上の松林である。城から麓・下屋敷までの周囲は17町29間。具方(北東)の外堀の長さは2町7間、横幅は10間半、深さは2丈。東の裏通りの長さは1町27間。北方の入は1町28間。南方の入は1町47間。西方は二之丸から下山際までで1町20間。東の裏通り堀は町45間、横幅は9間、深さ5尺。北方の堀の入は1町20間、横幅9間、深さ1丈2尺。南方の堀の入は1町57間、横幅9間、深さ5尺。橋は櫓門前の一つで、北方の長屋門前は土居を通して橋は無い。全て一重構であり、外郭は無い。」と記され、鹿兒島城の範囲と構造を知ることができる。この史料によると、宝暦6(1756)年段階では既に麓の屋形(居館)にも心が移りつつあるため実態とずれている部分はあるものの、薩摩藩の認識としては、鹿兒島城跡は「山城」で、「本丸」「二之丸」は山城にあるとされている。

次に、一部は江戸時代中期まで下るもの、江戸時代前期の鹿兒島城の姿がわかる主要な絵図から城山と麓の屋形(居館)との関係をみる。鹿兒島城が描かれた最も

古い絵図である寛文10(1670)年「薩摩御城下絵図」(第135図①)では、城山(上山城)を背にして、北側曲輪を「大内守殿居宅」、南側曲輪を「薩摩守殿居宅」としている。屋形(居館)の堀は東側のみで、薩摩守殿居宅の東側面に面して北から多間櫓、御楼門、塀、御角櫓が描かれている。「鹿兒島城」の記載は、城山に書かれており、城の中心は城山であるという意識がうかがえる。城山には複数の建物が描かれ、城山への登り口である現在の大手口に「大手門」が描かれる。また、北側曲輪前面には、武家儀礼である犬追物が行われる「犬追物馬場」鹿兒島城絵図差出一件が描かれる。

第135図①に続く絵図としては、元禄9(1696)年「鹿兒島城絵図控」(第135図②)、正徳3(1713)年「鹿兒島城絵図差出一件」(第135図③)、宝暦6(1756)年「薩摩国鹿兒島城絵図」(第135図④)がある。第135図②・④では、本丸・二之丸は城山山頂に、大手口は城山の麓にあり、城山が城の中心である、という意識がみえる。麓の屋形(居館)をみると、第135図②では北側曲輪を「居所」、南側曲輪を「修理大夫居所」としている。第135図③では北側曲輪が「薩摩守殿居宅」、南側曲輪が「嫡子部屋住之居」としている。第135図④では、北側曲輪に「又三郎居宅」、南側曲輪に「嫡子部屋居之内居宅当分大隅守罷居候」とある。各絵図で堀は北・東・本丸南側にある。本丸南側の堀は、山手で2回折れている。石垣は前面に描かれ、建物は御楼門、唐御門、御角櫓、本丸跡東側石垣に面した多間櫓、本丸跡北側石垣にも面した櫓門(北門)と多間櫓が描かれる。第135図②・④では本丸・二之丸が城山に記載されることは、「監察使問答集上」での鹿兒島城は「山城」であるとの記載を裏付ける。このように、江戸時代前期の鹿兒島城は、山城を城の中心として認識していたと考えられる。

また、第135図①～④の絵図に描かれる鹿兒島城の範囲は、概ね「監察使問答集上」の鹿兒島城の記載と重なり、これが鹿兒島城本来の範囲と考えられ、現在の『鹿兒島(鶴丸)城跡保全活用計画』で取り扱う「鹿兒島城跡」の範囲となっている。

発掘調査等 城山には上山城のものと考えられる複数の平坦面や堀切、土塁が築かれている。発掘調査で確認された16世紀後半の上山城二ノ丸の薬堀の堀はこの時期も維持されていたと考えられる(第三章4)。また、城山の入口である大手口跡では、元禄9(1696)年「鹿兒島城絵図控」侍屋敷門等の建物に関係すると考えられ、鬼瓦等の瓦が出土している。大手口跡では、第2基の建物基礎の坪地業もこの時期の遺構と考えられる(第三章5)。

麓の屋形(居館)部分では、御殿跡で櫓口や鉄洋が多く出土しており、蹄鉄や馬具等、牛馬行政に関連する



② 元和9 (1606) 年
「關原城跡圖説」 嶋義孝文書
東京大学史料編纂所蔵



④ 天明6 (1756) 年
「關原城跡圖説」 嶋義孝文書
東京大学史料編纂所蔵



① 寛政10 (1670) 年頃
「關原城下絵圖 (關原城)」 關原島津立石屋製鐵



③ 正徳3 (1713) 年
「關原城跡圖巻田一斗」 (部分) 嶋義孝文書
東京大学史料編纂所蔵

第135図 江戸時代前期の鹿野鳥城の姿を描いた絵図

鍛冶が行われていた可能性がある(第三章5)。名山遺跡では、侍屋敷の境の地下水と考えられる排水溝が確認された。大迫物馬場・火除地では、VI層で柱穴や杭列が伴う溝状遺構、V層で溝状遺構や柱穴群、瓦溜り、不明遺構などが確認された。VI層の杭列は、それぞれの杭が六角形に面取りされた装飾性の高い杭を用いており、第135図①に描かれた大迫物馬場の欄列と考えられる。(第三章9)。屋形(居館)では、全体的に17世紀に遡る遺構が確認されていない。

(2) 元禄の大火と「明地(火除地)」の設置

鹿児島城下では、度々火災が起こっており、文献に記載のあるものだけで26件確認できる(鹿児島県立埋蔵文化財センター2021)。特に、元禄9(1696)年の大火は、鹿児島城全体に大きな影響を及ぼした。

同年は火災が多く、4月23日の上浜町から出火した火災では、強風のため城下だけではなく鹿児島城にも延焼し、本丸(楼門・御角櫓・焼物蔵・御兵具蔵・対面所・評定所蔵・御書院蔵・御文書蔵・居所等)と二之丸の一部が被災し、被害は城下の肝付屋敷で止まった。鹿児島城のほか、土屋敷54か所、土家敷854か所、町屋敷203か所、一町家敷550軒が被災したとされ、甚大な被害をもたらした(元禄の大火)(東大島津家文書、「鹿児島城絵図控」)。宝永4(1707)年に「本丸新工作終了。御座所を御下屋敷より本丸へ移す」(鹿大王里文庫、「古記」-宝永4年4月18日条)とあり、本丸では復興まで10年以上を要している。

城下の度重なる火災のため、正徳3(1713)年に、被災した本丸・二之丸の前面の区画を城への延焼を防ぐための火除のための明地(火除地)と定め、その旨を幕府に願ひ出ている(東大島津家文書、「鹿児島城絵図差出一件」等)。また、火除地のほかにも城下の要所に火見櫓等を設け、城下の防災に努めた。第135図②と④を比べると、二之丸前面にあった「侍屋敷」が「明地(火除地)」となっていることがわかる。

発掘調査等 大迫物馬場・火除地においては、焼土や焼けた瓦等を多量に含むこの時の火事処理槽(IV層)が確認された。この層は、正徳3(1713)年に設置された明地(火除地)に伴う造成層と考えられる(第三章9)。また、本丸跡で確認された遺構は、大半が18世紀以降に新たに作り替えられたものであることが確認された(鹿児島県立埋蔵文化財センター2022)。さらに、本丸跡の石垣についても元禄の大火以降に大半が作り替えられたものであるとの指摘もある。17世紀代の麓の屋形(居館)で遺構があまり確認できないのは、元禄の大火による焼失やその後の片付けや建替えによって多くの遺構が失われたからであると考えられる。

(3) 江戸時代中後期の鹿児島城～屋形の充実～

江戸時代中期以降は、藩主の居館や藩庁である麓の屋

形(居館)が鹿児島城の中心となり、拡充された。

第4代薩摩藩主島津吉貴～第7代藩主重年の代には、家格の固定化や武士身分の引き締め、城下を方眼で区画し、稚児教育の強化を図るなど藩政が充実する。その中で、鹿児島城では、門や各諸設・建物等の呼称の決定や改称の記載が増加する。城山が美称で鶴丸山と呼ばれるものもこの頃からであると考えられる。また、麓の屋形(居館)では本丸の御角櫓や石垣の修復、南泉院・東照宮の造立など整備が進む。

この時期、整備拡張されたのが二之丸である。当初の二之丸は、現在の二之丸跡の中に本丸に近い北から二之丸(現在の県立図書館付近)、御台所、御下屋敷(現在の市立美術館付近)と建物が並んでいたように、それぞれに門があり、北から二之丸御門、御台所御門、下屋敷御門があった。御下屋敷には、吉貴など隠居した藩主が暮らすこともあり、その際には作事が行われたようである(享保6(1721)年『鹿児島県史料 旧記雑録(追録)』3-1263)。また、享保8(1723)年にも大規模な庭普請も行われている。

延久3(1747)年に第5代薩摩藩主島津維豊が隠居した際には、その側室である於喜久(妙心院)が御台所跡に屋敷を建てそれが山下御用屋敷と呼ばれるようになる(『藩法集8 鹿児島藩』(下)-2577)。

第8代薩摩藩主島津重豪の代になると、天明5(1785)年に御下屋敷とその北側の山下御用屋敷を合わせて二之丸と呼称するようにし(『藩法集8 鹿児島藩』(下)-2579)、それぞれの門の呼称を「二之丸御門」→「矢来御門」、「南口御門」→「御台所御門」、「御下屋敷御門」→「二丸御門」、「御下屋敷浦御門」→「南御門」、「御勘定所門」→「御役所御門」、「随神門脇御中門」→「花園御門」へと改称した(『鹿児島県史料 旧記雑録(追録)』6-2196)。これにより、本丸北側にあった旧二之丸から旧御下屋敷と二之丸殿舎の中核が移された(二之丸の拡大)。この後、御下屋敷が二之丸殿舎へ替えて暮られ(『鹿児島県史料 旧記雑録(追録)』6-2119)、御台所や二之丸御庭庭園の普請、旧二之丸の外御庭としての整備、二之丸南端に役所機能をもつ曲輪の設置など大規模な整備が行われる。さらに、重豪は鹿児島城全体の整備を進め、安永2(1773)年以降になると、防災のために設置された二之丸前面の明地(火除地)に聖堂・医学院・造士館(藩校)・演武館(武道道場、大迫物馬場も設置される)・諸役屋敷(御記録所・寺社奉行所・町奉行所等の役所)が創設された。さらに、堀や川に架かる橋への門・関所の設置、城下町に治暦の屋形である明時館(天文館)の設置、琉球飯屋を琉球館とするなど諸施設の改称を行い、屋形(居館)とその周辺を拡充した。こうした様々な事業や人材育成が幕末の薩摩藩の近代化を進める基礎となっていた。



⑤天保14(1843)年
「天保年間鹿児島城下絵図」鹿児島市立美術館蔵



⑥明治6(1873)年
成尾常矩「鹿児島屋形及びその周辺図」(部分)鹿児島市立美術館蔵
第136図 江戸時代中後期の鹿児島城の姿を描いた絵図

第10代薩摩藩主島津斉興の代になると、本丸周辺が整備され、文化7(1810)年に御楼門橋が板橋から石橋に『鹿児島県史料 旧記雑録(追録)』7-1075)、天保14(1843)年には、御楼門が建て替えられた『鹿児島県史料 斉宣・斉興公史料』-443)。また、天保年間(1830~1843)以降とされる本丸の庭園(築山・御池)もこの時期に造営された(第137図古写真⑦)。

第11代薩摩藩主島津斉彬の代になると、嘉永4(1851)年に「御城内動植館内(花園)(外御庭)に精練所及び反射炉雛形を制作」『鹿児島県史料 斉彬公史料』1-202)、安政4(1857)年に「鹿児島城御本丸御休息所より二之丸探勝園御茶屋まで電信を引く」『鹿児島県史料 斉彬公史料』4-204)といった近代化のための実験等が行われた。斉彬は、御花園地区と呼ばれた外御庭(旧二之丸)、御台所を生活拠点とし、外御庭には、櫓(ほしいい)製造を行った御台所や家臣に訓示をした御稽古所、焼き物の実験と新たな釉薬を作って職人に資料提供を行う御茶屋、水中訓練をする水泳場などを外御庭御茶屋周辺に整備し、天保通寶や琉球通寶(文久2(1862)年に薩摩藩が琉球救済の名目で幕府に3年間の期限付きで鑄造する許可を得て鑄造した銅銭)の鑄造実験や蒸餅やビスケット作り、新たな釉薬作り、ガラスの製作等を行う。また、自ら先導していた焼き物やガラス製造等はここで試験運用し尚古集成館で発展させるなど、集産館事業の実験を行っていた(徳永2010)。さらに、嘉永6(1853)年「鹿児島城下の海岸に台場の築造(大門口台場、祇園洲台場)を開始」(その後、安政元年に弁天台場、安政3年に新波止台場、安政4年弁天台場改築)『島津斉彬文書』(下)-174)など海岸防備を図る。

第12代薩摩藩主島津忠義の代では、因父島津久光が二之丸に入ることになり、その際に作事が行われた『鹿児島県史料 忠義公史料』1-38・39)。文久3(1863)年には、「薩英戦争中に敵弾が来た箇所について。御城山、数知れず。御本丸大奥御二階1個、破裂する。本丸板之間御中門脇1個、破裂せず。御楼門2個、破裂。二ノ丸庭・浩然亭各1個、破裂せず。御台所庭1個、破裂せず。御城外護摩所1個、破裂せず」『鹿児島県史料 忠義公史料』2-433)と被害を被った。

天保14(1843)年「天保年間鹿児島城下絵図」(第136図⑤)には鹿児島城下町全体の諸施設が描かれ、さらにそのそれぞれに施設名が書かれており、重豪の整備以降の城下町の様子がわかる。また、明治6(1873)年「鹿児島城下町及びその周辺図」(第136図⑥)では、鹿児島城下の施設が詳細に描かれており、城内の最終段階の施設配置がわかる。18世紀後半の絵図では、麓の屋形(居館)に本丸・二之丸が書かれるようになり、これらが絵図の中心になっている。一方、城山(上山城)は山として描かれることが増え、城山内の施設は一部を除き

描かれなくなる。18世紀後半以降に麓の屋形(居館)が充実するにつれ、城としての中心も麓に移ったものと考えられる。

発掘調査等 上山城である城山では、上山城二ノ丸跡では、18世紀代箱堀の堀が栗研堀に作り直され(第三章4)、大手口でも第Ⅲ期、第Ⅳ期の遺構が確認されるなど(第三章5)、城の中心が麓の屋形(居館)に移っても上山城の防衛機能は維持されていたと考えられる。

屋形(居館)では、本丸跡で明治6(1873)年『鹿児島城本丸殿舎配置図』に記された麒麟之間、奥御所院、御納戸といった御殿内部の建物や、令和2年度に復元された御楼門、御兵具所(多門櫓)や唐御門、御角櫓等の石垣に接する建物に伴う坪地業や布地業、基礎石列などの基礎構造、石管水道や排水溝等の水利遺構、石列、石垣、裏込め等の石垣関連遺構、庭園遺構(築山、池)、能舞台橋掛り跡を確認した(第三章1、第137図)。二之丸跡では、櫓作りの焚き窯場と考えられるレンガ積遺構がある御台所跡や陶磁器製造を行っていた茶屋の建物跡、御稽古所跡、水泳場が確認されており、この場所が、斉彬が近代化事業のために整備した生活拠点及び実験場の一部であったことが確認された(第20図、鹿児島県立埋蔵文化財センター2022)。二之丸C地点では、御下屋敷に関連する可能性のある排水溝やその後の二之丸敷と考えられる建物の礎石や基礎石組みの一部、二之丸御門の石畳が確認された(第三章2-⑤、第19図)。その他、垂水・宮之城島津家屋敷跡(第三章11)、造士館・演武館跡(第三章7)でも坪地業や布地業などの建物基礎や排水溝等の遺構が確認されている。

(4) 近代の鹿児島城～鹿児島城の「廃城」～

鹿児島城には、明治2(1867)年の版籍奉還後には知政所が置かれたが、明治3(1870)年には、鎮西鎮台第二分営が設置されたことで、政治拠点としての役割を終えた。明治5(1872)年の古写真(第137図)の段階では、城の建物はほぼ完全な形で維持されており、鎮西鎮台第二運営は鹿児島城の建物をそのまま使用していたようである。明治6(1873)年『全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方』の段階でも、鹿児島城は「存城」と位置づけられ、引き続き軍事施設として利用されることとなった。しかし、同年本丸跡の建物は失火により焼失した(国立公文書館、「公文録・明治六年・第三十八巻・明治六年十二月・陸軍省何下」)。

明治7(1875)には、御殿跡に西郷隆盛が私学校を設立した。その後、明治10(1877)年に西南戦争が勃発すると、鹿児島城下町は政府軍に占拠された。その城下町を取り戻すために薩軍が官軍を攻めた5~6月の戦いと西南戦争の最終段階である9月の城山攻防戦で戦場になった。明治4(1871)年の薩摩置業後も鹿児島城二之丸には久光が居住しており、二之丸は

引き続き島津邸として使用されて建物も残っていたが、9月の城山攻防戦の際に政府軍の砲撃により焼失した(国立公文書館、「陸軍省大日記」-軍機要領之部明治10年9月22日)。

こうして藩政期の建物が焼失した鹿児島城跡には、一時的に仮兵營が置かれた時期もあったが、その後、教育施設や病院等が設立された。軍の拠点は伊敷に置かれ、鹿児島城本丸跡が「陸軍省元所属不用地」として明治41(1908)年に払い下げられたことで、鹿児島城は軍事拠点としての役割も終え「廢城」となった(太田2020)。

発掘調査等 城山では、金属探知機調査により、西南戦争の際の2か所の堡塁と2か所の胸壁、2か所の堡塁状遺構が確認された。2か所の堡塁状遺構は非常に大型で、それぞれ「観測指揮所」、「砲台跡」の可能性がある。また、エンフィールド銃の銃弾や薬莖、刀装具等が出土している(鹿児島市2020)。

麓の屋形(居館)跡では、これまで西南戦争の遺跡として御殿跡の私学校跡石堀に残された大量の銃弾痕が知られているが、平成28年度の発掘調査では、本丸跡の御門跡周辺の石垣に、西南戦争の際のものと考えられる砲弾痕・銃弾痕(第二次世界大戦時のものも含まれると考えられる)が確認され、四斤三砲の砲弾片やエンフィールド銃とスナイデル銃の銃弾が出土した(第17図右列上・中、第137図、鹿児島県立埋蔵文化財センター2020)。

第4節 主要な出土遺物

(1) 陶磁器(第138図)

城内での生活を彩る多種・多様な陶磁器が出土している。本丸跡を中心としてその傾向をみる。

まず注目されるのが、薩摩藩の御用窯である堅野窯系の製品の多さである。17世紀代では、肥前陶器(唐津)とともに慶長年間(1596~1614年)初期から茶会記に記録があり、九州の中でも特に茶会等で用いられた茶入が大量に出土している。また、堅野窯系の製品では、白薩摩と呼ばれる白色陶胎や灰色陶胎、宋胡録写や象嵌(三島手)の製品が多くみられる。白色陶胎の製品では、小坏や碗等のほか、水注や花瓶・香炉など茶陶や獅子等が彫られた脚が付く鉢や花入、型打ち成形の皿など多様な種類の製品がみられ、中には島津家の家紋である丸に十の字が書かれたものも出土する(第29図右)。宋胡録写や象嵌(三島手)の陶器では、小型製品から大型製品まで多様な種類がある(第16図中央右、第91図153~159)。その他、陶器では幕末~近代の海外輸出用としても製作された錦手や金襴手とも呼ばれる色絵薩摩が出土している(第91図150~152)。

その他の出土した国産陶磁器の特徴としては、鹿児島県内では鹿児島城跡以外ではほとんど出土しない初期伊万里が見られること、大名間の贈答品の可能性がある筑

前や肥後人吉の茶陶と考えられる陶器が出土すること、琉球の土瓶と鉢(植木鉢)が多く出土すること、肥前有田や肥前系土師の上手の大量の色絵製品が目立つこと、薩摩磁器と呼ばれる藩内で生産された磁器の出土が目立つことが挙げられる。

輸入陶磁器では、中国龍泉窯系青磁の水注や明代~清代の景德鎮窯系磁器や漳州窯系磁器が出土した。また、本丸跡では、ドイツラインラウト地方の塩釉拓器瓶、垂水・宮之城島津家ではイギリスのドーソン窯跡の硬質陶器皿(第30図左の前側)、城下町の浜町遺跡ではオランダのマーストリヒト、P・レグラー窯製のプリントウェアなど、19世紀代のヨーロッパ陶磁器が出土している。

(2) 瓦(第139図)

大量に出土した瓦については、軒瓦を軒丸瓦101種類、軒平・軒杖瓦143種、小菊瓦17種類に分類し、その歴史の変遷を明らかにした。また、刻印瓦についてはその刻印集成(全163種)を行った(鹿児島県立埋蔵文化財センター2022)。その他、本丸跡の御門や多門櫓に貼られた海鼠瓦や鬼面の鬼瓦、凸面にタタキ目がある朝鮮系瓦なども出土している(第16図左、中央左)。

鹿児島城跡では、17世紀前葉の瓦の出土しており、築城時から瓦葺き建物が造られていた可能性が高い。初期の瓦には、朝鮮系と思われる独特な資料(鹿児島周辺生産か)と一般的な日本の瓦(鹿児島周辺生産と他地域からの搬入品)がある。

17世紀後半には朝鮮半島系の技術で製作された陶器瓦が含まれる。その文様は特異であり、朝鮮系と推定される瓦と共通するものが多く見られる。

18世紀初頭の瓦では、近世でありながら瓦当貼付技法の軒平瓦が目目される。これらには大型資料が多く、元禄の大火以降の普請に伴う可能性が高い。また、この時期以降、大坂系の瓦当文様が多く出土するようになる。

椀瓦の出現時期は、鹿児島城では19世紀に下る可能性が高い。この時期の軒杖瓦軒平部の瓦当文様には、中心飾り中央が橋様に見える、18~19世紀代の「大坂式」に酷似するものが見られるほか、大坂式文様をアレンジした独自の文様が出現し、以降近・現代まで継続する。

鹿児島城跡の瓦は、朝鮮半島や大坂など他地域からの影響を受けながら変化している。これら瓦の変化の時期は、鹿児島城跡の元禄の大火から復興や第8代薩摩藩主島津重豪による屋形(居館)の整備以降の時期など、鹿児島城跡の変化の時期と概ね重なっている。

また、17世紀~18世紀前半には、長崎県長崎奉行所跡等の長崎瓦や熊本県岡岡城跡の天草瓦と同范と考えられる瓦が出土した。このうち、長崎瓦では花十字紋軒丸瓦が二之丸G地点で4点(第18図)、本丸跡で2点出土している。これらは、第2代薩摩藩主島津光久母である永俊尼カタリナに関連するキリシタン瓦と言われている

たが、両地域の複数時期の瓦が搬入されていることから、宗教的な意味にとらわれない慎重な検討が必要である。また、刻印の調査では、鹿児島城出土瓦の中に、他地域から搬入された瓦が含まれていることも確認された。

(3) その他の重要遺物 (第137図)

本丸跡では、オランダの書物を参考にして製作されたと考えられる石製の日時計が出土している(鹿児島県立埋蔵文化財センター2020, 第137図下)。

第5節 鹿児島城跡の特徴と歴史的価値

これまでの調査成果を踏まえ、鹿児島城跡の特徴と歴史的価値について述べる。

山城と籠の屋形からなる城 鹿児島城跡は、山城である上山城(城山)と籠の方形居館である屋形(居館)からなる城である(第89図・90図・第135～第137図等)。

上山城が位置する城山は、始良カルデラ噴出物の入戸火砕流堆積物から成るシラス台地である。シラス台地は、上部が平らなため曲輪を形成する平坦面を得やすく、加工が容易で、風雨により斜面は垂直方向に急峻に切り立つ防壁に適した特徴をもつ。こうした特性を活かして上山には曲輪と考えられる平坦面が複数造成されており、防壁制は確保されていた。さらに、籠には湧水がある。

屋形(居館)は、北を吉野堀、南は俊寛堀によって守られ、東側には鹿児島湾(錦江湾)が広がっていた。屋形の中心部分(本丸跡)は、内堀と石垣によって守られ、居館の北側には、瓦葺きの礎石建物である多間櫓、居館入口の楕円形には前面に御楼門、背後に唐御門という二重の門をもち、防壁を固めていた。また、御楼門前には段差があり、現在の国道10号よりも南側は、一段低くなっており、城下町からは石垣は現在よりも高く見えるようになっていた。

天守がないことや高層の櫓が少ないことで過小評価されることがあるが、鹿児島城跡は、山城と籠の屋形(居館)という中世以来の伝統的な構造に、石垣や礎石建物、瓦といった築城当時の最新の技術を融合させた複合的な要素をもつ城であったと考えられる。また、シラス台地である上山城を背後に持つことで、防壁制も決して低くはなかったと考えられる。

詳細に書かれた絵図 鹿児島城跡の絵図は複数残されている。特に18世紀以降の遺構については、第136図⑤と⑥で描かれた配置のとおり確認されており、絵図を活用した発掘調査が有効であることが証明された。今後は、絵図や豊富な文献史料をもとに発掘調査だけでなく、地下レーダー探査等の多様な調査を併用することで、さらに鹿児島城跡の全容に迫ることが可能である。

島津家の文化面が窺える遺構 近年、屋形(居館)では、犬追物馬場・火除地跡で犬追物馬場の櫓列の一部(第28図左)、本丸跡の能舞台跡の櫓構り(第17図下)や

庭園遺構(同図右下)などが確認された。また、藩校である造士館や武術道場である演武館も一部が発掘調査によりその構造の一部が明らかになっている(第25・26図)。島津家は武力で幕末に近代化を行ったことで著名であるが、これらの発見は、島津家が伝統芸能や文化面にも力を入れていたことの証明になる。

建物の基礎構造 鹿児島城跡で確認されるほとんどの建物は、坪地業と呼ばれる基礎構造をもつ。坪地業は、穴を掘り、その中に焼いたたり潰したりした凝結凝灰岩の石材を敷き詰めて固める基礎構造である。また、それを列状にした布地業もある。礎石はこれらの基礎構造の上に載っている。溶結凝灰岩は、圧力を受けると固まって強固になる特徴をもっており、この基礎構造は、そうした石材の特徴を活かした基礎構造を構築できる土木技術と知識があったことを示している。

水利関係の遺構 鹿児島城跡の頃の城内の用水は、城山の山際に出る湧水を集め、井戸を掘っていたとされる。享保8(1723)年には、城山反対側の冷水から城内を掘削して本丸跡裏側の現在の「近衛の水」の地点まで通した冷水用水が開削され、冷水の湧水が鹿児島城内に送水されるようになる。また、天保10(1839)年に水道の大改造を行い、城内だけでなく、城下町の送水管や給水施設も改修された(鹿児島市教育委員会2020)。

鹿児島城跡では、多くの地点で細長い凝灰岩の中央部を削り貫いて接続した石管水道(主に上水)、平らな底石に2段以上の石垣状の側石を組み合わせた排水溝、井戸、水を地中から地上に汲み上げる高脚など、様々な水利関係の遺構が確認されており、水利を重視していたことがわかる(第三章5)。

冷水水道の開削後には、籠の屋形(居館)で池を伴う庭園が造営されるようになり、本丸跡では天保年間(1830～1843)年間以降に造営された御池を伴う庭園が(古写真は第137図③、遺構写真は第17図下)、二之丸C地点で天明5(1785)年に造営された二之丸御池が確認された(第三章2⑤)。

本丸跡では、石垣周辺に排水溝を巡らせ排水を集約し、南北の石垣からそれぞれ排水していた。また、城下町から正面にある東側の石垣では、低い位置に排水口を設置した。これは、城下町から排水に関する施設が見えないようにする工夫であると考えられる。このように、水の流れを管理することは、城の維持管理にとって重要である。こうした水の流れの管理は、本丸だけでなく、鹿児島城全体で行われていたと考えられる。今後は、確認された石管水道や排水溝等の水利関係の遺構を鹿児島城全体で整理することで、その水利機能が明らかになるであろう。

陶磁器からみえる上級武士の暮らし 出土した多くの優品からは、上級武士の暮らしが窺えるとともに、中国

陶磁器や肥前系、薩摩磁器の大皿や薩摩焼を中心とした茶陶の豊富さは、武家儀礼や会食、茶の湯の席で利用が考えられ、鹿児島城跡に藩主がいる城としてふさわしい機能があったことを示すものである。また、薩摩藩内で焼かれた陶磁器の出土は、過去に調査された窯跡出土陶磁器の消費地での様相を明らかにする上で需要である。

特色ある瓦 鹿児島城跡では、朝鮮半島系の技術で製作された陶器瓦や18世紀初頭の瓦当貼り付け技法の軒平瓦など、他地域ではみられない特徴的な瓦が出土していること、屋形（居館）一番が整備される18世紀以降に、大坂系の瓦当文様をもつ瓦が生産されるようになったこと、家紋瓦は丸に十の字ではなく牡丹紋が選ばれていること、など多くのことが明らかになった。また、胎土分析や瓦当比較、刻印の分類から、長崎瓦や熊本瓦(天草瓦・土山瓦)など、他地域の瓦が搬入されていることも明らかになった(第139図)。今後は、他地域からの瓦の搬入の背景や鹿児島県内での瓦生産の実態を明らかにしていくことで、さらなる研究の深化が期待できる。

海を越えた交流を示す遺物 出土した中国陶磁器やヨーロッパ陶磁器、オランダの書物を参考にしたと考えられる石製の日時計は、琉球や長崎を通じた薩摩藩の海外交易を示す遺物である。また、出土した多くの琉球陶器の土版と鉢(植木鉢)は、薩摩藩と琉球の深い関係を裏付ける。

近代化関連の遺構 二之丸跡の外御庭では、第11代藩主島津斉彬以降の近代化に関連する遺構が確認された。この場所は、尚古集成館等の磯地区での近代化事業の実験場であり、薩摩藩の近代化に大きく貢献している。今後は、さらなる関連遺構の確認や鹿児島城跡の近代化遺産としての位置づけが必要であろう。

西南戦争関連の遺構と遺物 城山や本丸跡の御樓門周辺の石垣や御殿跡の私学校石塀の西南戦争の砲弾痕・銃弾痕、出土した砲弾片や銃弾は、西南戦争の激しさや凄惨さを伝える貴重な遺構と遺物である。特に、御樓門周辺は、西南戦争以外に文久3(1863)の薩英戦争や第二次世界大戦でも被弾しており、御樓門周辺の石垣は、3度の戦争を経験した全国的にも貴重な石垣である。こうした遺構を遺していくことで、後世の人々に戦争の実態を伝えることができる。

第6節 今後の課題と展望

現在、多くの鹿児島県民には、鹿児島城跡本来の範囲や構造、特徴はよく知られていない。そのため、鹿児島城は天守をもたない防御制の低い、石高の割には小規模な城であったと認識されてしまっている。さらに、その歴史的価値も十分には周知されていない。

令和2年度に復元された鶴丸城跡御樓門は、様々な形で鹿児島県民の興味・関心を引き起こし、鹿児島城跡の

注目度は高まっている。今後は、鹿児島城の本来の姿や歴史的価値を様々な形で発信していく必要がある。

鹿児島城や鹿児島市下町は、度々火災や戦火に見舞われたこと、現在居残っていることから、多くの遺構が失われたと考えられていた。しかし、発掘調査を行うと予想以上に遺構が残存していることが確認できた。今後は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲の拡大などの法的整備、国や県、市の指定史跡の範囲拡大等のさらなる保護措置が求められるとともに、鹿児島城跡の全容を解明のための計画的な調査も必要となろう。

主要引用・参考文献(遺構・全体)

- 太田寿幸2020『鹿児島城の近代』『鹿児島城の城跡』黎明館
- 鹿児島県教育委員会1982『鹿児島(鶴丸)城本丸跡』鹿児島県教育委員会発刊調査報告書(26)
- 鹿児島県教育委員会1990『鹿児島城二之丸跡(遺構編)』鹿児島県教育委員会発刊調査報告書(65)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『重木・宮之城島津家原形跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発刊調査報告書(48)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2020『鹿児島(鶴丸)城跡跡一御樓門周辺一』鹿児島県立埋蔵文化財センター発刊調査報告書(2005)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2021『鹿児島城跡(大迫物馬場・火除地)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発刊調査報告書211
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2022『鹿児島(鶴丸)城跡一北御門・御角櫓・御舞台ほか一』鹿児島県立埋蔵文化財センター発刊調査報告書(214)
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館2001『鶴丸城石垣補修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿児島城御角櫓跡『黎明館調査研究報告書第14集』
- 鹿児島県歴史・美術センター黎明館2020『鹿児島城の城跡』
- 鹿児島市2021『天然記念物及び史跡城山保存活用計画』
- 鹿児島市教育委員会1984『鹿児島(鶴丸)城二之丸跡』鹿児島市埋蔵文化財センター調査報告書第5集
- 鹿児島市教育委員会1988『名山道跡一原内運動場建設事業等に伴う第1次〜3次緊急発掘調査報告書一』鹿児島市埋蔵文化財センター調査報告書第8集
- 鹿児島市教育委員会1992『造土版・廣武館跡』鹿児島市埋蔵文化財センター調査報告書第13集
- 鹿児島市教育委員会1995『甲突川川底道跡一玉江橋下一』鹿児島市埋蔵文化財センター調査報告書第19集
- 鹿児島市教育委員会2000『鹿児島(鶴丸)城二之丸跡6地点』鹿児島市教育委員会発刊調査報告書第28集
- 鹿児島市教育委員会2002『名山道跡一名山小学校校庭跡調査事業に伴う第5次埋蔵文化財確認調査報告書一』鹿児島市埋蔵文化財センター調査報告書第38集
- 鹿児島市教育委員会2003『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書一共同研公園・琉球館跡一』鹿児島市埋蔵文化財センター調査報告書第39集
- 鹿児島市教育委員会2004『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書二一玉皇坂跡・幕下道跡一』鹿児島市埋蔵文化財センター調査報告書第41集
- 鹿児島市教育委員会2017『鹿児島(鶴丸)城御殿跡』鹿児島市教育委員会発刊調査報告書第82集
- 木島孝之1995『鹿児島城の縄張り構造と島津氏権力構造との相関』『中世城郭研究』第9号中世城郭研究会
- 鶴丸城御樓門建設協議会・鹿児島県2016『鹿児島(鶴丸)城跡保存活用計画』鶴丸城御樓門建設協議会2021『鹿児島県指定史跡鶴丸城跡御樓門復元整備工事報告書』
- 徳永和美2008『鹿児島(鶴丸)城築城にみる思想一家の「城認識」と展開を中心に一』『黎明館調査研究報告書』第21集鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 徳永和美2010『偽金づくりと明治維新』新人物往來社
- 島中柳1992『鹿児島城について』『黎明館調査報告書』第6集鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 東和幸2013『鹿児島(鶴丸)城前庭の城と町づくり』『鶴丸の森から』第6集鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 三木博2014『島津藩の本城としての鹿児島城』『鹿児島県国際大学ミュージアム調査研究報告書』第11集鹿児島県国際大学ミュージアム
- 三木博2017『古松園からみた鹿児島城』『鹿児島県国際大学考古学ミュージアム調査研究報告書』第15集鹿児島県国際大学ミュージアム